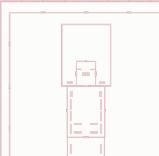


奈良 文化財 研究所

発掘調査 報告 2024



奈良文化財研究所発掘調査報告

2024

独立行政法人 国立文化財機構

奈良文化財研究所

奈良文化財研究所発掘調査報告

2024

目次

I	飛鳥・藤原宮跡等の調査	1	
1	藤原宮の調査	3	
	藤原宮西面外濠の出土遺物	- 藤原宮第23-5次	5
2	藤原京の調査	9	
	日高山瓦窯の調査	- 第213次	11
	日高山瓦窯出土の瓦	- 1978年調査・藤原宮第17次	47
	藤原京右京七条一坊SE1850の井戸枠と柱材	- 藤原宮第17次	55
3	飛鳥地域等の調査	59	
	石神遺跡の調査	- 第214次	61
	川原寺下層SD640・SK641出土土器	- 第119-5次	73
II	平城京と寺院等の調査	85	
	法華寺旧境内・海龍王寺旧境内の調査	- 第653・656次	89
	法華寺旧境内の調査	- 第659次	117
III	図版	PL.1~46	

例 言

1. 本書は、独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所が2023年度（一部2022年度を含む）におこなった発掘調査の報告である。
2. 本書は、Ⅰ 飛鳥・藤原宮跡等の調査報告、Ⅱ 平城京と寺院等の調査報告の2部構成である。調査次数は、Ⅰは飛鳥・藤原地区の次数、Ⅱは平城地区の次数を示す。
3. 当研究所の名称は、2度改称されているが、本書では過去の呼称も含めて奈良文化財研究所と表記する場合がある。また略称として奈文研を用いる。
4. 当研究所の刊行物については、以下のように略称を用いている。

『奈良文化財研究所紀要2019』	→ 『紀要2019』
『奈良国立文化財研究所年報2001 - Ⅰ』	→ 『年報2001 - Ⅰ』
『飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅴ』	→ 『藤原報告Ⅴ』
『平城宮発掘調査報告ⅩⅦ』	→ 『平城報告ⅩⅦ』
『飛鳥・藤原宮発掘調査概報26』	→ 『藤原概報26』
『1995年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』	→ 『平城概報1995』
『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報22』	→ 『藤原木簡概報22』
『平城宮発掘調査出土木簡概報45』	→ 『平城木簡概報45』
『奈良文化財研究所発掘調査報告2023』	→ 『発掘報告2023』
5. 本書で用いた座標値は、すべて世界測地系による平面直角座標系第Ⅵ系の数値である。高さは、東京湾平均海面を基準とする海拔高であらわす。2002年4月の改正測量法施行以前の日本測地系の座標値を世界測地系に変換するためには、飛鳥・藤原地域ではX座標に+346.5m、Y座標に-261.6m、平城地域ではX座標に+346.4m、Y座標に-261.3mをそれぞれ加えればよい（ともにマイナス数値のため、Xの絶対値は減少し、Yの絶対値は増加する）。詳細については『紀要2005』（22～23頁）を参照されたい。
また、GNSS測量機による水平位置の観測は、ネットワーク型RTK法による。詳細については、『発掘報告2023』記載の「発掘調査におけるGNSS測量と座標補正について」を参照されたい。
6. 奈文研では発掘調査の際に、大地区、中地区、小地区からなる区割りを設定している。最小単位となる小地区はアルファベット1文字と2桁の数字の組み合わせで表記する、1辺3mの正方形である。中地区は小地区名の前にアルファベット1文字で表記する。大地区名は4桁で表記し、時代を示す1桁の数字、遺跡の種別を表すアルファベット1文字、遺跡名または位置を示すアルファベット2文字の組み合わせからなる。
なお、飛鳥・藤原地区での大地区は東西672m、南北324mの長方形で、中地区はそれを東西に三分割（東側と中央が東西222m、西側が228m）したうえで、南北54mである（『藤原概報24』）。平城地区での大地区は東西・南北531mの正方形で、中地区はそれを東西に二分（東側267m、西側264m）したうえで、南端から60mごとに区切った大きさである（北端のみ51m。『平城概報1989』）。
7. 遺物の取り上げについては、上記の小地区（=1辺3m四方）ごとに、各遺構・土層に応じて取り上げをおこなっている。
8. 藤原宮内の地区区分については、『藤原概報26』（3頁）を参照されたい。

9. 藤原京の京域は岸俊男の12条×8坊説（1坊＝4町＝約265m四方）をこえて広がることが判明している。本書では10条×10坊（1坊＝16町＝約530m四方）の京域を模式的に示した。ただし、混乱を避けるため、条坊呼称はこれまでどおり、便宜的に岸説とその延長呼称を用いている。

10. 発掘遺構は、遺構の種別を示す記号と、一連の番号の組み合わせにより表記する。なお遺構記号については、『発掘調査のてびき』（文化庁文化財部記念物課2010）に則り、以下の通りとする。

S A（塀・柵・土塁）	S I（竪穴建物）	S T（墓・埋葬施設）
S B（建物：竪穴建物以外）	S J（土器埋設遺構）	S U（遺物集積）
S C（廊）	S K（土坑・貯蔵穴・落とし穴）	S W（石垣・防護壁）
S D（溝）	S L（炉・カマド）	S X（その他）
S E（井戸）	S M（盛り土・貝塚）	S Y（窯）
S F（道路）	S N（水田・畑）	S Z（古墳・墳丘墓・周溝墓）
S G（池）	S P（柱穴・ピット）	N R（自然流路）
S H（広場）	S S（礎石・葺石・配石）	

なお、2010年度以前の調査報告と記号が齟齬をきたす場合がある。例えば竪穴建物をSB、足場をSSとしていたが、今後は前者をSI、後者をSXとするなど、変更を加えて報告する。

11. 各調査では、調査員が実測図を作成するとともに、一部は写真測量等をおこない、これを図化した。本書で用いる遺構図は、これらの図化資料にもとづく。

12. 整理作業については、2023年度までは出土遺物のうち木製品・金属製品・石製品を考古第一研究室、土器・土製品を考古第二研究室、瓦磚類を考古第三研究室が、木簡と墨書土器の解読は史料研究室が中心となっておこない、遺構関係の資料整理については遺構研究室が担当した。2024年度以降は考古第三研究室担当は考古第二研究室が、史料研究室担当は文化遺産部歴史史料研究室および都城発掘調査部が、遺構研究室担当は文化遺産部建造物遺構研究室および都城発掘調査部が引継ぎ整理作業を実施した。このため、発掘担当者と整理作業担当者が一致しない場合がある。このほか、自然科学分析については埋蔵文化財センターの協力を得た。

13. 7世紀および藤原宮期の土器区分は飛鳥Ⅰ～Ⅴとあらわす。詳細については『藤原報告Ⅱ』（92～100頁）を参照されたい。

14. 平城宮出土軒瓦・土器の編年は、以下のようにあらわす。（括弧内は西暦による略年式）

軒瓦：第Ⅰ期（708～721）、第Ⅱ期（721～745）、第Ⅲ期（745～757）、第Ⅳ期（757～770）、第Ⅴ期（770～784）

土器：平城宮土器Ⅰ（710）、Ⅱ（720）、Ⅲ（740）、Ⅳ（760）、Ⅴ（780）、Ⅵ（800）、Ⅶ（825）

15. 執筆者名は、各節または各項の末尾に明記した。報告は原則的に調査担当者が執筆し、遺物については各研究室での担当者が執筆している。

16. 本報告書の発掘調査にかかる遺構および遺物の写真撮影は、写真室スタッフおよび調査員によるものである。

17. 註と参考文献については、各調査報告のそれぞれ末尾にまとめた。

18. 本書の編集は、Ⅰ 谷澤亜里、Ⅱ 川畑純が分担しておこなった。表紙および中扉のデザインは、中村一郎が担当し、中扉のデザインは故・金田あおい氏（藍寧舎）による原案をもとに、岡本麻友子（元奈文研技術補佐員）が作成した。英文目次はAnastasiia Dudkoが校閲した。

I 飛鳥・藤原宮跡等の調査



表 1 2023 年度 都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）発掘調査・立会調査一覧

調査回数	調査地区	遺 跡	調査期間	調査面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
213 次	5AJH-N	日高山瓦窯	2023.5.10～8.1	254.5㎡	橿原市上飛驒町	道上祥武	学術調査	11
214 次	5AMD-U	石神遺跡東方	2023.12.4～2024.3.15	335㎡	明日香村飛鳥	福嶋啓人	学術調査	61
215-1 次	5AME-P	水落遺跡	2023.12.14～15	96㎡	明日香村飛鳥	福嶋啓人	さく井工事	(立会)
215-2 次	5AKG-T・U 5AKH-P・Q	甘樫丘	2023.12.19～2024.2.1	487㎡	明日香村川原	道上祥武	園路整備	(立会)
215-3 次	5AJB-P・Q	藤原宮東方官衙北地区	2023.12.21～2024.1.10	125㎡	橿原市高殿町	道上祥武	水路改修	(立会)
215-4 次	5BHQ-R	キトラ地区	2024.1.15～16	24㎡	明日香村平田	道上祥武	法面工事	(立会)
215-5 次	5AMK-J・K	甘樫丘	2024.2.13・16	20㎡	明日香村川原	岩永 玲	園路整備	(立会)
215-6 次	5AJF-K	藤原宮内裏	2024.3.21	-	橿原市醍醐町	岩永 玲	木杭撤去	(立会)
215-7 次	5AJH-Q・R	藤原宮外周帯	2024.3.22～27	-	橿原市飛驒町	岩永 玲	樹木伐採	(立会)

表 2 2023 年度都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）現場班編成 ※総担当者

春	夏	冬
山藤 正敏（考古第二）	廣瀬 覚（考古第一）	谷澤 亜里（考古第一）
林 正憲（考古第三）	※岩永 玲（考古第三）	森川 実（考古第二）
※道上 祥武（考古第三）	鈴木 智大（遺 構）	※福嶋 啓人（遺 構）
総括：部長 箱崎 和久	写真担当：企画調整部写真室	保存科学担当：田村 朋美（考古第一）
史料担当：山本 崇（史 料）	高松塚古墳担当：柴原聡一郎（考古第一）	キトラ古墳担当：樋口 典昭（考古第二）

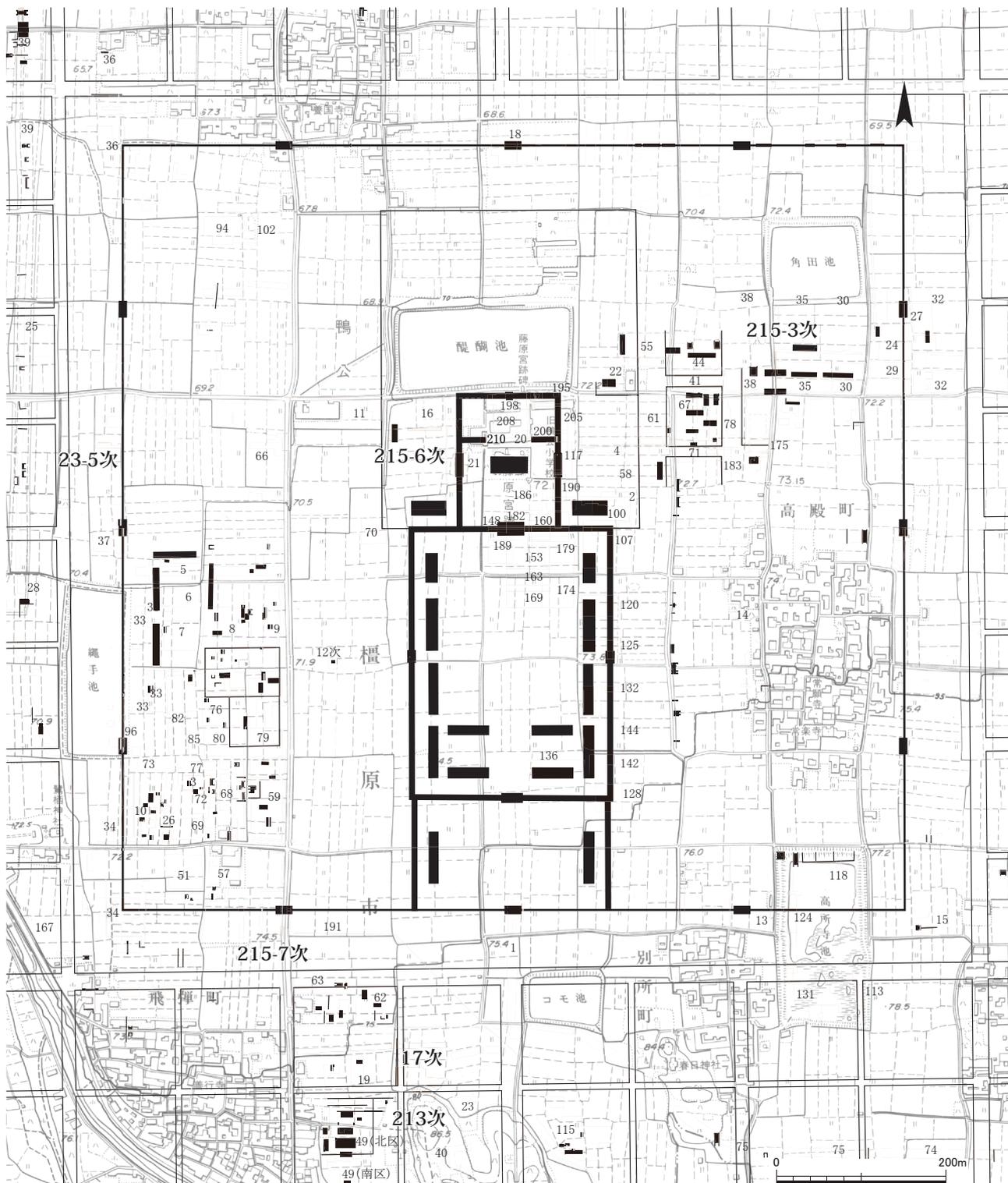


図1 藤原宮発掘調査位置図 1 : 7000

1 藤原宮の地理的環境

都城発掘調査部の飛鳥・藤原地区が発掘調査をおこなう地域のうち、藤原宮域は、奈良県北部に位置する奈良盆地のなかで、およそ、その東南部にあたる橿原市に立地している。

西暦 694～710 年に営まれた藤原宮は、現在の橿原市東南部に立地し、約 1 km 四方に復元できる。その遺跡は、藤原宮跡として、2024 年 10 月現在、100.70 万㎡が特別史跡に指定されている。指定地内には、指定以前から営まれていた集落や、大極殿周辺にあったものを移転した小学校などを含むものの、多くは標高 70～80 m の水田もしくは休耕田である。藤原宮の中核部、すなわち大極殿とその南の朝堂院に相当する部分は、遺跡整備がなされ旧水田上に盛土が施されている。大極殿院の北方、内裏の存在が推定される位置には、近世に開削されたと考えられる灌漑用ため池である醍醐池がある。

近年は、橿原市による季節ごとの花園の整備により、四季を通じて多数の来場者でにぎわう、奈良県内でも有数のフォトスポットになっている。大極殿跡の西方には、橿原市による藤原京資料室があり、藤原京の 1 / 1000 模型が展示されているほか、藤原宮の復元 CG を視聴することができる。

2 藤原宮の歴史的環境

西暦 694 年に遷都された藤原京は、条坊を備えた日本最初の本格的な都城で、その中心に置かれた藤原宮は、日本初の礎石建ち、瓦葺の宮殿である。藤原宮の位置については、江戸時代後期から考証がなされ、1935 年前後には学術的な論争に及んだが、1934 年から着手した日本古文化研究所による大極殿・朝堂院の発掘調査により、現在比定している位置であることが判明した。こうした成果を受けて、1946 年には、大極殿院・朝堂院・朝集院のエリア 20.67 万㎡が史蹟名勝天然記念物保存法下の史蹟に指定され、1952 年には現行の文化財保護法下の特別史跡となった。その後、2024 年までに 20 数次にわたる追加指定がおこなわれてきた。

1966 年には、藤原宮推定域の北部に国道 165 号線バイパスの建設計画が持ち上がる。1969 年までの奈良県教育委員会による発掘調査により、宮の北限と東西規模



図2 藤原宮跡を南から望む

が確定した。これによってバイパスのルートが変更され、藤原宮跡を迂回するルートをとることとなった。

1970 年以降に断続的におこなってきた当研究所による発掘調査で、大極殿や朝堂院からなる宮中核部と、いくつかの官衙の実態がはっきりしてきた。2024 年現在、藤原宮の復元面積に対する発掘調査面積は 14.2% に及ぶが、内裏や官衙域を中心に未解明の部分も多い。

平城京遷都ののち、藤原宮および藤原京の周辺地域では都市的な大きな開発はおこなわれず、近世には灌漑用のため池が造られたものの、大勢としては農業用地として保たれ、現在につながる農村景観が形成された。

戦後の高度経済成長による大規模開発への反省から、「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」（いわゆる古都保存法）が 1966 年に施行された。その後、指定範囲が追加されるなどしたが、2024 年現在、藤原宮跡も同法にもとづく歴史的風土保存地区に指定されている。また自然景観を保全するため、奈良県は 1970 年に奈良県風致地区条例を定め、「風致地区」として指定し、藤原宮跡もその一部として景観の保全がなされている。2013 年以降（明日香村と接する橿原市域は 2014 年以降）は、市町村への権限委譲により、各自治体の風致地区条例により、建築物などの形状や色彩の規制がおこなわれている。

2007 年には「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」が世界遺産暫定リストに登録され、2024 年現在、世界遺産への本登録を目指している。構成資産は宮殿と官衙、仏教寺院、墳墓（古墳）の計 20 資産で、藤原宮跡もその一つである。

（箱崎和久）

藤原宮西面外濠の出土遺物

一 藤原宮第 23-5 次

1 はじめに

都城発掘調査部飛鳥・藤原地区では、考古第二研究室と旧史料研究室が中心となり、藤原宮・京跡から出土した墨書土器集成の編集作業を進めている。この作業にかかわり、未報告の資料を含めた全点の再積読と撮影を実施し、第 23-5 次調査から出土した資料のなかに、未報告の木簡および、平安時代後期に属する仮名書き墨書土器の存在を確認した。これらの出土文字資料に共伴する土器群は、大和における当該期の一括資料としても注目される。以下、未報告資料を中心に紹介する。

2 第 23-5 次調査

調査の概要 第 23-5 次調査の調査地は、藤原宮大極殿の西方約 450 m、西面中門と西面北門のほぼ中央の藤原宮西辺に位置する。1979 年 3 月から 4 月にかけて、個人住宅の建て替えにともない奈文研が発掘調査をおこなった（『藤原概報 10』）。

調査の結果、調査区の東端で西面大垣 SA258 の柱穴 2 基を検出したほか、西面外濠 SD260 などを検出した。SD260 は、SA258 の西方約 21 m の位置にある南北方向の素掘溝で、宮西南隅（第 34 次調査）から西北隅（第 36 次調査）までの各所で検出しており、総延長は 939 m におよぶ。藤原宮期当初はほかの外濠と同じく幅は 5.5~6.0 m 程であったとみられるが、鎌倉時代頃まで存続し、後世の氾濫や浸食により、北端部では幅約 17 m にまで広がっている。本調査区では、当初の幅は 10 m、深さ 1.9 m で、数度の改修を経て最終的に幅 8.8 m、深さ 0.8 m になると報告されている。藤原宮期から 11 世紀後半までの時期に属する土師器・須恵器・黒色土器・瓦器・施釉陶器・磁器が出土しており、大半を占める平安時代に属する土器は、良好な一括資料といえる。

出土文字資料 文字資料は、いずれも SD260 から、木簡 1 点、墨書土器 1 点、刻書土器 1 点が出土した。このほか、墨画円板残欠 1 点が出土している（図 3）。木簡は、長さ(301)mm×幅(47)mm×厚さ 5mm、061 型式で、折敷底板に墨痕が認められるが、積読できない。墨画円板は、

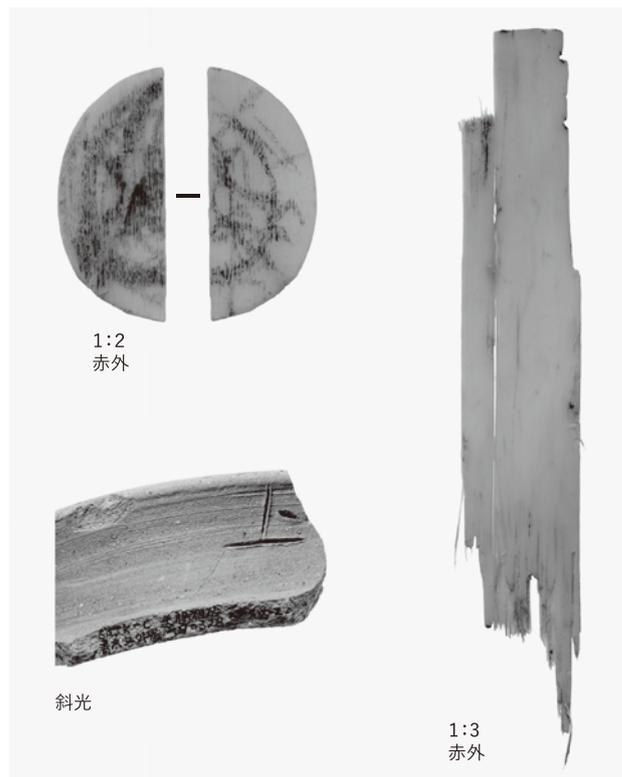


図 3 SD260 出土木簡・墨画円板・刻書土器

長さ 68mm×幅(24)mm×厚さ 4mm、065 型式で、半円分のみ残存し、絵の内容は不詳。ともに上層から出土し、平安時代後期に属するものであろう。刻書土器は、須恵器甕 C の口縁部外面に「上」(焼成前刻書)と記されており、飛鳥時代から奈良時代までに属すると推測される。

(山本 崇)

3 SD260 出土土器

西面外濠 SD260 の層序は、上位から順に暗灰褐色砂土(①層)、灰褐色粗砂 I(②層)、灰褐色粗砂 II(③層)で、その直下が基盤層にあたる青灰色砂層である(図 4)。外濠じたいが平安時代に掘り直され、③~①層が順次堆積したものと考えられる。出土土器が最も多いのが①層で、飛鳥時代から古代末までの土器が混在している。仮名書き墨書土器も、この土層からの出土である。また、②・③層は水流がもたらした堆積物で、土師器皿、黒色土器や土釜など、平安時代の土器が出土している。いっぽう①層は、②・③層で半ばまで埋没した外濠跡に堆積した土層で、層厚は最大で約 1 m におよぶ。

以下、①層出土土器を中心に、仮名書き墨書土器を含む土器群の全体を紹介する(図 5)。

飛鳥・奈良時代の土器 1・2 は土師器杯 A。いずれも b1 手法で、1 には二段放射暗文を、2 には一段放射暗文

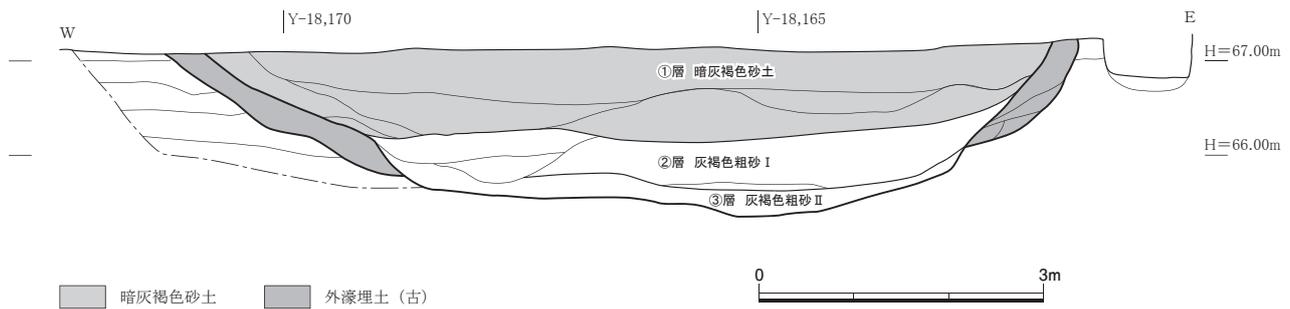


図4 SD260 断面図 1:80

を施す。3・4は土師器皿A。3には一段放射暗文を、4には二段放射暗文を施している。なお、4は高台が剥落した皿Bの可能性もある。5は土師器杯Dで、内面に工具痕が残る。これらは飛鳥時代後半から奈良時代前半にかけてのものか。

平安時代の土器 6は薄手の土師器杯片で、10世紀頃のものか。ほかにも底部片がある。③層出土。7~33は土師器皿。口径9.5~11.0cmの小皿(7~26)と、口径15.0~16.5cmの大皿(27~33)からなる。前者の口縁部は「て」の字状を呈し、その端部を上方へと小さく摘み上げる個体が多い。いっぽう、後者には口縁端部が外反するものと、上方へと小さく摘み上げるものがある。これらの小皿・大皿は10世紀後半から11世紀前半のもの。①層出土。

34は土師器甕。口縁部から胴部にかけての半身が残り、外面には頸部から胴部中位にかけてコゲが厚く付着し、使用痕跡が顕著である。35は土釜。口縁端部を内側に折り返して肥厚させ、体部に罫をめぐらせる大和B型¹⁾で、体部の下半を欠く。34は③層出土。

黒色土器には内黒のA類椀(36~39)と、内外面を黒色化したB類椀(40~44)との両方がある。前者は内面をヘラミガキし、外面をほぼ不調整にとどめるもの(36・37)と、外面にも粗いヘラミガキを施したもの(38・39)とからなる。高台の50%以上が残る底部片の計数によれば、A類とB類との割合は約4:1(34:8、n=42)となり、A類のほうが多い。いずれもほとんどが①層出土で、出土層位では両者を区別できない。

瓦器は皿(45)と椀(46~49)とからなる。後者は内外面のヘラミガキが稠密で、口縁部は内弯気味。外面のヘラミガキも高台付近におよぶなど、黒色土器の特徴を強くとどめている。とくに49は、川越編年では第I段階A型式の標式例として紹介されたものである²⁾。その年代観にしたがえば、11世紀前半に位置づけられよう。いずれも①層出土。

須恵器鉢(50・51)は糸切底で、51の口縁端部は玉縁

状を呈している。篠窯産。また、白色土器には皿(52・53)、椀(54)がある。これらは平安京からの搬入品とみられる。いずれも①層出土。

緑釉陶器には皿(55)と椀(56・57)がある。55は輪高台の大部分を欠くが、その内側にわずかな段差をもつもの。釉色は濃緑色で、近江産か。56は輪高台の接地面内側に明瞭な段差があり、内側に糸切痕をとどめる。見込には沈線をめぐらせ、その内側にはトチンの目跡が3カ所に残る。濃緑色の釉葉を全面に施釉する。近江産で、10世紀後半のもの。57は高台の内側が露胎のほかは全面に緑色釉を施釉する。見込にはトチンの目跡が3カ所にあり、底部には糸切り後に輪高台を貼り付ける。露胎部はにぶい橙色を呈する。これらは①層出土。灰釉陶器(58)は椀の口縁部片で、③層出土。

白磁椀(59)は口縁部片で、その端部が玉縁状をなすもの。SD260東端出土。

①層出土の土器群は、多量に出土した「て」の字状口縁部の土師器小皿や緑釉陶器などと、瓦器椀の最古型式との両方から考えて、10世紀後半から11世紀前半にかけてのものである³⁾。後述する仮名書き墨書土器は黒色土器A類の椀であり、10世紀末頃のものであろう。SD260が最終的に埋没したのは、瓦器椀の年代からは11世紀に降ると考えられる。

(森川 実)

仮名書き墨書土器 黒色土器A類椀の底部外面に墨書が認められる(図6)。土器は胎土の状態から大和産ではないとみられ、京都から持ち込まれたものと推測される。墨書は4~5文字の仮名とみられるものの、釈読に困難をともなったため、当該時期の仮名に詳しい外部研究者、乾善彦(関西大学)、宇都宮啓吾(大阪大谷大学)、軽部利恵(実践女子大学)の各氏を招聘し、個別に助言を求めた。史料研究室(令和5年度当時)からは、山本のほか、客員研究員の藤間温子が検討に参加した。

検討の結果、仮名は4文字と判断した。墨書は2行あり、右行に3文字、左行に1文字の計4文字が記されて

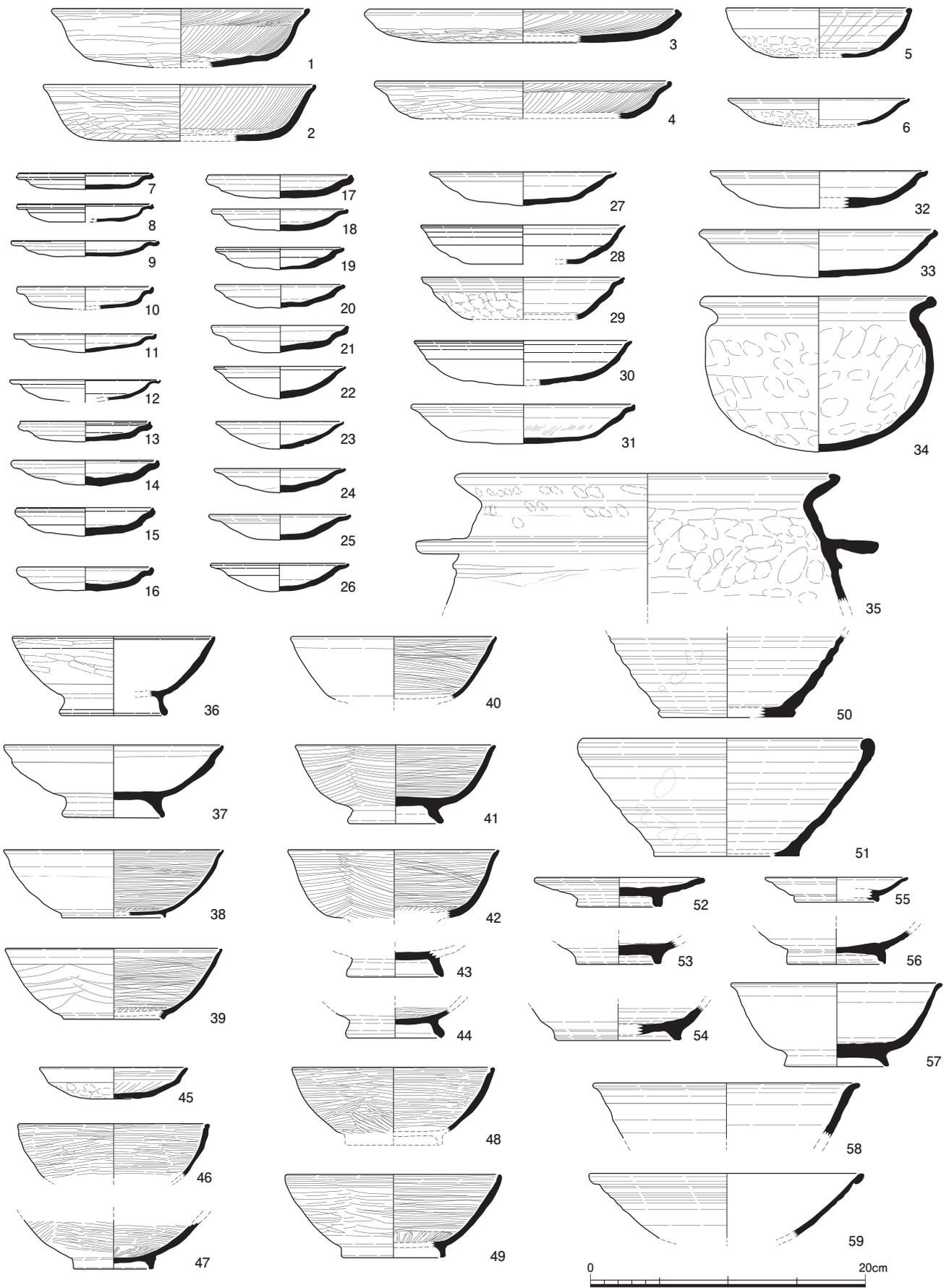


図5 SD260 出土土器 1:4

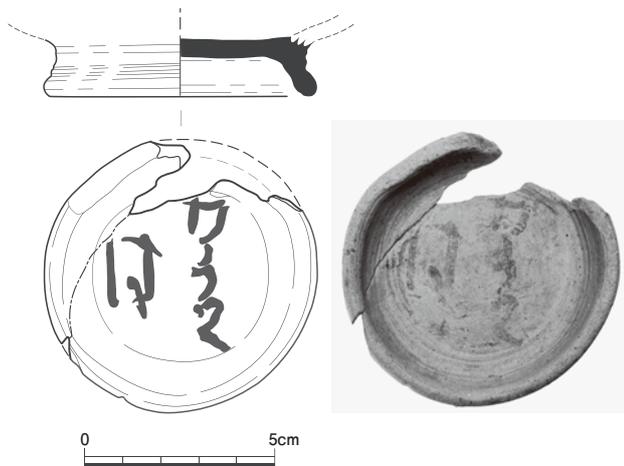


図6 仮名書き墨書土器 1:2

いる。仮に、右行から1文字目と称する。全体的な印象は、筆の運びがスムーズで一気に書いた感じがあり、なめらかな筆運びであるものの、字としては拙い、といえる。雅な感じはなく、さほど高くない階層の手になるものと推測され、そうであるならば、止め、刎ねが通例と異なる点など、ある程度の崩れは許容されるであろう。

1文字目は非常に不自然な形であり、あるいは欠損部分に筆画の一部が存した可能性も否定できない。2・3文字目は、連綿しており、仮名とみなしてよい。4文字目は他と比べ大きく書かれ、あるいは漢字の可能性も否定できない。4文字であるとすれば、歌の可能性は低いとみられるが、歌(の一部)を習書した可能性は、なお残る。

以下、釈読に際しては、筒井茂徳編『仮名名跡大辞典』(角川書店、1981年)、小林芳規編「仮名字体総覧(片仮名・平仮名)」(『日本古典文学大辞典 簡約版』岩波書店、1986年)、同編「平仮名字体一覧」(『国史大辞典』第11巻、吉川弘文館、1990年)をはじめ、平安時代中期から後期にかけての仮名書きの資料を参照した⁴⁾。

今回の検討により、可能性が指摘された仮名(およびその字母)は次のとおりである。

- 1文字目、そ(所)、な(那・奈)、み(美)、わ(和)
- 2文字目、う(宇)、か(可)、に(尔)
- 3文字目、え(衣)、く(久)、し(之)、は(者)、み(見)、む(无)、よ(与)
- 4文字目、さ(佐)、す(須)、つ(津)、は(波)、ふ(付)

上記を踏まえ、釈読案として「わかくは」「わかくさ」「なにはつ」などの案が示された。個別の文字を検討した結果、1文字目の最終画は左方向に払われ、禾偏の一画目が欠損部にあったとみるならば「わ(和)」がふさわしい。

2文字目の第1画が縦長であることから「字」とみるのは不自然で、「か(可)」の字形がもっとも近い。3文字目は「く(久)」であろう。4文字目は、「は(波)」の字形がもっともふさわしい。以上のごとく判断し、一部の筆画を欠損する1文字目は可能性を示すにとどめ、「□[わか] かく/は」と釈読した。

4文字目の「は(波)」が大きく書かれることについて、漢字仮名交じりとみる可能性も指摘されたが、すべて仮名とみてとくに矛盾はないと判断された。その場合、助詞だけが大きく書かれることは不自然であることから、「は」は名詞である可能性も指摘された。また、筆記の順番はつまびらかにしえないが、高台がやや深く右手で筆を持ったとするならば左行への筆記が容易く、最初に「は(波)」を記した可能性も考えられるとともに、あるいは逆に右行に3文字「わかく」と記した後に、左行にややゆったりと「は」を記した可能性などが推測される。以上から、墨書は「はわか(葉、若く)」あるいは「わかくは(若くは)」の意かと推測される。

4 まとめ

本報告では、藤原宮西面外濠 SD260 の出土遺物の再整理成果を公表した。10世紀後半から11世紀前半にかけての土器群は、大和の土器としては報告例の少ない時期の一括資料として貴重である。仮名書き墨書土器は、土器の年代観から10世紀末頃とみられるもので、平仮名への移行が急速に進んだとされる9世紀後半からはやや遅れるものではあるが、近時出土事例も増えつつあるとはいえ、なお類例の少ない仮名成立期の墨書土器に一例を加えるものとして貴重であろう。(山本)

註

- 1) 菅原正明「畿内における土釜の製作と流通」『文化財論叢』1983。
- 2) 川越俊一「大和地方出土の瓦器をめぐる二、三の問題」『文化財論叢』1983。川越によれば、瓦器碗(49)は「10世紀から11世紀に至る土師器や黒色土器とともに、SD260の最上層で出土したものである」という。
- 3) 平尾政幸「土師器再考」『洛史』12 京都市埋蔵文化財研究所、2019。
- 4) 京都国立博物館『かなの美図録』大塚巧藝社、1996。

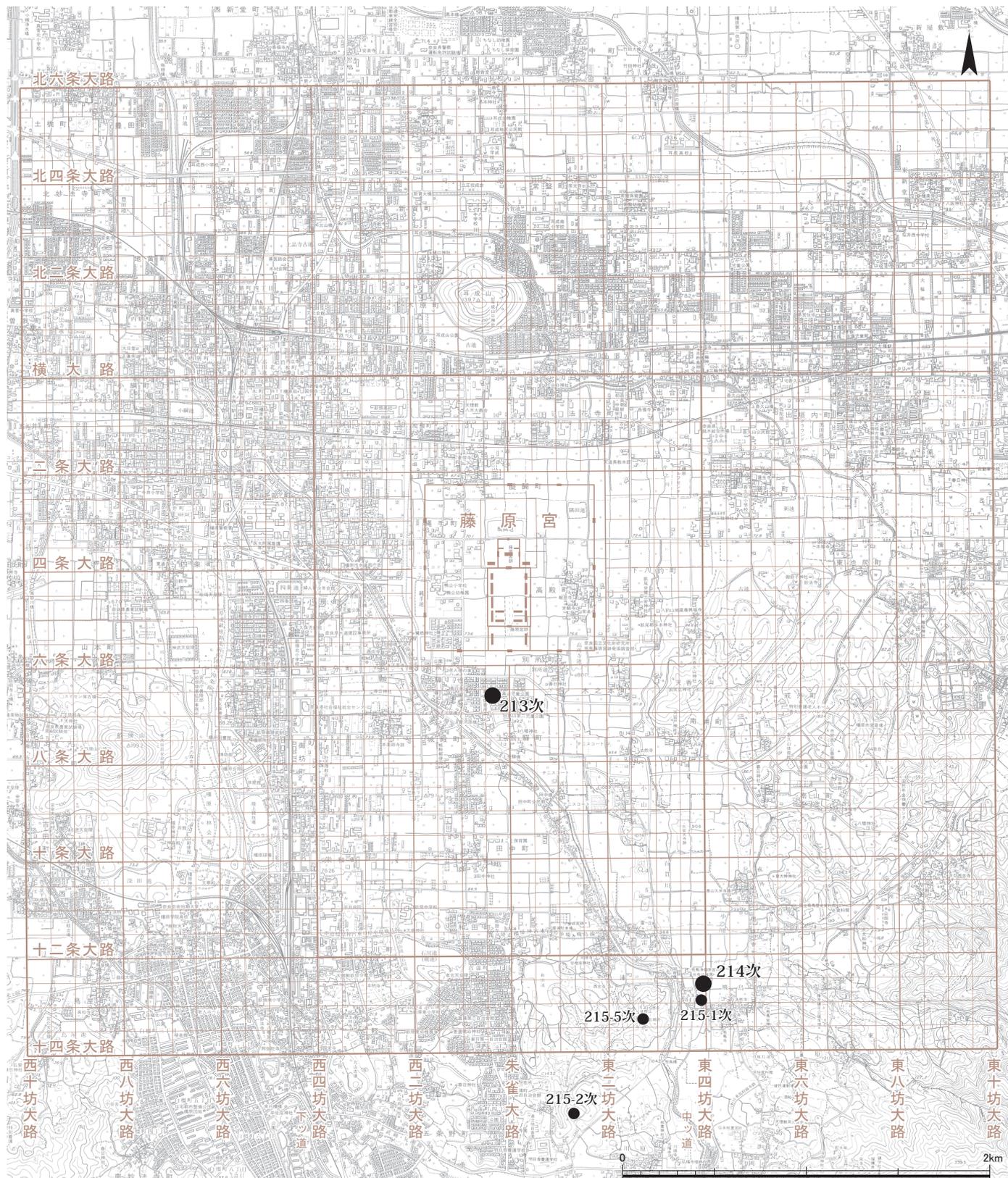


図7 藤原京発掘調査位置図 1 : 30000

1 藤原京の地理的環境

都城発掘調査部の飛鳥・藤原地区が発掘調査をおこなう地域のうち、藤原京域は、奈良県北部に位置する奈良盆地のなかで、およそ、その東南部にあたる橿原市に立地している。

西暦 694～710 年に営まれた藤原宮は、現在の橿原市東南部に立地し、約 1 km 四方に復元できる。藤原京は藤原宮を中心に置いた、東西約 5.3km、南北約 4.8km の方形に復元でき、東部および東南部の一部は、桜井市や明日香村にかかるが、多くは橿原市に広がる。このうち丘陵にかかる東南部、および大和三山と呼ばれる畝傍山、耳成山、香具山（いずれも国名勝）の周囲を除けば、標高 60～90 m の平野部である。

大河川はなく、中小の河川が北西方向に流下する。奈良盆地は降水量が少なく、また周囲の山地が浅いため河川の水量は乏しい。このため灌漑用のため池が多数掘られた。また大雨が続くと、しばしば河川の氾濫につながった。藤原京域に相当する地域も例外ではない。

平野部は古くから農業用地として使われ、散在する微高地には、水利と防衛の機能を備えた環濠集落が営まれた。国の重要伝統的建造物群に選定されている今井町もその一つで、一向宗の称念寺を中心とした寺内町として、江戸時代の民家を多数擁する古い町並みを残す。

橿原市域は、北は奈良・京都、南は高取・吉野、西は香芝・大阪、東は桜井・伊勢へ通じる、古くからの交通の要衝で、近代以降は鉄道網が発達した。その中心部は藤原宮跡の西方に位置し、古くからの集落を取り込んで都市化が進み、また住宅地も広がっている。歴史的な文化遺産は多く、明日香村にもかかる藤原京域の南部には、天皇陵や古墳が散在するとともに、藤原京内に営まれた寺院の遺跡が立地する。

2 藤原京の歴史的環境

西暦 694 年に遷都された藤原京は、条坊を備えた日本最初の本格的な都城である。藤原京の範囲は、東を中ツ道、西を下ツ道、北を横大路、南を山田道という藤原京以前の古道で囲まれた東西 2.1km、南北 3.2km の岸俊男説が長らく定説であったが、20 世紀末以降、南北 10 条、東西 10 坊からなる、いわゆる大藤原京が確定的となっ



図 8 藤原宮跡（中央）と藤原京域を南東から望む

た。藤原京内の施設としては、薬師寺と小山廃寺、大官大寺などの寺院があり、また京内の宅地なども、発掘調査によって一部で判明してきているが、不明な点も少なくない。藤原京域で史跡指定を受けているのは、上記の寺院跡を除けば、2024 年 10 月現在、朱雀大路跡とそれに接する左京七条一坊一坪および右京七条一坊一・二坪の一部、合計 44,809㎡である。

戦後の高度経済成長による大規模開発への反省から、1966 年に「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」（いわゆる古都保存法）が施行された。その後、指定範囲が追加されるなどして、2024 年現在、藤原地域では、橿原市域にあたる藤原宮を含む大和三山（耳成山・畝傍山・香具山）、桜井市域にあたる磐余地区が歴史的風土保存地区に指定されている。また自然景観を保全するため、奈良県は 1970 年にこれらの地域を「風致地区」として指定し、奈良県風致地区条例を定めた。2013 年以降（明日香村と接する橿原市域は 2014 年以降）は、市町村への権限委譲により、各自治体の風致地区条例により、建築物などの形状や色彩の規制がおこなわれている。

2007 年には「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」が世界遺産暫定リストに登録され、2024 年現在、世界遺産への本登録を目指している。構成資産は宮殿と官衙、仏教寺院、墳墓（古墳）の計 20 資産で、このうち藤原京域にあるのは、藤原宮跡、藤原京朱雀大路跡、大和三山、本薬師寺跡（以上、橿原市）、山田寺跡（桜井市）、大官大寺跡（明日香村）である。

（箱崎和久）

日高山瓦窯の調査

一第 213 次

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

藤原宮の瓦窯は奈良盆地を中心とした西日本各地に点在し、日高山瓦窯はその中でも藤原宮にもっとも近い場所に位置している。日高山瓦窯産の瓦は、藤原宮跡では大垣周辺を中心に出土することから、主として藤原宮大垣に瓦を供給していた瓦窯であることが指摘されている。さらに、藤原宮造営時に機能した運河 SD1901A (藤原宮第 20 次、『藤原概報 8』) 最下層 (機能時の堆積層) から日高山瓦窯産の瓦が出土しており、藤原宮の造営過程の中でも比較的初期段階に操業した瓦窯と考えられている¹⁾。日高山瓦窯は藤原宮の造営過程、特にその初期段階の瓦の生産実態を考える上で極めて重要な遺跡である一方、その詳細な構造や瓦窯の分布には不明な部分が多く残されていた。そこで、日高山瓦窯の実態解明に向けて、瓦窯の範囲確認および具体的構造の把握を主たる目的とした発掘調査を実施した。

奈良県による調査 日高山瓦窯の発見は 1960 年にさかのぼる。児童公園の改修工事がおこなわれた際に多量の焼土が確認されたことをうけ、奈良県教育委員会が緊急発掘調査を実施し²⁾、藤原宮期には類例のない平窯の瓦窯 1 基を確認した。この調査がおこなわれるまで、平窯は比較的新しい時期の窯構造と認識されていたが、平窯の出現が藤原宮期にさかのぼるという事実があきらかになった。さらに、日乾レンガを積み重ねた、特異な窯の構築方法も注目されることとなる。

奈文研による調査 1975 年、日高山丘陵北方において、市営住宅建設工事にもなう事前調査を奈文研が実施した (藤原宮第 17 次、『藤原概報 6』)。この調査において丘陵斜面を一部削平して掘られた東西素掘溝 SD1845 を検出し、その埋土から焼け歪んだ瓦や日乾レンガ、焼土、木炭が多量に出土した (図 9)。日高山瓦窯に近いこと、SD1845 から出土した瓦の中に 1960 年の発掘調査で平窯から出土していた軒丸瓦 6274A が含まれていたことから、ここで出土した瓦の多くが日高山瓦窯で焼成されたものと認識されていった。さらに、その出土量をうけ、先に

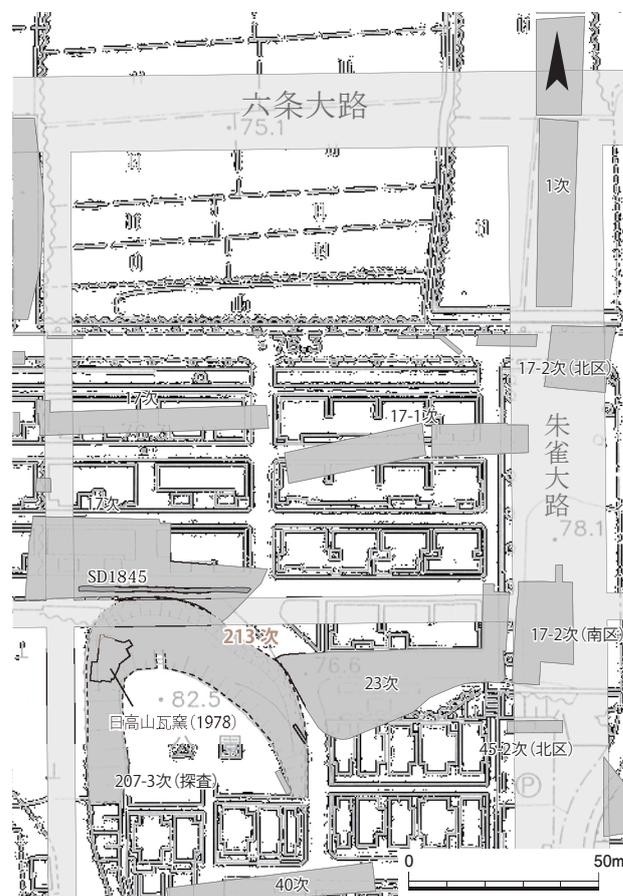


図 9 第 213 次調査区位置図 1 : 2000

確認できた窯以外にも複数の瓦窯の存在が想定されることとなった。1977 年には奈文研埋蔵文化財センターが磁気探査を実施し、丘陵西斜面から北斜面にかけて、合計 4 基の瓦窯が存在する可能性が判明した³⁾。この探査結果を踏まえ、1978 年には公園西斜面改修工事にもなう事前調査を実施した。その結果、丘陵西斜面において、窖窯 1 基と平窯 1 基を検出し、日高山瓦窯には窖窯と平窯の両方の形態が共存することがあきらかになった。この調査以降、1978 年の調査でみつかった窖窯を 1 号窯、平窯を 2 号窯、磁気探査で存在を推定した窯を 3 号窯、1960 年に調査された窯を 4 号窯と呼称している⁴⁾。しかし、これらの瓦窯はその存在が判明した一方で、各遺構の位置関係に齟齬が生じるなど、課題も残されていた。

2021 年からは、上記の調査成果の検証および瓦窯の範囲確認を目的とする学術調査を実施してきた。2021 年には、丘陵周辺の地形測量および磁気探査、地中レーダー探査を実施し、かつて存在が確認あるいは想定された瓦

窯4基に加え、さらに複数の瓦窯が存在する可能性を指摘した(飛鳥藤原第207-3次、『紀要2022』)。

調査区の設定とねらい 既往の発掘調査や探査の成果を踏まえて調査区の設定をおこなった。2021年に実施した探査の成果から、瓦窯が日高山丘陵北斜面をめぐるように広く存在すると想定できた。そこで、まず丘陵西側から北側にかけて、1~3区の調査区を設定した(図10)。1・2区は、1978年の発掘調査で確認した1・2号窯の位置を確認し、瓦窯の詳細な構造を精査することを目的とした。3区は、1977年のレーダー探査で想定した3号窯の所在を確認すること、1960年の発掘調査で確認された4号窯の位置を確認し、瓦窯の詳細な構造を解明すること、さらに、未知の瓦窯の所在確認および構造を解明することを目的とした。

その後、1~3区を調査する過程で、瓦窯が3区の東方にも存在することがほぼ確実となった。そこで、丘陵東側における瓦窯の分布確認を目的とする4区を設定し、継続して発掘調査を実施した。以上の調査区による総発掘面積は、2544㎡である。

(2) 発掘作業の経過

発掘調査は2023年5月10日から8月1日にかけて実施した。5月10日に1~3区の調査区を設定し、12日に灌木の伐採および重機搬入をおこなった。15日、調査区周辺に仮設のフェンスを設置し、重機掘削を開始した。まず、1・2区における既調査区の検出と重機掘削を並行して進め、26日には1~3区の重機掘削を完了した。その後は遺構検出および実測、写真撮影による記録作業を随時進めた。6月29日には調査成果の記者発表をおこなった。同日、地元住民(飛驒町・上飛驒町在住の方々)向けの現場説明会を開催し、25名の参加を得た。7月1日には現地見学会を実施し、悪天候ではあったものの、381名の参加を得た。7日、1~3区の調査成果を踏まえて4区を設定し、重機掘削を開始した。11日、4区の重機掘削を完了し、1~4区の遺構検出および実測、写真撮影などの記録作業を進めた。19日、文化庁、桑波田武志調査官による視察。20日より、記録作業を終えた調査区から、随時埋め戻しを進めた。1・2区は斜面に位置しているため、埋め戻し後の土砂流出を防ぐため、植生土のうおよび植生シートによる養生をおこなった。28日、すべての記録作業を完了した。8月1日にはすべての調査区の埋

め戻しを完了し、調査を終了した。なお、6月14日に木立雅朗氏(立命館大学)、同月26日に菱田哲郎氏(京都府立大学)、同月27日に藤原学氏(元大阪学院大学)にお越しいただき、調査に関して有益な助言を賜った。

(3) 整理作業の経過

発掘作業と並行して、出土遺物の整理作業をおこなった。出土遺物は、取り上げ時に土器、瓦、木器等の素材ごとに仕分け、藤原地区庁舎内の整理室に搬入し、洗浄、注記、接合、実測作業などを実施した。

2 遺跡の位置と環境

日高山瓦窯は、藤原宮南面中門の南方およそ300mの位置にある日高山丘陵の北裾部に所在する。日高山丘陵は微視的には東西2つの尾根で構成され、中央に小さな谷がある。日高山瓦窯は西側の尾根に所在し、現在は日高山児童公園として管理されている(図9、PL1-1)。東側の尾根にはかつて藤原京朱雀大路が縦断し、現在は市営住宅が建ち並ぶ。周辺は南東から北西へゆるやかに傾斜しており、西方では飛鳥川が北西に流れる。

藤原宮期以前、日高山丘陵は墓域として利用されていた。1984年の調査(藤原宮第40次、『藤原概報15』)では5世紀中頃の円墳(日高山1号墳)を検出したほか⁵⁾、6世紀前半代の埴輪、6世紀後半~7世紀初頭頃の須恵器、金銅製耳環が出土した。また、1985年の調査(藤原宮第45-2・9次調査、『藤原概報16』)では、6世紀末~7世紀中頃の横穴墓群を検出している。そのほか、周辺の調査で古墳時代の土器が旧流路などからわずかに出土しているが、古墳時代の生活痕跡は明瞭ではない。

藤原京の造営が開始されると、日高山丘陵では朱雀大路の敷設をはじめ、東側の尾根の削平や谷の埋め立てといった大規模な変化が進んでいった。これらの土木工事の一環で、古墳の破壊や横穴墓の埋め立てがおこなわれていたことを発掘調査で確認している(藤原宮第48-2・6次、『藤原概報17』)。こうして、藤原宮・京の造営が進められていくのに合わせて、日高山瓦窯は築かれた。

日高山瓦窯の操業開始時期については、藤原宮造営期の運河SD1901Aから出土した瓦が根拠となっている。SD1901A最下層からは天武11~13年(682~684)の年紀および天武14年に制定された冠位「進大肆」を記した木簡が出土している。同じ最下層から藤原宮期の瓦が一定

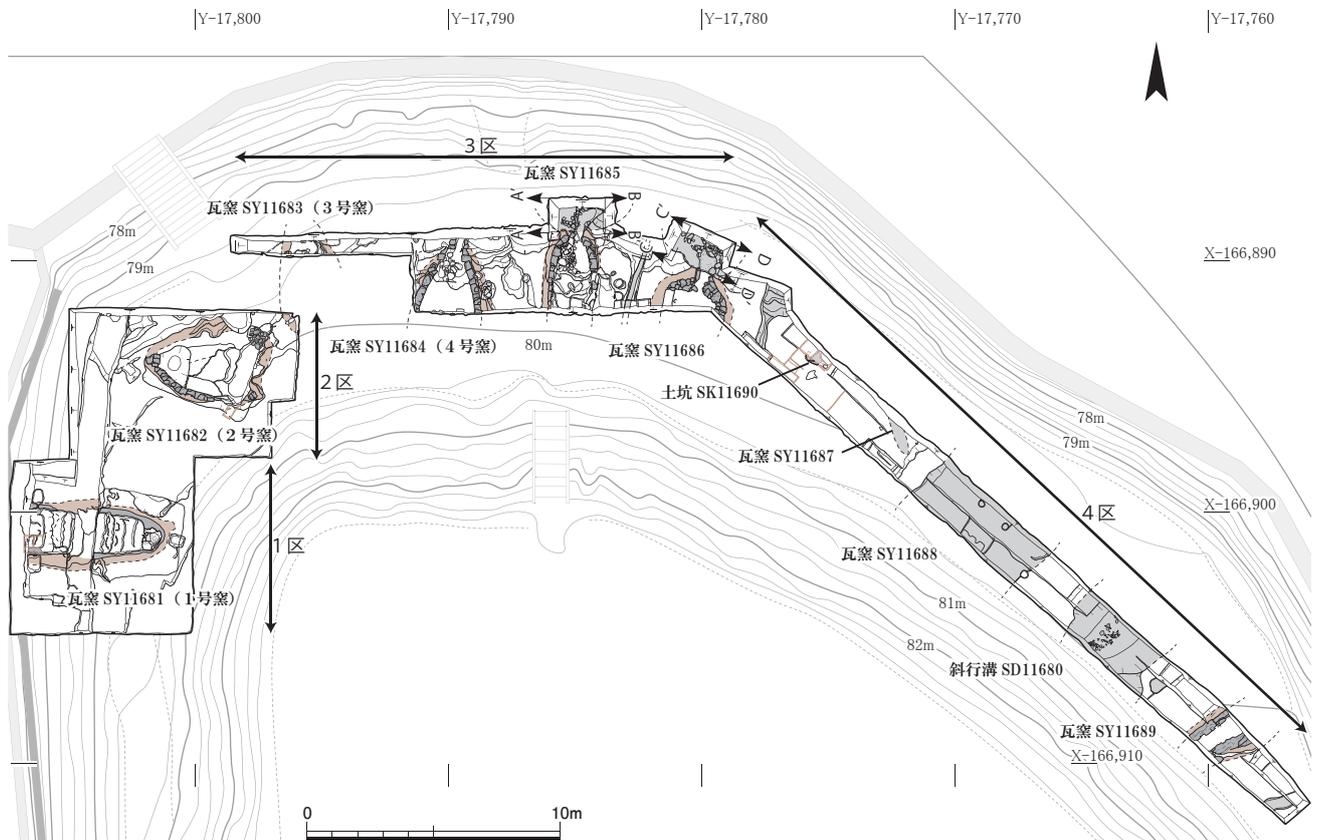


図10 第213次調査区全体図 1:300

量出土しており、その中に日高山瓦窯産とみられる丸瓦の破片が含まれていた。これにより、藤原宮の造営および日高山瓦窯における瓦生産は、天武朝末年、680年代に遡ると考えられている⁶⁾。

一方、日高山瓦窯の終焉については不明な点が多いが、日高山瓦窯で用いられた瓦範の多くが高台・峰寺瓦窯(奈良県高取町～御所市)をはじめとする他の瓦窯へ移動していることから、藤原宮造営途中に操業を終了したと考えられている。なお、1978年に調査した1号窯(瓦窯SY11681)焼成部内の堆積層から、11世紀後半～12世紀頃の瓦器・土師器が出土している。したがって、12世紀頃までは瓦窯は埋没しておらず、操業終了後もしくは大きな改変はうけていなかったとみられる。

3 調査の方法と基本層序

(1) 調査の方法

奈文研による1978年の調査区および2021年度実施の物理探査の成果を踏まえて、調査区を設定した(図10)。

掘削に関して、公園の整備盛土と旧調査区の埋戻土の掘削には重機を使用し、その後は人力による掘り下げと遺構検出をおこなった。

調査は1978年調査区に重複する1・2区から開始した。まず、1区の表土・整備盛土・旧調査区埋戻土を除去し、1978年調査区および1号窯(瓦窯SY11681)の遺構面を把握した。SY11681の所在を確認した後、2区の重機掘削に取りかかった。まず、1978年調査時に設定していた1区と2区を南北に縦断する試掘トレンチを把握した。その上で調査区全体の掘削をおこない、2号窯(瓦窯SY11682)の位置を特定した(PL.1-2.2-1)。続いて、3区の重機掘削をおこなった。3・4号窯(瓦窯SY11683・11684)はその所在は認識していたものの、正確な位置が不明瞭であったため、まず幅60cmの東西方向の試掘トレンチを設定し、各窯の位置の把握を進めた。これにより、SY11683・11684の位置を特定し、さらに、未知の瓦窯2基(瓦窯SY11685・11686)の存在を確認した(PL.2-2)。これらの結果を受け、3区を南北に拡張し、遺構の平面

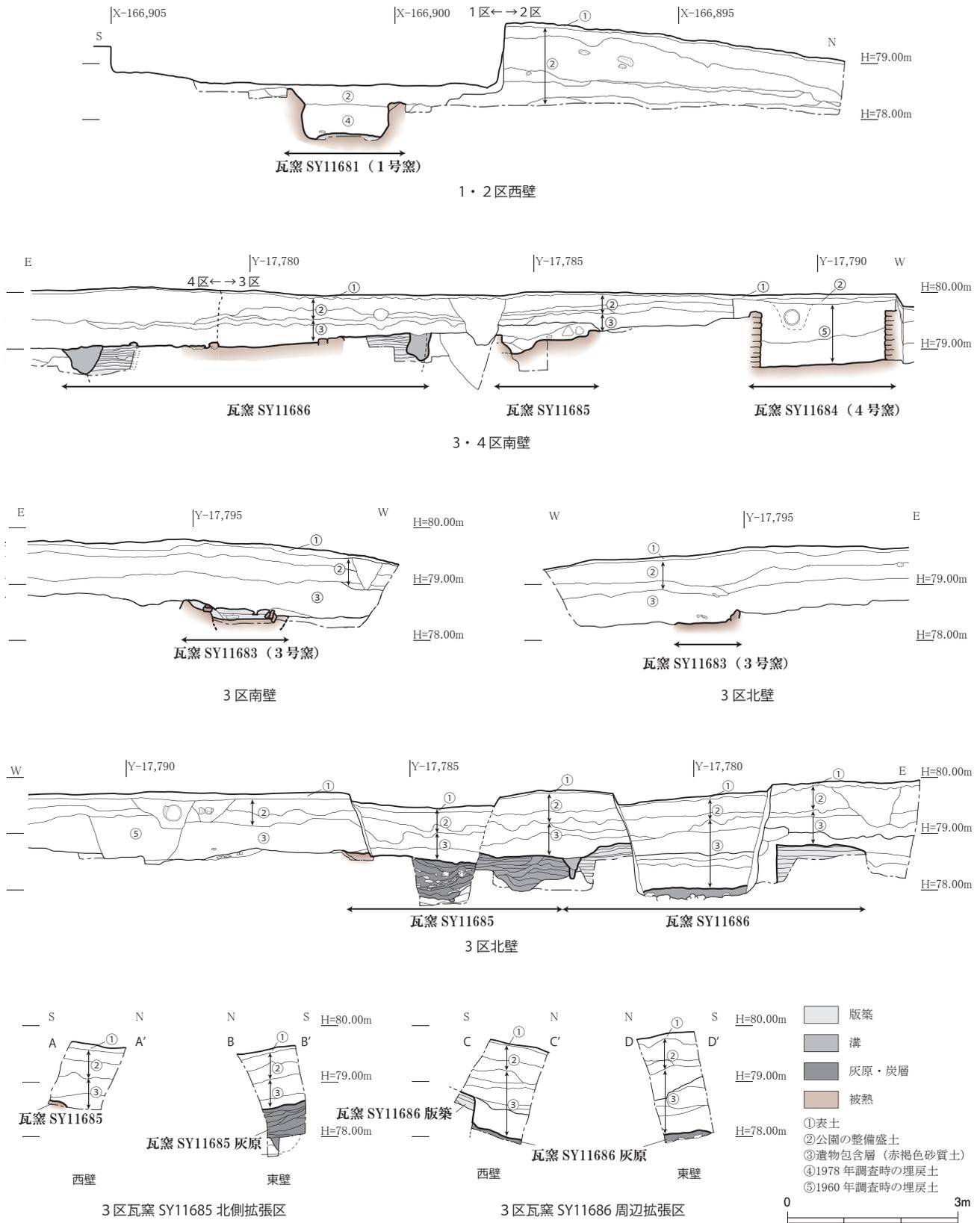


図11 第213次調査区1~3区土層図 1:100

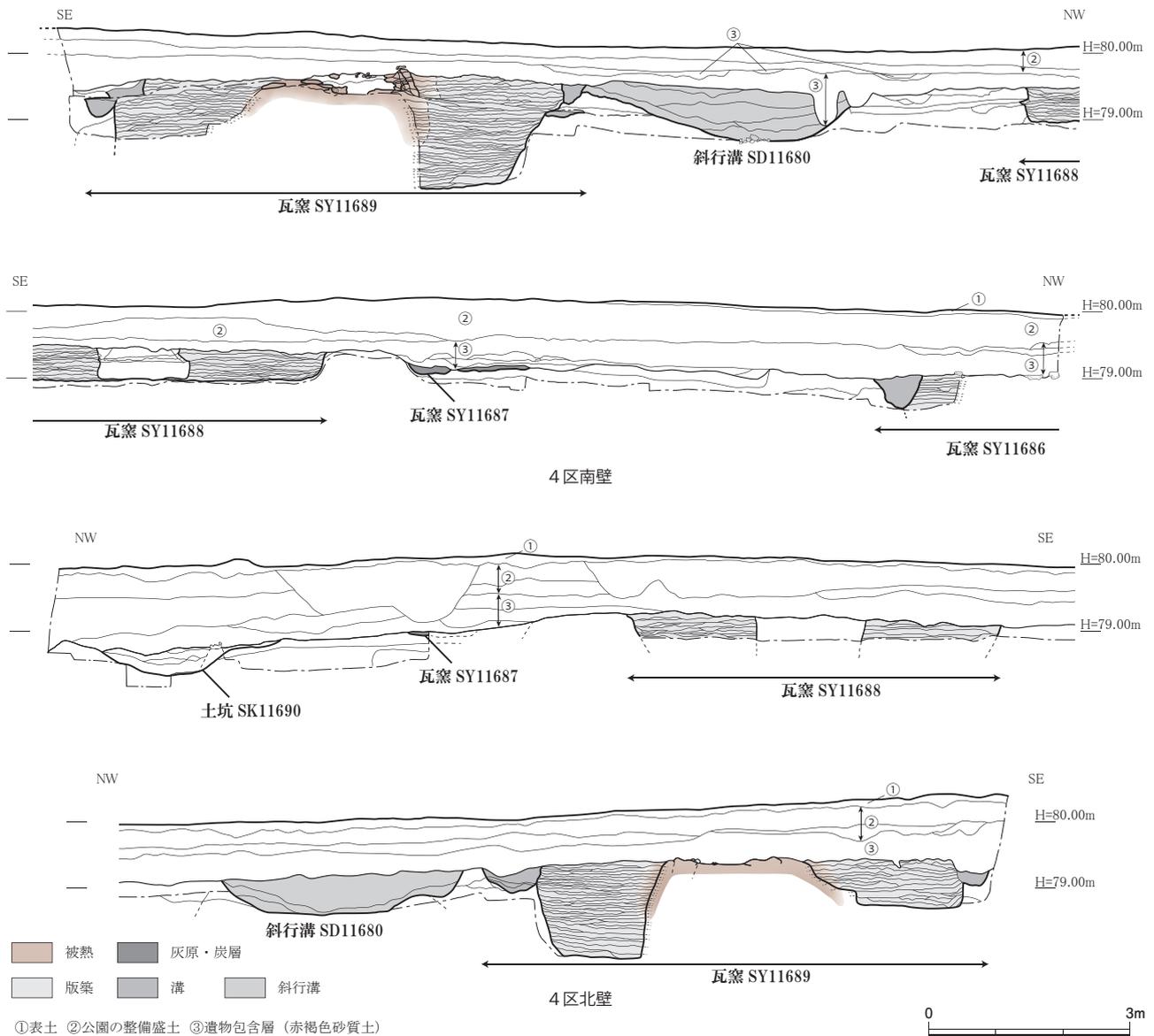


図12 第213次調査区4区土層図 1:100

検出を進めた。ただし、SY11683付近に関しては樹根のため拡張を断念し、所在の確認にとどめた。なお、3区の遺構検出状況から瓦窯の北方に灰原が展開することが予想されたため、SY11685およびSY11686付近では北方にも調査区を拡張した。

3区の遺構検出後、3区の東方に幅2mの試掘トレンチ(4区)を設定し、瓦窯群の範囲確認調査を進めた。4区では結果的に3基の窯跡(瓦窯SY11687~11689)に加え、炭が堆積する小型の土坑SK11690および古墳の周濠とみられる斜行溝SD11680を検出した(PL2-3)。

SY11681・11682・11684・11685については窯内部の調査をおこなった。このうち、SY11681・11682・11684は再発掘である。SY11681では構築方法および操業実態に関する詳細情報を得るために、遺構の再検討とあわせて、燃焼部にサブトレンチを1ヵ所設定して調査をおこなった。SY11682も遺構の再検討とあわせて、焚口と焼成部にサブトレンチを1ヵ所ずつ設定して調査をおこなった。SY11684では、1960年調査時に出土した瓦の一部が焼成部に埋め戻されていることを今回確認した。1960年調査では燃焼部の調査をおこなっていないため、窯内部の瓦

堆積を半裁し、断面情報を記録した上で、出土したすべての遺物を取り上げた。SY11685は新規の発掘調査であり、燃焼部および焼成部に瓦や日乾レンガが大量に堆積していることを確認した。また、SY11685の北方では複数層にわたる灰原を検出した。窯内部の瓦堆積および灰原を半裁し、断面情報を記録した上で窯内部および灰原の遺物の取り上げをおこなった。

なお、SY11689については窯の内部調査を実施しなかったが、瓦窯の構築方法に関する情報を得るため、窯の東西にサブトレンチを設定し、窯の断面情報および版築の施工状況の記録をおこなった。

遺構検出作業と並行して、実測および写真撮影、3次元計測による記録をおこなった。SfM-MVSを用いた3次元計測を全調査区に対して実施し、これによって得られた3次元モデルで作成したオルソ画像にもとづき、現地で実測をおこなった。SY11684・11685については詳細な3次元モデルを作成した。堆積状況などの記録を終えた遺物から取り上げをおこなったほか、灰原や燃焼部に堆積していた炭混土の一部についてサンプリングおよび分析をおこなった。

(2) 測量

発掘調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法およびトータルステーションで調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は基準点藤原No.178(X=-166811.528、Y=-17737.092、H=76.950m)からオートレベルで直接水準移動をおこない、調査区周辺に仮設の水準点を設定し、調査期間中の水準測量の基準とした。

(3) 基本層序

調査地は現在、檜原市の公園として管理されており、①表土(0.1m以下)の下に、公園の整備にともなう②整備盛土(0.1~0.6m)が広範囲で確認できる。その下層には③瓦や日乾レンガの破片を多量に含む遺物包含層(赤褐色砂質土、0.3~0.5m)が広く堆積する。このほか、1・2区では④1978年調査時の埋戻土、瓦窯SY11684周辺では⑤1960年調査時の埋戻土がそれぞれ存在する。これらをすべて取り除くと、遺構面に到達する。瓦窯が構築された地山はいずれも花崗岩風化土で構成され、一部で花崗岩が岩脈状に露出する。

4 検出遺構

(1) 瓦窯SY11681(1号窯)

位置 1区で検出した(図10・11・13、PL.3・4)。瓦窯の主軸は東西方向で、丘陵斜面に対して直交する。斜面西方で燃焼部、斜面東方で焼成部および煙道を検出した。

基本構造 半地下式有階有段窖窯。1978年の調査で確認していた、燃焼部・焼成部・煙道を再検出した。検出長6.0m、版築土を除く窯体最大幅1.9m。焚口および燃焼部の一部、天井部は失われている。地山を東西6.0m以上、南北3.7mの平面長方形に、深さ1.4m以上掘り込み、この掘り込みの内側最大0.9mの範囲に、粘質土と砂質土を版築で突き固めながら互層に積み上げる。この版築土の内側にスサ入りの粘土を貼り付けて窯壁とする。焼成部下面にも同様の版築による盛土をおこない、この盛土に階段状の段を削り出して床面を構築する。

燃焼部 検出長0.9m、最大幅1.9m。地山を削り出した高さ0.5mの階によって焼成部と区別される。燃焼部側壁は地山を削り出した面にスサ入りの粘土を貼り付けるほか、一部に日乾レンガを構築材として使用する。底面には粘土を貼り付けて構築した床面が複数存在し、地山面を含めて計5面の床面があることを確認した。

焼成部 全長3.8m、最大幅1.7m。掘り込みおよび内部の版築土が高さ1.4m分残存していることを確認した。版築土の内面に厚さ0.2mのスサ入りの粘土を貼りつけて窯壁とする。前述の通り、焼成部床面は砂質土を版築で突き固めて構築されていた。この盛土を計9段の階段状に削り出して、焼成部床面としている。

被熱痕跡 SY11681周辺で瓦窯の操業による被熱痕跡を検出した。特に丘陵斜面下方、燃焼部付近の被熱痕跡は地山の花崗岩におよび、この被熱痕跡をSY11681の版築土を施工するための掘り込みが破壊している。したがって、斜面下方の被熱痕跡がSY11681の構築に先行することは間違いない。これに対して、丘陵斜面上方、焼成部付近の被熱痕跡は版築土内にもみ存在し、掘り込みの外には広がらない。こちらはSY11681の操業によるものとみられる。このことから、斜面下方のSY11681の構築に先行する被熱痕跡を第一次被熱、斜面上方のSY11681の操業による被熱痕跡を第二次被熱として、段階差を捉えることができる。

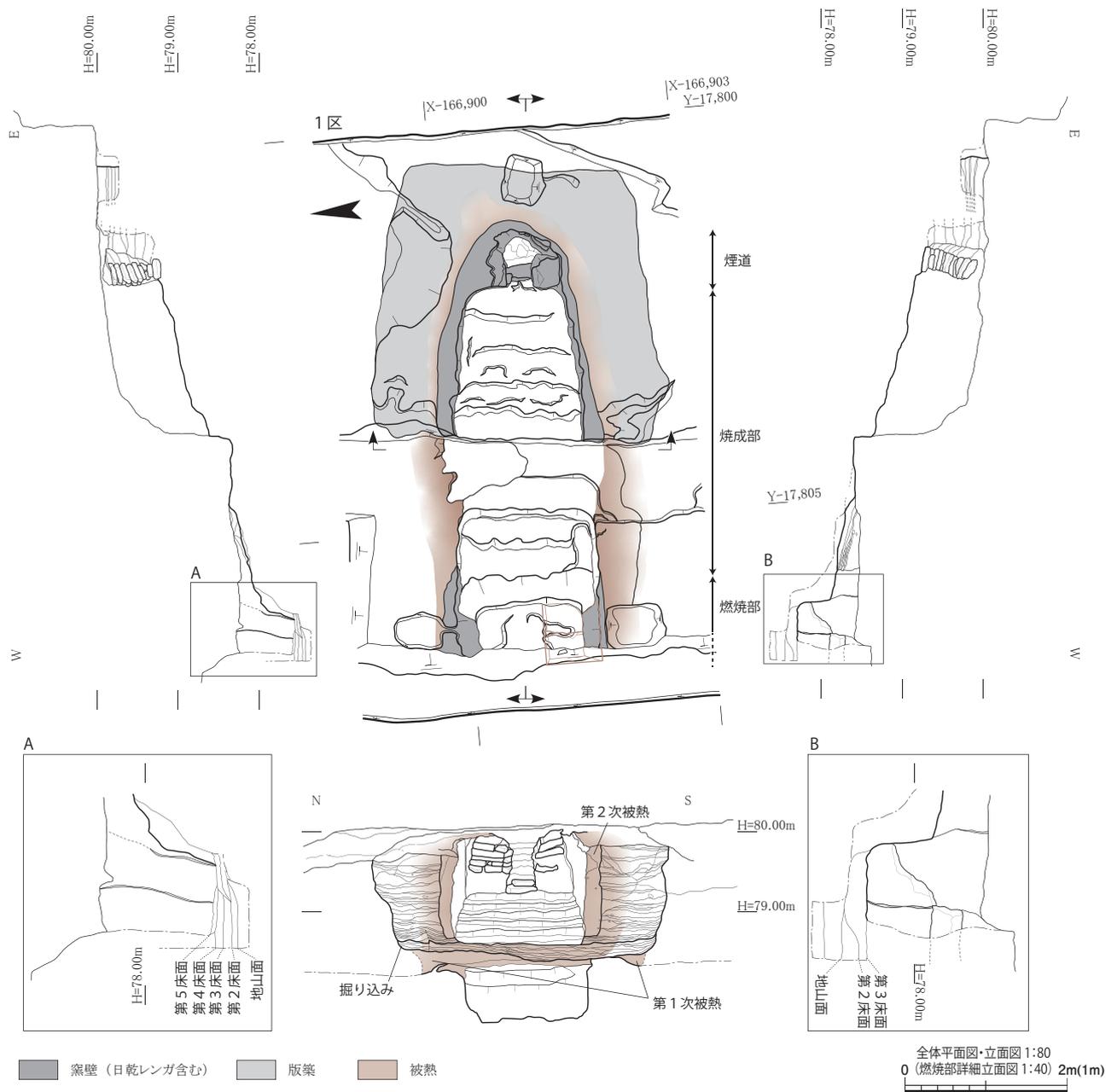


図13 瓦窯SY11681 (1号窯) 平面図・立面図 1:80

煙道 焼成部奥に1本の煙道を備える。焼成部側に日乾レンガを積み重ね、奥壁との間の空間に粘土を層状に貼り付けて幅を狭めて、煙道を構築する。現在、焼成部奥壁の上部が失われているが、焼成部床面からやや上がった位置に横穴が設けられ、煙道に接続していたことが1978年の調査で報告されている。煙道の平面形は幅0.8m、奥行0.4mの半円形で、ほぼ垂直に立ち上がる。

(2) 瓦窯SY11682 (2号窯)

位置 2区で検出した(図10・14, PL5)。瓦窯SY11681

と同様、瓦窯の主軸は東西方向で丘陵斜面に対して直交する。斜面西方で焚口、斜面東方で煙道を検出した。SY11681とは4.0mの間隔をとる。

基本構造 半地下式有階平窯。1978年の調査で発見していた瓦窯の焚口・燃焼部・焼成部・煙道を再検出した。全長4.6m、最大幅3.6m。窯の北半は失われているが、周辺に被熱痕跡を残しているため、概形を復元できる。地山を長方形に掘り込み、掘り込みの内側に平面杓子形になるように日乾レンガを長手方向に積み上げて窯壁を構

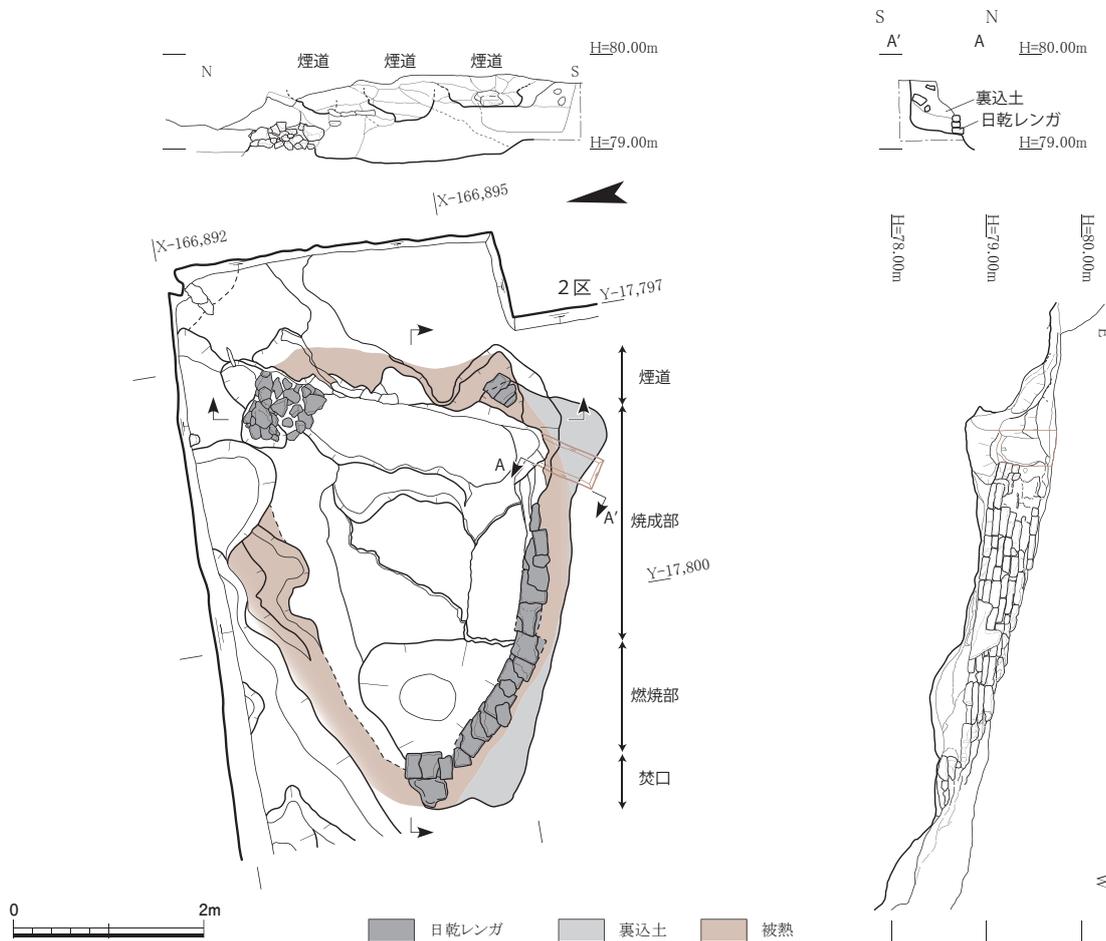


図 14 瓦窯 SY11682 (2号窯) 平面図・立面図 1 : 80

築する。掘り込みと日乾レンガの内側には若干の裏込土を充填する。窯壁残存高は0.6mで、日乾レンガの目地や表面にはスサ入りの粘土を貼り付けている。

焚口 推定幅0.8m。焼成部の狭端に日乾レンガを窯の主軸に対して直交するように積み重ね、焚口をつくる。

焼成部 全長1.2m、推定最大幅1.6m。地山を削り出した高さ0.3mの階によって焼成部と区分される。中央でややくぼみ、焚口にむかってすりあがる。炭を含む黒褐色砂質土が厚く堆積し、その上面に瓦が散乱していたことが、1978年の調査で判明している。底面は岩盤が露出しており、貼床等は確認できなかった。

焼成部 全長2.4m、推定最大幅3.6m。側壁残存高0.6m。床面はわずかに傾斜する。地山の岩盤の上に厚さ0.1m程度の粘土を貼り付けたものが硬化して残存する。

煙道 焼成部奥壁北隅に崩落した日乾レンガが堆積しており、北端の煙道の残存部と考えられる。その他の

煙道は地山を削り出して構築した痕跡がわずかに残るのみだが、後述する瓦窯 SY11684 と同様、3本の煙道を備えていたとみられる。それぞれ検出幅0.7m、奥行0.5m。

(3) 瓦窯 SY11683 (3号窯)

位置 3区西端で瓦窯の一部、2区東北隅部で被熱痕跡をそれぞれ検出した(図10・11・15、PL6-1)。瓦窯の主軸は南北方向で、丘陵斜面に対して直交する。瓦窯 SY11682 に近接するが、重複関係はない。

基本構造 1977年の探査で存在が推定されたもので、今回、その一部を検出した。3区西端で窯壁と炭を多く含んだ黒色土の堆積を検出しており、焼成部の一部の可能性がある。また、2区東北隅で被熱痕跡を確認しており、位置や規模からみて、SY11683の影響によるものとみられる。全体の詳細な構造は不明だが、その他の窯窯に特徴的な大規模な掘り込みが周囲に存在しないこと、隣接

する窯との重複関係が認められず、その他の窯よりも小規模と想定できることから、瓦窯 SY11682・11684 と同様、平窯の可能性が高い。

燃烧部 検出長 0.5m。最大幅 2.1m。地山を削り出して窯を構築する。内部には炭を含む黒色土が堆積し、上位に天井土の一部とみられる粘土の硬化層が存在する。

(4) 瓦窯 SY11684 (4号窯)

位置 3区中央部で検出した(図10・11・16, PL.6-2・7)。瓦窯の主軸は南北方向で丘陵斜面に対して直交する。斜面北方で焚口、斜面南方で焼成部を検出した。瓦窯

SY11683 とは 3.0m の間隔をとる。

基本構造 半地下式有階平窯。1960年の調査で発見していた瓦窯の焚口・燃烧部・焼成部を再検出した。全長は 3.6m であることがかつての調査で確認されており、今回はそのうち 2.5m 分を検出した。最大幅 2.7m。残存高 0.8m。基本構造や平面形は前述の瓦窯 SY11682 (2号窯) とほぼ共通し、日乾レンガを長手方向に積み上げて窯壁を構築する。ただし、窯体に沿うように平面杓子形に地山を掘り込んでおり、SY11682 で確認したような裏込土はほとんど認められない。

焚口 幅 0.7m。燃烧部北端に日乾レンガを窯の主軸に対して直交方向に積み重ねて燃烧部との境とする。さらにその北方に粘土ブロックを土堤状に貼り付け、細長い焚口を形成する。

燃烧部 全長 0.9m、最大幅 1.4m。SY11682 と同様に中央部がくぼんでおり、地山を削り出した高さ 0.3m の階によって焼成部と区分される。底面は岩盤が露出しており、貼床などは確認できなかった。燃烧部内は未調査であったため、灰、瓦・日乾レンガの破片が 0.1m ほど堆積していることを確認した。燃烧部壁面下半は岩盤が露出し、上半は日乾レンガを積み重ねる。

焼成部 検出長 1.1m。最大幅 2.2m。床面は岩盤が露出しており、SY11682 と同様、わずかな傾斜をもつ。過去の調査では床一面が焼土で埋まっていたことが報告されている。

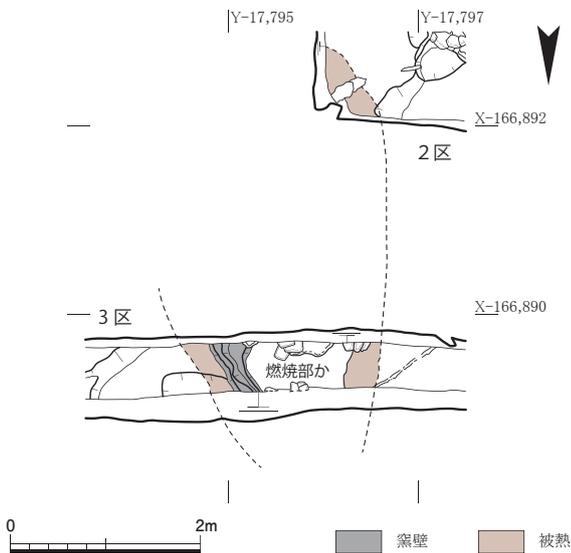


図15 瓦窯 SY11683 (3号窯) 平面図 1:80

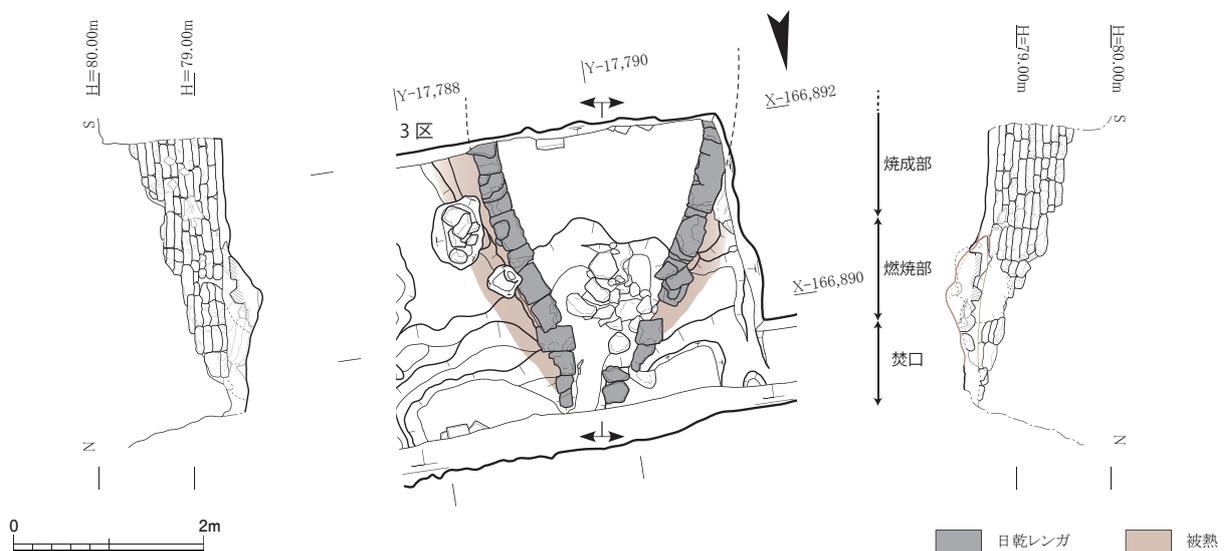


図16 瓦窯 SY11684 (4号窯) 平面図・立面図 1:80

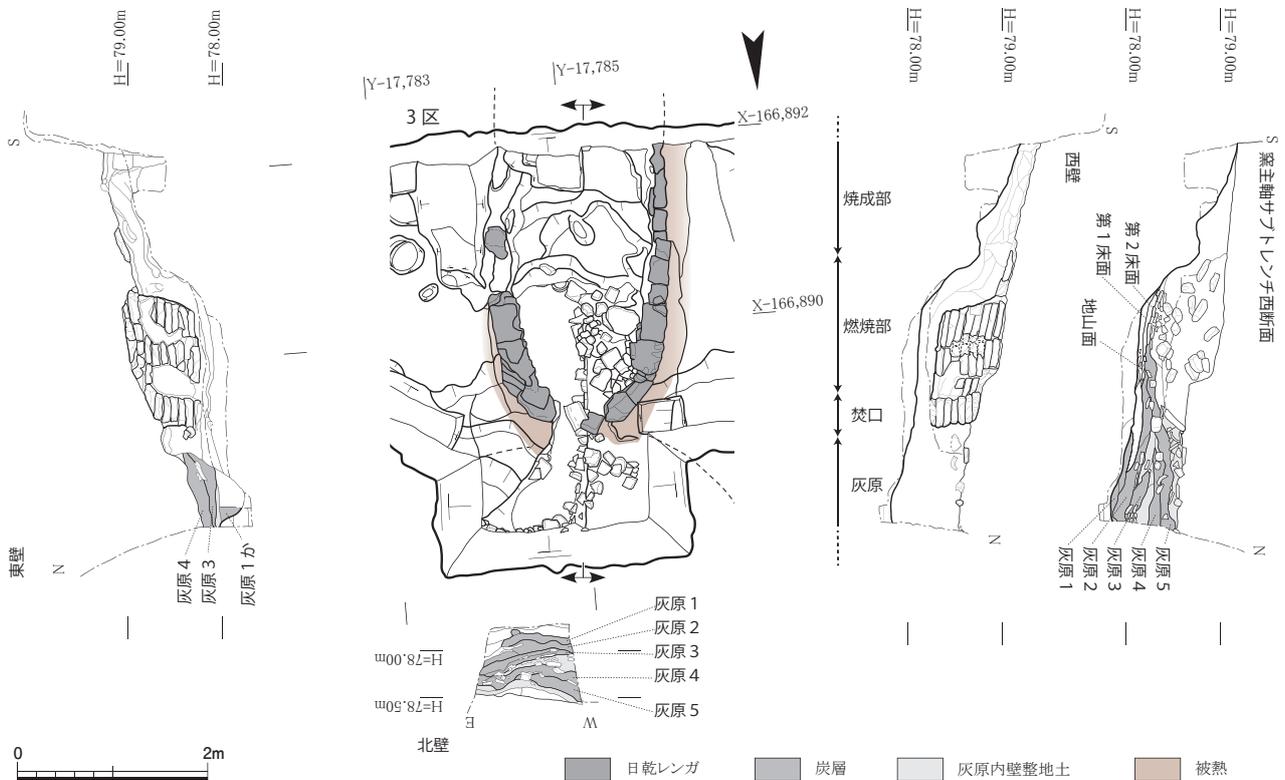


図17 瓦窯 SY11685 平面図・立面図・断面図 1 : 80

煙道 今回は調査区外だが、過去の調査で3本の煙道が確認されている。日乾レンガを用いた断面方形の煙道であり、斜め上方向に開口していたと報告されている。

(5) 瓦窯 SY11685

位置 3区中央部で検出した(図10・11・17, PL8)。瓦窯の主軸は南北方向で、丘陵斜面に対して直交する。斜面北方で灰原および焚口、斜面南方で焼成部を検出した。瓦窯 SY11684 とは 2.0m の間隔をもつ。

基本構造 半地下式有階(有段)窖窯。焚口・燃焼部・焼成部を検出した。検出長 3.2m、最大幅 1.9m。残存高 0.8m。窯体に沿って地山を掘り込んでおり、裏込土を用いない。燃焼部および焼成部の側壁に日乾レンガを積み、平面形はやや細長い、杓子形を呈するなど、全体的には瓦窯 SY11682・11684 のような平窯に近い様相をもつ。その一方で、地山を削り出した比較的傾斜の急な焼成部を備えており、燃焼部床面に複数の貼床をもつなど、内部構造的には窖窯に近い。

焚口 幅 0.5m。燃焼部北端で日乾レンガを窯の主軸に対して直交方向に積み重ねて燃焼部との境とする。さ

らにその北方に粘土ブロックを土堤状に貼り付け、細長い焚口を形成する。

燃焼部 全長 1.1m、最大幅 1.3m。地山を削り出した高さ 0.6m の階によって焼成部と区分される。燃焼部壁面は下端から日乾レンガを積み上げて構築し、壁面および目地にスサ入り粘土を貼り付ける。燃焼部内には多量の瓦や日乾レンガの破片が堆積していた。底面には粘土による貼床をおこなっており、地山面を含めて合計 3 面の床面を確認した。

焼成部 検出長 1.5m、最大幅 1.6m。地山を削り出して比較的強い傾斜をもった床面を構築する。上面の削平が激しく、床面に段を備えていたかは不明である。

灰原 焚口の北方で灰原を検出した。瓦を焼成した際に窯内に生じた炭や不良品を掻き出した炭混土の堆積と、粘土による整地が交互に堆積する。操業の都度、炭や不良品の掻き出しと周辺の整地を繰り返していたとみられる。炭混土の堆積は合計 5 層分(灰原 1~5)を確認しており、少なくとも 5 回以上、焼成が実施されたと考えられる。なお、灰原の最下層(灰原 1)は瓦を含まない炭

混土の堆積であり、窯の本格操業に先行する「空焚き」をおこなった痕跡の可能性がある。灰原は東方の瓦窯 SY11686 周辺まで広がり、SY11686 の築窯にともなう掘り込みおよび素掘溝によって一部が破壊されている。灰原はさらに北方斜面に広がる。

(6) 瓦窯 SY11686

位置 3区東端で検出した(図10・11・18、PL.9)。瓦窯の主軸は南北方向で、瓦窯 SY11684・11685 に比べて東偏する。斜面北方で灰原および焚口、斜面南方で燃焼部を検出した。瓦窯 SY11685 とは 2.0m の間隔をとる。

基本構造 半地下式窖窯。焚口と燃焼部を検出した。検出長 1.4m、窯体最大幅 1.8m。地山を東西 5.7m、深さ 0.7m 以上掘り込み、掘り込みの内側最大 2.6m の範囲に版築で突き固めた砂質土を積み上げている。掘り込みの東西両端に沿って幅約 0.6m の素掘溝をめぐらせる。これらはその配置から排水機能を有していた可能性が高い。版築土の内側に日乾レンガを鉛直方向に 2 個積み上げ、焚口および燃焼部の壁面を構築する。焼成部は調査区外だが、大規模な掘り込みと版築土は瓦窯 SY11681 と共通する。これに加えて、平窯とは焚口の構造が大きく異なることから、窖窯と判断した。SY11686 の構築にともなう掘り込みおよび素掘溝で SY11685 の灰原の一部が削平されている。SY11685 が一定期間操業され、灰原の堆積が進んだ段階で、SY11686 の構築が開始されたと理解できる。

焚口 幅 0.6m。燃焼部側壁から直角方向に開口部を狭め、焚口をつくり出す。灰原が広がる面から高さ 0.7m 分の版築土が立ち上がっており、この版築土の内側に日乾レンガを鉛直方向に積み上げて焚口を構成する。焚口の北方には北に向かってハの字状に広がる前庭部が存在し、後述の灰原が展開する。

燃焼部 検出長 0.5m、幅 1.8m。壁面は焚口と同様に下端から日乾レンガを鉛直方向に積み上げて構築したとみられる。日乾レンガの上面に粘土ブロックを貼り付けた部分があり、天井土を構成した粘土ブロックの一部の可能性もある。この粘土ブロックの表面で、棒状の工具で粘土ブロックを突き固めた痕跡を確認した。

灰原 焚口の北方、前庭部で灰原を検出した。瓦片と炭混土を含む堆積層が複数存在し、複数回の操業が想定される。灰原はさらに北方斜面に広がる。

(7) 瓦窯 SY11687

4区で灰原を検出した(図10・12・19、PL.10-1)。窯の詳細な構造は不明だが、窯体は調査区外にあり、隣接する瓦窯 SY11686・11688 に比して丘陵の上方に構築されたと考えられる。灰原は地山上面の整地土直上に広がり、さらに北方に展開するとみられる。今回は瓦片や炭化物を含む 1 層のみを検出した。

(8) 瓦窯 SY11688

4区で版築土を検出した(図10・12・20、PL.10-2・11)。東西約 5.2m の範囲の地山を深さ 0.5m 以上掘り込み、その内側約 1.9m の範囲に版築で突き固めた砂質土を積み上げる。検出長 1.6m。窯の中央部には最大幅 1.3m の版築のおよばない範囲があり、燃焼部ないし焼成部に相当するか。同地点で性格不明の小穴を合計 3 基検出しており、窯構築時のなんらかの施設の痕跡の可能性もある。大規模な掘り込みと版築土、平面形が窯 SY11681・11686 に類似し、窖窯の一部とみられる。ただし、窯壁を構築した痕跡や被熱痕跡が周囲に認められず、完成することなく放棄された窯と考えられる。

(9) 瓦窯 SY11689

4区で焼成部ないし燃焼部とみられる部分を検出した(図10・12・21、PL.12)。東西幅 6.5m の地山を深さ 1.8m 以上掘り込み、その内側 1.8~2.3m に版築で突き固めた砂質土を積み上げる。掘り込みの東西両端に沿って幅約 0.4m の素掘溝をめぐらせており、瓦窯 SY11686 と同様、排水用の溝の役割が想定できる。窯壁はスサをあまり含まない粘土を積み上げる。検出長 1.6m、残存高 1.8m、窯体最大幅 1.7m。掘り込みの底部から 1.0~1.2m までは版築土の内側に粘土を層状に積み上げて窯壁を構築するが、それより上方は層状の粘土を内側に持ち送って天井を構築しつつ、掘り込みとの間に版築を施す。壁幅は約 0.3m。粘土層の一部は紫色に還元・硬化した面で剥離しており、上面には突き棒痕跡が明瞭に残る。大規模な掘り込みと版築土、平面形が瓦窯 SY11681・11686 と共通しており、内部の詳細は不明だが、半地下式の窖窯の可能性が高い。

(9) 土坑 SK11690

瓦窯 SY11686 と瓦窯 SY11687 の間で検出した小型の土坑(図10・12・22、PL.13-1)。地山を掘り込んでおり、底面付近のみが残存する。底面は平らで東西 0.6m、南北 0.6m

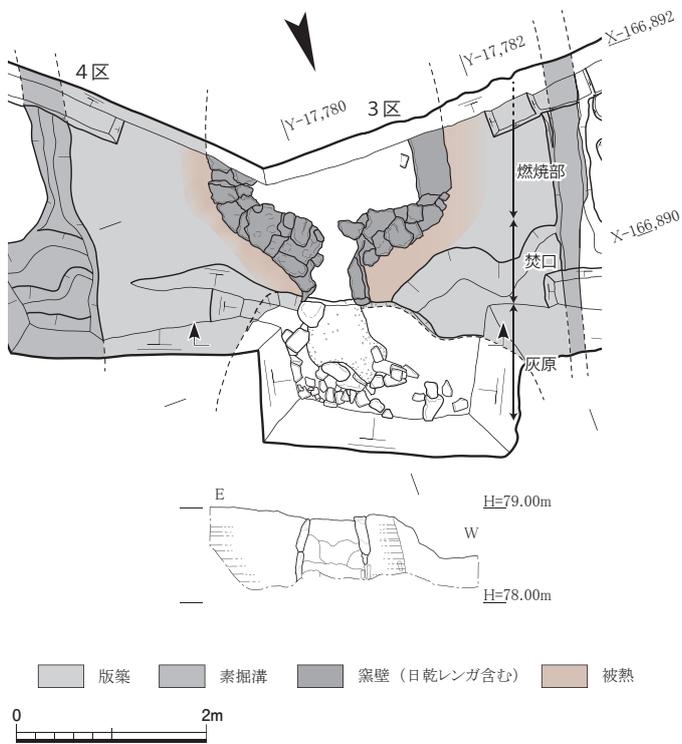


图 18 瓦窯 SY11686 平面図・焚口立面図 1 : 80

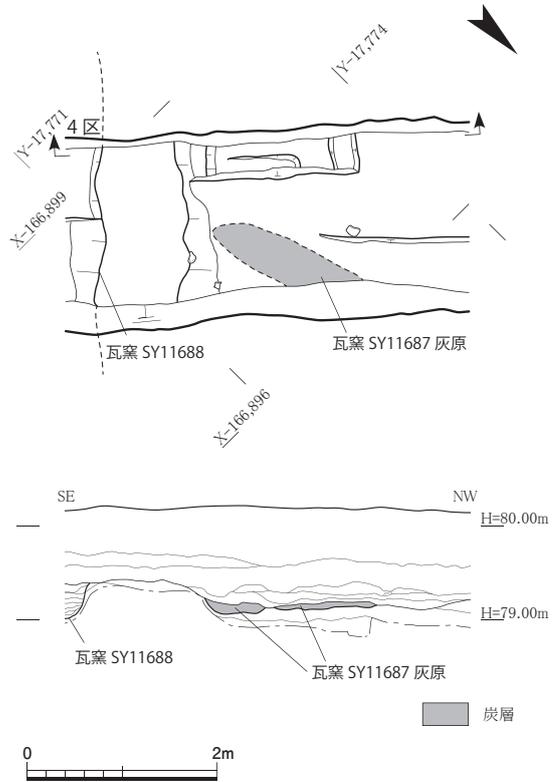


图 19 瓦窯 SY11687 灰原平面図・断面図 1 : 80

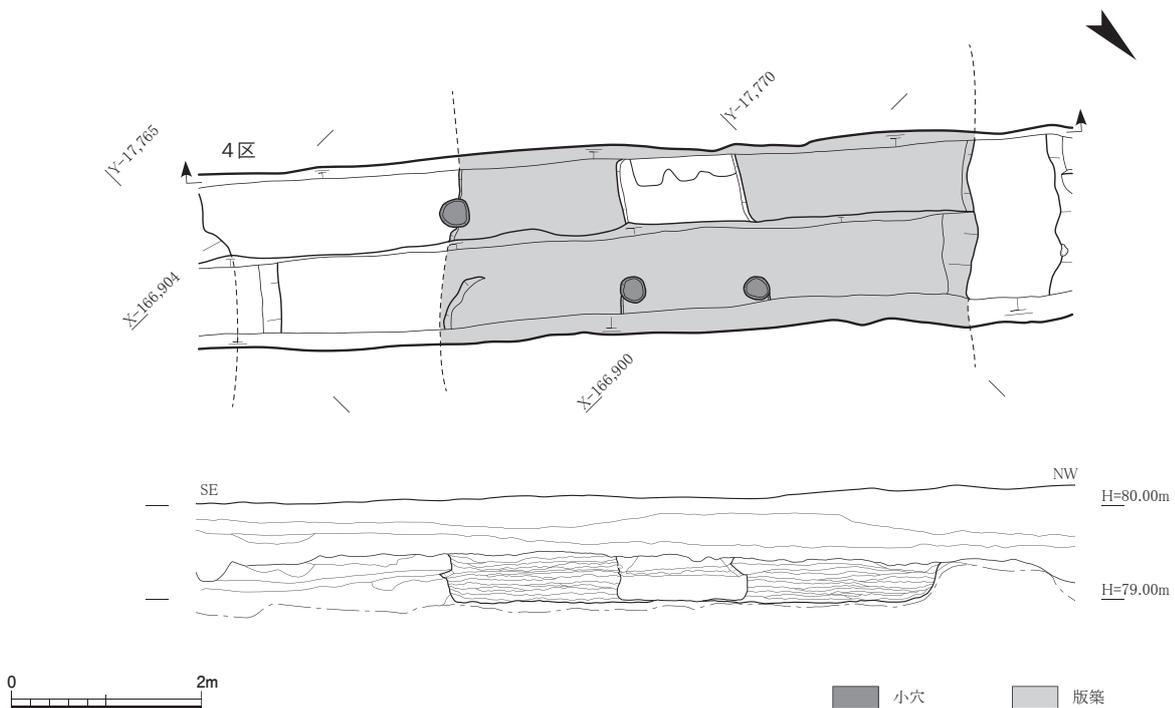


图 20 瓦窯 SY11688 平面図・断面図 1 : 80

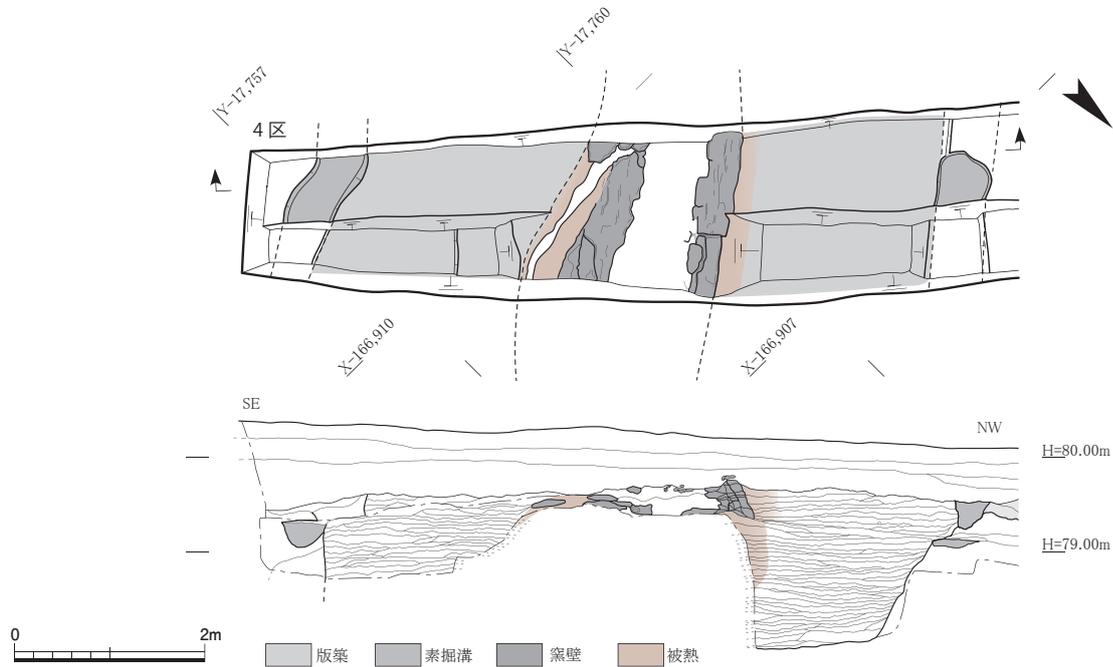


図21 瓦窯 SY11689 平面図・断面図 1 : 80

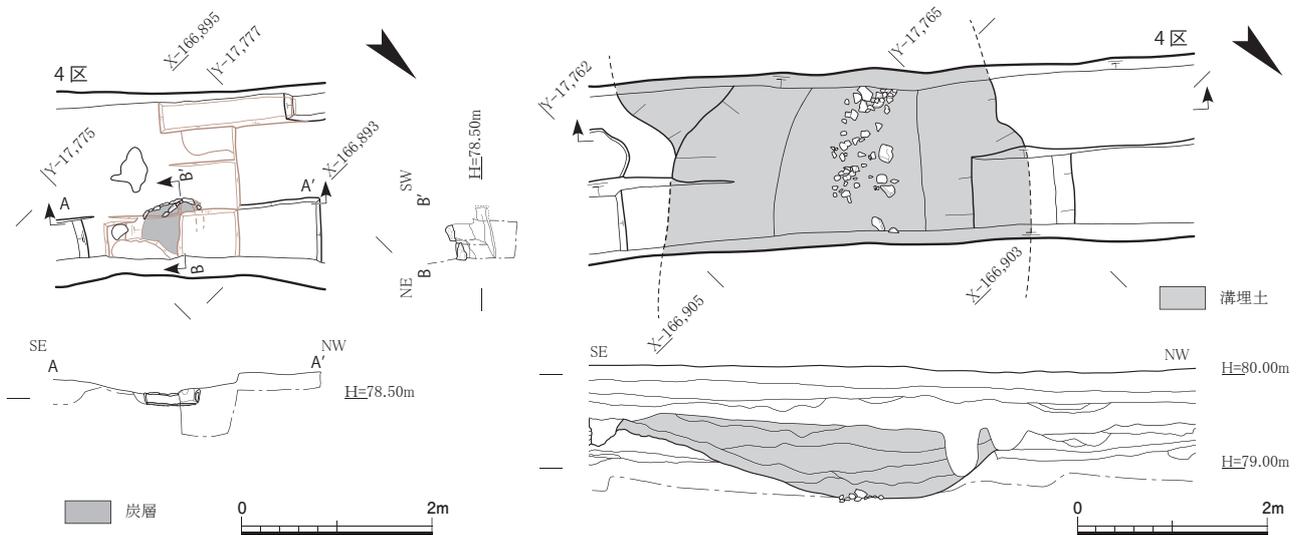


図22 土坑 SK11690 平面図・断面図 1 : 80

図23 斜行溝 SD11680 平面図・断面図 1 : 80

以上の隅丸方形を呈し、底に炭混土層が約3cm堆積する。底面から直立する壁面には、厚さ約3cmの粘土を貼るが、その大半が赤～黒褐色に焼け、硬化している。ただし、底面や周辺の地山はほとんど被熱していない。なんらかの焼成遺構と考えられるが、性格や時期は特定し難い。

(10) 斜行溝 SD11680

瓦窯 SY11688 と瓦窯 SY11689 の間で検出した、幅 3.6

～4.0m の素掘溝 (図 10・12・23, PL.13-2)。検出長 1.6m、深さ 0.8m 以上で地山を掘り込む。溝埋土の最下層から埴輪片・土師器片・須恵器片が出土しており、古墳の周濠の一部の可能性はある。その場合、西方で対となる溝を検出していないため、4区東方の調査区外に同様の溝が存在したと考えられ、SY11689 は古墳の墳丘を削平した上面に構築されていることとなる。

凸面ナデ調整。

軒丸瓦 6275E の出土は 1 点のみで、8 が SY11685 燃焼部から出土した (PL.17-1)。瓦当厚 2.0~2.8cm。玉縁部が欠けており、丸瓦残存長 28.5cm。褐灰色。瓦当側面上半から丸瓦後方にかけて、縦方向のヘラケズリを施し、瓦当側面全体を周に沿うナデで整える。瓦当裏面は全体にヘラケズリをおこない、上半はナデで仕上げる。丸瓦凹面接合部付近にはユビまたは棒状工具による接合痕跡を残す。丸瓦は側縁 c 手法。

軒丸瓦 6275I とみられる破片が SY11685 灰原から 1 点出土した (9)。外縁のみの小片で、詳細は不明。

軒丸瓦 6279A とみられる小片が SY11684 燃焼部から 1 点出土した (10)。SY11686 周辺の遺物包含層からも小片が 1 点出土しているが、いずれも外縁のみの小片で、詳細は不明である。

軒平瓦 6643Aa の多くは SY11685 から出土した。11 は SY11685 燃焼部出土 (PL.17-2・5)。全長 36.0cm、顎長 8.0cm、顎の高さ 1.3cm の貼り付け削り出し段顎。にぶい黄橙色。広端から狭端にかけて粘土紐を二重に巻き付けて体部をつくり、広端付近にのみ粘土紐を三重に巻き付けて顎部を成形する。側面はヘラケズリで面取りをおこなう。凸面も広端部から中程には縦方向のヘラケズリを施すが、狭端部にはわずかに縦縄タタキの痕跡を残す。凹面は瓦当部付近のみ幅 2.5cm 程度のヘラケズリを施す。この他、瓦当部の小片が 2 点出土している。12 は SY11685 燃焼部、13 は瓦窯 SY11689 の版築土内から出土した。

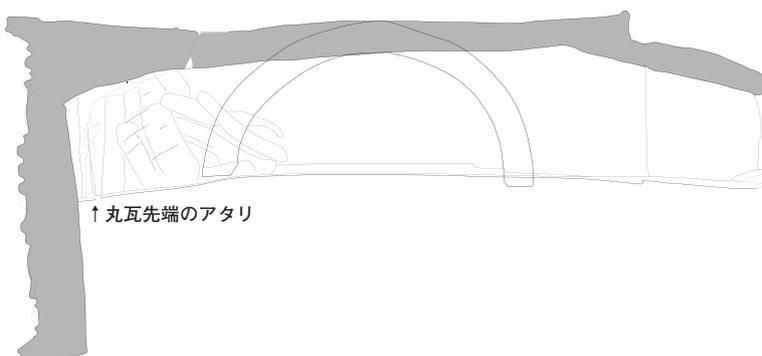
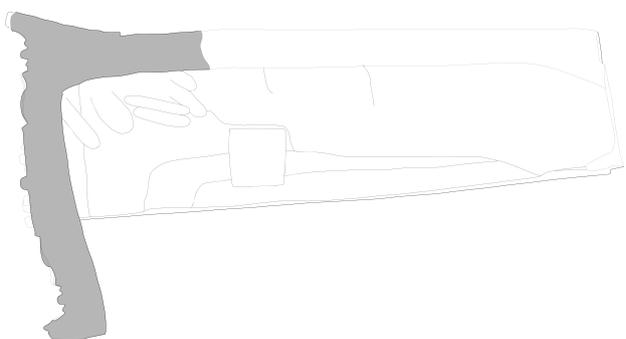
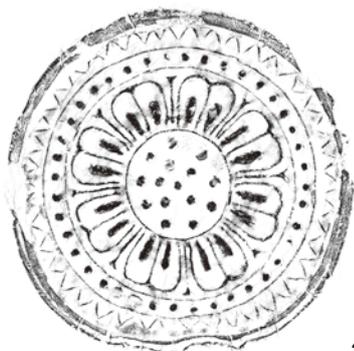
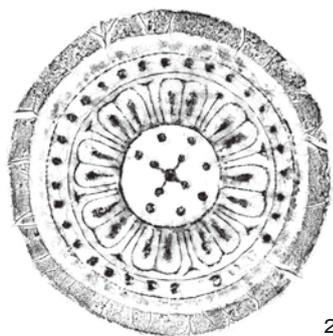
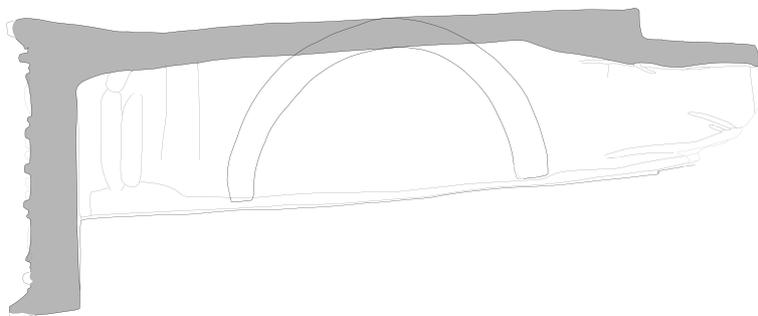
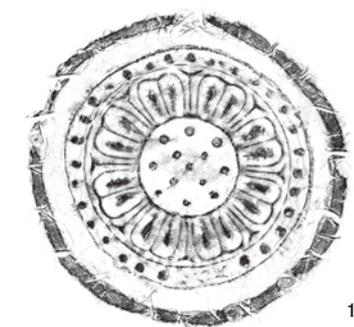
丸瓦 いずれも幅 2~3cm の帯状粘土を積み上げる「粘土紐技法」を用いた玉縁式丸瓦 (図 26・27)。胴部から玉縁部にかけて粘土紐を一連で積み上げ、別途肩部付近に粘土を貼り付けて玉縁を成形する C 手法を用いる。全体に縦縄タタキによる叩き締めをおこなった後、ナデおよびカキ目調整を施すが、玉縁部のナデ調整を省略し、カキ目を明瞭に残す個体が少数存在する。側面調整は分割破面の調整をおこなわない a 手法を基本とし、軒丸瓦のみ側面全体にヘラケズリを施す c 手法を用いる。

1 は SY11685 燃焼部出土。全長 34.1cm、玉縁長 5.4cm、直径 17.0cm。赤黒色。2 は SY11686 灰原出土。全長 34.3cm、玉縁長 5.0cm。直径 15.5cm。褐灰色。3 は SY11685 灰原出土。全長 31.7cm。玉縁長 5.1cm。直径 16.1cm。4 は SY11685 燃焼部出土。全長 28.0cm、玉縁長 7.3cm、直径 17.7cm。他の個

体に比べて全長が短く、玉縁長が長くなるように成形された個体。玉縁部凸面に明瞭なカキ目を残す。灰黄色。5 は SY11685 燃焼部出土。玉縁部から肩部が欠けている。直径 18.6cm。灰色。6 は SY11685 燃焼部出土。直径 18.2cm。褐灰色。**平瓦** いずれも幅 3~5cm の帯状粘土を積み上げる粘土紐技法を用いた桶巻づくり平瓦 (図 28・29)。凸面は縄タタキの後、ナデおよびカキ目調整をおこない、縄目を残さない。凹面狭・広端部付近にヘラケズリをおこなうものが多い。平瓦分割後の側縁調整は基本的にはおこなわず、軒平瓦のみ側縁全体にケズリ調整をおこなう。なお、凹面に分割界点をのこす資料が複数存在する。これらはいずれも桶の側板に設けられた縄の結び目が反転したものとみられる。

1 は SY11684 燃焼部出土。全長 37.2cm、厚さ 2.5~3.2cm のやや厚い個体。褐灰色。狭端から 4.5~5.5cm の位置に分割界点があり、分割截線に重複する。反対側にも分割界点があり、広端から 5.5~6.7cm の位置にある。ただし、こちらは先の分割界点から平行に 19.1cm の間隔をおいた、平瓦の中央部付近にあたる。2 は SY11686 灰原出土。全長 37.2cm。厚さ 2.0~2.4cm。灰黄褐色。片側面の分割截線に重複する分割界点が 2 つ存在する。それぞれ狭端から 9.5~13.0cm、広端から 3.5~4.2cm の位置にある。3 は SY11685 燃焼部出土。全長 36.6cm、厚さ 2.3cm。にぶい橙色。片側面の分割截線に重複する分割界点が 2 つ存在する。それぞれ狭端から 9.0~11.5cm、広端から 6.0~8.4cm の位置にある。4 は全長 34.7cm、横幅 25.0cm、厚さ 1.4~2.3cm。灰色。片側面の分割截線に重複する分割界点が、広端から 7.2~9.0cm の位置に 1 つ存在する。今回出土した平瓦で唯一横幅が明らかとなった個体。5・6 は凸面のナデを省略し、カキ目を明瞭に残す個体。5 は SY11685 燃焼部出土。厚さ 1.7~2.0cm。灰色。6 は SY11685 焚口付近出土。片側面の分割截線に重複する分割界点が、広端から 1.5~2.8cm の位置に 1 つ存在する。

鬘斗瓦 今回出土した道具瓦の大半は鬘斗瓦である。多様な形態の鬘斗瓦が出土しており、側面調整と法量にもとづいて整理をおこなった。A 類 (両側面未調整)、B 類 (片側面ヘラケズリ)、C 類 (両側面ヘラケズリ)、D 類 (片側面に断面剣状の面取り加工、反対側面はヘラケズリの上、一角に隅切加工) の 4 つに大別し、特に B・C 類については横幅にもとづいて、1 (横幅 11cm 以下)、2 (横幅 11~15cm)、3 (横



↑ 丸瓦先端のアタリ

0 10 cm

図24 第213次調査出土軒瓦(1) 1:4

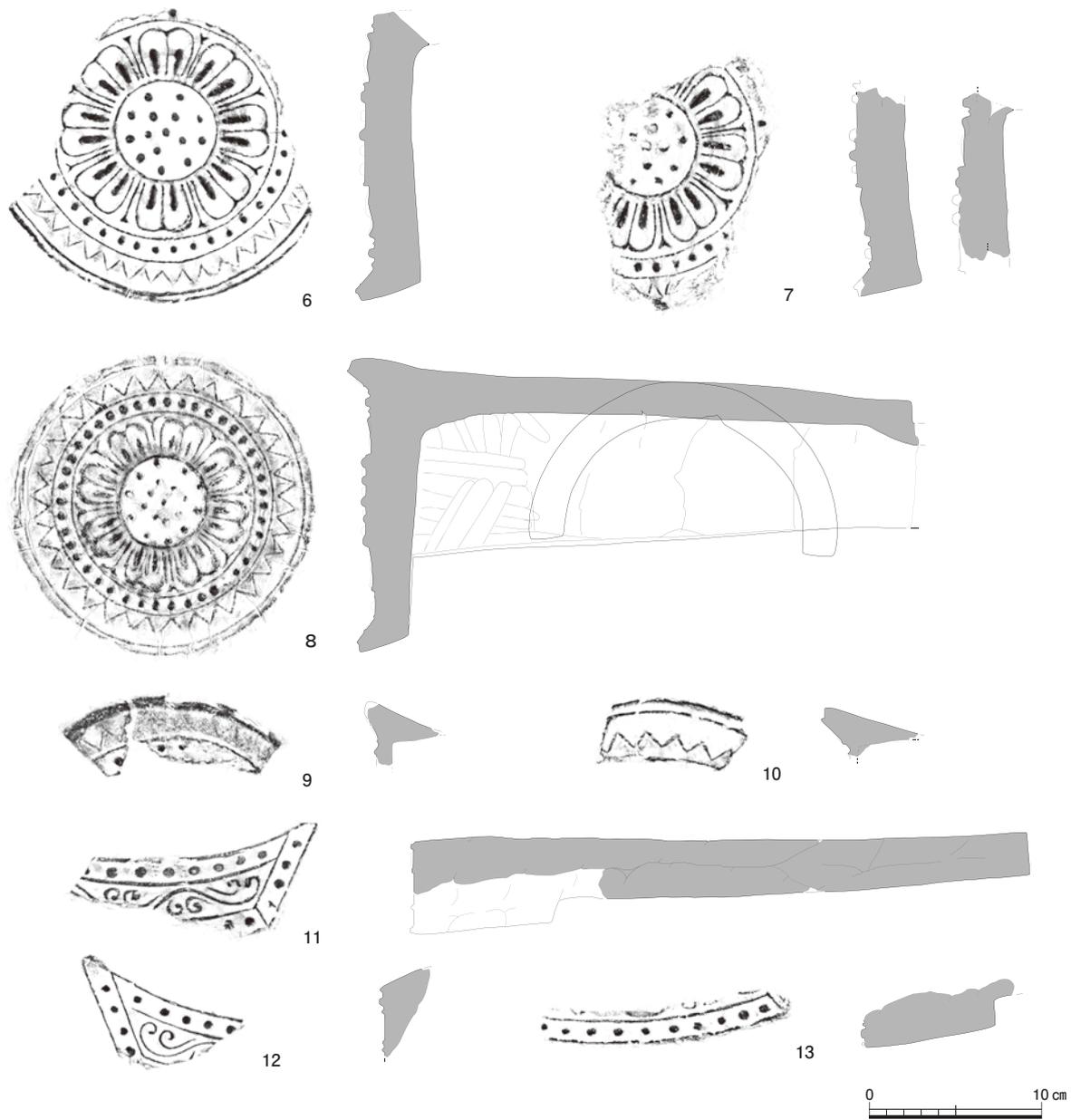


図 25 第 213 次調査出土軒瓦 (2) 1 : 4

幅 15cm 以上) の 3 つに細分した (図 30・31)。

1 は両側面未調整の A 類。SY11684 焼成部出土。残存長 22.4cm、横幅 12.5cm。厚さ 2.3cm。にぶい黄橙色。凸面は横方向のカキ目およびナデ調整。片側面の分割截線に重複する分割界点が 1 ヶ所あるが、端部との位置関係は不明。

2~4 は片側面にのみヘラケズリを施す B 類。2 は B1 類の完形品。SY11684 出土。全長 35.2cm、横幅 9.0~11.0cm。厚さ 2.1cm。褐灰色。凸面はタテナデおよびヘラケズリ調整。3 は B2 類の完形品。SY11684 出土。全長 35.8cm、

横幅 12.0cm。厚さ 2.0cm。にぶい黄橙色。凸面は縦方向のカキ目およびナデ調整。凹面中央部狭端から 9.5cm、広端から 8.0cm の位置にそれぞれ分割界点があり、分割截線とは重複しない。4 は B3 類の完形品。SY11684 出土。全長 35.3cm、横幅 15.2cm。厚さ 2.0~2.5cm。褐灰色。凸面は横方向のカキ目および縦方向のヘラケズリ、ナデ調整。凹面中央部狭端から 3.5cm、広端から 7.0cm の位置にそれぞれ分割界点があり、分割截線とは重複しない。

5~7 は両側面にヘラケズリを施す C 類。5 は C1 類の

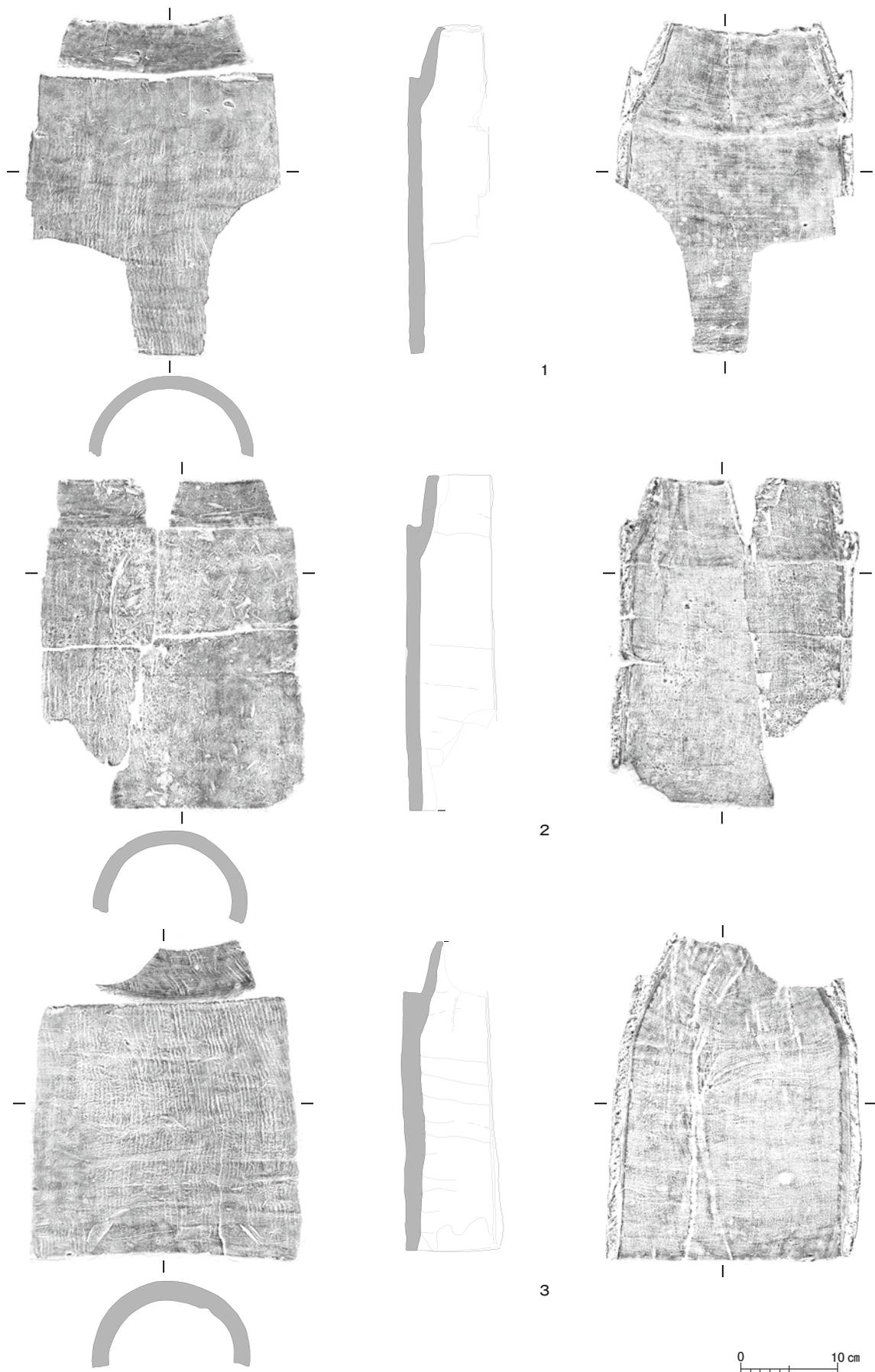


图 26 第 213 次調査出土丸瓦 (1) 1 : 6

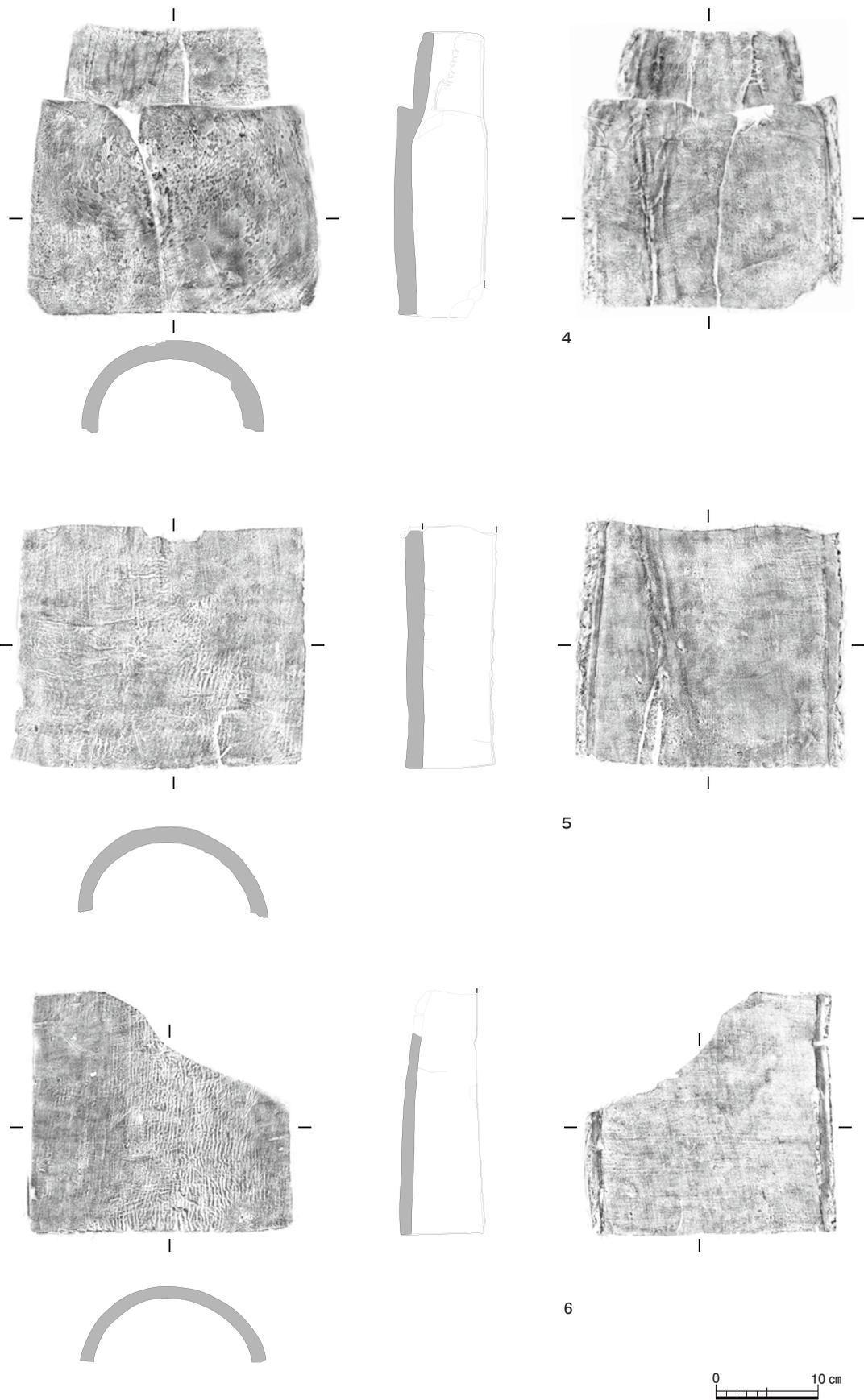


図 27 第 213 次調査出土丸瓦 (2) 1 : 6

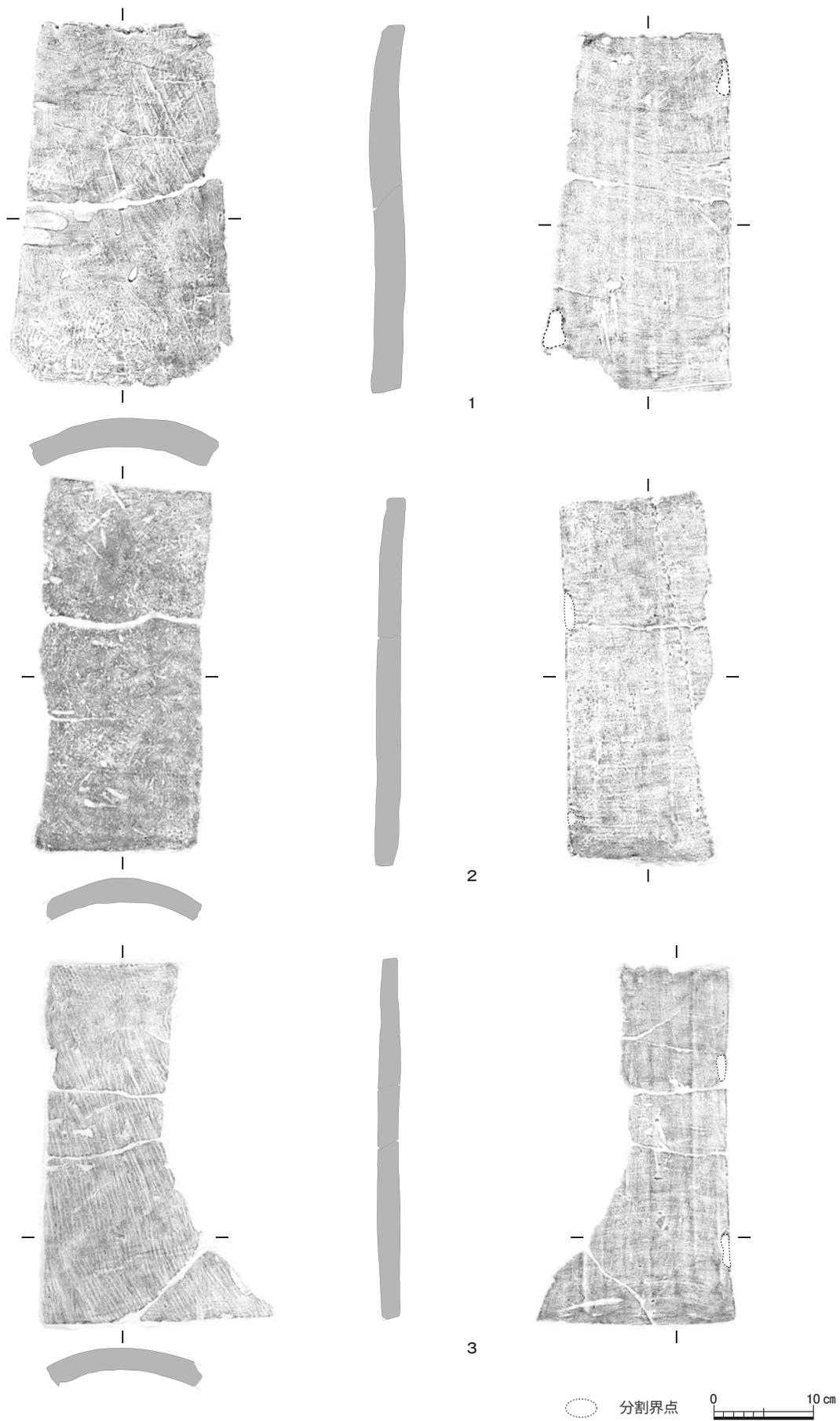


图 28 第 213 次調査出土平瓦 (1) 1 : 6

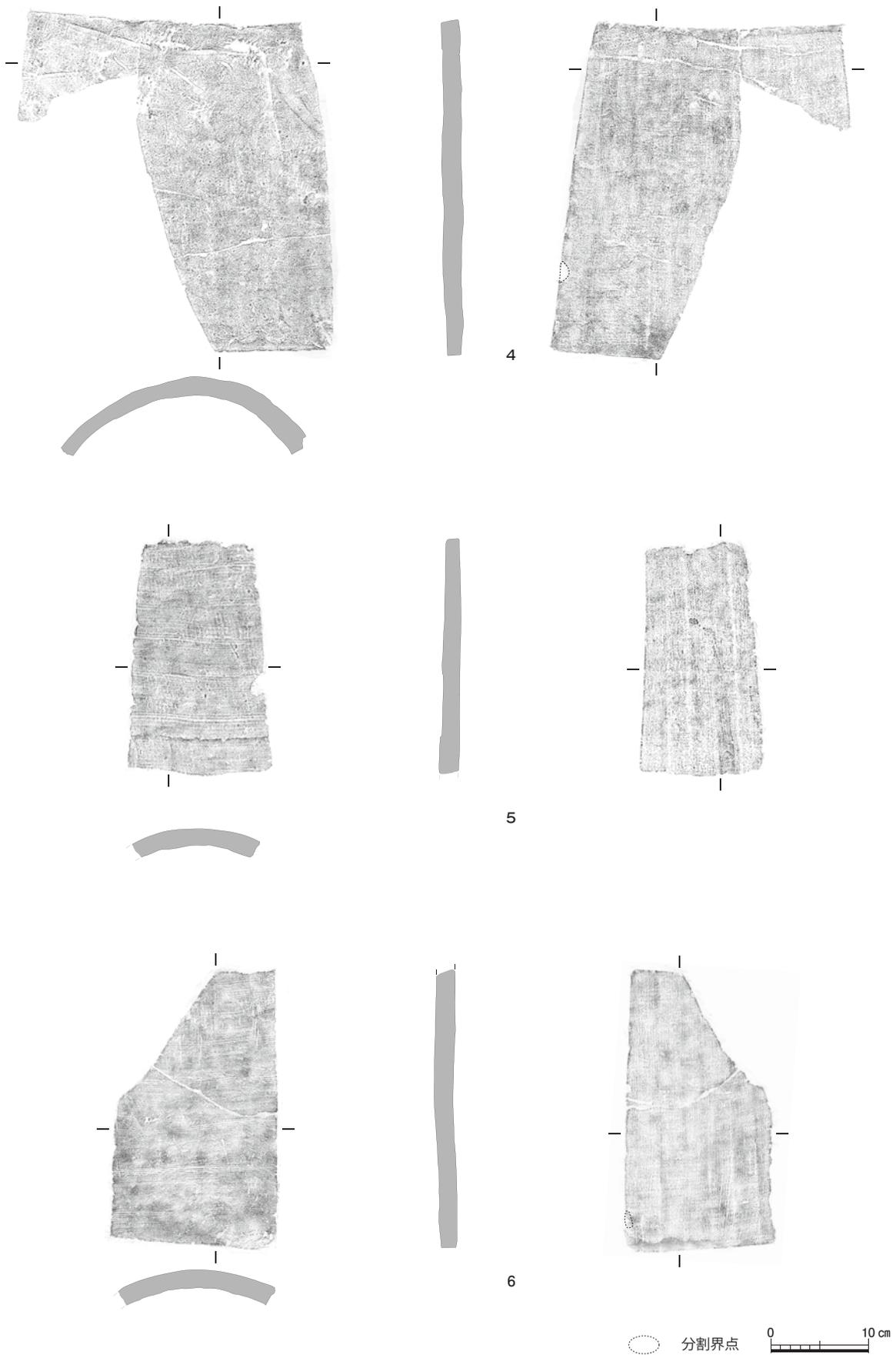


図 29 第 213 次調査出土平瓦 (2) 1 : 6

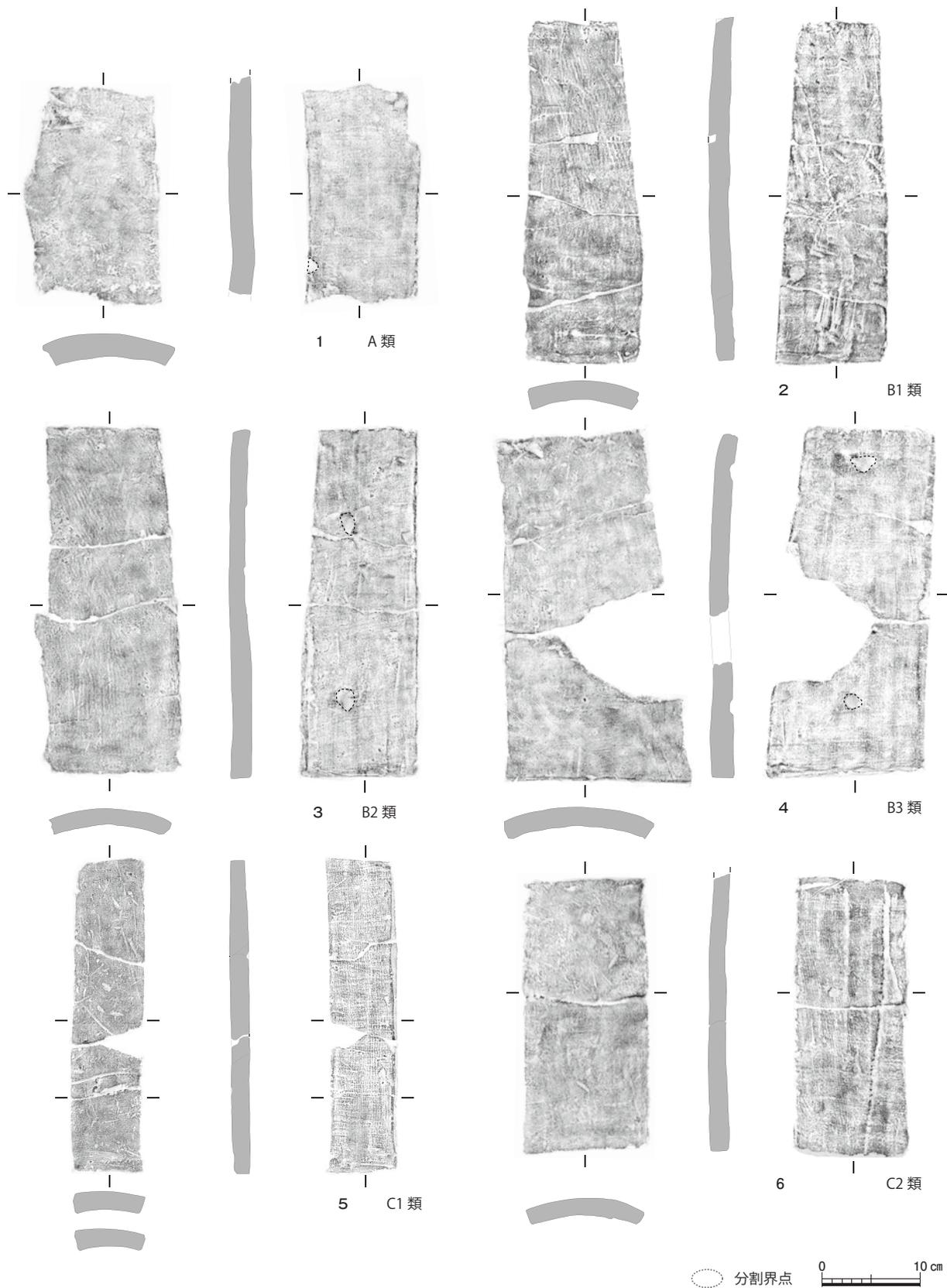


图 30 第 213 次調査出土熨斗瓦 (1) 1 : 6

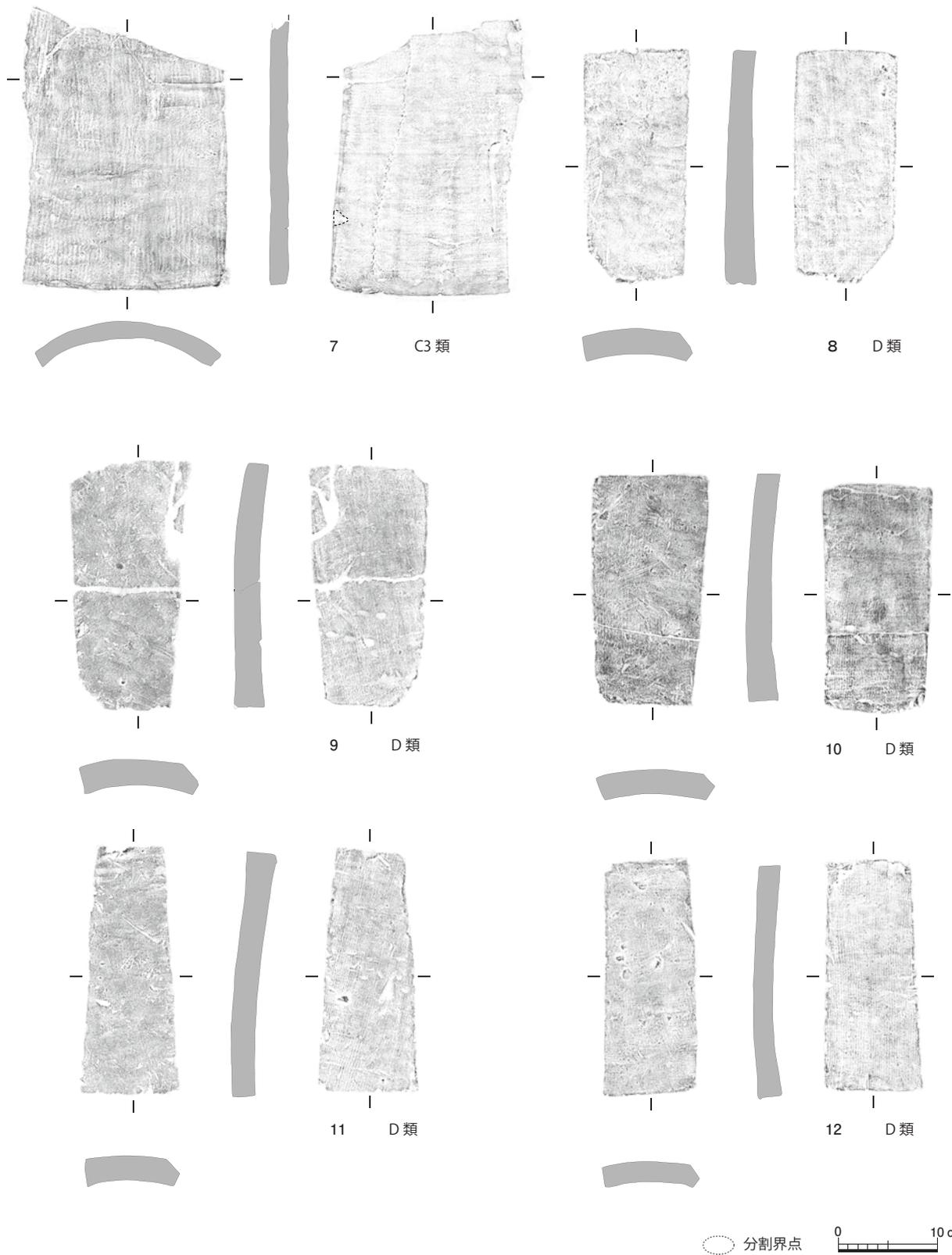


図31 第213次調査出土斗瓦(2) 1:6

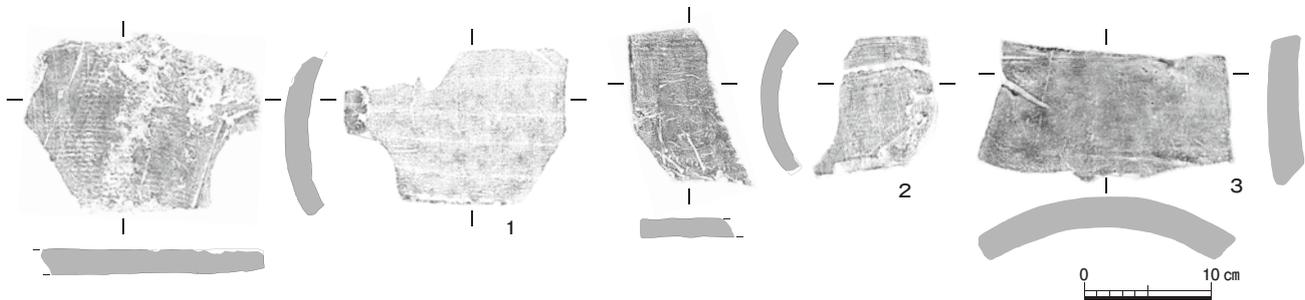


図 32 第 213 次調査出土面戸瓦・ヘラ描き瓦 1 : 6

完形品。SY11684 出土。全長 32.2cm、横幅 6.8cm。厚さ 1.5~1.8cm。灰褐色。凸面横方向のカキ目およびナデ調整。6 は C2 類。SY11684 出土。残存長 28.5cm、横幅 11.5cm。厚さ 1.5~2.0cm。にぶい褐色。両側面を断続的なヘラケズリで仕上げる。凸面縦方向のヘラケズリおよびナデ調整。7 は C3 類。SY11686 灰原出土。残存長 26.9cm、横幅 17.5cm。片側面は浅いヘラケズリ、反対側面は断続的なヘラケズリで調整する。凸面縦方向のヘラケズリおよびナデ調整。

8~12 は片側面に断面剣先状の面取り加工をおこない、反対側の側面を隅切瓦状に加工する D 類。凸面に比較的丁寧な横方向のカキ目調整と一部ナデを施す。短辺両端もヘラケズリで丁寧に調整する。その他の熨斗瓦に比べて全長が短く、全体に厚くつくられており、曲率が低い。すべて SY11685 燃焼部内の瓦堆積から出土した。8 は全長 23.9cm、横幅 11.1cm。厚さ 2.5cm。にぶい橙色。広端側の片隅を切り落とす。9 は縦 24.9cm、横 8.5~10.8cm。にぶい橙色。厚さ 2.6~2.7cm。広端側の片隅を切り落とす。10 は縦 23.3cm、横 12.0cm、厚さ 2.5cm。灰色。広端側の片隅を切り落とす。11 は縦 25.0cm、横 9.5cm、厚さ 2.5cm。灰褐色。12 は縦 23.9cm、横 9.9cm、厚さ 2.1cm。暗赤灰色。隅切を省略している。

面戸瓦 熨斗瓦に比して、面戸瓦の出土は少なく、合計 2 点にとどまった (図 32)。1 は平瓦を加工して面戸瓦としたもの。狭端の隅をくり抜いて袖部を形づくる。舌部は平瓦の側面をそのまま残し、二次加工はおこなわない。SY11684 出土。2 は丸瓦の一部を打ち欠いて面戸瓦としたもの。SY11685 出土。

ヘラ描き平瓦 平瓦の凸面にヘラ描きを施した平瓦が 1 点、SY11685 から出土した (図 32-3)。焼成前に線刻をおこなっている。

(道上祥武)

(2) 土器類

調査区全体から整理用木箱で 2 箱分の土器が出土した (図 33)。大半は古代の土器と古墳時代の土器・埴輪で、その他に弥生土器、瓦器、近世陶器などが出土した。

赤褐色砂質土出土土器 窯直上の遺物包含層である赤褐色砂質土から、整理用木箱 1 箱分に満たない土器が出土した。出土した土器の多くが古代の土師器・須恵器であることから、赤褐色砂質土は窯廃絶後に比較的短期間で堆積したものと考えられる。土師器には甕、須恵器には杯 B、杯 H、杯蓋、壺 A 蓋、壺 C、甕がある。1 は須恵器で、かえりをもたない杯蓋の端部片。残存度が低く口径を復元することはできない。外面全体に自然釉が降着する。

窯出土土器 窯内や窯周辺から整理用木箱 1 箱分に満たない土器が出土した。古代の土器が大半で、古墳時代の土器を少量含む。いずれも小片で、器種を特定できるものは少ない。2 は須恵器で、瓦窯 SY11689 の版築土から出土したかえりをもつ杯蓋の端部片。残存度が低く口径は復元できない。外面にロクロケズリを施す。

土器からみた窯の構築・操業年代については、出土量が少なく細かな時期決定は難しいが、窯直上の包含層 (赤褐色砂質土) からかえりをもたない杯蓋が、窯版築土からかえりをもつ杯蓋がそれぞれ出土したことから、飛鳥 IV~V と考えて大過ないであろう。

斜行溝 SD11680 出土土器・埴輪 整理用木箱 1 箱分の古墳時代の土器・埴輪と古代の土師器が出土した。古墳時代の土器には須恵器の器台、脚付長頸壺が、古代の土師器には甕 A がある。埴輪は形象埴輪片が多数出土した。

3 は土師器甕 A (PL.18-1)。胴部下半~底部が欠損しており、残存高は 15.5cm で復元口径は 14.0cm。口縁部は斜め上方に開き、端部を上方に強く摘み上げており、端部外面に面を作る。外面は肩部~胴部中位を縦方向のハケ

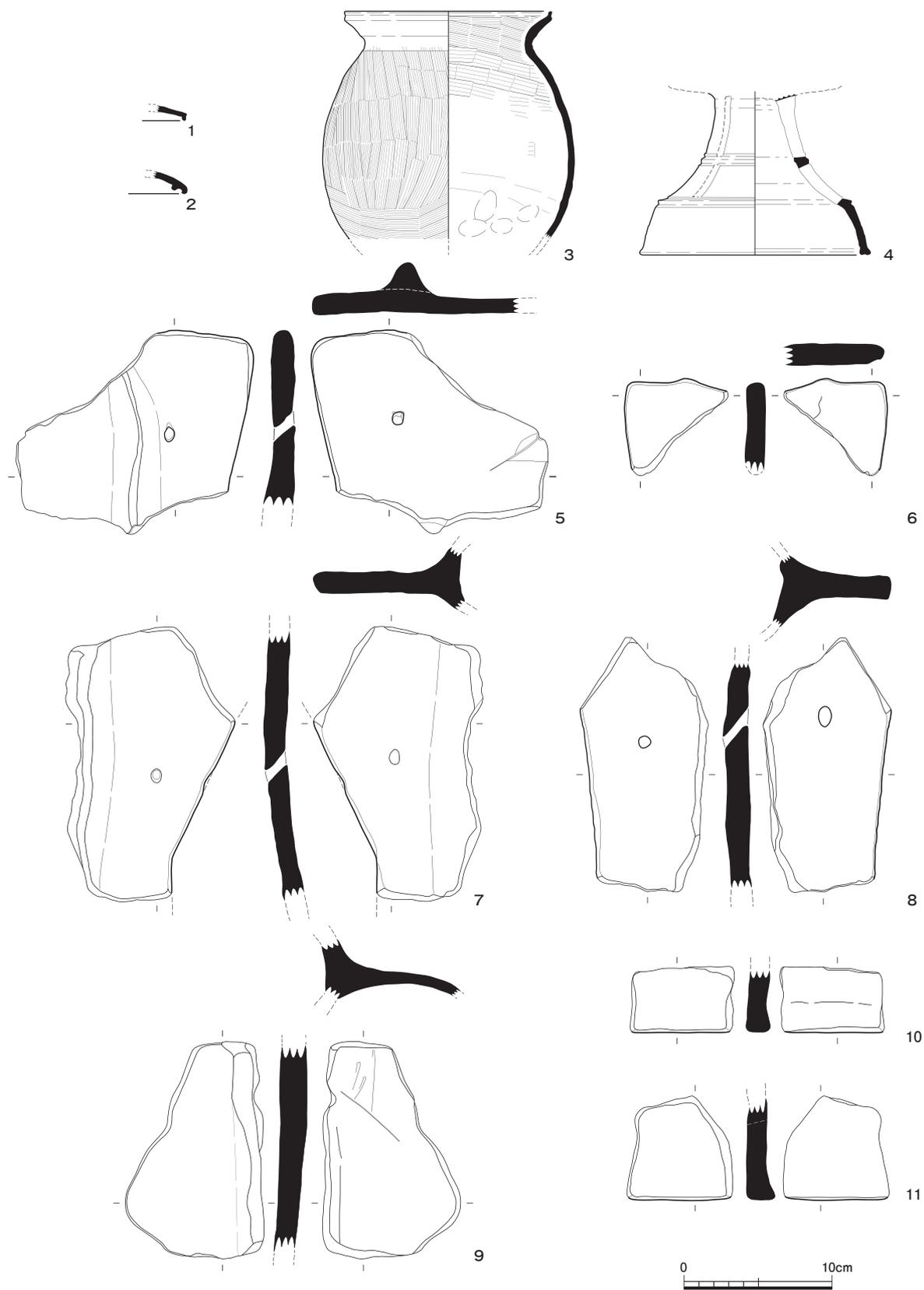


図 33 第 213 次調査出土土器類 1 : 4

メで調整し、内面は口縁部～肩部を横方向および斜め方向のハケメで調整する。胴部内面には板状工具によるナデ調整を施し、内面下部には指頭圧痕を残す。4は古墳時代の須恵器の脚部片で、脚付長頸壺にともなうものと考えられる(PL.18-1)。残存高は11.0cmで、復元底径は15.6cm。2段の方形透孔が、3方向に穿たれていたと思われる。脚部中位に2条の凹線が巡り、下方の曲部には鋭い稜をもつ。脚部のみでの時期決定は難しいが、類例が6世紀後半にみられる。

5～9は石見型埴輪片(PL.18-2)。いずれも胎土に径1～2mmの礫を多く含み、焼成は甘く、器面が磨滅しており調整等は不明である。SD11680から出土したすべての埴輪片が同質の胎土であり、同一個体の可能性もあるが、接合できる破片は少なく、全形を復元できる資料はない。5～8は形象部上半の破片で、5・7・8の鱗部には径8～10mmの円形の小孔が穿たれている。5は上段面の破片で背面には幅2.8cmの補強粘土を貼り付けている。6も上段面の破片と推定しているが、5と異なり、上辺に突起がみられ、5とは別個体の可能性がある。9は形象部下半の破片と考えられる。鱗部は湾曲しており、表面にはいくつかの刻線が認められるが、製作時にともなうものではなく、後世の掘削等による欠損とみられる。10・11は基底部片。底径は復元できないが、胎土が類似することから、5～9の石見型埴輪と同一個体である可能性が高い。なお、突帯は巡っていない。基底部に突帯をもたない点は「大和南部型」の石見型埴輪の特徴の一つとして指摘されており、類例として奈良県高取町イノヲク12号墳出土例が挙げられる⁹⁾。

上記の石見型埴輪の鱗部には線刻による文様がないこと、また図化はしていないものの石見型埴輪の可能性のある他の破片にも文様がみられないことから、今回出土した資料は、無分割型・無文型¹⁰⁾の石見型埴輪と考えられる。時期は6世紀後半と捉えておく。

(樋口典昭／群馬県地域創生部)

(3) 日乾レンガ

瓦窯内や遺物包含層から出土した日乾レンガおよび瓦窯SY11681・11682・11684・11685を構成する日乾レンガを取り上げる。いずれもスサ・砂礫を多く含んだ胎土で製作され、礫や土器の小片を含む個体もある。側面の粘土が一部突出する個体が複数存在し、成形時に側方か

ら板を押し当てて成形した痕跡とみられる。すなわち、作業台の上にスサを混ぜた粘土塊を配置し、上方または側方から板状の工具を押し当てて直方体に成形し、日光で乾燥させるという製作工程が想定できる。この想定によると、粘土の突出がある方が成形時の上面となる。なお、布目痕跡などは確認できなかった。

瓦窯内・遺物包含層出土資料(図34) 1はSY11684内埋戻土から出土した。長辺25.0cm、短辺21.5cm、厚さ7.5cm。小型に属する。中央がややくぼむ面が成形時の上面とみられる。長辺部分に被熱痕跡を強く残す。2はSY11685東側の攪乱から出土した。長辺残存長21.0cm、短辺18.0cm、厚さ7.3cm。小型に属する。長辺の一边を大きく切り落とし、角の丸い三角形平面を呈する。短辺部分に被熱痕跡を強く残す。3～6はSY11685燃焼部から出土した。3は長辺29.0cm、短辺19.0cm、厚さ10.8cm。小型に属するが、やや分厚い。側面2面に成形時の粘土の突出部を残し、その下方に幅7.5cmの平滑面をつくる。長辺部分に被熱痕跡を強く残す。4は長辺26.0cm、短辺22.0cm、厚さ7.7cm。小型に属する。側面1面に成形時の粘土の突出部を残し、その下方に幅5.5cmの平滑面をつくる。窯構築時に施したとみられるスサ混じりの粘土が表面に付着する。5は長辺26.0cm、短辺24.0cm、厚さ8.0cm。小型だが正方形に近く、厚さは小型の個体とほぼ等しい。側面1面に成形時の粘土の突出部を長さ1.5cm分残しており、その下方に幅5.5cmの平滑面を残す。6は長辺38.0cm、短辺26.0cm、厚さ10.0cm。後述する日乾レンガの基本的な大きさにはほぼ相当する。片側の長辺の二角を切り落とし、平面六角形となっている。いずれの面も平滑に仕上げ、粘土の突出部を残さない。最も短い辺に被熱痕跡を強く残す。6とほぼ同様の規模・形状をもつ個体が同じSY11685燃焼部で出土しており、特定の箇所を用いたと考えられる。出土地点や複雑な形状から、燃焼部から焼成部にかけて横幅が大きくなる箇所などが候補となるか。

瓦窯構成資料 各窯を構成する日乾レンガの計測がおこなった(図35、表4)。短辺は25～27cm前後を基本に個体差が少ない一方、長辺は個体差が大きく、その中でも35～38cm前後のものが多い。日乾レンガを主要な構築材とする窯(SY11682・11684・11685)はいずれもレンガを長手方向に積み上げていたが、杓子形の平面形を構成するために長さの微調整をおこなっていた結果とみられる。計

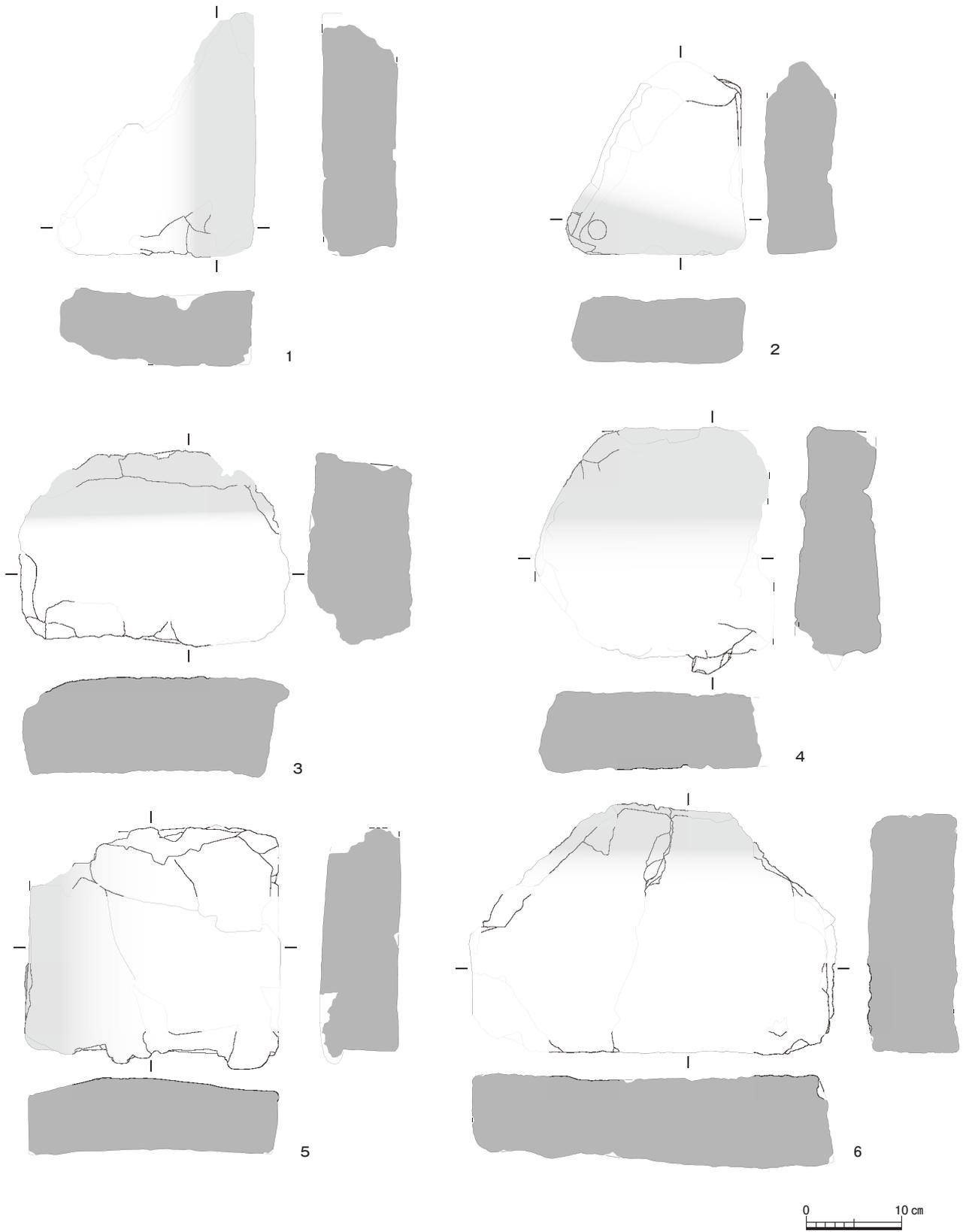


図 34 第 213 次調査出土日乾レンガ 1 : 6

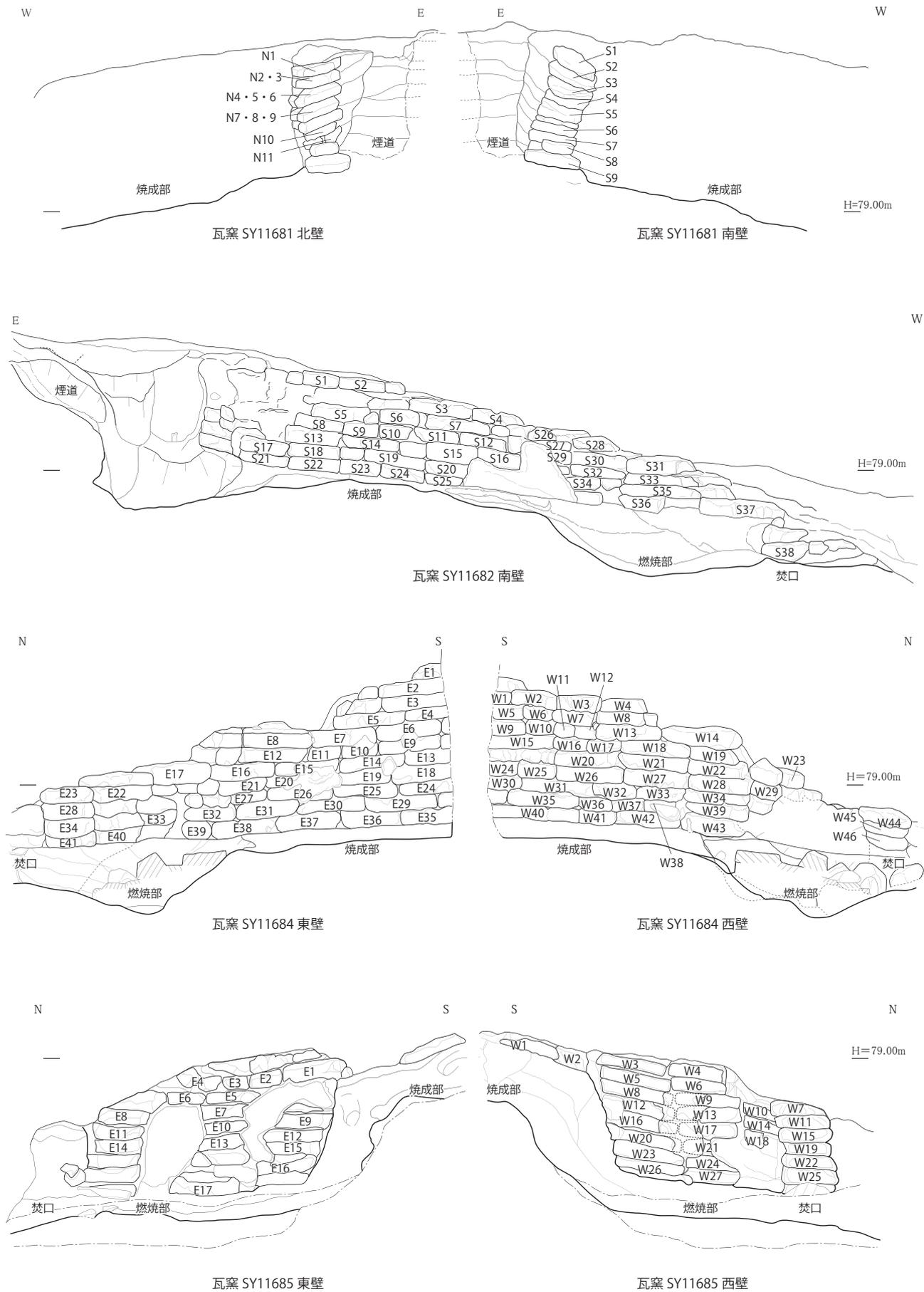


図 35 日乾レンガ法量一覧表対応図 1 : 30

表4 瓦窯 SY11681・11682・11684・11685 構成日乾レンガ計測値一覧表

遺構	計測No.	日乾レンガ計測値 (cm)			
		長辺	短辺	厚さ	
SY11681 南壁	S1	32.0	25.0	7.5	
	S2	36.0	25.0	7.0	
	S3	35.0	25.0	7.5	
	S4	36.0	25.0	6.0	
	S5	38.0	24.5	7.0	
	S6	40.0	25.0	8.0	
	S7	42.0	25.0	6.0	
	S8	27.0	17.0	6.5	
	S9	37.0	27.0	6.0	
SY11681 北壁	N1	38.5	28.5	7.0	
	N2		25.0	5.5	
	N3	38.0	25.0	6.5	
	N4	15.0	7.0	19.0	
	N5	17.0		7.0	
	N6	15.0		6.5	
	N7	20.7	18.0	6.0	
	N8	20.0		8.0	
	N9	15.0		7.0	
	N10		13.0		
	N11		10.0		
SY11682 南壁	S1			8.0	
	S2		25.0	7.0	
	S3	36.0	26.5	7.5	
	S4		25.0	7.0	
	S5	30.0		8.0	
	S6	22.0		8.0	
	S7	37.0		7.0	
	S8	25.5		7.0	
	S9	25.0		8.0	
	S10	15.0		7.0	
	S11	23.0		8.5	
	S12	25.0		7.0	
	S13	29.0		7.0	
	S14	25.0			
	S15	27.0		9.0	
	S16	22.0		8.0	
	S17	25.6		6.0	
	S18	37.0		7.0	
	S19	35.6		7.5	
	S20	28.0		8.0	
	S21	21.0		8.0	
	S22	25.0		7.0	
	S23	26.0		8.0	
	S24	23.0		7.0	
	S25	25.0		5.0	
	S26		25.0		
	S27			7.0	
	S28		27.0		
	S29			7.0	
	S30	30.0	27.0	7.0	
	S31		25.0	7.0	
	S32	28.0		7.5	
	S33	35.0	25.0	7.0	
	S34			7.6	
	S35	35.0	25.0	6.0	
	S36	25.0		7.0	
	S37		25.0	7.0	
	S38	36.5	25.0	7.0	
SY11684 西壁	W1	18.5		7.0	
	W2	25.5	23.0	7.0	
	W3	24.5	25.5	8.0	
	W4	22.0	26.0	7.5	
	W5	24.0		7.5	
	W6	15.5		7.0	
	W7	24.5		7.0	
	W8	28.0	26.5	7.0	
	W9	28.5		7.5	
	W10	15.5		7.5	
	W11	12.0		7.5	
	W12	13.0		7.0	
	W13	36.0	26.5	8.0	
	W14	36.0	27.0	7.5	
	W15	39.0		7.5	
	W16	20.5		7.0	
	W17	20.0		7.0	
	W18	40.0		8.0	
	W19	26.0	26.5	7.0	
	W20	32.5		7.0	
	W21	39.0		6.5	
	W22	31.0	25.0	7.0	
	W23		25.5	8.5	
	W24	17.5		8.0	
	W25	22.0		8.0	
	W26	38.5		8.0	
	W27	38.0		8.5	
	W28	38.0		8.0	
	W29		27.0	8.0	
	W30	25.0		7.0	
	W31	39.0		7.0	
	W32	32.0		7.0	
	W33	23.0		7.0	
	W34	38.0		7.0	
	W35	38.0		7.0	
	W36	21.0		7.0	
SY11684 西壁	W37	18.0		7.0	
	W38	24.0		7.0	
	W39	35.0		7.0	
	W40	55.0		6.0	
	W41	23.0		6.0	
	W42	37.0		7.0	
	W43	38.0		7.5	
	W44	26.5		7.0	
	W45			8.0	
	W46			7.5	
	SY11684 東壁	E1	35.5	22.0	8.0
		E2	35.0		8.0
		E3	38.0	26.0	7.0
		E4	22.0		7.0
		E5	38.0		10.0
		E6	38.0		8.0
		E7	37.5	27.5	8.0
E8				8.0	
E9		38.0		7.0	
E10		21.0		7.5	
E11		17.0		7.5	
E12		38.5		7.0	
E13		26.0		7.5	
E14		38.0		9.0	
E15		36.5		8.0	
E16		36.5		8.0	
E17		37.0	26.0	9.5	
E18	31.5		8.5		
E19	32.0		8.5		
E20	38.0		8.5		
E21	28.0		8.0		
E22			24.0		
E23	25.5	38.0	9.0		
E24			7.0		
E25	35.0		8.0		
E26	38.0		6.0		
E27	20.0		6.0		
E28	25.5	38.0	9.0		
E29	38.0		8.5		
E30	36.0		7.0		
E31	38.0		8.0		
E32	32.0		8.0		
E33	20.0				
E34	25.5	38.0	9.0		
E35	27.0		7.0		
E36	35.0		6.5		
E37	38.0		9.0		
E38	38.0		8.0		
E39	18.0		7.0		
E40	30.0				
E41	25.5	38.0	9.0		
SY11685 西壁	W1	35.0	27.0		
	W2		7.0		
	W3	38.0	27.0	6.5	
	W4	29.0	27.0	7.5	
	W5	38.0		7.0	
	W6	32.0		7.0	
	W7			7.0	
	W8	38.0		7.0	
	W9	35.0		7.0	
	W10	22.0	18.0	7.0	
	W11		27.0	7.0	
	W12	35.0		7.0	
	W13	38.0		7.5	
	W14	23.0		8.0	
	W15		27.0	8.0	
	W16	35.0		7.0	
	W17	35.0		7.0	
W18	25.0		7.0		
W19	25.0		7.0		
W20	38.0		9.0		
W21	30.0		9.0		
W22	25.0		8.0		
W23	38.0		7.0		
W24	30.0		7.0		
W25	25.0		7.0		
W26	35.0		6.0		
W27	30.0		7.0		
SY11685 東壁	E1	25.0	27.0	6.5	
	E2	17.0		6.0	
	E3	15.0	26.0	7.0	
	E4	18.0	22.0	7.0	
	E5	28.0		6.5	
	E6	28.0	15.0	7.0	
	E7			6.0	
	E8	25.0	22.0	8.0	
	E9			6.5	
	E10			6.0	
	E11	24.0		9.0	
	E12			6.5	
	E13			6.0	
	E14	23.0		7.0	
	E15			6.5	
	E16	32.0		6.0	
	E17	35.0		10.0	

測結果より、長辺 38cm 前後、短辺 27cm 前後が日高山瓦窯の日乾レンガの基本的なサイズといえる。製作工程におけるある程度の収縮が想定されるものの、そこには一定の規格が存在したと考えられる。

6 検出遺構・出土遺物の検討

(1) 瓦窯の構造

冒頭でも述べたように、日高山瓦窯には窖窯と平窯が併存する。今回、それぞれの窯の構造および構築方法について詳細な情報を得ることができた。ここではまず、その構造的特徴を整理する（図 36）。

窖 窯 焼成部が傾斜する構造をとる、日高山瓦窯以前から日本に存在する形式の窯。過去の調査であきらかになっていた瓦窯 SY11681 に加え、瓦窯 SY11686・11688・11689 も窖窯と考えられるが、ほぼ全容があきらかになったのは SY11681 のみである。ここでは、SY11681 で得られた情報を基本に、SY11686・11688・11689 の情報を補完することで、窯構造を復元する。

日高山瓦窯の窖窯は地山を掘り込み、別途粘土などを用いて天井を構築する「半地下式」である。今回、SY11686 で天井土の一部とみられる粘土を焚口付近で確認しているほか、SY11689 版築土の内側で、窯壁を構成する粘土を徐々に持ち送りながら層状に積み上げ、天井を構築している様子を確認した。

SY11681 では、焼成部の床面を合計 9 段のゆるやかな階段状に削り出していた。煙道は奥壁内側に粘土を貼り付けて幅を狭め、焼成部側に日乾レンガを積み上げる。焼成部と燃焼部の境には地山を削り出した階を備える。階の高さは 0.5m で、後述する平窯に比べてやや高い。SY11681 では燃焼部床面に粘土を用いた貼床を施して平坦に仕上げしており、地山面を含めた、合計 5 面の作業面を確認した。SY11686 では焚口および燃焼部に日乾レンガを構築材として使用していることを確認した。

日高山瓦窯の窖窯の最大の特徴は窯の周囲に施した版築土である。窯の周囲の地山を平面長方形に大きく掘り込み、版築で突き固めた土で掘り込みの内部を充填する。掘り込みは SY11681 で南北幅 5.7m、SY11689 で東西幅 6.5m、深さはもっとも残存状況のよい SY11689 で 1.8m におよぶ。このような大規模な基礎の機能として、窯の構築に際した地盤改良が想定できるが、前後の時期

を含めて、現状、類例はない。日高山瓦窯の窖窯で試行されたものの、普及には至らなかったと考えられる。なお、SY11681 では粘質土と砂質土による互層が明瞭だが、SY11686・11688・11689 では総じて砂質土を用いている。SY11689 では、天井部に近い位置でも版築土を検出しており、窯の大部分を版築土で埋め立てる構造が想定できる。また、未完成のまま廃棄されたとみられる SY11688 では、版築土の内側で 3 基の小穴を検出した。その詳細については検討が必要だが、この小穴を柱の抜取痕跡と仮定した場合、版築をおこなう際の堰板を支持する柱や窯構築時の支保工の柱などの存在が考えられるだろう。以上の版築土や日乾レンガの積み上げと並行して窯の内側にスサ入りの粘土を貼り付け、窯壁を作り上げていく築造工程が復元できる。

SY11686・11689 で、版築土の外縁を掘り込む素掘り溝を確認した。その配置から排水用の溝としての機能が想定でき、版築における砂質土の使用と一体で、湿気対策を試みたものと理解できる。なお、後述の平窯には同様の溝は存在しない。

前庭部の様相は不明な点が多いが、SY11686 の状況から、土饅頭状に積み上げた版築土を焚口付近でハの字状に削り取って前庭部を構成していたと考えられる。

平 窯 焼成部が平坦かきわめてゆるい傾斜をもつ窯で、日本では日高山瓦窯が現状での最古例である。既にあきらかとなっていた瓦窯 SY11682・11684 に加え、今回存在が確定した瓦窯 SY11683 も想定される平面規模や周囲に版築土が存在しない点から、平窯の可能性はある。

日高山瓦窯の平窯は先述した窖窯と同様、丘陵斜面の地山を平面杓子形に掘り込み、天井は別途粘土などを用いて構築する半地下式である。今回、平窯の天井構造に関する明確な情報を得ることはできなかったが、SY11684 燃焼部内から日乾レンガとともに不整形な粘土塊が複数出土しており、これらを構築材としていた可能性がある。

焼成部は段や畦のない平坦な床面を構成し、傾斜はほとんどない。SY11682 では焼成部床面に粘土を薄く貼った状況を確認したが、SY11684 では同様の状況は確認できなかった¹¹⁾。SY11682・11684 はいずれも焼成部と燃焼部の境界に地山を削り出した高さ 0.3m の階が存在し、窖窯に比べてやや低い。燃焼部は中央部がやや低く、ゆ

るやかなすり鉢状を呈する。SY11684 焼成部には炭化物を多く含む土が堆積しており、SY11683 で検出した炭混土はここに相当するとみられる。SY11682・11684 とともに3本の独立した煙道を備えており、焼成部奥壁に横穴をあけ、斜め方向に延び、地上に排気する¹²⁾。

日高山瓦窯の平窯は、杓子形の平面形と、窯を構成する日乾レンガが特徴である。日乾レンガはいずれもスサ、砂礫を多く含む粗い胎土で製作され、短辺や厚みはほぼ統一されている一方、長辺は窯の平面形にあわせて多様な長さに調整されている。基本的に長手方向に積み上げられ、焚口付近のみ日乾レンガを窯の主軸に対して直交方向に複数積み重ね、焼成部と焚口の境界とする。さらにその外側には不整形な粘土ブロックを土堤状に貼り付け、細長い焚口を構成する。日乾レンガの目地および表面にはスサ入り粘土を貼りつける。

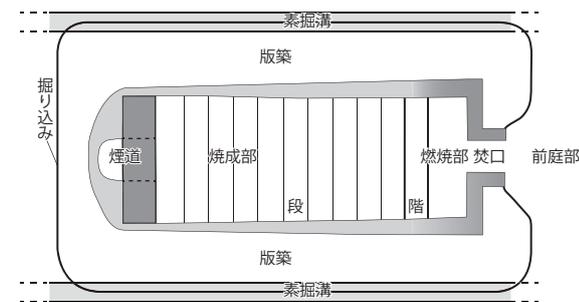
日高山瓦窯の平窯には先の窖窯のような版築土を含む巨大な掘り込みはない。ただし、SY11682 は平面長方形に地山を掘り込み、粘土による裏込めをおこないつつ、その内側に日乾レンガを積み重ねていた一方、SY11684 では裏込土をほぼ用いず、窯の規模と形状に合わせて地

山を掘り込み、そのまま日乾レンガを掘り込みの内側に沿って積み上げて窯を構築していた。

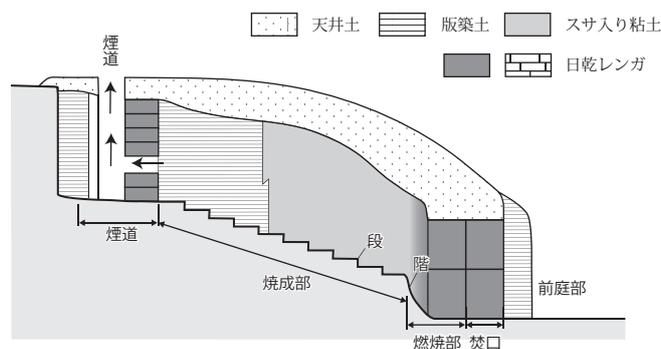
折衷窯 瓦窯 SY11685 の内部の調査をおこない、窖窯と平窯の両方の要素をもつ窯であることを確認した。

焼成部の検出は一部にとどめたが、平窯である SY11682・11684 の焼成部と比較すると、SY11685 の焼成部は明確に急な傾斜をもっていた。また、焼成部と燃焼部の境界には高さ 0.6m のやや高い階を備えているほか、燃焼部底面にサブトレンチを設定し、床面の調査をおこなったところ、粘土による貼床と地山面を含めた合計3面の平坦な床面が存在することを確認した。以上のように、内部構造に関しては窖窯の様相が強い。

対して、SY11685 の杓子形を呈する平面形は SY11682・11684 に近い。日高山瓦窯の窖窯に特徴的な掘り込みと版築による大規模な基礎は存在せず、日乾レンガを積み重ねて構築した窯壁など、外見上は SY11682・11684 のような平窯の様相が強い。ただし、細部に目を向けると、SY11682・11684 に比べて窯の平面形が主軸方向に細長くなっている点が指摘できる。また、SY11682・11684 の日乾レンガは焼成部床面の高さでレンガの下端を揃えてい

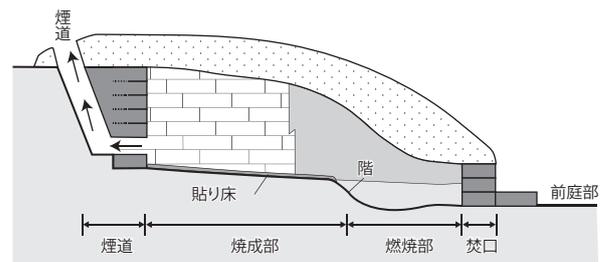
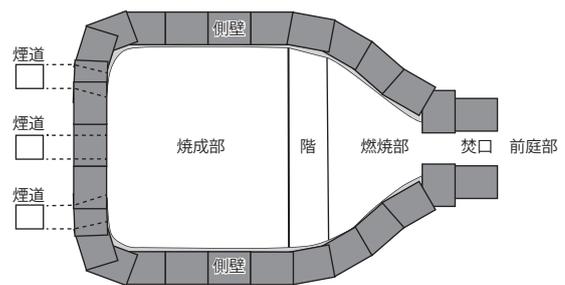


平面図



断面図

窖窯(瓦窯SY11681・11686・11688・11689)



平窯(瓦窯SY11682・11684)

図 36 日高山瓦窯の窯構造模式図

るが、SY11685は燃焼部の下端まで日乾レンガを構築材として使用するなど、若干の違いが認められた。

以上、SY11685の構造的特徴は日高山瓦窯の窖窯と平窯をかけ合わせた折衷様式といえる。窖窯でも構築材の一部に日乾レンガを使用していることは先述の通りであり、窖窯と平窯の相互の影響は随所でうかがえる。窖窯と平窯の併用に加え、両者を掛け合わせた窯の構築、運用が日高山瓦窯の操業実態であった。

(2) 瓦窯 SY11681 の改変について

今回検出した瓦窯の大半で窯の操業による被熱痕跡を確認した。とりわけ、瓦窯 SY11681 の被熱痕跡について、丘陵斜面下方、燃焼部付近の被熱痕跡（第一次被熱）と、丘陵斜面上方、焼成部付近の被熱痕跡（第二次被熱）に区別できることを今回指摘した。

これらの被熱痕跡の先後関係を改めて整理すると、SY11681 周辺の版築土を施す際の掘り込みが第一次被熱を破壊しており、SY11681 操業時の被熱痕跡である第二次被熱とは連続しない。すなわち、第一次被熱→版築土の施工（SY11681 の築造）→第二次被熱（SY11681 の操業）という順序があきらかであり、SY11681 の築造（版築による造成）以前に、ほぼ同じ場所で、前身の窯による操業がおこなわれたと考えてよい。

今回、前身窯に関して確認できたのは被熱痕跡のみで、窯体は SY11681 の構築によってほぼ破壊されたとみられる。ただし、被熱痕跡の広がりに着目すると、第一次被熱は第二次被熱に対して南北に幅広いことを指摘できる。また、SY11681 煙道付近に設置された、1978 年調査時のサブトレンチを利用し、周辺の土層を観察したところ、第 1 次被熱が SY11681 煙道付近に存在しないことを確認した。こうした被熱痕跡の様相を踏まえると、前身窯は SY11681 に対して横幅が広く、主軸方向に短い窯と推定できる。過去の調査を含めて日高山瓦窯では藤原宮期以前の瓦がほとんど出土していないことから¹³⁾。前身窯も藤原宮の瓦を焼成した瓦窯であり、日高山瓦窯の操業期間内におさまるとみてよいだろう。

(3) 日高山瓦窯の瓦生産

軒瓦 現在、藤原宮の瓦は胎土と製作技法から A～V の 19 の造瓦グループに分けられており、このうち A グループが日高山瓦窯産にあたる。軒瓦については、軒丸瓦 4 型式 8 種、軒平瓦 1 型式が日高山瓦窯産とされて

表 5 瓦窯と出土瓦の関係

瓦窯	軒丸瓦	軒平瓦	備考
瓦窯 SY11682 (2号窯)	6274Ab or Ac	6647C	6647Cは後世の混入か。
瓦窯 SY11684 (4号窯)	6274Ab、6279Aa?		
瓦窯 SY11685	6233Ab・Ac、6274Ab、6275E、6275I?	6643Aa	
瓦窯 SY11687	6233Ac		灰原付近での出土。
瓦窯 SY11689		6643Aa	版築土内からの出土。

過去の調査による出土資料を含む。

きたが、これまで、日高山瓦窯から直接出土した資料は 6274Ab のみで、大半は第 17 次調査検出の東西素掘溝 SD1845 からの出土であった。特に 6275E については、製作技法などの諸特徴から日高山瓦窯産の可能性が高いものの、出土地点が日高山瓦窯から 80m 以上離れているなど、根拠の薄さが指摘されていた¹⁴⁾。

今回の調査で、軒丸瓦 4 型式 6 種、軒平瓦 1 型式が出土した。その大半が窯内からの出土である。

瓦窯 SY11685 で 6233Ab・Ac、瓦窯 SY11687 周辺で 6233Ac が出土した。6274Ab は過去に瓦窯 SY11682・11684 で出土しているほか、今回、SY11684・11685 から出土した。SY11685 ではこのほか 6275E、6643Aa が出土している。6643Aa については、範傷の進行から 2 段階に分けられる。今回出土した資料について、段階を特定しうる明確な範傷を確認することはできなかったが、顎部形態や調整方法から、いずれも 1 段階とみられる。なお、6643Aa は瓦窯 SY11689 の版築土からも出土している。

以上、SY11685 で 6233Ab・Ac の両方が出土していること、6233Ac・6274Ab・6643Aa が複数の窯で出土していることなどから、窯による型式ごとの焼き分けなどはなかったと考えられる（表 5）。今回、SY11685 で 6275E が出土したことで、6275E も正式に日高山瓦窯産（A グループ）に含めることができる（表 6）。

丸瓦 すべて粘土紐技法を用いた玉縁式丸瓦。玉縁部に個体差があり、長さ 5～5.5cm の玉縁部をもつ丸瓦が多く、7cm 前後のやや長い玉縁をもつ丸瓦が少数含まれる。なお、5 号窯出土 6274Ab の玉縁部は 7cm、6233Ab の玉縁部は 6cm であり、軒丸瓦に玉縁部の短いものは認められなかった。丸瓦部直径は 13～14cm を基本とし、個体差はほぼない。6233A は他の軒丸瓦に比べて瓦当径が小さいが、上記と同様のサイズの丸瓦を一部歪ませて接合している（PL.17-2）。したがって、丸瓦は一定のサイズの模

表6 藤原宮瓦生産地一覧

グループ	産地	軒丸瓦	軒平瓦	技法
A	日高山瓦窯	6233Aa・Ab・Ac 6274Ab・Ac 6275E・I 6279Aa	6643Aa	粘土紐
B	久米寺瓦窯	6271A・B・C	6561A	粘土板
C	高台・峰寺瓦窯	6233B 6273A・B 6275A・B・C・H・J・N 6276G 6279Aa・Ab・B	6641E 6642A・B・C 6643Ab・B・C・D・E	粘土紐
D	西田中・内山瓦窯	6281Ba	6641F	粘土板/紐
E	牧代瓦窯	6276C・F	6647C	粘土板
F	推定讃岐東部or阿波産	6278C・E	6647E	粘土板
G	近江石山園分瓦窯	6278A・D・F・G	6646A・Ba・Bb	粘土板
H	安養寺瓦窯	6275D 6281A	6641C	粘土紐
J	大和産（大和郡山市か）	6273C	6641Aa・Ab・N	粘土紐
K	讃岐宗吉瓦窯	6278B	6647D	粘土板
L	淡路土生寺瓦窯	6274B	6646E・F	粘土板
M	推定和泉産	6274Aa	6647A・B	粘土板
N/P	高台・峰寺瓦窯	6275A・H 6279B	6643Ab・C 6646C	粘土紐
Q	推定大和盆地産	6274Ac	6643Aa	粘土紐
R	今泉瓦窯	6273B	6641E	粘土紐
S	三堂山瓦窯	6233Ab・Bb 6275E		粘土板/紐
T	大和産	6273D		粘土紐
U	大和産		6647D	粘土板/紐
V	大和産（五條市か）		6646G	粘土板

ゴシック体は瓦窯からの出土・表採が確認されている型式・種

骨を用いて、規格的に製作されていたと考えられる。

平瓦 すべて粘土紐技法を用いた桶巻き作り平瓦。今回、縦幅があきらかな資料が複数出土しており、縦幅37cm前後が基本的な規模と考えられる。一方、横幅が明らかな資料は今回一点しか出土しなかったが、第17次調査や1978年の調査で横幅のあきらかな個体が複数出土している¹⁵⁾。その中には狭端幅28cm程度の平瓦が含まれ、今回出土した平瓦とも大きな齟齬はない。これらの平瓦は、その曲率から粘土円筒をおよそ3分割したものと考えられ、想定される粘土円筒は直径35cm程度と推定できる。いずれも縄紐の結び目による分割界点を分割の指標としているが、今回出土した平瓦の中にはあきらかに間隔の狭い分割界点を残すものも含まれていた。熨斗瓦を含めた製作工程の検討が必要である。

(3) 日高山瓦窯における平窯の導入

日高山瓦窯の平窯は、日本最古の平窯形式の瓦窯としてかねてより重要視されてきた¹⁶⁾。しかし、その導入の背景については不明な部分が多い。

藤原宮における19の造瓦グループのうち、7グループが藤原宮造営にともない新規に設置された造瓦グループとされる¹⁷⁾。日高山瓦窯（Aグループ）もこの新設の造瓦グループに含まれるが、このグループでは、帯状の粘土を模骨または桶に巻き付けて丸・平瓦を製作する「粘土紐技法」を採用する。この新規の瓦製作技術の導入については、中国からの影響がかねてより指摘されてきた¹⁸⁾。さらに、中国の瓦窯では西周段階から伝統的に半倒焰式の平窯が用いられており、燃焼部が低く、焼成部が平坦で段や畦をもたない有階無段式の平窯について、日高山瓦窯の平窯との構造の共通点が指摘されている¹⁹⁾。また、藤原宮の瓦について、平城宮の瓦と同様、中国都城の瓦を模倣した黒色の瓦を志向していた可能性を指摘する意見もある²⁰⁾。

中国の瓦窯構造の変遷を整理した向井祐介は、日高山瓦窯4号窯（SY11684）と中国唐代の瓦窯の形態や構造を比較し、平面形態、日乾レンガの使用、奥壁下方から垂直に立ち上がる煙道などを共通点に挙げる。また、中国

の平窯は唐代において、漢代以来の独立した3本の煙道を有する構造から、煙道を5本備え、なおかつ焼成部奥に「煙室」と呼ばれる空間をもつ構造に変化することが一般的だとする²¹⁾。

この代表例として、唐長安城大明宮含元殿の創建期の瓦磚を焼成した瓦窯が挙げられる。操業時期は含元殿の

造営年代から、662~663年と考えられる²²⁾。また、近い時期の例として河南省洛陽市洛陽新街口窯跡群の瓦窯が注目される²³⁾。唐代初期から北宋初期の瓦窯が12基検出されており、このうちY5・6・9~11号窯が唐代(初唐期; ~開元19年(731))の窯とされる。窯の平面形は含元殿瓦窯に近いが、独立した3本の煙道を有し、日高山瓦

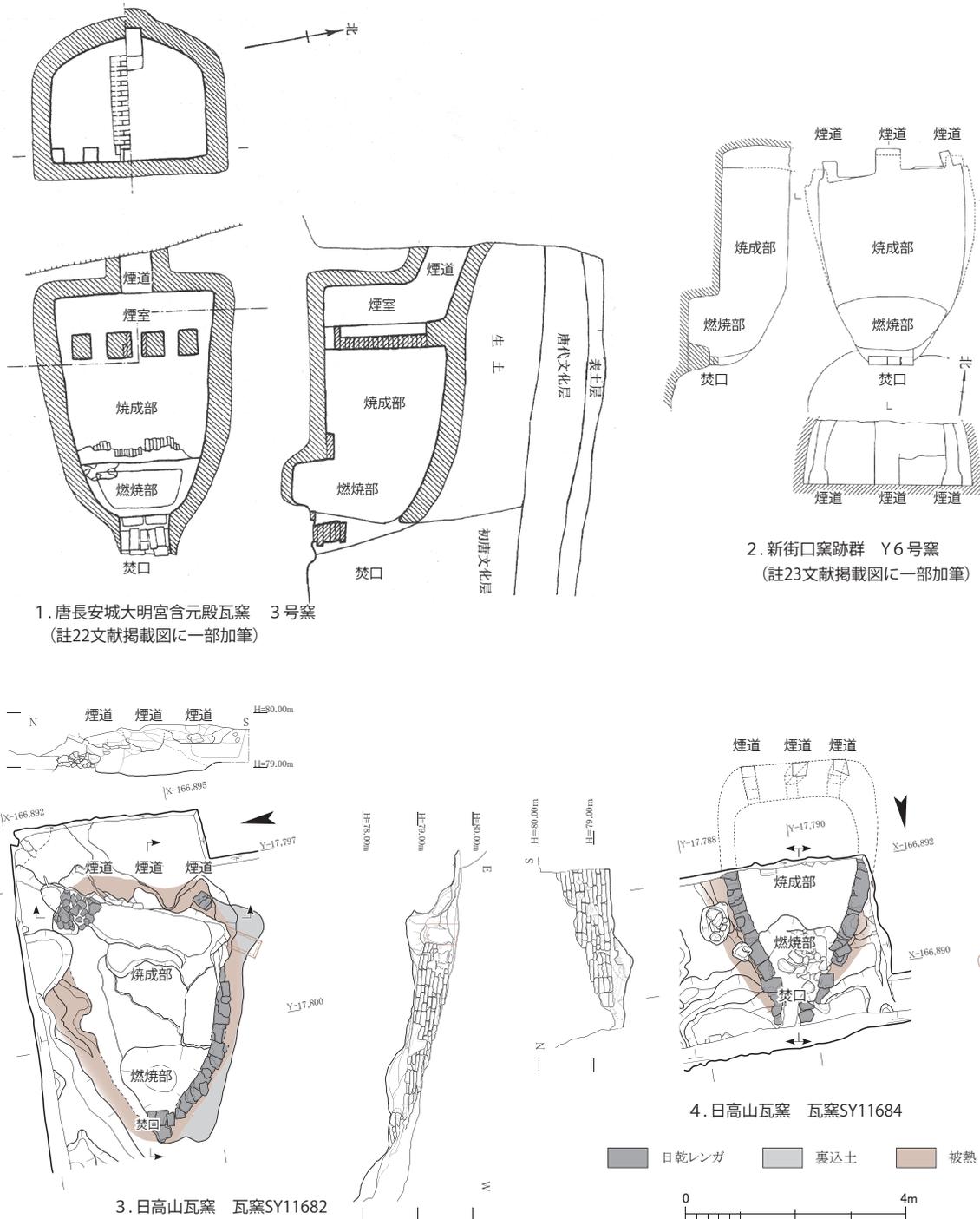


図37 唐代中国の瓦窯と日高山瓦窯の平窯 1:120

窯の平窯により近い構造をもつ(図37)。向井は、Y6号窯をはじめとする新街口窯跡群の唐代初期の瓦窯について、焼成室が主軸方向にやや長いことを含め、初唐期でも比較的早い時期に操業したものと推測する²⁴⁾。

中国の平窯と日高山瓦窯の平窯には形態や構造に共通点が見いだせる一方で、唐代のオーソドックスな平窯と比較した場合には相違点も存在する。まず、中国では含元殿瓦窯のように、地山をくり抜いた地下式のものが多いが、日高山瓦窯の平窯は半地下式である。また、唐代の瓦窯の大半は日高山瓦窯のようなスサを含む日乾レンガではなく、別途焼成した磚を構築材として使用するものが多く、壁面や天井にはほとんど使用しない。さらに、日高山瓦窯の平窯は独立した煙道を3本備えるが、前述の通り、中国唐代の瓦窯では5本の煙道と奥に煙室をもつものが一般的であり、日高山瓦窯はやや古い構造に位置づけられる。

以上、日高山瓦窯の平窯と中国唐代の平窯の比較をおこなった。瓦窯の構造や平面形については共通点が多く、瓦の製作技術にみられる関係性も踏まえると、日高山瓦窯における平窯導入の背景には中国の影響があった可能性は高い。しかし、中国の同時代の様相と比較した場合にやや古い様相を帯びていることにも注意を要する。今後、唐代の瓦窯との比較を進め、朝鮮半島をも含めた技術系譜、伝播の様相を解明していくことが課題となる。

7 総括

(1) 藤原宮造営初期における大規模な瓦生産体制

日高山瓦窯では、これまで瓦窯SY11681・11682・11684の3基の瓦窯を発掘調査で確認していたが、今回、新たに6基の瓦窯を検出し、少なくとも9基の瓦窯の存在があきらかとなった。瓦窯SY11686構築時の掘り込みが瓦窯SY11685の灰原の一部を破壊するなど、一部先後関係を確認したが、窯相互の重複は認められず、基本的には併存していたと考えられる。また、SY11681の再検討によって、窯の改変があきらかとなったことも重要である。

日高山瓦窯は、藤原宮の造営過程の中でも比較的初期に操業した瓦窯と考えられているが、日高山瓦窯における複数の瓦窯の存在は、藤原宮造営の初期段階から、瓦の大量需要に備えた大規模な瓦生産体制が整えられてい

たことを示している。奈文研では藤原宮跡で出土した瓦の整理作業を継続的に進めており、藤原宮における瓦の生産と供給の実態をあきらかにしていくことが今後の課題である。

(2) 藤原宮期の瓦窯構造と瓦生産の実態

日高山瓦窯において、窖窯と、新たに導入した平窯という異なる構造の窯を併用して瓦生産をおこなっていたことを改めて確認した。ただし、日高山瓦窯の窖窯は版築を用いた巨大な基礎を備えており、6世紀後半以来使用されてきた窖窯とも大きく異なる。瓦窯の築造における版築の使用は日高山瓦窯で初めて試みられたと考えられるが、その他の藤原宮の瓦窯や後の瓦窯では、現状確認されていない。新たな築窯技術として導入したものの、定着には至らなかったであろう。

また、平窯の構築方法にも個体差が存在した。裏込土を用いない瓦窯SY11684に対して、瓦窯SY11682は平面をやや大きく掘り込み、一部裏込土を充填して構築するなど、その実態は多様であった。窖窯と平窯の両方の要素を備えた構造をもつ折衷式の瓦窯SY11685のような瓦窯を初めて確認したことも成果である。すなわち、日高山瓦窯では新旧の技術が互いに影響を及ぼし合いながら操業がおこなわれていたのであり、それは、SY11681・SY11686のような窖窯にも随所で日乾レンガを構築材に用いている点や、平窯のSY11682が長方形の掘り込みを備えている点からもうかがえる。

以上のように、日高山瓦窯は、平窯導入直後の瓦窯の操業実態を示す好例といえ、7世紀末以降の造瓦技術の変遷を考える上できわめて貴重である。今回は所在確認にとどめた瓦窯を含めて、今後も継続的に調査をおこなうことで、その多様な操業実態をあきらかにすることが可能となるだろう。

(3) 古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播

日本における日乾レンガを用いた平窯の瓦窯は、現状、日高山瓦窯が最古例である。藤原宮に瓦を供給した瓦窯は西日本各地に存在するが、日高山瓦窯以外に平窯を導入した窯は現状確認されていない。前述のように、日高山瓦窯の平窯に近い構造をもつ瓦窯は、中国唐代の平窯に求めることができる。粘土組技法の採用をはじめ、藤原宮で用いられた瓦には、中国の影響と考えられる要素も多く、中国から平窯が伝えられた可能性は十分に想定

できる。

ただし、日高山瓦窯が操業していたと考えられる680年代は、遣唐使の派遣が途絶え、中国との交流が滞っていた時期にあたり、当時、中国から直接平窯が伝えられたと単純に結論づけてよいかは疑問が残る。あるいは、朝鮮半島を介した間接的な伝播も考えられるが、現状では、日高山瓦窯と同時期または先行する時期の新羅・百濟地域において、日高山瓦窯と同じ構造の平窯は確認されていない。したがってその具体的な導入経路についてはさらなる検討が必要と言わざるを得ない。

日高山瓦窯における平窯の瓦窯の存在は、日本で初めての瓦葺宮殿を建造するにあたり、大陸の技術を積極的に取り入れ、試行錯誤をしながら瓦生産をおこなっていた当時の様相を如実に示すものである。以上、今回の調査を通して、古代東アジアにおける造瓦技術の変遷と伝播を考える上で、重要な成果を得ることができた。

(道上)

註

- 1) 石田由紀子「藤原宮運河SD1901A出土の瓦 - 第20次調査から」『紀要2012』奈文研、2012。
- 2) 網干善教「橿原市飛騨町日高山瓦窯跡」『奈良県文化財調査報告書(埋蔵文化財編)』第5集 奈良県教育委員会、1962。
- 3) 土肥 孝「日高山瓦窯の調査」『藤原京右京七条一坊調査概報』藤原京右京七条一坊跡調査会、1978。
- 4) 前掲註3。
- 5) 日高山1号墳周溝から出土した木心鉄板張輪鍔が5世紀前半代に位置づけられている。(片山健太郎「日高山1号墳出土の木心鉄板張輪鍔」『紀要2021』)
- 6) 石田由紀子「藤原宮における瓦生産とその年代」『文化財論叢Ⅳ』奈文研、2012。
- 7) 前掲註3。
- 8) 丸瓦の側面調整および玉縁式丸瓦の製作技法の分類は、大脇潔「丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅸ』奈文研、1991にもとづく。
- 9) 木村 理「大和南部型埴輪の分類と様式 - 藤原宮下層資料の報告から -」『文化財論叢Ⅴ』奈文研、2023。
- 10) 和田一之輔「石見型埴輪の分布と樹立古墳の様相」『考古学研究』第53巻第3号 考古学研究会、2006。
- 11) 前掲註1の報告において、窯の床面は花崗岩の硬い地山であったことが報告されている。
- 12) 前掲註1。
- 13) 1978年の調査で瓦窯SY11682から軒平瓦6647Cが1点出土しているが、胎土がまったく異なり、日高山瓦窯で生産されたとは考えにくい(前掲註3)。
- 14) 清野孝之・降幡順子『蛍光X線分析と鉍物組成分析による飛鳥藤原地域出土瓦の生産・供給体制の研究』プレスコ、2020。
- 15) 石田由紀子「日高瓦窯出土の瓦 - 1978年調査・藤原宮第

17次」本書47頁。

- 16) 藤原 学「通論・瓦窯でみるわが国造瓦の特質と課題」『瓦窯の構造研究』真陽社、2024。
- 17) 石田由紀子「藤原宮造営における瓦生産体制と瓦窯構造」『瓦窯の構造研究』真陽社、2024。
- 18) 佐川正敏「中国の軒平瓦の成形・施文技法を考える - 東アジアの造瓦技術の比較研究Ⅰ」『日本中国考古学会会報』第2号 日本中国考古学会、1992。
- 19) 向井佑介「中国における唐代以前の瓦窯構造」『瓦窯の構造研究』真陽社、2024。
- 20) 前掲註17。山崎信二『古代造瓦史 - 東アジアと日本 -』雄山閣、2011。
- 21) 前掲註19。
- 22) 中国社会科学院考古研究所西安唐城工作隊「唐大明宮含元殿遺址1995-1996年発掘報告」『考古学報』第3期、1997。
- 23) 洛陽市文物考古研究院「河南洛陽市新街口唐宋窯址の発掘」『考古』第6期、2015。
- 24) 前掲註23。

日高山瓦窯出土の瓦

— 1978年調査・藤原宮第17次

1 はじめに

日高山瓦窯は、藤原宮の瓦を生産するため設置された官窯である。藤原宮南門から南約300m、藤原宮の数ある瓦窯のなかでも宮にもっとも近くに位置する。1962年の奈良県教育委員会による発掘調査（以下奈良県調査）と¹⁾、奈文研による1977年の磁気探査、および1978年の発掘調査（以下1978年調査）で²⁾、計4基の瓦窯（1～4号窯）を確認している。そのうち2号窯と4号窯が平窯で、7世紀末という平窯としては古い操業年代と、焼成部の床面が平坦で畦がない窯構造は、中国・唐の瓦窯との関連も指摘され、従来から注目されてきた。2023年、奈文研は日高山瓦窯の調査を実施し、これまで確認していた4基に加え、新たに5基の瓦窯を検出した（飛鳥藤原第213次調査、本書11頁）。この結果、日高山瓦窯が大規模な瓦窯群であることがより鮮明になった。

本稿では1978年調査、および日高山瓦窯に北接する1975年に調査した藤原宮第17次調査の出土瓦について報告する。これまで1978年調査で出土した瓦についての詳細な報告はなかった。第213次調査で再発掘した1・2号窯の実態を正確に把握するためにも、1978年調査出土瓦の基礎的な報告は不可欠である。第17次調査では、瓦窯に関わる瓦磚類が大量に出土している（『藤原概報6』）。これらを報告することで、日高山瓦窯で生産された瓦の様相をより明確にできるであろう。ひいては、藤原宮の瓦生産の事態を知る一助になると考える。なお、1・2号窯の詳細な規模・窯構造については本書収録の第213次調査の報告を参照されたい。

日高山瓦窯産の瓦の特徴 個々の出土資料を説明する前に従来から認識されている日高山瓦窯の瓦の特徴について述べる。丸瓦・平瓦の製作技法は、粘土紐を桶や模骨に積み上げて作る粘土紐技法である。凸面調整は、①縦縄タキをナデ消すものと、②回転を利用したカキ目調整痕とがある。①が大半のため、本報告で凸面調整に関して特に記載がない場合は①とする。また、平瓦円筒を分割する際の指標は分割界点である。これは桶に取り付けられた縄紐の結び目の圧痕と考えられている。さらに

丸・平瓦の分割の際の側縁手法は分割裁面と分割破面を残すa手法³⁾が多い。ただし分割破面を残さないc手法も一定数ある。本報告では丸瓦、平瓦、鬘斗瓦のうち、両側縁とも残存していた場合の側縁手法については、両側縁ともa手法を側縁Ⅰ、片側がa手法、もう片方がc手法を側縁Ⅱ、両側縁ともc手法を側縁Ⅲとして記載する。

2 1978年調査出土瓦

本調査区からは、軒丸瓦1点（6274Aa）、軒平瓦1点（6647C）、丸瓦245点（49.4kg）、平瓦331点（64.1kg）、鬘斗瓦9点、窯壁片7点（1.0kg）、日乾レンガ片12点（1.4kg）、榛原石1点の瓦磚類が出土した。

1号窯（SY11681） 窯構造は半地下式の有段窖窯。1号窯からの瓦の出土量は多くはない（図38、PL19-1）。丸瓦51点（9.4kg）、平瓦31点（8.9kg）が出土した。これらは主に焼成部の埋土である暗赤褐色土層からの出土である。

1は大きく焼けひずんだ丸瓦。玉縁から左側縁の一部を残す。玉縁長約5.0cm。焼成は堅緻で暗灰色を呈す。2号窯内部から出土した破片と、1号窯の灰原付近から出土したものが接合した。2・3は平瓦。側縁手法は2がa手法、4はc手法。ほかにも小片で図化は不可能だが、特徴的な瓦として軒丸瓦の接合部が1点、平瓦2枚が溶着した破片が1点出土した。焼成は硬質のものから軟質のものまでであった。4は凹面にヘラ描きがある平瓦。線は横方向に2本平行しており、「ニ」または「キ」状のヘラ描きか。どちらも藤原宮内で出土例がある。なお、あきらかに製作技法や胎土・焼成の異なる丸瓦が1点、焼成部暗赤褐色土から出土している。天井部の崩落などにより、地表面の土が流入したことによる後世の混入とみられる。

2号窯（SY11682） 半地下式の平窯である。主に燃焼部から大量の瓦が出土した。出土量は丸瓦194点（49.0kg）、平瓦301点（55.5kg）を数える。ここでは特徴的なものを報告する（図39、PL19-2）。大半が燃焼部埋土からの出土であり、それ以外についてのみ出土場所を記載する。

1は6274AbかAc。瓦当の下半部を残す。瓦当裏面はきわめて平坦に仕上げる。焼成は堅緻で赤灰色。2は変形忍冬唐草文軒平瓦6647Cの上外区の破片。頸部の接合部で割れており、剥離部分では6647C特有の重弧文風の型挽きの痕が確認できる。焼成は良好で色調は灰白色。

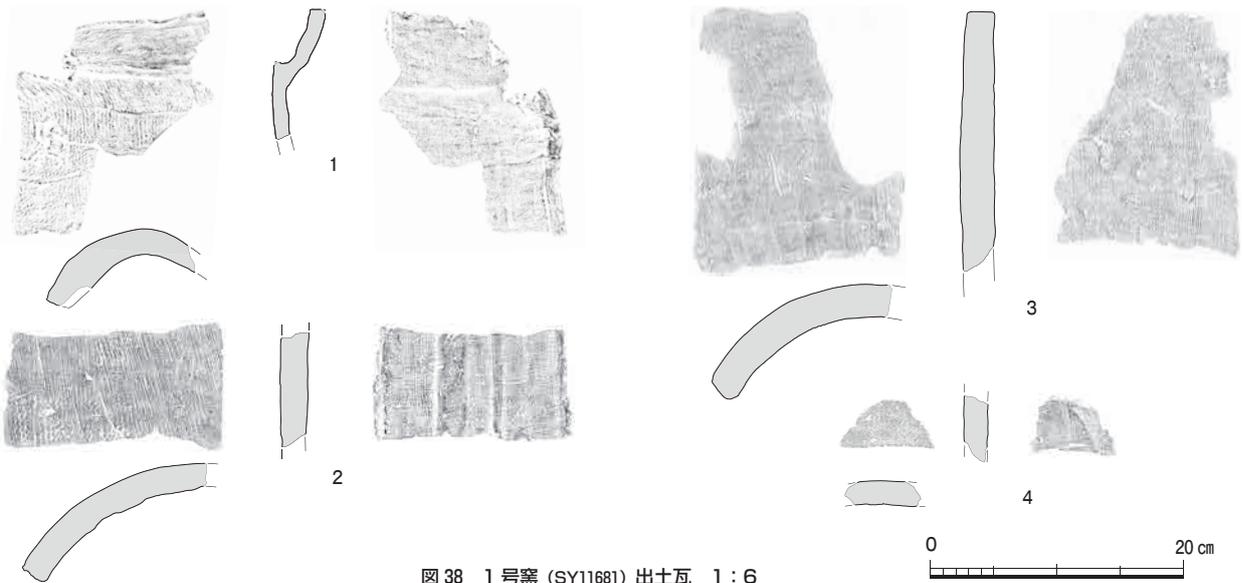


図38 1号窯 (SY11681) 出土瓦 1:6

凹面に2次焼成の痕跡がある。2号窯の灰原付近の崩壊土より出土。製作技法や胎土からみても、あきらかに牧代近接窯 (Eグループ)⁴⁾ で作られたものであり、後世の混入である。

3~5は丸瓦。3は玉縁部で玉縁長6.5cm。焼成は堅緻で色調は赤灰色。4は狭端部の破片で、焼成は堅緻で暗灰色。5は狭端から体部の破片。焼成は軟質で色調は灰白色。6~11は平瓦。6は狭端部の幅が完形で残存する。狭端幅28.0cm、側縁Ⅰ。凹面には布目痕の下に粘土紐の接合痕を明瞭に残す。焼成はやや軟質で色調は黄褐色。平瓦横断面の曲率から、1つの平瓦円筒から3枚の平瓦が製作されたことがわかる。7は狭端部の破片。平瓦の分割界点が凹面の側縁付近ではなく、中央部に近い部分にある。8・9は凸面に横方向のカキ目調整をおこなう。8は凹面の側縁付近に分割界点がある。8・9とも焼成は硬質。8は2号窯上層埋土から出土。10は凹面中央に分割裁線が確認できる。熨斗瓦にする予定で焼成前に予め線をつけたものの、最終的には分割しなかったと考えられる。11は胎土に砂粒を大量に含む瓦。混入の可能性も考えられるが、日高山瓦窯にはこのような胎土の瓦が一定量あるため、日高山瓦窯産の可能性が高い。

12~16は熨斗瓦。熨斗瓦は、9点出土しており、丸・平瓦に比して出土量は比較的多い。熨斗瓦は平瓦をもとに作られるため、平面形は桶の形に規制される。日高山瓦窯では、裁頭円錐形の桶を使用するため、平瓦の平面形は台形のものが多い。したがって、それを分割して作る熨斗瓦も台形となる。熨斗瓦には挟端部で幅が14cm以上になるもの (A類) と挟端で幅が11cm以内、広端で12cm前後になるもの (B類) とがある。それぞれ平瓦を2分割、

もしくは3分割したものとみられる。12はA類で狭端部を残す。狭端幅14cm。凸面は縦方向のハケ目調整の後、横方向のナデをおこなう。側縁Ⅱで焼成は堅緻。13~16はB類の熨斗瓦。13は広端に近い部分で、凸面はカキ目調整の後、磨り消し。最大幅12cmで側縁Ⅱ。焼成は良好で、黄灰色。14は挟端と広端の一部が欠けるがほぼ完形。側縁Ⅱ。復元狭端幅9.5cm、最大幅10.8cm、長さ34.5cm。焼成は堅緻。15は熨斗瓦としては厚みがあり、片方の側縁は凸面側を大きく面取りする。これらは軒平瓦の体部によくみられる特徴のため、当初軒平瓦にする予定だったものを、何らかの理由で熨斗瓦にした可能性がある。側縁Ⅲ。焼成はやや軟質で褐色。16は凹面に粘土紐の接合痕が明瞭に残る。側縁Ⅲ。焼成は堅緻で、色調は褐灰色。

3 第17次調査出土瓦

第17次調査の概要 本調査区は、藤原京右京七条一坊にあたる (図9)。1975年、橿原市市営住宅の建設にともない奈文研が発掘調査をおこなった。調査区は5ヵ所にわたるが、特に顕著な遺構が確認できたのは日高山瓦窯に隣接する調査区 (本稿では南区と呼ぶ) である (図40)。南北溝 SD1856 とそれともなう南北堀 SA1855、井戸 SE1850、炉跡状遺構 SX1847~1849、東西素掘溝 SD1845 などを確認した。SE1850は井桁組の井戸で、内法は約0.8m、内部からは大量の瓦と若干の土器、ふいごの羽口のほか、和銅2年 (709) 4月の紀年銘木簡を含む木簡9点が出土した (『藤原概報6』、本書55頁)。SX1847~1849は径0.5m前後、深さ0.2mの浅い土坑で、内面が焼けていた。周辺から焼土や銅滓、木炭などが出土しており、小規模な鑄造炉とみられる。SD1845は日高山丘陵南端

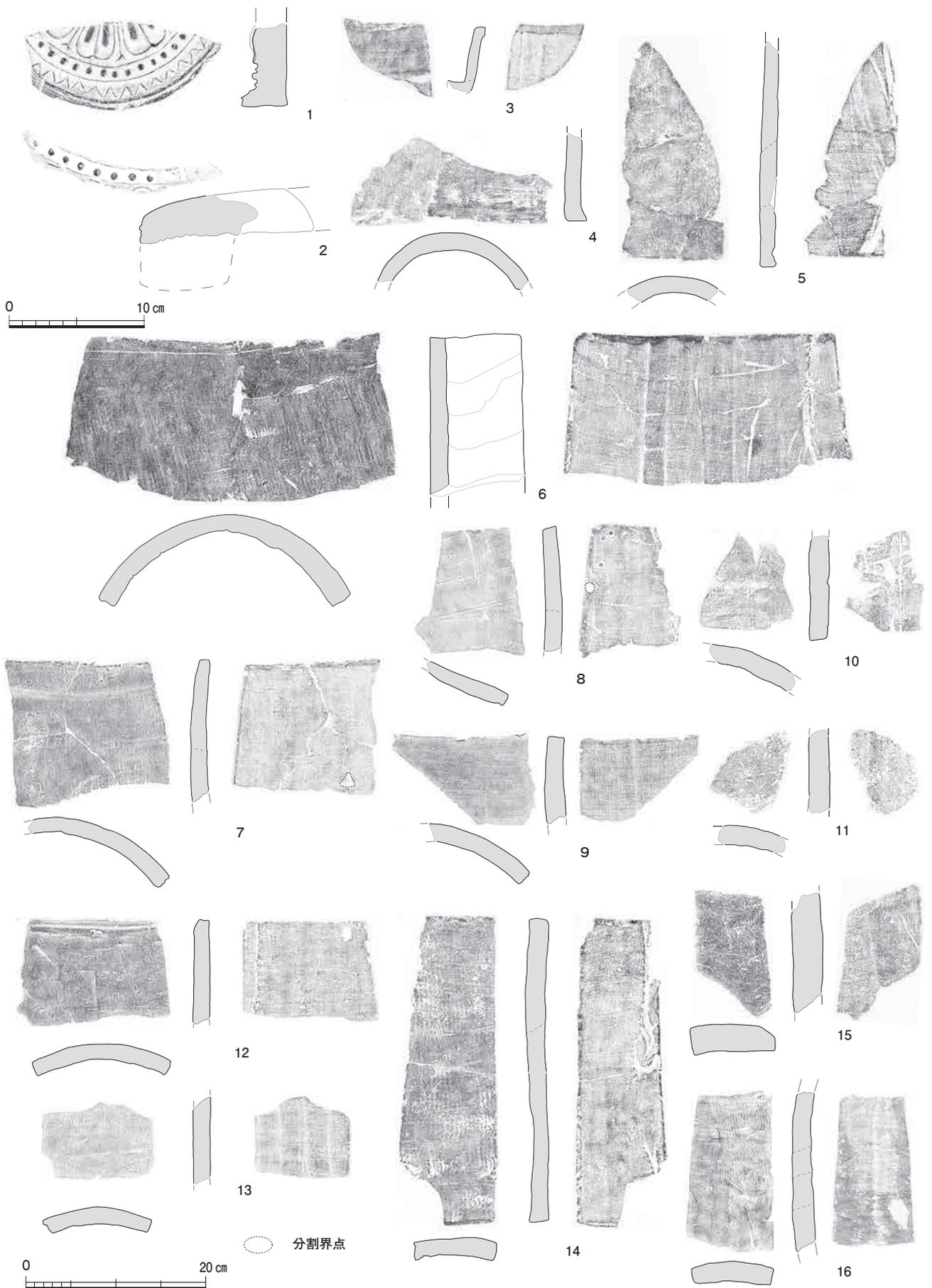


図39 2号窯 (SY11682) 出土瓦 1:6 (軒瓦1:4)

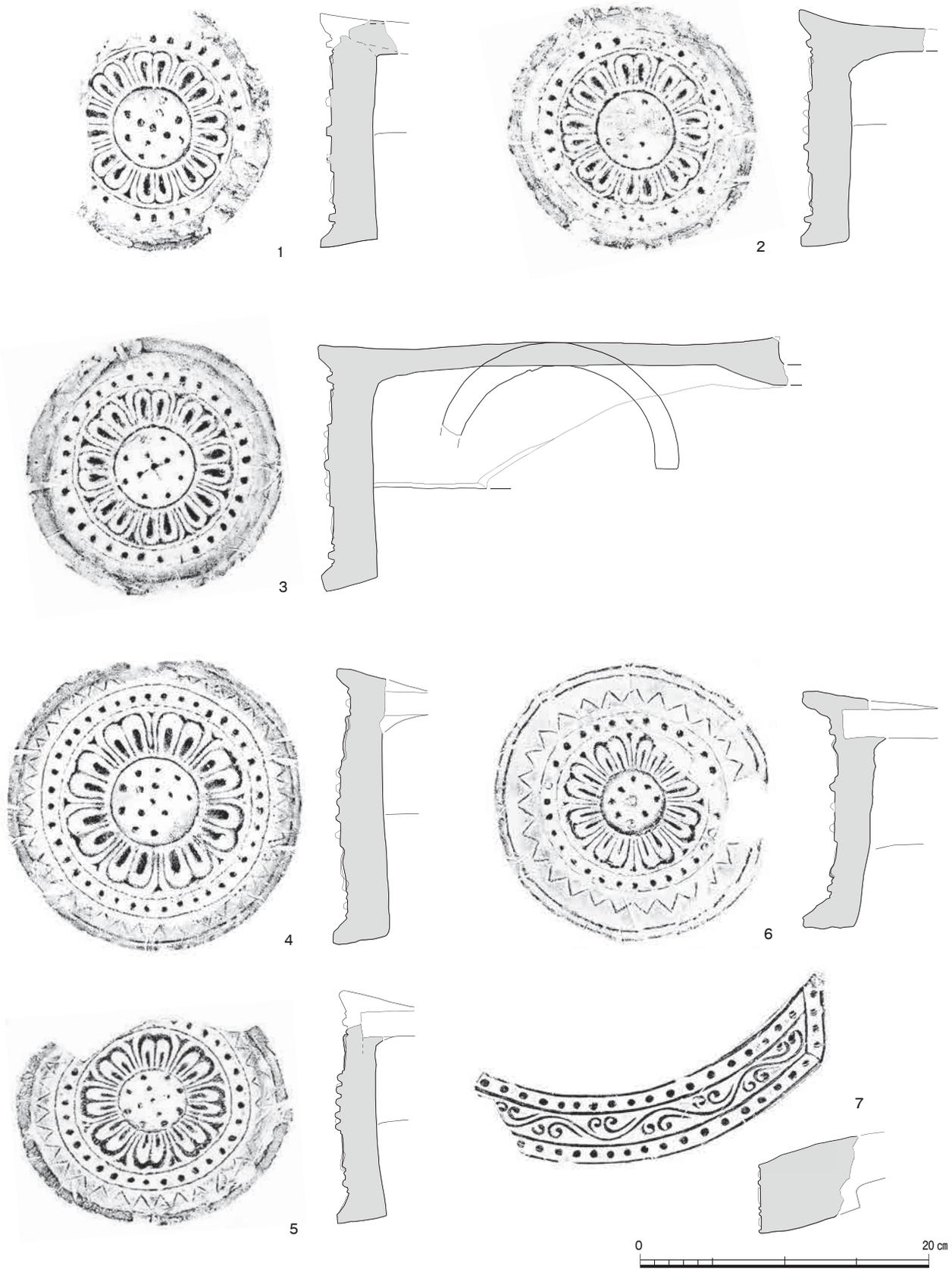


図41 第17次SD1845出土軒丸瓦・軒平瓦 1:4

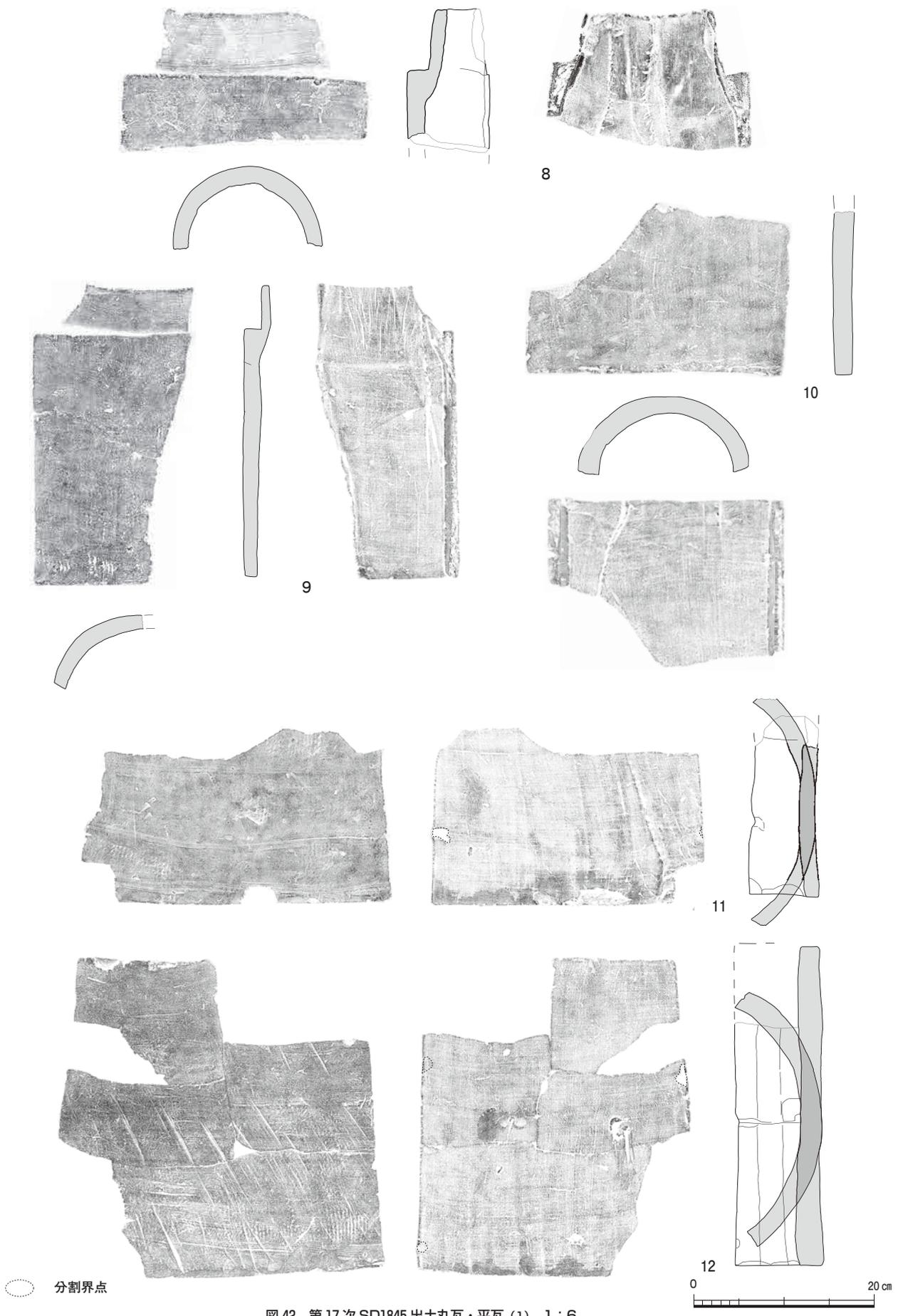


图 42 第 17 次 SD1845 出土丸瓦・平瓦 (1) 1 : 6

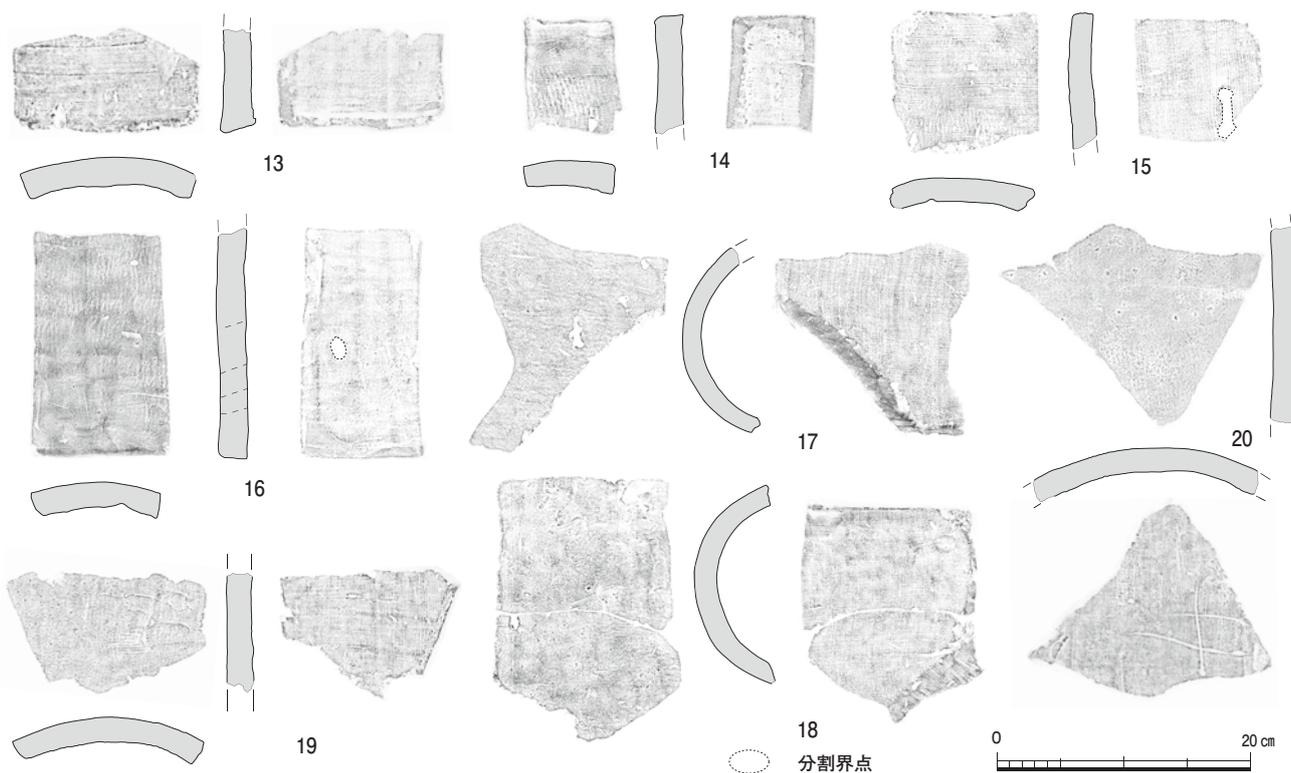


図43 第17次SD1845出土丸瓦・平瓦(2) 1:6

が黒灰色、内面が灰色。9は右半分が欠損するが長さは完形で、全長33.5cm。玉縁長4.8cm。凹面には粘土紐の接合痕が残る。10は丸瓦狭端から体部にかけて半分程度残存する。凸面調整の一部に横方向のカキ目が確認できる。側縁Ⅰ。焼成は硬質で、色調は灰白色。11・12は平瓦。11は広端から体部にかけて半分程度残存する。復元広端幅28.5cm。側縁Ⅲで凹面の側縁付近に分割界点を確認できる。焼成は硬質で、色調は灰色。12は狭端、広端それぞれ片隅を欠損するが、ほぼ完形。長さ37.7cm。平瓦中央部の幅31.0cm。凸面には縦縄タタキを板状工具で横方向にナデ消した後、さらに斜め方向にも板ナデをおこなう。その際の工具の圧痕を明瞭に残す。側縁Ⅰ。凹面の側縁付近に分割界点、広端付近と中央やや狭端寄りの2カ所確認できる。焼成は軟質。色調は赤色。

13~16は鬘斗瓦。13は幅の広いA類で広端の幅は17cm。側縁Ⅲ。焼成は硬質で色調は灰色。14~16は幅の狭いB類。14は狭端幅7.0cmと幅が非常に狭く、平瓦を4分割して作った可能性がある。側縁Ⅲ。焼成は堅緻で、色調は赤褐色。15は狭端幅11cm。凸面は縦縄タタキの後、カキ目調整。凹面部側縁から約3cmほど離れた箇所に分割界点がある。側縁Ⅰ。焼成は硬質で色調は灰色。16は広端幅約11cm。凸面は縦縄タタキの後すり消し。側縁Ⅲ。15と同じく、側縁からやや離れたところに分割界点がある。焼成は硬質、色調は赤褐色。17・18は袖が短いタイ

ブの面戸瓦。17は上端と左袖が欠損するものの、右袖から舌部にかけてが残存する。焼成は硬質で色調は暗灰色。18は左袖と舌部の一部が残存する。焼成前に玉縁を打ち欠き、丸瓦の肩部の段を残して面戸瓦の左袖にする特異な形状をする。焼成は堅緻、色調は暗灰色。焼成は硬質で、色調は赤褐色。19は狭端の隅を欠く隅切平瓦。凸面はカキ目調整の後、磨り消し。焼成は堅緻、色調は暗灰色。20は凹面に「キ」状のヘラ描きをもつ平瓦。南区では同様のヘラ描き平瓦がほかにも2点出土している。

なお、SD1845上層からは、胎土や製作技法が異なる、あきらかに日高山瓦窯産ではない瓦も出土している。

SE1850 出土瓦 SE1850出土の瓦磚類は表8の通り。すべて井戸内部からの出土である。瓦の様相は、SD1845と共通するため、ここでは特筆すべき軒瓦のみ紹介する(図44、PL.22-2・3)。1は瓦範彫り直し前の6274Aa。中房の蓮子に周環がめぐる6274Aa特有の特徴があるいっぽう、Ab・Acのように外縁上面の圈線がある。丸瓦の先端は未加工で、瓦当裏面の丸瓦の差し込みは浅い。焼成は堅緻で、色調は赤褐色。製作技法や胎土・色調からみても日高山瓦窯の製品であることは明白。6274Aは、AaがMグループの推定和泉で生産され、その後瓦範のみが日高山瓦窯に移動し、彫り直しを経て6274Ab・Acが生産されたと考えられていた。だが、6274Aaに一部日高山瓦窯産があることが判明した。2は忍冬唐草文軒平瓦。忍

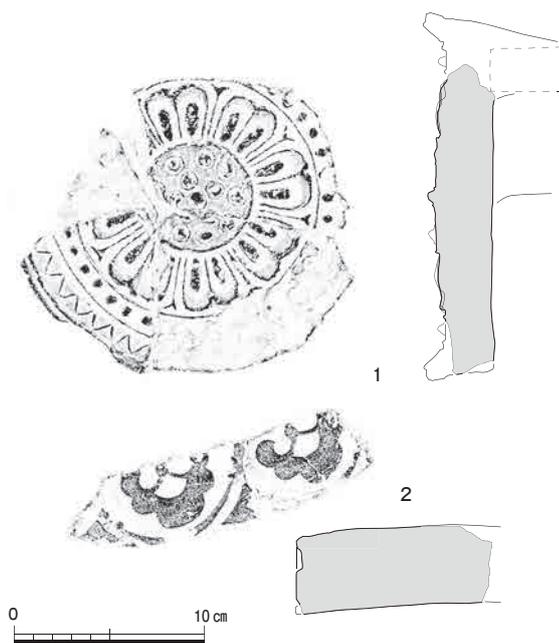


図44 第17次 SE1850 出土軒丸瓦・軒平瓦 1:4

冬文を型押しして作り出すもので、吉備池廃寺 Ia や藤原京左京五条三坊で出土するものと同じ。焼成・胎土・製作技法からみても、日高山瓦窯で生産されたものではない。

4 まとめ

日高山瓦窯は藤原宮造営当初から操業を開始し、藤原宮造営の途中で生産を終了したと考えている。藤原宮運河 SD1901A から天武末年（682～685）の紀年銘木簡とともに日高山瓦窯産の瓦が出土していることに加え、6279A、6643Aa といった瓦範が後に藤原宮の瓦生産の中心を担う高台・峰寺瓦窯に引き継がれること、SD1901A を埋め立てて建てられた藤原宮大極殿など中枢部の建物には、日高山瓦窯の瓦は用いられないためである⁵⁾。ここでは、以下の2点について述べ、まとめたい。

窯構造と瓦との関連性 1号窯は半地下式窖窯、2号窯は半地下式平窯である。両者は窯構造が異なるが、焼成部出土の瓦を見る限り、焼成や色調に大きな違いはなかった。どちらも焼成は軟質から硬質のものまであり、色調も暗灰色から赤色まで幅広く、一定していない。従来から平窯はその特異な窯構造ゆえ、扱いにくさが指摘されてきた⁶⁾。その結果が瓦に出ているとみられるが、窖窯も同様であることは注目できる。日高山瓦窯の窖窯は、先に周辺を大きく掘り下げた後に版築で積み上げ、粘土を貼って窯を構築する。焼成部の傾斜も緩やかである。窖窯とはいえ、これまでにない窯構造であり、平窯同様、試行錯誤の末の挑戦的な瓦窯と位置づけられる。ただし、先述したように後世の混入もあり、1号窯・2号窯の焼成

部出土の瓦がそれぞれの窯で焼かれたと断定はできない。

また日高山瓦窯に多い赤褐色の瓦は酸化焼成が要因である。藤原宮の瓦の色調は中国の都城の瓦に倣い、黒色を志向したと考えられ⁷⁾、赤褐色の瓦は求めるものではなかつたろう。瓦を黒色にするには焼成部内の酸素の供給を断ち、還元焼成にする必要がある。仮に構造が異なる平窯・窖窯ともに赤褐色の瓦が焼成されたとしたら、天井部の構造に何らかの要因があり、還元焼成が首尾よくいかなかった可能性も考えられる。

出土瓦の特徴と日高山瓦窯の位置づけ 1978年調査・17次調査南区出土瓦の特徴として、①焼成・色調にばらつきがあること、②熨斗瓦の出土量が多いことがあげられる。これらの特徴は第213次調査においても共通する。①については先に述べた。②については、日高山瓦窯産の瓦は、北面中門や西面中門など大垣周辺で多く用いられたことがわかっている⁸⁾。大垣の屋根であれば、丸・平瓦に対し、熨斗瓦の割合が多いことは理解できる。

日高山瓦窯は藤原宮造営初期の瓦生産を担った瓦窯である。当該地は窯業地帯ではなく、藤原宮にごく近い場所を選定して瓦窯が新設されたと考えられる。そこでは粘土紐技法や平窯など、新しい造瓦技法や窯構造が積極的に導入された。これらはすべて宮殿に瓦を葺くための瓦大量生産に向けた戦略の一環と位置づけられる。日高山瓦窯での瓦生産が、以降の都城の瓦生産の基盤となっていくのである。今回、窯構造や出土瓦を通してその一端を知ることができた。

本稿は JSPS 科研費 18K01084、20H01349 の成果の一部である。
(石田由紀子／京都国立博物館)

註

- 1) 網干善教「橿原市飛騨町日高山瓦窯跡」『奈良県文化財調査報告書-埋蔵文化財編』奈良県教育委員会、1962。
- 2) 土肥 孝「日高山瓦窯の調査」『藤原京右京七条一坊調査概報』藤原京右京七条一坊跡調査会、1978。
- 3) 大脇 潔「研究ノート 丸瓦の製作技術」『研究論集Ⅹ』奈文研、1991。
- 4) 藤原宮の造瓦グループの分類については、本書 43 頁参照。
- 5) 石田由紀子「藤原宮造営における瓦生産体制と瓦窯構造」『瓦窯の構造研究』窯跡研究会、2024。
- 6) 藤原 学「瓦窯構造からみた焼成技術とその変遷」『植崎彰一先生古希記念論集』真陽社、1998。
- 7) 前掲註 5。
- 8) 石田由紀子「藤原宮における瓦生産とその年代」『文化財論叢Ⅳ』奈文研、2012。

藤原京右京七条一坊 SE1850 の井戸枠と柱材

—藤原宮第 17 次

本稿は、藤原京右京七条一坊で検出した井戸 SE1850 の井戸枠材について報告するものである。第 17 次調査については、既に『藤原概報 6』で概要が報告されており、SE1850 についても検出状況、井戸枠の概要、出土遺物について言及されている¹⁾。井戸枠内部からは、SE1850 南方に位置する日高山瓦窯で焼成されたと考えられる多量の瓦のほか、ふいご羽口、藤原宮期の土器、木簡などが出土している。木簡のなかには和銅 2 年 (709) の年紀をもつ荷札がある。

現在、飛鳥・藤原地区では、日高山瓦窯の発掘調査成果について整理を推進しており、その一環として、改めて第 17 次調査出土井戸枠材の詳細な実測調査、観察、樹種同定、年代測定を実施した。

検出位置および検出状況 井戸 SE1850 は藤原京右京七条一坊の西南隅部に位置する。井戸枠の心は七条条間路南側溝 SD1845 心の約 6.5m 北方、西一坊坊間路西側溝 SD1856 の約 19.5m 東方に位置する。ただし SD1845 に対となる北側溝、SD1856 に対となる東側溝はいずれも検出されていない。

東西約 4.8m、南北約 5.2m の東南部がやや突き出た円形平面をもち、深さ 1.2m の掘方に、内法寸法東西 0.9m、

南北 0.8m の井籠組の井戸枠を据える (図 45)。井戸枠部分のみ、周辺よりさらに 10cm 深く掘り下げられている。南北面は最下段から 5 段、東西面は最下段から 4 段分が残存する。井戸枠を組んだ後、南北面の下から 3 段目の天端まで埋めたのち、東南隅の外に柱を据え、井戸枠とともに埋めている。柱材を検出したのは、西南隅 1 ヲ所のみであり、釣瓶を受ける吊る柱と考える。

部材の形状と寸法 井戸枠は、最下段に東西面を据え、その上に南北面を相欠きで組んで、さらに東西面・南北面を繰り返し積みあげる (図 46・47、PL.23・34)。東西面最下段のみ、両端の上面を凹形に欠き込み、他は両端の上下を凹形に欠きこんでいる。

各部材の主要寸法をみると、折損のないもので、全長は 1,150~1,234mm、内法寸法は 834~905mm、成は 205~369mm、厚さは 28~42mm と、材ごとの誤差が生じている (表 9)。

井戸枠の木取りと加工痕跡 井戸枠はいずれも針葉樹 (目視観察) の心去りの板材で、井戸使用時の内面を木裏にするものが若干多いものの、木表とするものもある。内外面はチョウナで整えられており、とくに外側には加工痕跡を良好に残す。残存状況のよいもので刃幅 78mm のチョウナ痕が確認できる。両端木口および相欠きの仕口にはノコギリによる加工痕跡があり、仕口で確認できるアサリ幅は約 3mm である。

柱材の形状と木取りと加工痕跡 西南隅に立つ柱材は (図 47-19、PL.24-19)、心持ちの針葉樹材 (目視観察) であるが、心部分は抜け落ちている。不整形な 11 角形の断面形状をなしており、おおむね円形を目指し整えられたものとみられる。直径約 150mm、長さ 656mm で、下端から約 480mm より上部は腐食によって痩せているが、下部は側面に刃幅 50mm のチョウナ痕跡が良好に残り、下端はヨキにより隅部が削がれている。 (鈴木智大)

樹種同定と年代測定 井戸枠のうち、3 枚の板材について樹種同定と年輪年代学的検討をおこなった。

薄切片プレパラートの生物顕微鏡観察により、東面 3 段目、西面 4 段目、北面 1 段目をスギ (*Cryptomeria japonica* (L.f.) D.Don) と同定した。また、これらの横断面 (木口) の接写写真から年輪幅を計測し、年輪年代学的検討を実施した。年輪曲線の目視評価と統計評価²⁾をおこなったところ、西面 4 段目と北面 1 段目が 86 層重複する

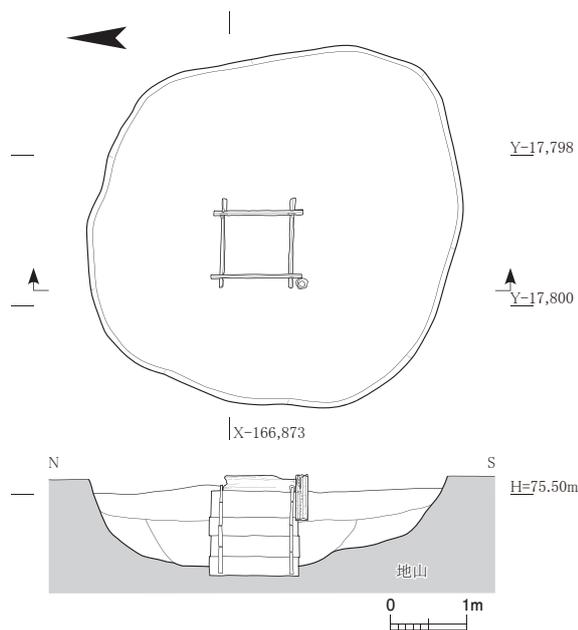


図 45 SE1850 遺構図・断面図 1:100

表9 SE1850 井戸枋材 一覧 (通番号は図46・47およびPL.23・24に対応)

方位	通番号	段数 (下から)	全長 (mm)	内法 (mm)	成 (mm)	厚さ (mm)	仕口欠込深さ (mm)			内面木取	
							北	南	(上段：上面、下段：下面)		
東面	1	5 段目	905	— —	238	35	北	— —	南	— —	木表
	2	4 段目	1,160	895 901	268	34	北	42 101	南	20 109	木裏
	3	3 段目	1,150	905 895	285	30	北	63 85	南	49 82	木裏
	4	2 段目	1,227	892 891	271	42	北	66 61	南	92 51	木裏
	5	1 段目	1,191	885 なし	252	42	北	109 なし	南	110 なし	木裏
西面	6	5 段目	883	— —	226	37	北	— —	南	— —	木表
	7	4 段目	1,188	882 897	332	30	北	79 121	南	48 122	木表
	8	3 段目	1,164	896 893	251	30	北	65 86	南	22 80	木裏
	9	2 段目	1,135	890 886	271	28	北	94 64	南	86 39	木裏
	10	1 段目	1,202	886 なし	245	35	北	103 なし	南	112 なし	木裏
南面	11	4 段目	971	— —	205	34	東	38 68	西	— —	木表
	12	3 段目	1,166	851 849	305	30	東	58 106	西	82 78	木表
	13	2 段目	1,234	860 872	365	37	東	79 122	西	87 122	木表
	14	1 段目	1,164	885 880	309	40	東	35 139	西	23 139	木裏
北面	15	4 段目	1,167	834 —	276	30	東	— 70	西	— 74	木裏
	16	3 段目	1,158	838 840	310	32	東	68 78	西	82 53	木裏
	17	2 段目	1,200	862 842	297	32	東	74 58	西	88 72	木裏
	18	1 段目	1,198	879 873	369	34	東	144 60	西	142 50	木裏

関係で照合した ($t=8.8$)。174 層になった 2 材の平均年輪曲線は、薬師寺東塔部材 73 点を平均した年輪曲線³⁾と照合し ($t=9.7$)、より外側の年輪が刻まれる西面 4 段目の最外層の年代は 602 年であった。この材には辺材が確認できないため、原木の伐採年代は 602 年を遡らず、取り去られた心・辺材部の年輪数を加算したものとなる。

(星野安治)

まとめ SE1850 は釣瓶を受けたと考えられる柱を備えた井籠組の井戸である。井戸枋材の加工精度はそれほど高いとは言い難いが、外面を中心に加工痕跡を良く残す。また、辺材を含まない最外層の年代は 602 年を示しており、数十年後に伐採された材を利用したと考えれば、少

なくとも木簡の年紀にある和銅 2 年まで存続していたと考えられる。藤原宮期に利用されたことは間違いがないだろう。日高山瓦窯の稼働時期を考える上でも重要な部材と位置づけられる。

(鈴木)

註

- 1) 『藤原概報 6』1976。
- 2) Ballie M.G.L. and J.R. Pilcher 'A simple cross-dating program for tree-ring research' "Tree-Ring Bulletin" 33, 1973. クロスデーティングの統計評価がスチューデントの t 値で示される。
- 3) 星野安治、児島大輔、光谷拓実「国宝薬師寺東塔木部材の年代測定-建立年代について-」『紀要 2017』。

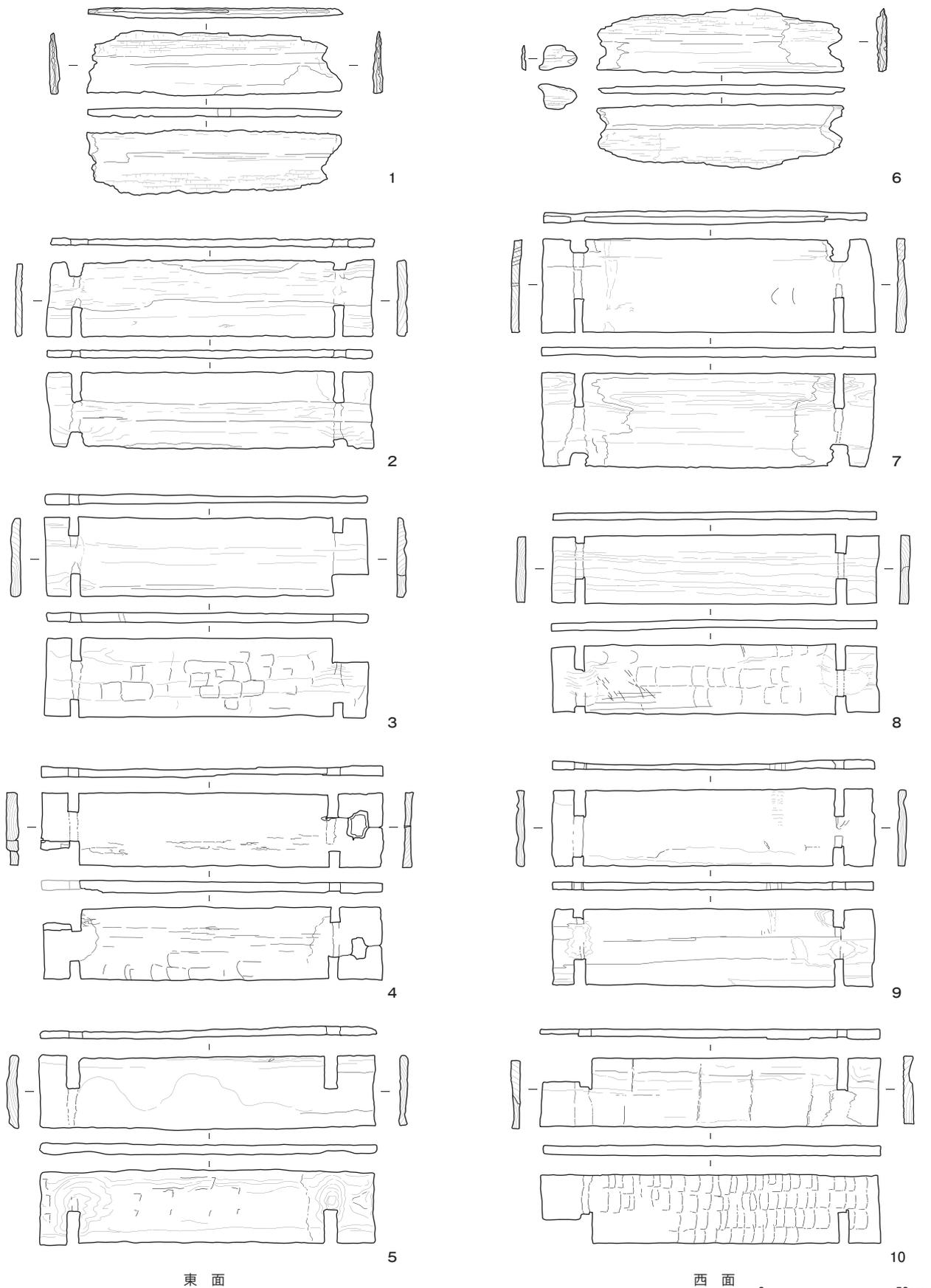


図46・47の1～18は各材について、上面・内面・底面・外面の順に並べ、左右に小口面を掲載した。

図46 SE1850 井戸枠 (東・西面) 1:20

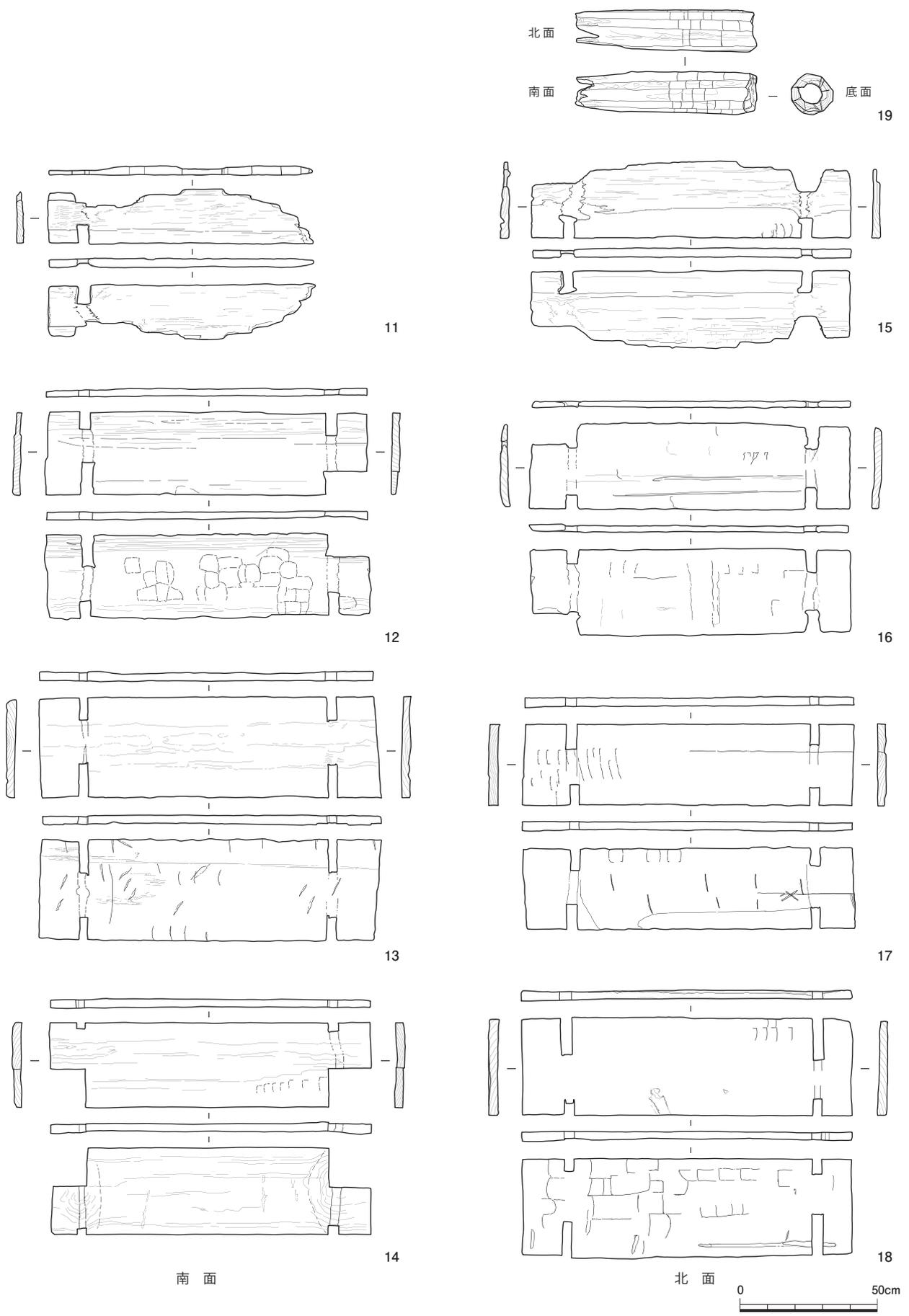


图 47 SE1850 井戸枠 (南・北面) 1 : 20

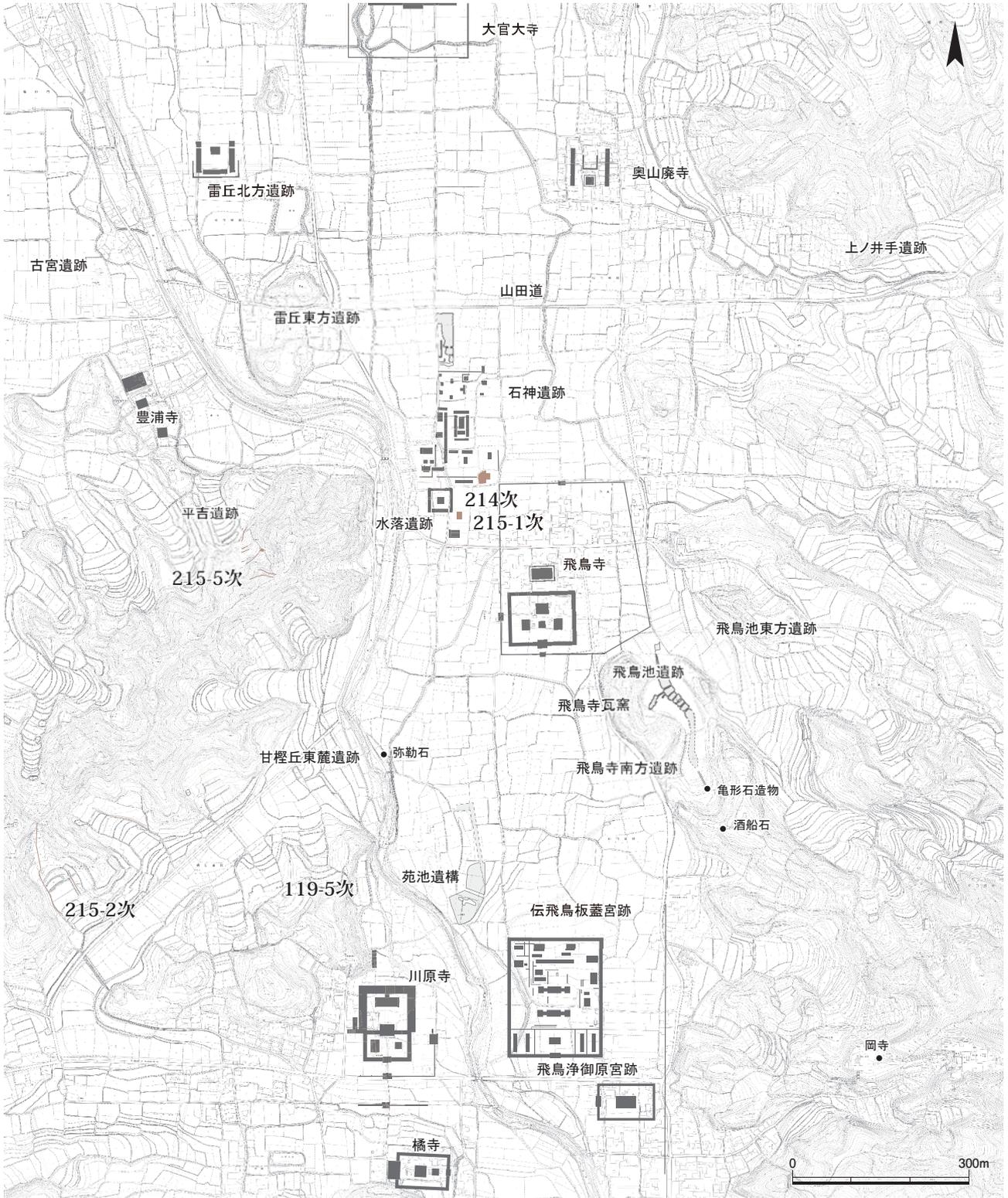


図 48 飛鳥地域発掘調査位置図 1 : 10000

1 飛鳥地域等の地理的環境

都城発掘調査部の飛鳥・藤原地区が発掘調査をおこなう地域のうち飛鳥地域は、奈良県北部に位置する奈良盆地のなかで、およそ、その東南部にあたる明日香村に立地している。ただし、飛鳥地域の語は、その概念に大小あり、明日香村に接する桜井市や橿原市、高取町の一部を含む場合もある。一般的に、飛鳥地域と言えば、明日香村の北部、奈良盆地が東南部でやや南に張り出す、飛鳥川の東岸域を指す。

南高北低の地勢で、丘陵部と低地部からなり、低地部の標高は100～120mである。丘陵部には森林が広がり、集落が散在するほか、低地部には水田が営まれている。飛鳥地域は、古代を中心とする歴史的な文化遺産が多数存在し、史跡や特別史跡に指定されている遺跡や古墳のほか、宮内庁管轄の古墳も少なくない。

現在の主要な産業は農業と観光である。低地部の水田のほか、丘陵部における果樹等の栽培で、とりわけ飛鳥川上流域では丘陵部においても狭い平地を造成した農村景観が形成され、観光にも寄与している。なかでも明日香村稲渕・栢森・入谷に展開する農業・集落の景観は、奥飛鳥の文化的景観として、2011年に国の重要文化的景観の選定を受けた。また、18世紀後期以降、古墳や寺院跡は名所として観光の要素ともなってきた。

2 飛鳥地域等の歴史的環境

飛鳥地域は6世紀末に飛鳥寺が、狭い盆地の中央部に造営されて以降、7世紀には推古天皇の豊浦宮をはじめ、天武天皇の飛鳥浄御原宮までいくつもの宮殿が営まれ、また橘寺、川原寺などの寺院が造営されるなど、7世紀の政治・文化の中心地であった。また周辺の丘陵部には高松塚古墳やキトラ古墳などの装飾古墳も存在し、いわゆる終末期古墳も多数築かれた。

西暦694年に遷都された藤原京は、東南部の一部が現明日香村域に含まれている。大官大寺は藤原京内に創建された寺院だが、飛鳥地域の寺院として考えることもあり、このほかにも藤原京内に位置するものの飛鳥地域との結びつきが強い遺跡もある。

710年の平城京遷都にともない、いくつかの寺院は平城京に移転した。その後、飛鳥地域の低地部は、藤原地



図49 飛鳥地域の中心部を南からみる

域とともに都市的な開発はおこなわれず、大勢としては耕作地として保たれてきた。1972年の高松塚古墳の極彩色壁画の発見は、飛鳥地域に飛鳥ブームあるいは考古学ブームを巻き起こし、多くの人びとがこの地域を訪れることになった。

一方、戦後の高度経済成長による大規模開発への反省から、1966年には、「古都における歴史的風土の保存に関する特別措置法」（いわゆる古都保存法）が施行された。当初は明日香村の一部がその対象地域であったが、1980年には「明日香村における歴史的風土の保存及び生活環境の整備等に関する特別措置法」（いわゆる明日香法）が施行され、村全域に歴史的風土の保存と村民生活の調和を図るための措置が講じられた。また自然景観を保全するため、奈良県は1970年にこれらの地域を「風致地区」として指定し、奈良県風致地区条例を定めた。2014年以降は、市町村への権限委譲を受け、明日香村が定める風致地区条例により、建築物などの形状や色彩の規制がおこなわれている。

2007年には「飛鳥・藤原の宮都とその関連資産群」が世界遺産暫定リストに登録され、2024年現在、世界遺産への本登録を目指している。構成資産は宮殿と官衙、仏教寺院、墳墓（古墳）の計20資産で、このうち飛鳥地域等からは、飛鳥宮跡、飛鳥京跡苑池、飛鳥水落遺跡、酒船石遺跡、飛鳥寺跡、橘寺跡、川原寺跡、檜隈寺跡、大官大寺跡、石舞台古墳、菖蒲池古墳、牽牛子塚古墳、天武持統天皇陵古墳、中尾山古墳、キトラ古墳、高松塚古墳の16資産が挙げられている。（箱崎和久）

石神遺跡の調査

—第 214 次

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

石神遺跡は斉明朝の漏刻（水時計）跡である水落遺跡の北側、飛鳥寺の北西に位置し、かつては飛鳥浄御原宮推定地と考えられていた。また、その東南部にあたる小字石神の水田は、1902・1903年に石造物（須弥山石・石人像）が出土したことで知られ、1936年には東京帝室博物館の石田茂作が、石造物の性格究明を目的とした発掘調査をおこなった（以下、石田調査と略称）。この調査で、石田は「敷石遺蹟」と石組の溝、「井戸」などを発見し、後年これらが『日本書紀』齐明天皇5年（659）3月条にみえる、陸奥・越の蝦夷への饗応の場の遺構であると考えられるにいたった¹⁾。石神遺跡を斉明朝の饗宴施設とする遺跡観は、この石田説に端を発している。

奈文研はこれまで、石神遺跡の継続的な発掘調査を実施してきた（図50）。調査面積は延べ17,600㎡に達している。その第1次調査（1981年）の調査地は、石造物が出土した水田で、調査目的は石田調査で見つかった遺構を再確認することであった。この調査では石田が発見した遺構を再検出し、所期の目的を果たすとともに、飛鳥時代の掘立柱建物や東西塀などを新たに検出した（PL26・PL27）。また、その2年後に西側隣接地で実施した第3次調査（1983年）では、石神遺跡と水落遺跡とを隔てる東西掘立柱塀SA600と、その後身の区画施設である東西掘立柱塀SA560を新たに検出するなど、大きな成果をあげた。しかし第1次調査では、これら区画施設の遺構を未検出であったため、石神遺跡の範囲を確定するうえで大きな課題となっていた。

その後の調査でも、7世紀代を中心とした建物や石敷広場、井戸、石組溝などの遺構群を確認し、上記の石田説による石神遺跡の遺跡観は継承されている。近年では、都城発掘調査部（飛鳥・藤原地区）考古第二研究室が進める出土土器の再整理によって新知見が蓄積されている²⁾。さらには、石神遺跡一帯は小治田の地に含まれるとみる理解もあり³⁾、推古朝小墾田宮に関連した遺構の検出を期待する気運も高まりつつある。



図50 第214次調査区位置図 1:3000

奈文研では、2024年度末に石神遺跡第1～4次調査を主とした正式報告書を刊行予定である。その報告書の作成業務を進めるなかで、上述した課題の解決が急務となり、土地所有者をはじめとする地元の方々のご理解を得て、2023年度は第1次調査区の再発掘を実施した。今回の調査は石造物出土地における実に3度目の発掘調査である。

(2) 発掘作業の経過

調査は2023年12月6日から2024年3月14日にかけて実施した。調査範囲は未検出遺構の確認に必要な範囲を中心とし、第1次調査区の西半分を主な調査対象とした。調査面積は335㎡で、すべて既調査区である。

12月1日に調査前状況を撮影し、12月4日に調査区の設定と水準基準点の移動をおこなった。12月6日に調査区周辺の仮設ロープ柵の設置等の環境整備をおこない、同日から18日まで重機により耕作土および第1次調査の埋戻土を除去。19日から人力掘削を始め、第1次調査の保護砂（真砂土）の除去と遺構検出を開始した。なお、石組溝SD335およびSD330・331の溝内埋戻土

は側石の崩落を防ぐため、部分的な除去にとどめた。2024年1月31日に調査区全景の高精細写真撮影(PL25)およびSiM-MVS用の写真撮影をおこない、2月1日から8日にかけて実測による記録をおこなった。13日から断割および下層調査を実施した。29日に記者発表をおこない、3月1日に地域住民向けの現地説明会を開催して、27名に見学いただいた。2日に一般向けの現地見学会を開催し、来場者は805名であった。現地見学会当日には遺構細部の高精細写真撮影も実施した。4日には奈文研埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室の協力を得て、地質学的調査のため、第1次調査で未掘部分のSD335溝埋土のサンプル採取作業をおこなった。6日から15日に埋め戻し作業をおこない、終了時の写真撮影をおこなって発掘作業を終了した。

なお、2月8日に高橋克壽氏(花園大学)、15日に上原真人氏(京都大学名誉教授)、菱田哲郎氏(京都府立大学)、諫早直人氏(同左)、小澤毅氏(三重大学)、27日に青木敬氏(國學院大学)、3月4日に木下正史氏(東京学芸大学名誉教授)にお越しいただき、調査に関して有益なご意見を賜った。

(3) 整理作業の経過

発掘作業と併行して、出土遺物の整理作業をおこなった。出土遺物は取り上げ時に、土器、瓦、木器等の素材ごとに仕分け、藤原地区庁舎内の整理室に搬入し、洗浄、注記、接合、実測作業などを実施した。また地質学的調査のために、埋土の一部を切り取り、埋蔵文化財センター遺跡調査技術研究室で分析作業をおこなった。

2 遺跡の位置と環境

(1) 地理的環境

石神遺跡は飛鳥川の右岸に形成された低位段丘面に位置する(PL26-1)。この低位段丘面は高いほうから岡面(低位段丘Ⅰ面)と飛鳥面(低位段丘Ⅱ面)に区分される。岡面は島庄から岡、川原にかけての平坦面を指す。飛鳥面は大字飛鳥から小山集落付近まで広く分布し、石神遺跡もこの面に位置する。両者の境界である段丘崖は、飛鳥京跡苑池から奈良県立万葉文化館に向けての南西から北東にかけて位置し、現在の吉野川分水はこの崖線に沿って流れている。

飛鳥面の地形は飛鳥川に向けて東から西へ緩やかに

傾斜する。大字飛鳥周辺では、東方から流下する八釣川が谷から抜けて平坦面にいたり、中の川となる地点付近(飛鳥坐神社の北側)を扇頂とする扇状地を形成している。石神遺跡周辺はこの扇状地の扇端付近にあたる。飛鳥面の基盤層は砂礫層で、低位段丘に相当する扇状地の基底礫層にあたると考えられる。

石神遺跡は東から西へ傾斜する地形ではあるものの、これまで検出されてきた石組溝等の7世紀代の主要な水路は南方から引水しているものも多い(後述のSD330・SD335など)。これらの取水地は和田萃が唱えるように、飛鳥京跡苑池の北西、弥勒石の近くにある「木葉堰」とするのが有力である⁴⁾。現在も木葉堰から取水して飛鳥面の灌漑用水として利用されている。石神遺跡で検出した飛鳥時代の石組溝等の水路が、実際にどこからどこまで通じていたかは未だ不明ではあるものの、飛鳥川右岸のどこかで取水し、崖線に沿って石神遺跡周辺まで通じていたことは想像に難くない。

(2) 歴史的環境

石神遺跡は飛鳥寺の西北隅に接し、水落遺跡に北接する。前述のように明治期に石造物が発見されて以降、石田調査や奈良県による調査(1965年)を経て、奈文研による調査が進められてきた。その結果、遺跡は大規模な建て替えをおこないながら時期とともにその性格を変え、大きく、A期の斉明朝の饗宴施設(ただし3小期に分かれ、最古のA-1期は斉明朝より一段階古い)、B期の天武朝の宮外官衙施設、C期の藤原官期の建物群という変遷で理解してきた(『紀要2009』)。ただし、前述のような近年の出土土器に関する新知見から、これまでの石神遺跡像に対して再考を促す検討成果も示されつつある。

石神遺跡A期の主要遺構の範囲については、石神第3・10次調査(『藤原概報14』、『同22』)で南限施設とみられる東西塀SA600・1600(A期)を、第13・14次調査(『紀要2001』、『同2002』)で北限施設の東西塀SA3893(A-1・2期)・3895(A-3期)と東西石組溝SD3896(A-1期)・3950(A-3-1期)を確認している。そして第21次調査(『紀要2009』)で掘立柱建物SB4341(A-2期)・4340(A-3期)と、それに取り付く南北塀SA4327(A-2期)・4326(A-3期)を検出し、これらを一度は東限施設とみなしてきた。西限については、第10~12次調査で未検出であり、さらに西方の調査区外に位置するとみられる。

いっぽうで、第1・2次調査で検出した石組溝SD334・335・435は、調査区中央を南北に貫流したのうち第2次調査区北端で東折し、さらに東方の調査区外へつづいている（『藤原概報12』『同13』）。つまり、上述の東限施設は石神遺跡の区画内側に位置する建物や塀のひとつであり、本来の東限区画施設は未検出で、従来の石神遺跡の範囲よりもさらに東に存在する可能性を指摘できる。

くわえて、明日香村教育委員会による雷丘東方遺跡の調査（1987年）を契機とし、小壘田宮の所在地を飛鳥川西岸の古宮土壇一帯ではなく、雷丘東方を含む東岸一帯に想定する見解が主体を占めるようになった。さらには石神遺跡の整地土から多量に出土した鉄鏃類を小壘田兵庫と関連づけ、飛鳥寺北面に接するこの地域一帯を小壘田宮に含ませる考えもある。また、飛鳥寺北面大垣では、飛鳥寺北方の調査（飛鳥藤原第21-8次）で北外堀SD501がとぎれることを確認しており、ここに北面大垣北門が開く可能性が高い（『藤原概報8』）。石神遺跡の東方へつづく石組溝の存在とも関連して、石神遺跡の東方かつ飛鳥寺の北方に位置する石神遺跡東方区域にも両者に関連した重要施設の存在が想定できる。

3 調査の方法と成果

(1) 調査の方法

調査手順 第1次調査区の位置を踏まえて、遺構の確認に必要な範囲に限定して今回の調査区を設定した⁵⁾。

調査区内の掘削では、耕作土および床土、第1次調査の埋戻土の除去は重機を用いておこない、当時の掘削停止面の明示および遺構保護を目的とした砂（真砂土）の除去からは人力掘削に切り替え、遺構検出をおこなった。調査区内に3m方眼の小地区を設定し、客土や遺物包含層、整地土の掘り下げに際してはこの小地区単位で遺物を回収した。

遺構検出にあたっては、まず第1次調査の遺構検出面を再検出した。その結果、今回の調査区南半を中心に、流路NR310⁶⁾の堆積土が残されており、また後述の石敷SX327南辺にはNR310を覆う平安時代の遺物包含層が一部落ち込んで残されていることを確認した。その他にも、明治期の石造物引き上げにともなう攪乱や石田調査後の埋戻土も部分的に残されていた。これら後世の堆

積土を必要に応じて除去し、7世紀代の遺構検出をおこなった。遺構検出後は遺構への影響が最小限の範囲でサブトレンチを設定し、溝や柱穴の埋土および構築方法、整地土等の確認をおこなった。また、今回の調査区北端で、SD335の未攪乱の溝埋土が残されていることを再確認し、地質学的調査のためサンプルを採取した。

調査終了後には掘削停止面の明示と遺構保護を目的として、調査区全体に砂を散布したうえで、掘削時に生じた土砂で埋め戻しをおこなった。

測量と記録 調査ではGNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本として平面図を作成した。遺構面の記録に当たっては、通常の写真撮影にくわえてSfM-MVSによる三次元モデル作成のための写真撮影も実施した。

標高は飛鳥藤原No.31（X=-168,549.309、Y=-16,677.042、H=101.030m）からオートレベルで直接水準測量をおこなった。

(2) 基本層序

今回の調査区は第1次調査区に包含され、水田畦畔保護の関係から、第1次調査区よりもやや控えた形で調査区を設定した。そのため、調査区中央北辺の一部を除いて、本来の土層を観察することはできなかった。ここでは、第1次調査の所見および今回の調査での認識をもとに、基本層序を述べる。基本層序は、上から耕土・床土（40cm）、中世以降の水田土壌とみられる黄褐色砂質土（40cm）、平安時代の遺物包含層（30cm）とつづき、その下の奈良時代以降の流路NR310の砂礫層（10~70cm）を介して、7世紀代の遺構面に達する。地山は径5~10cmの礫を多量に含むにぶい黄褐色または灰黄褐色砂礫で、7世紀前半の施設はこの地山を掘り込んで造営される。

これまでの石神遺跡の調査で、7世紀代には2時期の大規模な整地がなされたことがあきらかとなっている。一時期目は7世紀前半の遺構を廃したのちに黄色粘土を主体に造成された整地土（A期整地土）で、二時期目は炭化物や焼土、土器を含む7世紀後半から末までに造成された整地土（B期整地土）である。今回の調査では、石敷SX327の下に、礫の混じる灰黄褐色砂質土の整地土を検出し、これがA期整地土であることが判明した（PL30-2）。またこのA期整地土は石組溝SD335の側石を覆っていることもあきらかとなった。いっぽう、その他の場所で

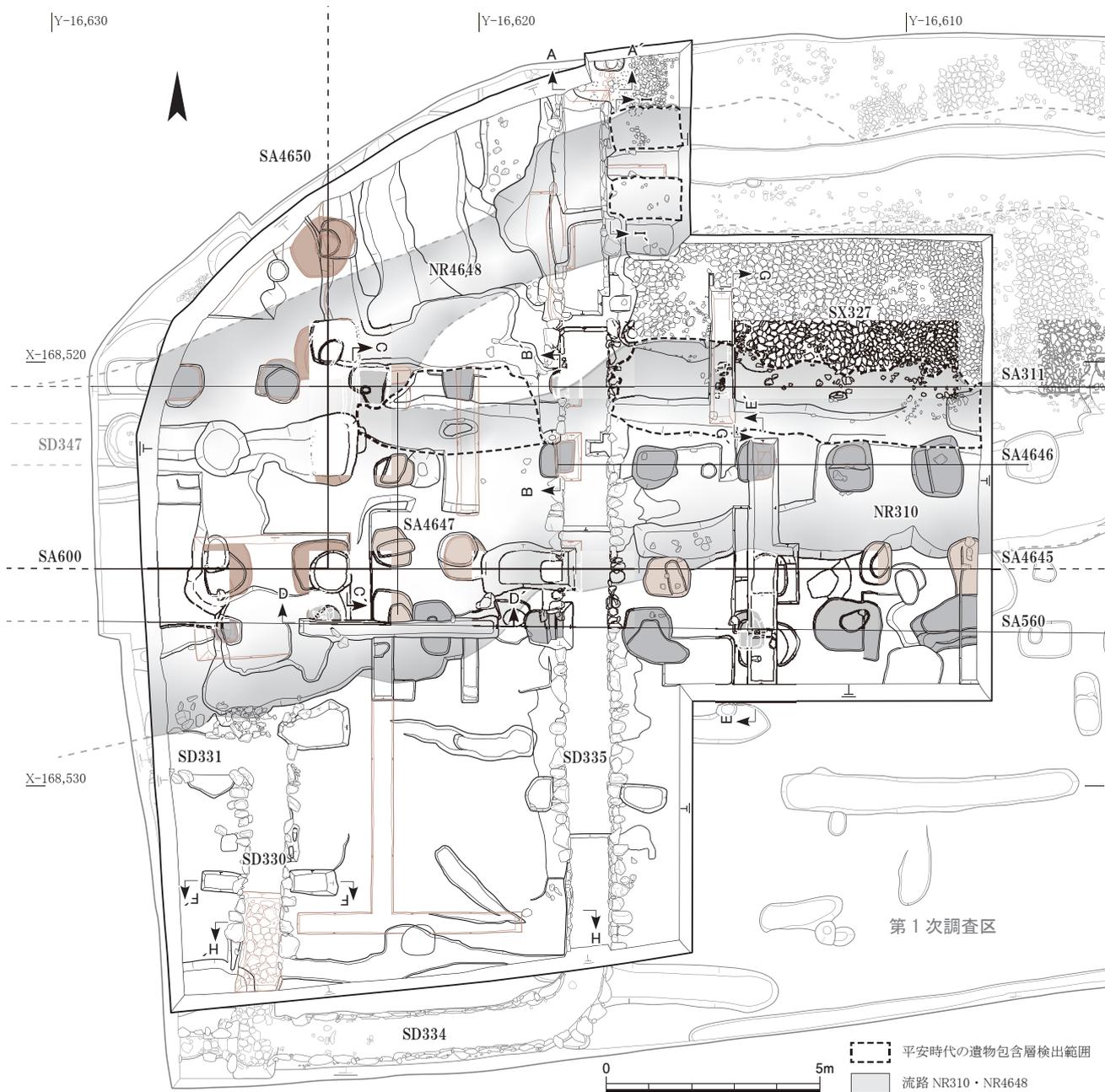


図51 第214次調査区遺構図 1:150

は整地土が確認できず、第1次調査時に除去されたか、流路 NR310 の浸食等によって削平されたものと考えられる。

くわえて、今回の調査では、石敷 SX327 南辺の東西約 15m、南北約 2m にわたり、平安時代の遺物包含層が帯状に残存していることを確認した。この包含層は流路 NR310 よりも上位にあり、石敷 SX327 を覆っていたものが一部落ち込んで残存していたと考えられる (図58)。

(3) 検出遺構

今回の調査では、7世紀代および奈良時代以降の遺構を検出した。主な検出遺構は、東西塀4条、南北塀1条、東西柱列1条、南北柱列1条、石組溝2条、石敷1面、流路2条である (図51)。本稿では、今回の調査で新たに検出した遺構と、第1次調査の遺構解釈を改めたものについて報告する。また、先述のように、これまでは7世紀の遺構群を A 期 (7世紀前半から中葉まで)、B 期

(7世紀後半)、C期(7世紀後半～末)の大きく3期、さらにA期は3つの小期(A-1・A-2・A-3)に分けられていた。しかしながら、近年の出土遺物の再検討成果や今回の調査成果を踏まえて、これらの時期区分の再検討をおこない、本稿では新たな時期区分として、7世紀前半(旧来のA-1・A-2期)、7世紀中葉から後半まで(同A-3・B期)、7世紀後半から末まで(同C期)の3時期に分けて報告する。詳細については、2025年3月刊行予定の『石神遺跡発掘調査報告I』で述べることにしたいが、上述の2時期の整地を大きな画期にとらえ、その整地土との上下関係をもとに再編した時期区分である。

A. 7世紀前半の遺構

石組溝 SD335 石田調査で発見されたクランクする石組溝の一部。調査区の南外にある東西石組溝 SD334 が東端で北折して南北石組溝 SD335 となる(PL.27-1)。SD335 北端は北の第2次調査区内で東に折れ、東西石組溝 SD435 となり、さらに東へつづく。

溝幅は上端で1.2m、下端で0.9mを測り、逆台形断面を呈する(PL.27-3)。溝の深さは約1.0mで、側石は幅30～70cm、高さ30～40cmの自然石を用い、3～4段に横

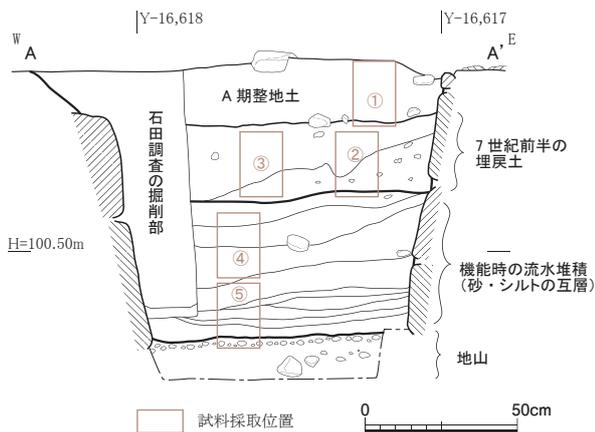


図52 石組溝 SD335 土層断面図 1:25

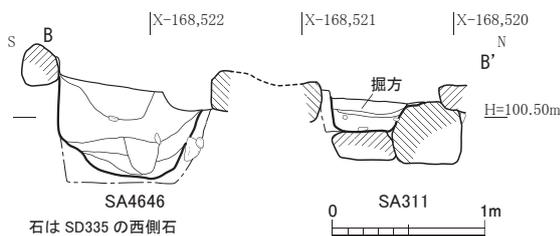


図53 SD335の側石を壊す東西柱列 SA4646・東西塀 SA311 柱穴断面図 1:50

積みして造られる(PL.29-1・3)。底石は設けない。

溝埋土の大半は石田調査で完掘されていたが、調査区北端の畦畔直下に未掘部分があり、本来の溝埋土を観察できた。それによると溝埋土のうち、底部から60cmほどは雲母や黄褐色細砂を多く含み、粗砂と細砂、シルトが互層をなしており、機能時の流水堆積が確認できる(図52、PL.30-3)。溝上部40cmは人為的な埋立土が2層確認でき、このうち下層(25cm)は炭化物や雲母が混じる褐色粘質土、上層(15cm)は白色粒や少量の雲母が混じる暗褐色粘質土で埋め立てられる。下層は後述する区画を東へ拡張する際に埋め立てられたもので、上層は7世紀前半の遺構を廃した後に造成された整地土(A期整地土:灰黄褐色粘質土)と考えられる。

SD335はその西側石が7世紀前半の東西塀 SA4645 や7世紀中葉から後半までの東西柱列 SA4646、7世紀後半から末までの東西塀 SA311 に壊されている(図53)。また流水堆積層からは飛鳥Iに属する土器が出土した(図61参照)。

東西塀 SA600 調査区西部で新たに検出した東西掘立柱塀(PL.28-2)。西の第3・10次調査でも検出しており、今回の調査では柱穴2基、東西2間分(約4.0m)を検出した。東端で南北塀 SA4650 に接続する。造営方位はほぼ正方位にのり、西の第3次調査区では基壇を有することを確認しているが、今回の調査では後述の流路 NR310 の浸食、もしくは明治時代の石造物発掘にともなう攪乱が著しく未検出である⁷⁾。また、南北塀 SA4650 と共有する東端の柱穴は、石田調査では井戸と認識していた⁸⁾。今回の調査で柱掘方を検出し、石田調査では柱痕跡もしくは柱抜取穴を井戸として掘り抜いていたことが判明した。

SA600の柱間寸法は約2.5mである。今回の調査で検出した柱掘方は一辺1.3m以上の隅丸方形で、深さは約1.3mに達する(図54)。西の柱穴1基では径0.7～1.0mの柱痕跡もしくは柱抜取穴を確認した。柱掘方の埋土は礫を含む暗褐色もしくは灰褐色の砂質土で、柱痕跡もしくは柱抜取穴の埋土は、黄色粘土ブロックを含む黄褐色もしくは茶褐色の砂質土である。

SA600は、これまでの検出総長が102m以上におよぶ(図62)。柱穴の規模は藤原宮の大垣に匹敵し⁹⁾、7世紀前半の石神遺跡南面を区切る大規模な区画施設である。

南北塀 SA4650 調査区西北部で新たに検出した南北掘立柱塀(PL28-1・3)。SA600 東端の柱穴を始点に北進し、調査区の北外へつづく。造営方位はほぼ正方位にのり、SA600 と同じく基壇を有する可能性はあるが、今回の調査では未検出である。東に位置する石組溝 SD335 とは、溝心と柱心との間で約 6m を隔てる。

柱間寸法は約 2.5m である。柱掘方は一辺約 1.4m の隅丸方形で、検出面からの深さは約 1.4m である(図 54)。柱掘方の埋土は礫や土器片、黒色粘土ブロックを含む灰褐色粘質土で、柱痕跡もしくは柱板取穴の埋土は小礫や黄褐色粘土ブロックを含む暗褐色粘質土である。

第 1 次調査北区では、今回検出した北延長部分の推定位置に、黄褐色粘土を含む茶灰褐色粘質土の柱穴を検出している。また、第 2 次調査区でも推定位置で、南北 3 間分の南北塀 SA480 を検出しており、これらは SA4650 の一部である可能性がある。

南北柱列 SA4647 調査区西半で新たに検出した南北掘立柱列。柱間 3 間分(約 6m)を検出した。造営方位は正方位にのる。柱間寸法は 1.8m と狭い。柱穴は流路 NR310 によって大きく削平を受けるが、柱掘方は一辺 0.8~1.0m の隅丸方形で、いずれの柱穴にも柱板取穴が

確認できる(図 55)。検出面からの柱穴の深さは約 0.6m である。柱掘方の埋土は一部に小礫を含む暗褐色もしくは黒褐色粘質土で、抜取穴の埋土は黄色粘土ブロックおよび土器片を含む暗褐色粘質土である。

SA4647 は後述の SA560(7 世紀中葉から後半)や SA311(7 世紀末)と重複し、これらより古い。いっぽう、7 世紀前半の遺構である東西塀 SA600 や南北塀 SA4650 とは重複関係がなく、時期を決定する直接的な根拠はない。しかしながら、SA4647 の柱掘方には SA600 の基壇に由来する埋土は認められず、SA600 および SA4650 造営後に柱穴を掘削したとは考えにくい。不明な点が多いものの、現時点では SA600・SA4650 造営時の足場のような仮設的な柱列と考えておく。

東西塀 SA4645 調査区中央部で新たに検出した東西掘立柱塀。SA600 と SA4650 の屈折点から東へ 6 間分(約 15m)を検出し、さらに東へつづくと思われる(PL28-2)。基壇は未検出である。造営方位は SA600 と同じく正方位にのる。

SA600 東端の柱穴とは約 3m 隔てており、それ以後では柱間寸法にややばらつきがあるものの、約 2.5m である。SA4645 の柱掘方は一辺 1.0~1.2m の隅丸方形を呈

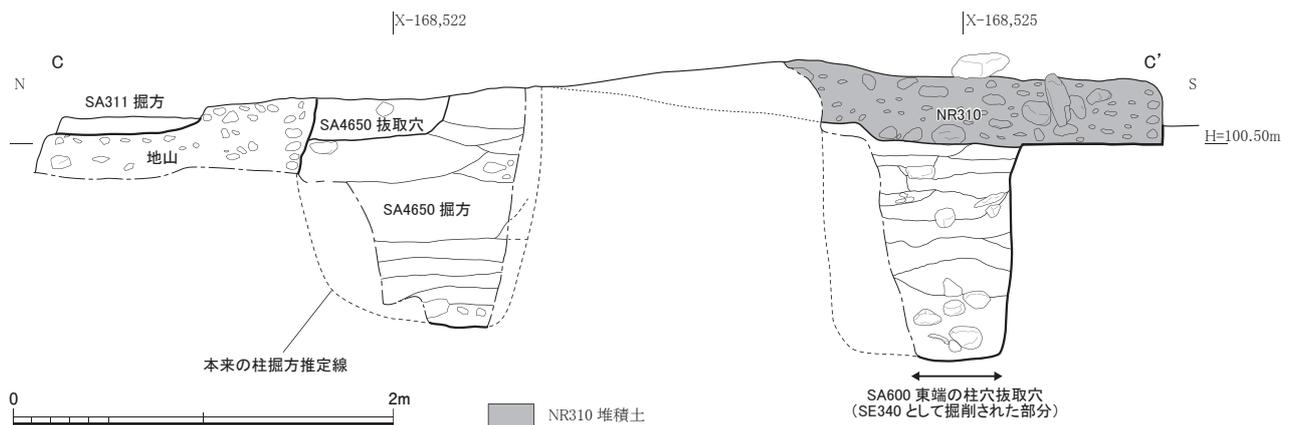


図 54 東西塀 SA600 および南北塀 SA4650 の柱穴断面図 1 : 40

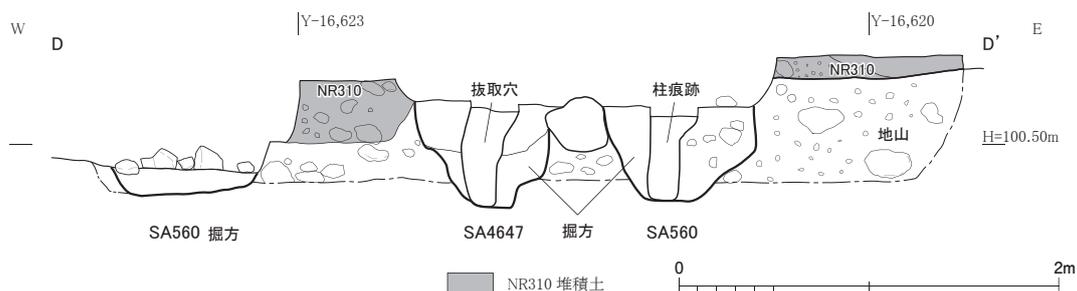


図 55 南北柱列 SA4647・東西塀 SA560 の柱穴断面図 1 : 40

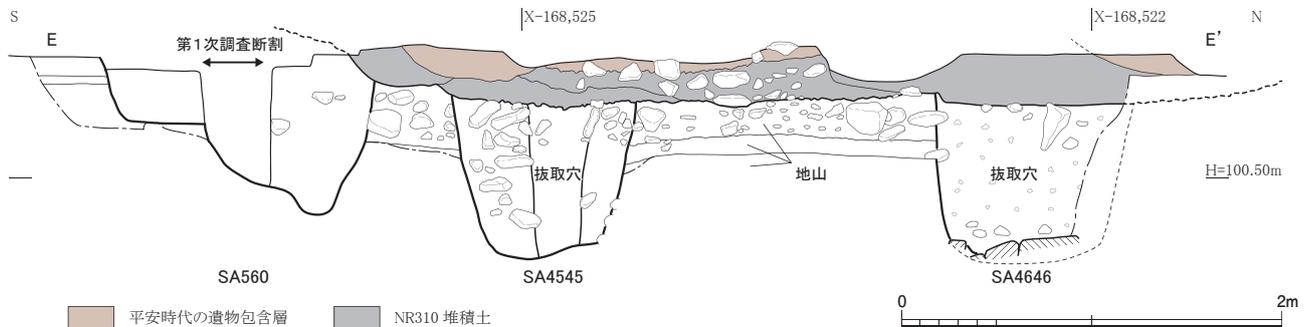


図 56 SA560・4645・4646 の柱穴および NR310 の断面図 1 : 40

し、一部の柱穴に 30 × 80cm の柱抜取穴が確認できる (図 56)。検出面からの深さは約 0.8m である。SA600 の東延長部分にあるが、SA600 よりも柱掘方はやや小規模で浅い。柱掘方の埋土は礫混じりの灰黄褐色砂質土で、柱抜取穴の埋土は黄色粘土ブロックを含むにぶい黄褐色砂質土である。石組溝 SD335 の側石を壊しており、これより新しい。遺構の重複関係から、石組溝 SD335 を埋め立てたのち、東西塀 SA600 に取り付いて東に延長した 7 世紀前半の区画施設と考えられる。

B. 7 世紀中葉から後半までの遺構

石組溝 SD330・SD331 調査区西南隅で再検出したクランクする石組溝。石田調査で発見されたもので、南北石組溝 SD330 が北で西へ折れて、東西石組溝 SD331 となり、西の第 3 次調査区でさらに北に折れて南北石組溝 SD332 となる (PL.27-2)。SD330 は今回の調査区南外で、先述した SD335 につながる東西石組溝 SD334 と交差してさらに南へ延びることが確認されている。なお、調査区内の SD330・331 の溝埋土は、石田調査で完掘されている。

今回の調査では SD330 を約 6.0m 分、SD331 を約 3.0m 分確認した (PL.29-2・4)。溝幅は 0.7~0.8m、深さは約 0.7m で、側石の最下段には高さ 60~70cm、幅 50~60cm の一枚石を立て並べる。最下段は完存するものの、上部の数段分は流路 NR310 によって壊されている (図 57)。溝底には径 20cm ほどの河原石を敷く。

これまで石組溝 SD330・331 は先述の SD335 と同時期の遺構と考えられてきた。いっぽうで、SD330 と SD334 の交差部分の溝埋土は、石田調査によって完掘されており、両者の先後関係は明確でない。第 3 次調査区では SD332 の溝埋土が一部残存し、飛鳥 I ないし

II に属する土器が少量出土している。これにくわえて、両者の側石の構築方法や底石の有無などの違いにも鑑みて、両者には若干の時期差があるとみられ、SD330・331 の方が新しいと考えられる。

石敷 SX327 調査区東北隅において東西約 9.0m、南北約 3.0m の範囲で再検出した石敷。第 2 次調査区で検出した南北棟掘立柱建物 SB400 の外周を取り囲む石敷の一部である (PL.27-4)。石敷南端は流路 NR310 の浸食により壊されている。第 1 次調査では平安時代の土器を含む黄褐色土に覆われていたことが判明しており、この黄褐色土は先述の平安時代の遺物包含層とみられる。さらに SX327 は、7 世紀前半の遺構を廃したのちに造成された整地土 (A 期整地土：灰黄褐色粘質土) の上面に敷設されることが今回新たに判明した (図 58)。

東西塀 SA560 調査区中央部において、東西塀 SA600 の南約 1.3m の位置で検出した東西掘立柱塀。第 1・3・10 次調査でも検出している¹⁰⁾。今回の調査では 3 基の柱穴を新たに検出し、第 1 次調査区を横断することがあきらかとなり、さらに東へつづくと思われる。造営方位はほぼ正方位にのるものの、SA600 よりも東でやや南に振れる。第 3 次調査で基壇を有することが判明しているが、今回の調査では未検出である。

柱間寸法は約 2.5m である。柱掘方は一辺 0.8~1.2m の隅丸方形を呈し、直径 30cm 前後の柱痕跡を残す (図 55・56 参照)。柱掘方の埋土は暗褐色もしくは灰褐色の砂質土で、一部に礫が混じる。柱痕跡の埋土は暗褐色粘質土で、一部で黄色粘土ブロックが混じる。

第 3 次調査では、SA560 の柱穴は SA600 の基壇を掘り込んでいたことが確認されている。これまでの検出総長は約 128m におよび、SA600 を建て替えた、7 世紀中

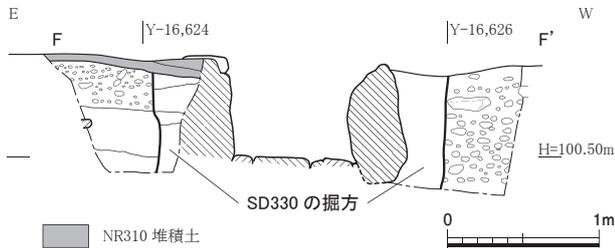


図57 南北溝 SD330 断面図 1:50

葉から後半までの南限区画施設と考えられる。

東西柱列 SA4646 調査区中央部で再検出した東西掘立柱列。第1次調査では桁行5間、梁行1間の掘立柱建物 SB325 として検出した。今回の調査成果から再検討した結果、SB325の北側柱を東西柱列 SA4646、南側柱を SA560 とし、それぞれ独立した遺構と解釈を改めた。

流路 NR310 によって削平されるものの、調査区内では5基の柱穴を再検出した。SA4646の造営方位は正方位にのり、SA560とは約3.9mを隔てている。柱間寸法は約2.5mである。柱掘方は明瞭ではなく、掘方よりも大きく抜取穴を掘り、柱を抜き取ったものと考えられる。抜取穴は一辺0.8~1.4mの隅丸方形をなし、埋土は橙色粘土ブロックを多量に含む礫混じり粘質土である。深さは検出面から0.9mである(図56)。

西端の柱穴は石組溝 SD335の西側石を壊しており、これよりも新しい(図53参照)。東西堀 SA560とは距離を隔てているものの、柱筋がおおよそ揃うため、同時期に機能したものと考えられる。石敷 SX327のすぐ南に位置しており、北に位置する掘立柱建物 SB400の目隠堀と推定しておく。

C. 7世紀後半から末までの遺構

東西堀 SA311 調査区北部を横断する東西堀。第1次調査区東端でも一部を検出し、東の第209次調査区、西の第3次調査区でも一連の堀を検出している¹¹⁾。調査区内の石組溝 SD335より東では、先述のとおり、平安時代の遺物包含層や後述の流路 NR310に覆われている。そのため断割調査をおこない、これら後世の堆積土の下で柱穴1基を確認した(図58、PL.30-4)。SD335より西では、新たに柱穴5基を検出した。造営方位は方眼北に対して東で北に約1°振れる。

柱間寸法は約2.1mである。柱掘方は一辺0.7~1.0m

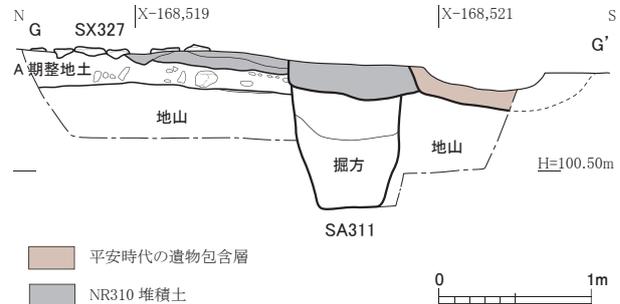


図58 東西堀 SA311 柱穴および流路 NR310 断面図 1:50

の隅丸方形で、A期整地土を切り込み、一部の柱穴では径20cmほどの柱痕跡を確認した。柱掘方の埋土は黄色粘土ブロックまたは橙色粘土ブロックを含む黄褐色粘質土で、柱痕跡の埋土は黄褐色粘質土である。

SA311は石組溝 SD335の西側石を壊す(図53)。SA311は既往の調査成果と同じく、7世紀末の遺構とみられる。第3次調査区から第209次調査区まで、検出総長は約85m以上であり、7世紀後半から末までの石神遺跡の大規模な南限区画施設である。

東西溝 SD347 東西堀 SA311の南を併走する東西素掘溝。第1次調査では調査区西端で検出し、溝は完掘された。今回の調査でも、東西堀 SA311に併走する形で調査区内を横断すると推定されたが、調査区内の大部分で流路 NR310によって削平されていることが判明した。

D. 奈良時代以降の遺構

流路 NR310 調査区の大部分で再検出した流路。第1・3次調査でも検出している。幅約3.0~6.0m、深さ約0.7~1.5mの河道で、調査区を北東から南西へ流下する。特に、調査区南半には NR310が運搬した砂礫層が厚く堆積し、今回の調査ではこの堆積土を除去して7世紀代の各遺構を検出している(図59)。

堆積土は、拳大から人頭大の礫を多量に含む砂礫土で、水が常時流れていた形跡は認められない(図56参照、PL.30-1)。巨礫を多量に含むことから、自然河川ではなく、土石流や鉄砲水といった出水時のみ土砂が堆積する涸れ川に類似する遺構と考えられる。

NR310は7世紀代の遺構が廃絶した後に、遺跡東方からの土砂が流下することで形成されたものであろう。これまで述べたように、NR310の経路上では多くの遺構や整地土がその浸食で壊されている。この流路を埋めた砂礫層からは、奈良時代中頃の土器や平安時代の

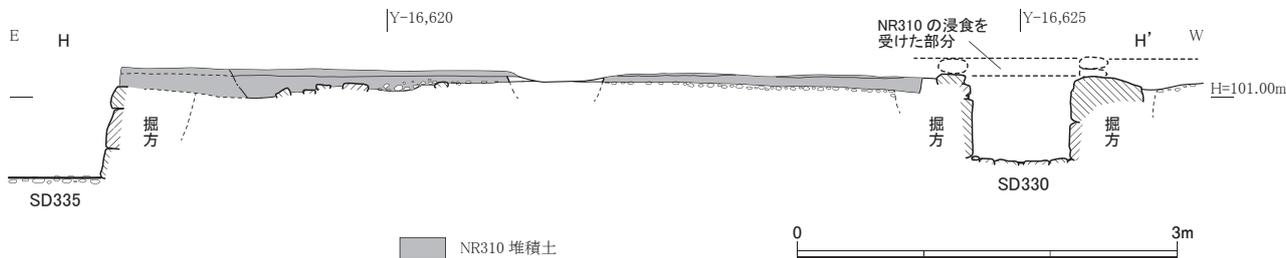


図 59 調査区南半に堆積する NR310 由来の砂礫層と石組溝の断面図 1 : 60

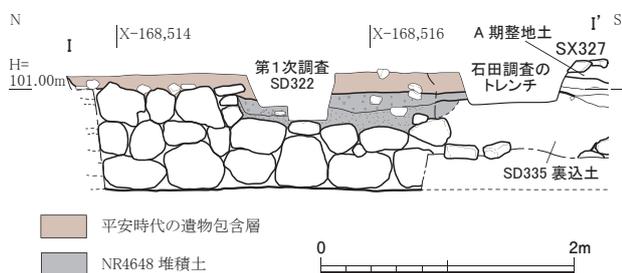


図 60 流路 NR4648 断面図 (SD335 東壁) 1 : 60

黒色土器、7世紀代の瓦、凝灰岩切石が出土しており、NR310 は奈良時代以降の遺構と考えられる。

流路 NR4648 調査区北端で新たに検出した東西流路。第1次調査で検出した平安時代の素掘溝 SD322 の下位に位置する。調査区内の石組溝 SD335 北端部分で、溝側石を大きく壊している (図 60)。今回の調査区外ではあるが、石敷 SX327 の敷石が南北幅 2.2~2.6m、東西約 11m の範囲で乱れる部分が NR4648 の河道と推定される。溝の深さは 10~30cm である。石組溝 SD335 以西では、石造物の引き上げにともなう攪乱により判然としないが、流路 NR310 と同じく、北東から南西方向に流下していたと考えられる。(福嶋啓人)

(4) 出土遺物

瓦類・石製品 型式不明の軒丸瓦 1 点、丸瓦 60 点 (3.99kg)、平瓦 446 点 (17.53kg) が出土した。埋戻土を除けば、流路 NR310 からの出土が最多で、0.53kg である。軒丸瓦は NR310 出土。丸瓦・平瓦は小片に限られるが、玉縁部が残存する丸瓦は、模骨が筒部までの A 手法によるものであった。平瓦は、側面を調整しない a 手法、分割後の破面凸部を削る b 手法、側面全体を調整する c 手法のものが出土した。なお、遺構の時期を比定できる資料はない。

また石製品として、榛原石製の板石が 5 点出土した。うち 2 点が NR310 からの出土である。(岩永 玲)

土器 今回の調査では、整理箱で 4 箱の土器が出土した。再発掘調査であるため、大部分は第1次調査時の埋戻土か、近代以降の攪乱層 (石田調査の埋戻土等を含む) から出土した (図 61)。

1 は土師器杯 G の小片。復元口径はやや不正確であるが、概ね半球形を呈する。底部外面にはユビオサエの凹凸を残す。本例は今回の調査区北壁付近において、石組溝 SD335 の埋土断面を再精査している最中に、砂・シルト互層 (機能時堆積層) から出土した。SD335 の大部分は、石田調査で既掘のため、第1・2次調査時の出土土器は多くないが、埋土上部から土師器杯 C・杯 G・杯 H・高杯 C・把手付椀、須恵器杯 H・杯 G など、飛鳥 I の中でも新しい段階の土器が出土している。わずか 1 点ではあるが、今回の調査で SD335 の砂・シルト互層から出土した土師器杯 G は、この点で貴重である。

2 は土師器皿 B。復元口径約 32cm で、内面には一段放射暗文と螺旋暗文を施す。このうち、螺旋暗文はやや特殊で、施文範囲は広い底部内面の大部分を占める。底部中央を欠くものの、あきらかに出尻底である。類例は少ないが、ほぼ同じ大きさで出尻となる土師器皿 B は平城京左京三条二坊 SD4750 でも出土していることから、奈良時代前半に降ると考えられる。流路 NR310 の灰色砂礫層から出土したものである。この砂礫層からは、他にも土器が出土しているものの、大部分は小片である。第1次調査時には土師器杯 A (平城宮土器Ⅲ)、須恵器杯 A・杯 B、椀 B、壺 K が出土しており、奈良時代の土器を含んでいる。流路 NR310 の灰色砂礫層からは黒色土器の小片も出土しており、この流路が奈良時代から平安時代にかけてのものであることを示している。

このほか、SA600 柱穴埋土から出土した土器もあるが、弥生時代や古墳時代の土器片が多く、図化できるものはない。



図 61 第 214 次調査出土土器 1 : 4

これらの土器は、石神第 1・2 次調査で出土した土器群とともに、2025 年 3 月刊行予定の『石神遺跡発掘調査報告 I』に再掲する予定である。(森川 実)

その他 流路 NR310 の暗褐色混礫土から椀形鉄滓 1 点、灰色砂から馬歯片が出土した。このほか、流路 NR310 から少量の木炭片、排土中からサヌカイト剥片 3 点が出土している。(谷澤亜里)

(5) 地質学的調査

試料と方法 調査区北端で確認した石組溝 SD335 の未攪乱の溝埋土から、整地土ならびに溝上層の埋立土(図 52 の 2・3 層)と、それより下位層の流水堆積を構成するシルト・砂層、および溝底部下の基盤層にかけて、堆積構造解析のための地質切取試料 5 点を採取した。試料の切り取りに際しては、スチロール製の角型ケース(221 × 141 × 37mm)を用い、切り出す対象の壁面を浮き出させるように周辺を掘削して切り取った。土層断面と採取位置は図 52 のとおりである。

堆積構造解析 試料は研究所に持ち帰った後で整形し、層相写真撮影、層相観察、低出力 X 線による撮像解析、高出力 X 線 CT による断層画像撮像およびその画像を用いた 3 次元構造解析をおこなった。なお、現在も解析途中であり、2025 年 3 月刊行予定の『石神遺跡発掘調査報告 I』にて、解析結果を報告する予定である。

4 成果と課題

(1) 7 世紀前半の区画塀と石組溝との関係

今回の調査で、南限区画施設である東西塀 SA600 が北へ折れて、南北塀 SA4650 となることがあきらかとなり、7 世紀前半の石神遺跡の区画東南隅が確定した。このことは、石神遺跡全体の規模や変遷を知る上で貴重な成果である。くわえて、第 1990-1 次調査で検出した東西塀 SA1460 が SA4650 に接続すると仮定すると、クランクする石組溝 SD334・335・435 とこれら区画塀が併存し、一体的に機能した可能性のあることが指摘できる(図 62・63)。つまり、石組溝 SD334・335・435 は区

画施設のすぐ外を併走する基幹水路の役割があろう。石神第 13・14 次調査(飛鳥藤原第 110・116 次、『紀要 2001』・『同 2002』)で、7 世紀前半の石神遺跡北限を示す東西塀 SA3893 と、そのすぐ北に位置する東西石組溝 SD3896 を検出しており(図 62)、区画塀と石組溝が併走する関係は同様である。SD3896 の溝幅は 2.1m、深さは 0.6m で、SD335 よりも規模は大きいものの、底石をもたない点や側石の構築方法は類似する。

今回の調査や北限区画施設の状況から、7 世紀前半の石神遺跡の外周部分では、区画施設とその外側に底石をもたない石組溝を配置していた可能性は十分に考えられよう¹²⁾。いっぽうで、第 21 次調査で検出した従来の東限施設とみなしてきた SB4341 や SA4327(図 62)の東では、石組溝は未検出であった。つまり、これらは区画の東限施設ではなく、区画内の塀や建物のひとつである可能性が高いといえよう。石組溝 SD435 がさらに東へ延びることを踏まえると、石神遺跡の本来の東限施設は、第 21 次調査で検出した遺構よりも、さらに東方に存在すると推定される。

(2) 遺構変遷と遺跡の規模

7 世紀前半の区画東南隅があきらかとなったものの、7 世紀前半のうちに区画外側の石組溝 SD335 を埋めて、東西塀 SA600 のさらに東に、東西塀 SA4645 を付け足したことが判明した。すなわち、7 世紀前半のうちに区画が東へ拡張したことがあきらかとなったのである(図 63)。7 世紀前半以降の石神遺跡南限の区画塀(東西塀 SA560 や東西塀 SA311)は、第 1 次調査区よりもさらに東へ延びており、これまでの調査でも東限を示す明確な遺構は検出されていない。

近年の飛鳥藤原第 209・212 次調査(『紀要 2022』、『発掘報告 2023』)でも東限を示す南北塀を検出しておらず、両者の間に位置する未調査区や第 212 次よりもさらに東に存在する可能性がある。7 世紀代の石神遺跡東限をあきらかにするためにも、石神遺跡東方区域の調査は重要である。

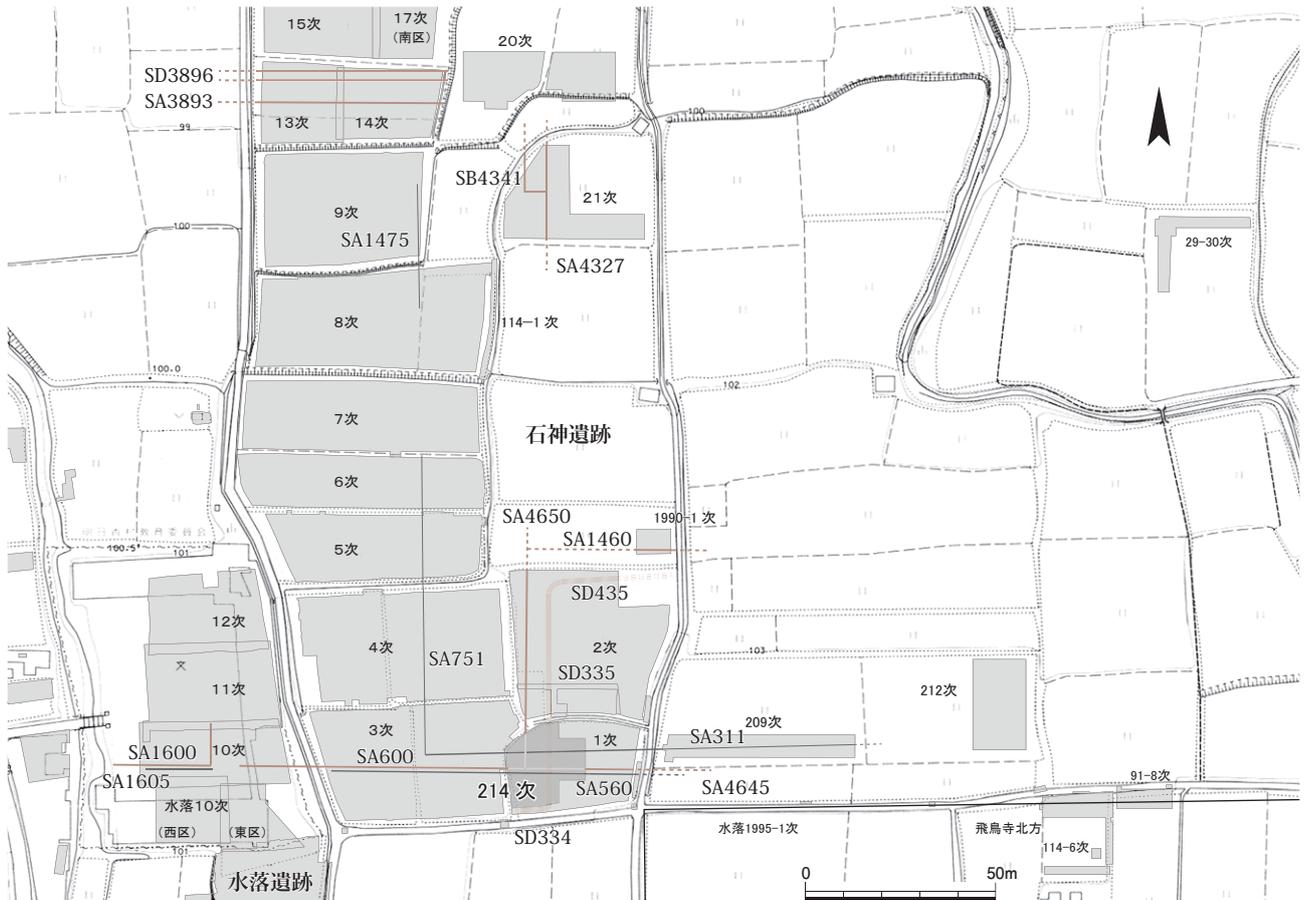


図 62 7世紀代各時期の区画塀位置図 1 : 2000

(3) 奈良時代以降の石神遺跡の様相

これまでの石神遺跡の調査では、7世紀の遺構や平安時代以降の遺構は検出されていたものの、奈良時代の遺構は流路 NR310 を除いて未検出であり、平城遷都後の当地の様相は不明であった。その解明の糸口になる遺構が NR310 であろう。NR310 は自然河川のような常時流水がある流路ではなく、出水時のみ土砂が堆積する涸れ川に類似するような遺構と考えられ、一種の自然災害であった可能性もある。

当該地域は飛鳥川の河岸段丘上に位置し、東の山手から西の飛鳥川へ緩やかに傾斜する扇状地にあたり、東から土砂が流れ込む状況は、自然地形や砂礫層の基盤層が示すようにごく自然の事象であろう。こういった自然地形や自然現象が起り得るなかで、大規模な整地や建物・塀の建設、水路網の構築といった土木建築事業によって石神遺跡の施設が造営されたのである。NR310 は、平城遷都後から平安時代までの石神遺跡の履歴の空白部分を埋める遺構であるとともに、当該地域の土地利用の変遷や石神遺跡周辺の地形の変化を考えるうえでも数少ない貴重な遺構といえる。

5 おわりに

今回の再調査で、7世紀前半の南限区画塀 SA600 や東限区画塀 SA4650 を検出し、7世紀前半の区画東南隅が確定するとともに、さらに7世紀前半のうちに遺跡の区画が東へ広がること、7世紀中葉以降の区画南限施設も石神遺跡の東方につづくことが判明した。

いっぽうで、第2次調査区以北は未調査地が多く、SA4650 の行方も推論の域を出ない。区画塀に併走する石組溝の行方も未だ不明であり、東限区画施設も第2次調査区のさらに東方に存在している可能性が高い。今後も土地所有者や地域住民のご理解を得たうえで、石神遺跡周辺の未調査地の継続的な調査を積み重ねることで、石神遺跡の区画および変遷だけでなく、遺跡全体の性格をあきらかにすることができると考える。なお、本報告を含む石神遺跡第1~4次の発掘調査成果については、2025年3月刊行予定の『石神遺跡発掘調査報告Ⅰ』にて公表する予定である。

(福岡)

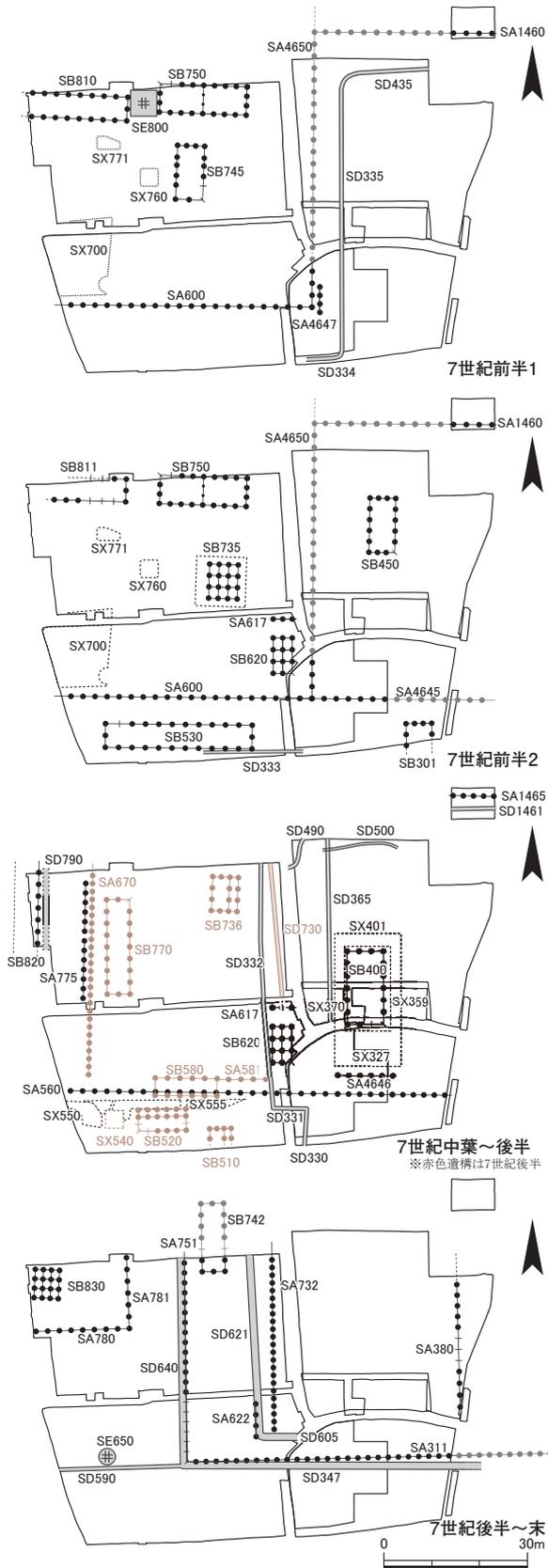


図 63 石神遺跡第 1～4 次調査区の遺構変遷図 1 : 1500

註

- 1) 石田茂作「飛鳥の須弥山遺跡」『飛鳥随想』学生社、1972。
- 2) 森川 実・大澤正吾「石神遺跡 B 期整地土・SD640 出土の土器群 - 石神遺跡第 3～5 次・第 10～12 次」『紀要 2018』。土橋明梨沙「石神遺跡出土の東北系黒色土器 - 石神遺跡第 3～8・11 次」『紀要 2020』。山藤正敏「石神遺跡 SD1347・1476 出土の土器群 - 石神遺跡第 8・9 次」『紀要 2021』など。
- 3) 相原嘉之「飛鳥古京の攻防」『琵琶湖と地域文化 - 林博通先生退任記念論集』サンライズ出版、2011。相原嘉之「飛鳥浄御原宮の宮城」『古代飛鳥の都市構造』吉川弘文館、2017 など。
- 4) 和田 萃「飛鳥川の堰 - 弥勒石と道場法師」『日本史研究』第 130 号、1973。
- 5) 第 1 次調査区南に東西方向に通る道路（村道飛鳥 6 号線）は 2002 年に拡幅がなされたため、第 1 次調査区南辺の約 1.5m 幅は、現在、道路下に位置する。『明日香村遺跡調査概報 - 平成 13 年度 -』明日香村教育委員会文化財課、2003。
- 6) これまで自然流路 SD310 として報告してきたが、溝ではないため遺構記号を NR に改めた。また常時流水をとまうような自然河川ではなく、涸れ川に類似する遺構と認識を改め、「自然流路」ではなく「流路」とした。
- 7) 第 3 次調査区で検出した基壇は南北幅約 3.0m、高さ約 15 cm で、柱を据えた後に厚さ約 5cm の版築によって造られる。基壇土は黄褐色もしくは暗褐色粘質土で、基壇縁には化粧石を並べていたとみられる（『藤原概報 14』）。
- 8) 第 1 次調査でもこの認識を踏襲しており、井戸 SE340 として検出している。
- 9) 藤原宮第 24 次調査で検出した藤原宮の東面大垣は柱間寸法約 2.7m の掘立柱塀である。柱掘方は一辺約 1.8m の隅丸方形で、柱掘方よりも長い楕円形の柱抜取穴をもち、推定される柱の直径は約 45cm である（『藤原概報 9』）。藤原宮の大垣に使用された柱は、その後、平城宮第一次大極殿院の東面築地回廊を横断する木樋暗渠に転用された（『平城報告 X I』）。なお、古代の宮城や寺院の外周施設を比較検討した研究として、黒崎 直「掘立柱塀と築地塀 - 藤原宮と平城宮の外周施設をめぐって -」（『立命館大学考古学論集 I』立命館大学考古学論集刊行会、1997）が詳しい。
- 10) 第 1 次調査では SA305 という遺構番号を付していたが、今回の調査で柱穴を検出したことにより、一連の遺構であることがあきらかとなったため、SA560 に統一した。
- 11) 第 3 次調査では、SA610 として一連の遺構と考えていなかったが、今回の調査で SA311 と一連の塀であることが判明し、SA311 に統一して記述した。
- 12) 第 1 次調査区西南隅にある東西石組溝 SD334 は南限区画施設 SA600 と一体的に機能したが、西の第 3 次調査区では未検出である。第 3 次調査区南辺は流路 NR310 の本流が大部分を占め、この流路によって壊されている可能性もあろう。しかしながら、飛鳥川に向かって西へ傾斜する地形を考えると、水源は石神遺跡南方に存在したことは確実である。さらに、SD334・335・435 が石神遺跡東方へ水を通すための基幹水路と仮定すると、SA600 の南面にこれら基幹水路と同規模の石組溝は不要とも考えられる。

川原寺下層 SD640・SK641 出土土器

—第 119-5 次

1 はじめに

川原寺下層の南北溝 SD640 および土坑 SK641 は、2003 年におこなわれた川原寺寺域北限の調査（飛鳥藤原第 119-5 次）で検出された遺構で、古墳時代中期の土器が多数出土した。当該調査については、2004 年に報告書¹⁾（以下『報告』）を刊行したものの、内容は注目を集めた古代の遺構や遺物の記述を中心とし、SD640・SK641 出土土器の記述は概要にとどまっていた。

SD640・SK641 出土土器は、古墳時代中期のまとまった資料であり、飛鳥地域における古墳時代中期の土器様相を把握するうえで重要な資料である。そこで本報告では、SD640・SK641 出土土器について詳細な調査をおこなった成果を報告するとともに、その年代的位置づけを整理し、飛鳥地域における古墳時代中期の基礎資料として提示したい。
（樋口典昭／群馬県地域創生部）

2 遺構の概要

川原寺跡は、奈良県高市郡明日香村川原に所在する古代の寺院跡である。持統朝の四大寺刹の一つとして、1921 年に史跡指定された後、1957～59 年の奈文研による発掘調査によって主要堂塔の規模や構造、伽藍配置があきらかとなった。史跡指定地の北方でおこなった飛鳥藤原第 119-5 次調査では、寺域北限を区切る北面大垣 SA600 にくわえ、その内部に川原寺造営時の鉄釜铸造土坑 SX599 や瓦窯 SY595、多数の炉跡、造営後の掘立柱建物群が確認されたことで、川原寺の寺域北限における空間利用の実態があきらかとなった。

SD640 および SK641 は、調査区南端で一部を検出した古墳時代中期の遺構である（図 64）。南北溝 SD640 は西にある丘陵裾に沿って延びる素掘溝で、南北 2.5 m の範囲で確認した。幅 1.8m、深さ 0.6～0.9m である。その一部を掘り下げたところ、灰黄色土から古墳時代の土器が多量に出土した²⁾。

調査区南壁の土層図（図 65）によれば、SD640 の埋土は、上位から順に①黄褐色粘質土（SD640 を覆う工房以前の整地層）、②灰黄褐色土、③暗褐色土、④黄色ブロック混灰色

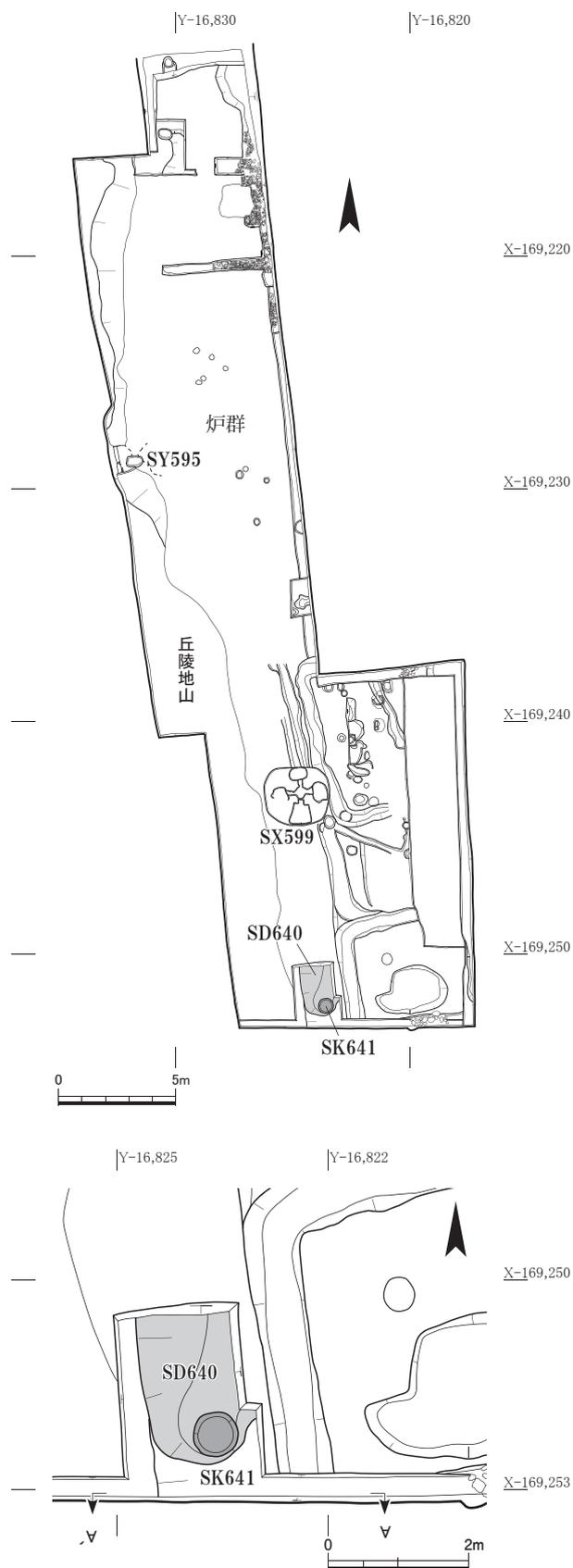


図 64 下層遺構図 1 : 300 (上図)・1 : 100 (下図)

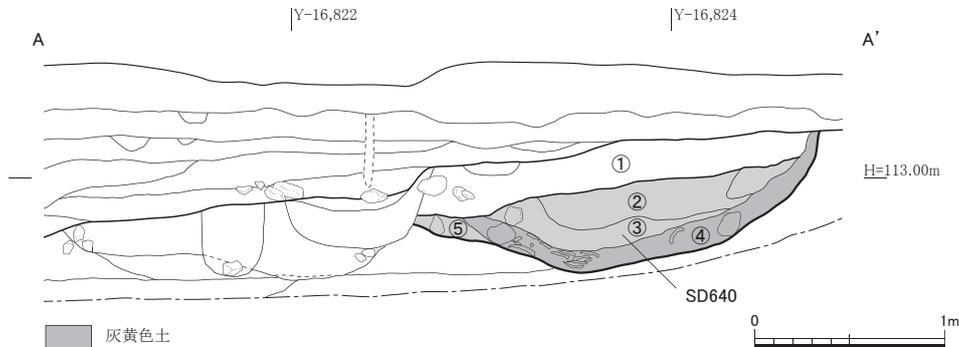


図 65 南北溝 SD640 断面図 1:40

粘土、⑤褐色土で、①～③・⑤は灰色粘土ブロックを含む。このうち、古墳時代の土器群が多量に出土した「灰黄色土」は④の土層で、この溝の埋土最下層に当たる。地山は明黄灰色粘土で、おそらく風化した岩盤層であろう。この土層図によるかぎり、流水によって砂礫層が堆積した形跡はない。

SK641はSD640の底面で検出した土坑で、平面形は円形。径0.6m、深さ0.7m。古墳時代の土器が多量に出土しているほか、滑石製模造品や白玉が出土している。

これらの遺構は古墳時代の整地土が遺存する調査区西南部にあり、上層遺構である古代の遺構面の保護のため、検出は一部にとどめている。このほかに、古墳時代の遺構としては調査区中央部で竪穴建物SB642を検出している。

(松永悦枝/文化庁)

3 SD640 出土土器

(1) 土師器

杯1点、鉢1点、高杯13点、壺3点、甕22点、鍋1点が出土している。高杯と甕の出土が目立つ(図66～68)。

杯 1は杯。丸みを帯びる底部から緩やかに彎曲して立ち上がり、口縁部で内傾する。端部は丸く収める。内外面とも調整は不明瞭であるが、口縁部外面は横ナデ、体部外面を斜め方向のハケ目で調整する。内面底部には板ナデとみられる工具痕が残る。口径13.5cm、器高5.8cm。

鉢 2は鉢。口縁部はやや内彎し立ち上がり、端部内面に段をもつ。口縁部と体部の境に突出した稜をもち、受部状をなす。内外面ともにナデ調整で、下半部から底部にかけては、ヘラケズリが施される。『報告』ではロクロ土師器と報告したもの。口径9.8cm、器高7.6cm。

高杯 3～15は高杯。杯部は椀形のものや、口縁部が直線的に開くもの、外反するものがある³⁾。脚部接合部の外面は基本的にユビオサエで調整し、脚柱部はヘラケズリで仕上げている。

3～5・11・12は無稜外反高杯。杯部と脚部の接合部には、棒状工具による刺突痕をもつ5・12や、刺突痕をもたない3がある。このほかに、接合部に円錐形の粘土を充填する4がある。

3は口縁部が緩やかに開き、端部は外反し、内面に面をもつ。杯部外面から接合部にかけてハケ目調整する。杯部内面はハケ目調整後、ナデを施す。脚部裾部外面はナデ、内面はユビオサエとハケ目調整する。口径15.8cm、器高12.0cm。4は3と同様に口縁部が緩やかに開き、端部は外方へ折れる。杯部内外面はハケ目調整の後、ナデにより仕上げている。脚部接合部にはハケ目調整後、ユビオサエを施す。裾部外面はナデ調整し、内面はハケ目およびユビオサエを施す。口径16.2cm、器高11.8cm。5の杯部は椀形を呈し、口縁端部を強く外方へ屈曲させている。杯部外面下半部から脚部接合部にかけてはユビオサエにより整える。杯部内面は放射状に暗文を施し、その間隔は広い。口径は13.9cm、残存高10.6cm。11・12は杯部片。11は5と同様に杯部が椀形を呈し、口縁端部を外方に屈曲させる。杯部器面は風化が目立ち、内外面の調整は不明瞭。復元口径15.2cm、残存高4.6cm。12の口縁部は直線的に開き、端部は緩やかに外傾する。杯部外面は全体の風化が著しく、調整は不明。内面はハケ目および板ナデにより調整する。黒斑が口縁部に付着する。復元口径16.0cm、残存高6.2cm。

6～10・13は椀形高杯。杯部と脚部の接合部には、棒状工具による刺突痕がみられる。杯部底部から脚部にか

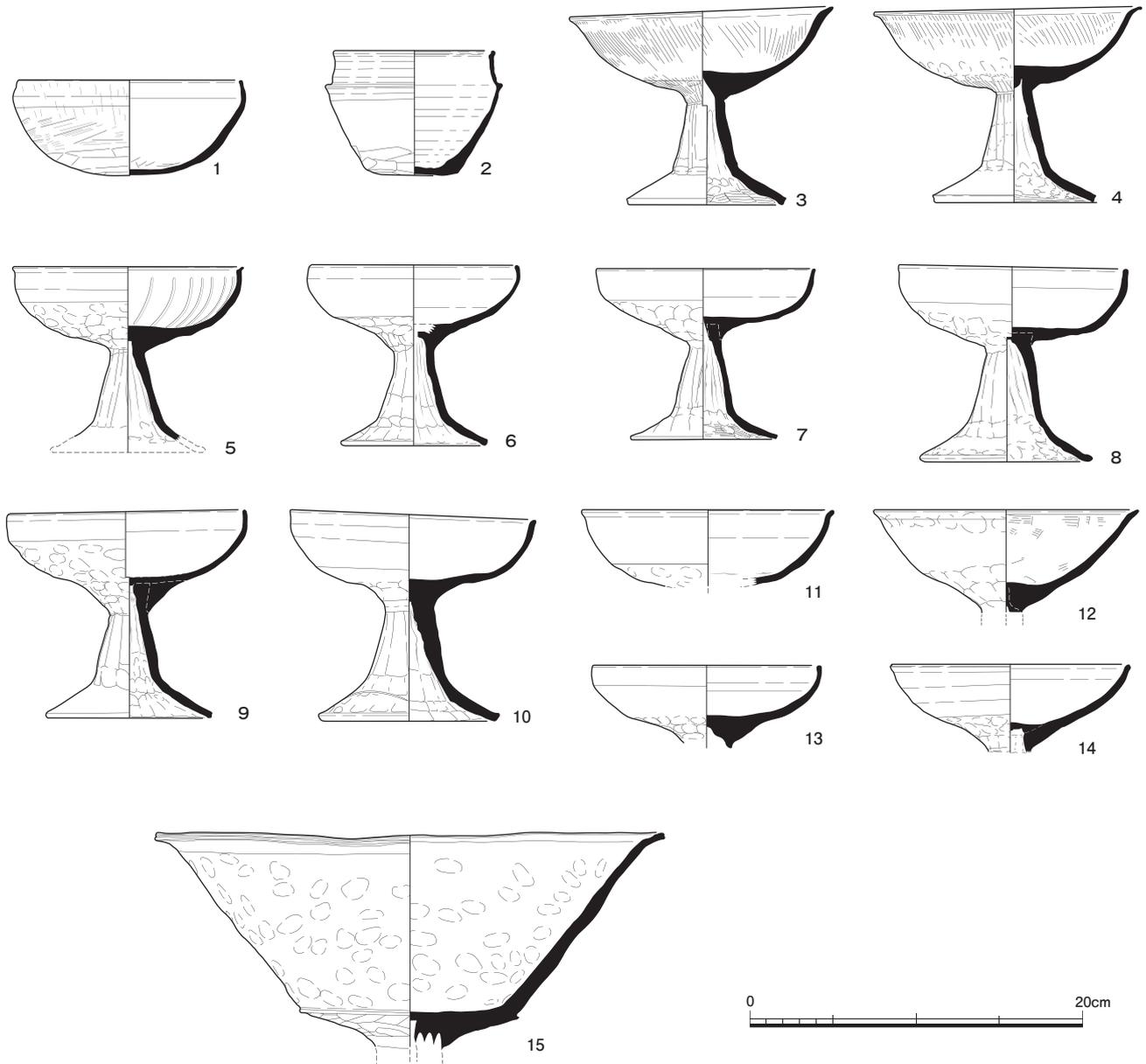


図 66 SD640 出土土師器 (1) 1 : 4

けて粘土を貼り付けて接合するものもある (9)。6 の口縁部は内彎し端部を丸く収め、杯部内外面を横ナデで調整する。脚部は裾部から端部にかけてユビオサエとナデで調整し、内面には絞り痕がみられる。復元口径 12.6 cm、器高 11.0cm。7 の口縁部は直線的に立ち上がり、端部を丸く収める。杯部内外面の調整は不明瞭で、杯部下半から脚部接合部にかけてはユビオサエにより整える。脚裾部外面はユビオサエののちナデ調整し、内面は横方向のハケ目を施す。口径 13.2cm、器高 10.3cm。8 の口縁

部は直線的に立ち上がり、端部を丸く収めている。杯部内外面の調整は不明瞭で、杯部下半から脚部接合部にかけてはユビオサエを施す。脚柱部の内面には絞り痕を残し、脚裾部内外面ともにユビオサエがみられる。口径 13.8cm、器高 11.8cm。9 の口縁部は緩やかに内彎して立ち上がり、端部を丸く収める。杯部外面は、口縁部を横ナデし、下半から脚部接合部にかけてはユビオサエを施す。杯部内面はナデ調整する。口径 14.4cm、器高 12.5cm。10 の口縁部は直線的に立ち上がり、端部に狭い面をも

つ。杯部内外面はナデで仕上げる。脚柱部から裾部屈曲部に横位の線刻がある。口径 14.8cm、器高 12.8cm。13 は杯部片で、脚部との接合部までが遺存する。口縁部は直立気味に立ち上がり、端部は丸く収める。杯部は内外面ともナデ調整し、外面下半から脚部接合部にかけてユビオサエを施す。口径 13.7cm、残存高 5.0cm。

14 は無稜直口高杯の杯部片。口縁部は緩やかに内彎しながら開き、端部を丸く収める。脚部接合後に杯部底面を閉塞したと思われる、杯部と脚部の接合部には棒状工具による刺突痕をもつ。接合部外面にはユビオサエが顕著で、杯部内外面はナデ調整する。口径 14.5cm、残存高 5.4cm。

15 は大型の高杯杯部片。口縁部は緩やかに外反し、端部には面をもち、鈍い凹線がめぐる。杯部は底部と口縁部との境に稜をもつ。杯部と脚部の接合部には、棒状工具による刺突痕をもつ。杯部内外面は、ナデおよびユビオサエで調整し、脚部接合部はユビオサエと板ナデを施す。口径は 30.6cm、残存高 13.2cm で、径高指数は 34.8 と大型化の傾向が読み取れる。

壺 16～18 は壺。底部が平底のものや直口壺がある。16 は平底の壺。口縁部は斜め上方へ直線的に開き、端部は丸く収める。口縁部内外面および胴部外面はヘラケズリを施し、胴部調整は板ナデ。底面には木葉痕が残る。胴部外面にススが、内面にはコゲが付着する。復元口径 10.8cm、器高 12.8cm。17 は口縁部が頸部から中位にかけて内彎しながら立ち上がり、再度端部にかけて外方へ開く。胴部外面は、斜め方向のハケ目、内面はユビオサエで調整する。胴部外面には黒斑が付着する。復元口径 11.6cm、器高 15.3cm。18 は直口壺の口縁部片。内外面は風化が顕著で、外面には横ナデ、内面には横方向のミガキがわずかに残る。口径は 14.8cm、残存高 6.3cm。

甕 19～40 は甕。法量から小・中・大型のものがあり、口縁部の形態も多様である。大型のものの中には、長胴のものもある。

19 は、なで肩の肩部から緩やかに口縁部へいたり、端部に向かって外方へ開く。胴部から口縁部まで縦方向のハケ目調整の後、口縁部はナデで調整する。肩部から胴部にかけての内面は、ユビオサエと板ナデで調整する。口縁部外面には黒斑が付着する。復元口径 12.8cm、残存高 8.5cm。

20・21 は小型甕。20 の口縁部はやや内彎して立ち上がり、端部には段をもつ。胴部外面は斜め方向のハケ目で調整し、内面はユビオサエが目立つ。口縁部・胴部外面にはススが付着する。復元口径 11.2cm、残存高 7.2cm。21 の口縁部は短く立ち上がり、端部は肥厚し面をもつ。胴部外面は器面の風化が目立つが、内面は肩部から胴部中位をナデ、下半部はユビオサエで調整する。復元口径 12.8cm、残存高 11.1cm。

22～34 は中型甕。22 の口縁部は直線的に開き、端部を丸く収めている。口縁部下半から頸部の外面は、横方向のハケ目で調整し、内面も同様に横方向のハケ目を施す。復元口径 14.8cm、残存高 4.8cm。23 の口縁部は直線的に開き、端部は内傾面をもつ。口縁部内外面は横方向のナデで調整している。肩部外面は横方向のハケ目、内面には板ナデが施される。復元口径 15.6cm、残存高 6.8cm。24 の口縁部は直線的に開き、端部が肥厚する。胴部外面はハケ目、内面はユビオサエおよび板ナデで調整している。胴部外面にススが、内面にコゲが付着する。復元口径 12.8cm、残存高 8.2cm。25 の口縁部は直線的に開き、端部には段をもつ。口縁部内外面は横ナデで仕上げている。肩部外面は風化により調整不明で、内面はユビオサエおよびナデ調整。復元口径 15.2cm、残存高 6.6cm。26 は口縁部が直線的に開き、端部は肥厚する。肩部内外面の調整は、器面が風化しているため不明。復元口径 14.4cm、残存高 8.9cm。27 の口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。胴部外面を板ナデで調整し、内面にはヘラケズリを施す。胴部外面にススが付着する。復元口径 14.4cm、残存高 11.0cm。28 の口縁部は直線的に開き、端部に段をもつ。胴部外面は風化が著しく調整は不明瞭だが、部分的にハケ目が残る。内面はユビオサエで調整する。胴部内面にはコゲが薄く付着する。復元口径 16.8cm、残存高 11.3cm。29 の口縁部は外反し、端部を丸く収める。胴部外面は多方向のハケ目、内面はヘラケズリ調整する。口径 16.5cm、残存高 17.8cm。30 の口縁部は緩やかに外反しながら開き、端部を丸く収める。頸部から胴部中位にかけては斜め方向のハケ目で調整し、胴部下半は不明瞭だが板ナデによる調整がみられる。内面は、ユビオサエおよび横方向のハケ目を施す。胴部外面と口縁部にススが、胴部内面にコゲが付着する。口径 13.8cm、残存高 12.9cm。31 は口縁端部を丸く収める。胴部外面は

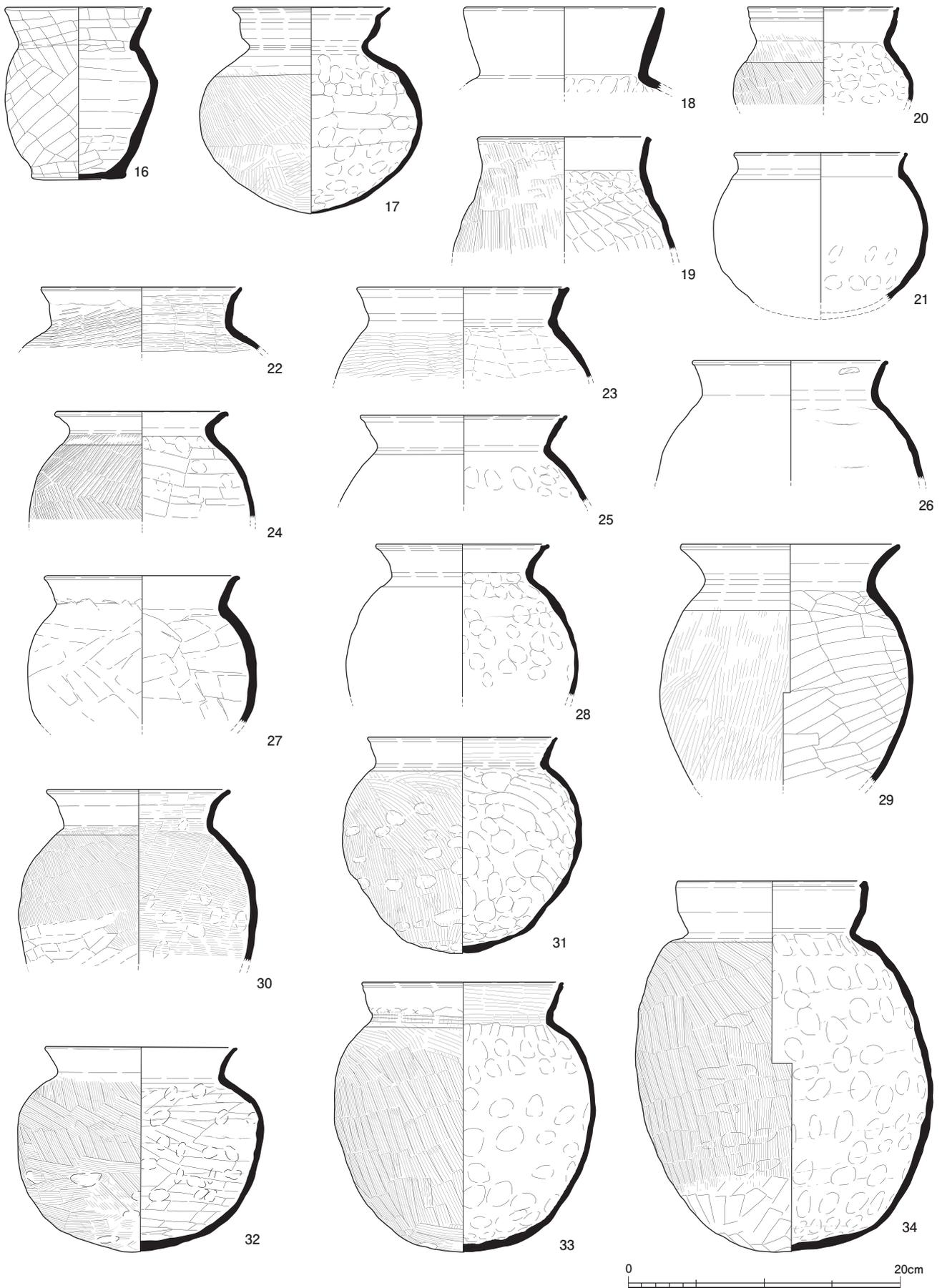


図67 SD640 出土土師器 (2) 1 : 4

斜め方向のハケ目、内面はユビオサエを施す。復元口径 14.0cm、器高 16.0cm。32 の口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。他に比して肩部が張る。胴部外面には多方向のハケ目とともに工具による押圧痕がみられ、内面はユビオサエおよび板ナデで調整する。口径 14.1cm、器高 15.2cm。33 の口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。胴部外面は、斜め方向および縦方向のハケ目、底面には横方向のハケ目を施す。内面は、口縁部には板ナデ、胴部にはユビオサエが残る。胴部外面中位にはススが付着し、胴部内面の下半から底部にかけてコゲと、炭化穀粒らしき物質が付着する。口径 14.8cm、器高 20.0cm。34 は長胴形甕。口縁部は中位で緩やかに屈曲し、「く」字形を呈する。端部は肥厚する。胴部外面は斜め方向および縦方向のハケ目、内面はユビオサエおよびナデで調整する。胴部外面に長楕円形の大きな黒斑がある。復元口径 13.4cm、器高 27.5cm。

35～40 は大型の甕。35 の口縁部は直線的に開き、端部に内傾する面をもつ。外面は風化のため調整不明。内面にはユビオサエおよび板ナデが施される。復元口径 18.4cm、残存高 7.45cm。36 の口縁部は直線的に外方へ開き、端部に面をもつ。口縁部外面には粘土紐接合痕が残る。外面は調整不明。内面はユビオサエおよびナデで調整する。口径 18.0cm、残存高 9.4cm。37 の口縁部は直線的に外方へ開き、端部には面をもつ。肩部は縦方向のハケ目で調整し、内面は横方向のハケ目とナデ、ユビオサエを施す。復元口径 19.2cm、残存高 8.5cm。38 は口縁部が直線的に開き、端部は肥厚し、内面は窪む。胴部外面は多方向のハケ目で調整し、内面には粘土紐接合痕が残る。外面の口縁部から胴部にかけて黒斑とともにススが付着する。復元口径 18.8cm、残存高 23.1cm。39 は長胴形甕。口縁部は直線的に外方へ開き、端部を丸く収める。胴部外面は縦方向のハケ目、内面はナデで調整する。胴部外面には黒斑が付着し、ススで薄く覆われている。また、内面下半部にはコゲが付着する。口径 17.6cm、器高 30.2cm。40 の口縁部は中位で緩やかに屈曲し、端部は丸く収める。胴部は長胴形を呈する。胴部外面は器面風化のため調整は不明で、内面はユビオサエおよび板ナデで調整する。外面の胴部下半には黒斑がある。口径 16.5cm、器高 32.7cm。

鍋 41 は鍋。口縁部は内彎し、端部は面をもつ。胴部

には、把手が剥離した痕跡が認められる。口縁部外面に粘土紐接合痕が残る。胴部は横および斜め方向のハケ目が施され、内面はやや不明瞭だがユビオサエおよびナデによる調整がみられる。胴部外面にはススが付着する。注口部の大部分が欠損するが、片口の鍋とみられる。復元口径 26.8cm、残存高 13.0cm。

SD640 出土土師器の特徴 これら SD640 出土土師器には、椀形高杯に器高が 10cm 前後のもの (6・7) と 12cm 前後のもの (8～10) があり、さらに径高指数が 34.8 と大型化の傾向がみられる高杯が含まれる (15)。また、丸底で口縁部が緩やかに内彎する杯 (1) も含まれることから、やや幅はあるが TK73～208 型式期に収まると考えられる。出土土師器の多数を占める甕も、内外面調整や胴部形態から同様の年代観に収まると考えられる。一方、外反高杯には小型で杯部が椀形を呈するもの (5) がみられ、こうした資料には TK208～23・47 型式期の須恵器が共伴することが指摘されている⁴⁾。

また、甕は布留式甕の系譜をひく形態が少数みられるものの、大多数はその派生形で、頸部が「く」字に屈曲し、口縁部は外反、内面調整にナデを施すものである。他にも、長胴形甕 (34・39・40) が含まれている点も特筆される。いずれも外面調整はハケ目、内面はユビオサエ、あるいは板ナデによる調整である。34 や 40 の内湾する口縁部形態は、土師器甕の折衷型ともみられ、形態・調整の点で土師器化する。

(樋口)

(2) 須恵器

杯蓋 4 点、杯身 8 点、高杯 2 点、高杯蓋 1 点、把手付椀 2 点、臚 2 点、器台脚部片 1 点、甕 2 点が出土した (図 69)。

杯蓋 42～44 は杯蓋。42 は天井部下位から口縁部にかけての小片。平坦な天井部に、天井部と口縁部との境界は突出して鈍い稜をなす。口縁部はわずかに外方へ開き、端部は面をもつ。形態的特徴とともに、全体的に器壁が厚く、外面の回転ヘラケズリの範囲などから TK216 型式期まで遡及する可能性がある。43・44 はやや丸みを帯びる天井部に、口縁部との境界は細く短く突出する。43 は口縁部が直立し、端部は外傾面をもつに対し、44 は緩やかに内彎しながら端部は面をもつ。ともに外面の回転ヘラケズリ調整は、天井部の 1/2 を超える広い範囲で施す。44 は、外面は青灰色であるが、内面は淡黄橙色を呈

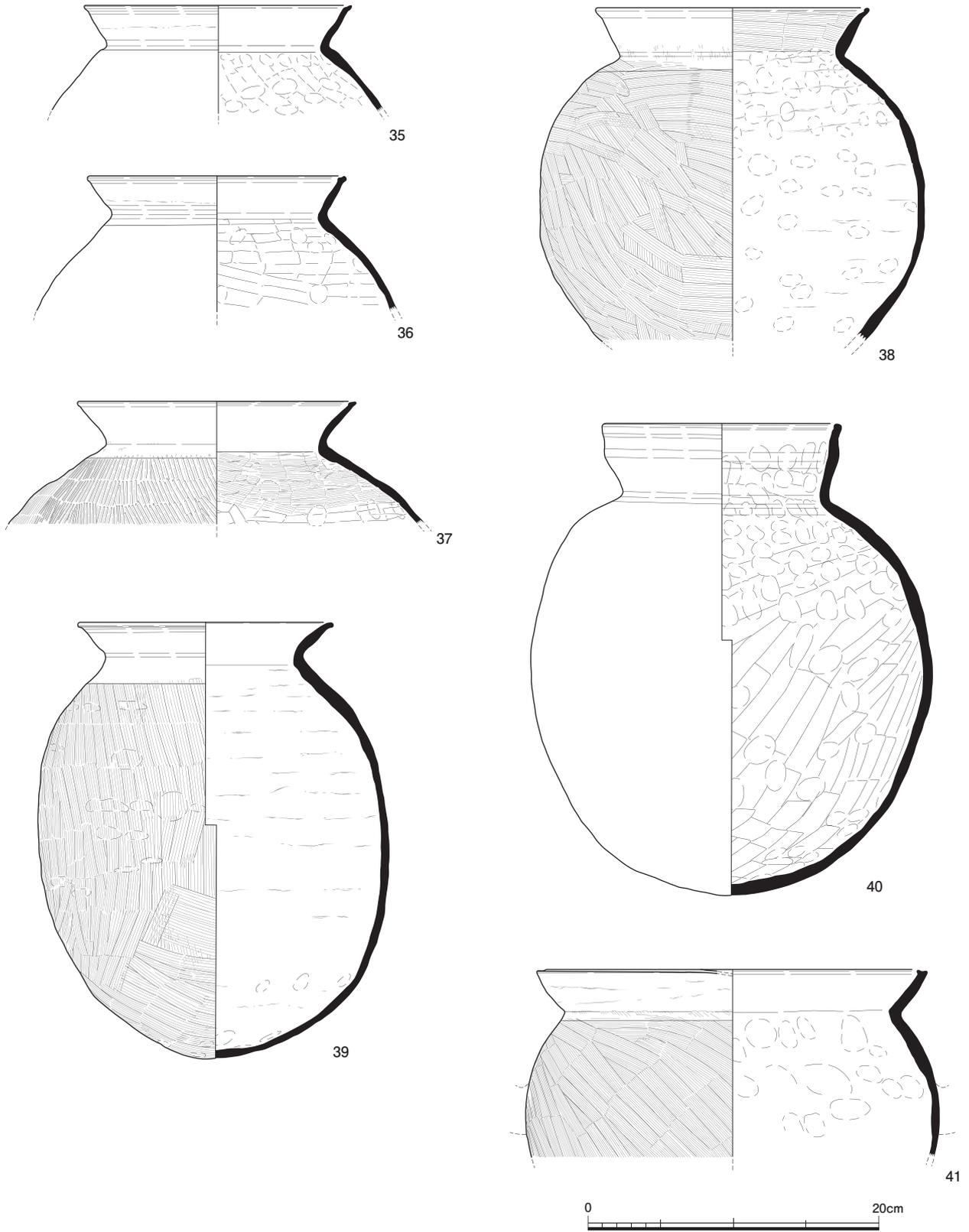


図 68 SD640 出土土師器 (3) 1 : 4

する。口径 13.4~13.5cm、器高 4.4~4.5cm。

杯身 45~52 は杯身。45 はたちあがりやや内彎し、端部は丸みを帯びる。受部は水平にのびるも短く、丸みを帯びる。外面の回転ヘラケズリは、体部の 1/2 の範囲で施し、全体に扁平である。復元口径 12.3cm、器高 5.2cm。46・47 は丸みを帯びる底部に、たちあがり内彎しながら上方へのび、端部は面をもつ。受部は斜め上方へのび、先端はシャープ。外面の回転ヘラケズリは体部の 1/2 の範囲に施す。口径 11.6~11.9cm、器高 4.7~5.5cm。47 の外面は青灰色であるが、たちあがり外面から内面全体は淡黄橙色を呈する。形態的特徴および分量から、44 の杯蓋と組み合うと考えられる。また、両者ともに外面は還元焰焼成の青灰色を呈するものの、44 の杯蓋は内面全体が、47 の杯身はたちあがり外面から内面全体にかけて淡黄橙色を呈すことから、蓋 (44) を身 (47) にかぶせて焼成した様子が観察される。

48~51 はたちあがり内傾するものや、緩やかに内彎しながら直立するものがあるが、底部はいずれも丸みを帯び、受部は短く斜め上方へのびる。口縁端部は丸く収める。外面の回転ヘラケズリは、体部の 1/2 前後の範囲に施す。口径 9.9~11.9cm、器高 4.7cm。52 はたちあがり内傾し、先端にわずかな面をもつ。受部は短く水平にのび、全体に扁平。外面には、底部から放射状に受部直下まで手持ちヘラケズリにより調整する。口径 10.3cm、器高 4.2cm。杯蓋・杯身ともに TK23・47 型式に比定される。

高杯 53 は高杯蓋。天井部にボタン状のつまみを付し、天井部と口縁部との境界は稜をもつ。口縁端部は内傾面をもち、先細る。器壁は全体的に薄い。外面の回転ヘラケズリ調整は天井部の 2/3 程と広い範囲に施す。口径 12.4cm、器高 5.1cm。54 は有蓋高杯。たちあがりはやや内傾する。受部はほぼ水平にのび、先端はシャープに仕上げる。口縁端部はなだらかな面をもつ。脚部は短く、「ハ」字状に大きく開き、円孔を穿つ。透孔は 3 方向にあくとみられ、円孔は 2 カ所が遺存する。円孔直下には断面形が鈍い三角形の突帯をめぐらす。外面の杯部下位には脚部接合時の縦ナデがある。53 とセットとなるかは不明。口径 10.4cm、残存高 9.1cm。身が深く、シャープな受部や、脚部のプロポーシオンから TK208 型式期の特徴をみせる。

55 は高杯杯部片。杯部中位に低突帯と鈍い凹線により文様帯を区切り、1 条の波状文を施文する。文様帯部分に把手を付した痕跡が遺存する。両耳となるかは不明。脚部には長方形透孔を 3 方向に穿つ。杯部底部外面には複数条の沈線を施しており、脚部との接合強度を高めている。形態的特徴から無蓋高杯とみられる。

把手付椀 56・57 はいずれも平底の椀。片方に把手が付くが欠損し、痕跡のみが残る。外面胴部下位は底部調整による回転ヘラケズリ、あるいは手持ちによる横方向のヘラケズリを施す。体部中位に突帯や凹線により文様帯を区切り、波状文を 1 条施文する。口縁部が遺存する 56 は先端を丸く収める。56 の底部外面から体部下半にかけては、正置焼成に伴う火襷痕が観察される。56 は復元口径 7.6cm、器高は 5.0cm 前後に復元。57 は復元底径 6.5cm、残存高 3.9cm。

甕 58・59 は甕。58 は口縁端部が一部欠損するのみで遺存状況がよい。口縁部は斜め上方へ開き、段を作って再度斜め上方へのびる。頸部と口縁部の境界の稜はシャープに突出する。体部は肩が張り出し、最大径が胴部上位に位置するイチジク形を呈する。胴部最大径と頸部に波状文を 1 条ずつ施文し、胴部文様帯上に径 1.2cm の円孔を穿つ。外面の胴部下位から底部にかけては平行タタキ痕が残る。底部は尖底気味で、内面中央には底部成形時の押圧痕が明瞭に残る。口径 10.8cm、胴部最大径 15.7cm、器高 15.1cm。59 は、58 と同様に体部は大きく張り出すが、58 よりも扁球形で、底部は丸底。口縁部は肩部から大きく外方へひらく。胴部最大径の位置に鈍い凹線により文様帯を区切って 2 条の波状文を施文し、その間に径 1.3cm の円孔を穿つ。頸部にも 2 条の波状文を施文するが、上段の波状文は胴部に比して間隔が緩慢で不均等である。外面胴部下位には成形時の回転ヘラケズリ調整がみられ、底部内面には円盤接合痕や接合時の横方向のユビナデが残る。胴部最大径 17.7cm、残存高 15.5cm。いずれも TK23・47 型式期に位置付けられるが、58 がより古相の特徴をみせる。

器台 60 は波状文を 1 条施した小片。文様は、低突帯と凹線により区画した内側に施す。施文時のストロークは大きく、施文具の当り方は弱い。透孔などの痕跡は遺存範囲にないが、器形や文様から高杯形器台脚部片とみられる。

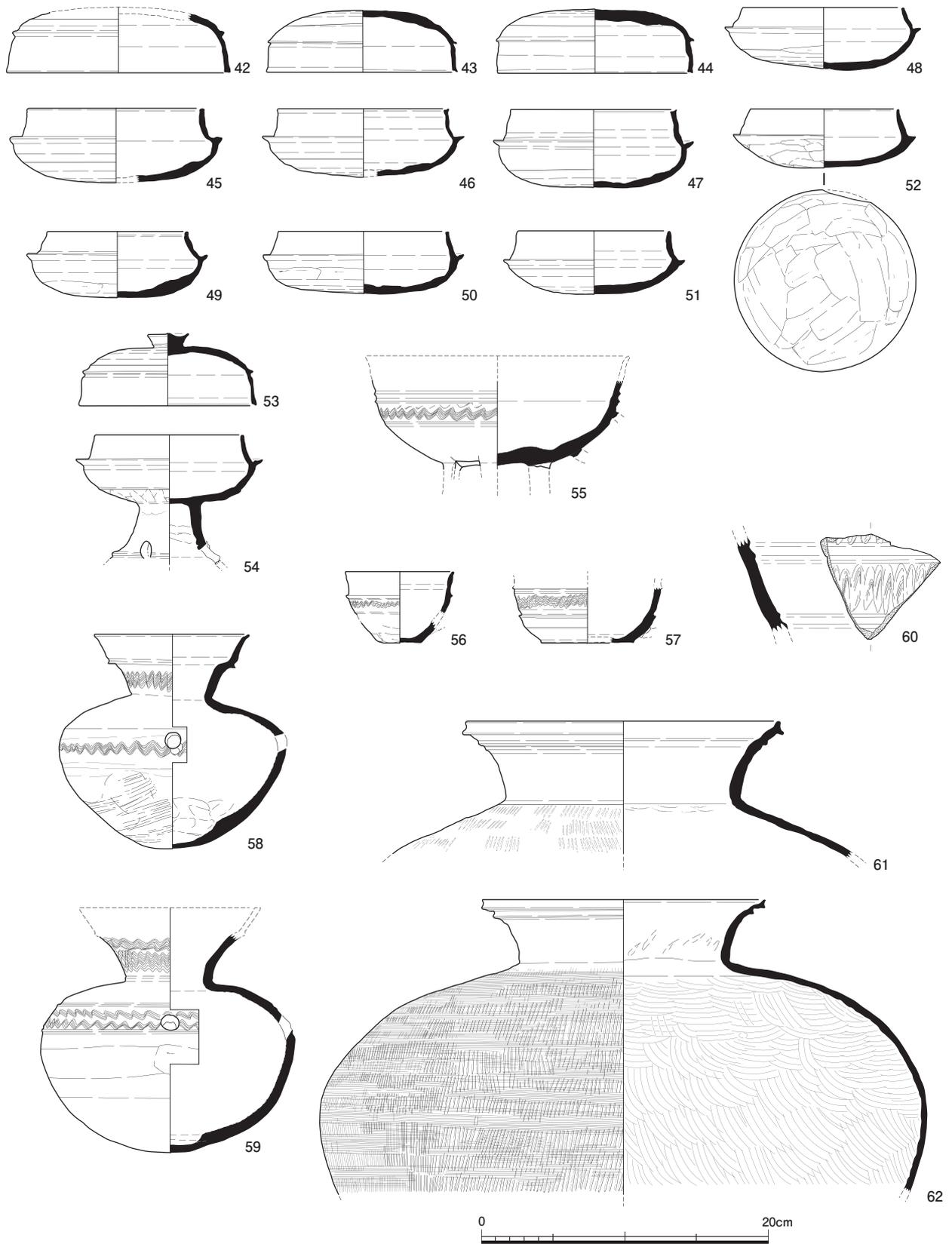


図 69 SD640 出土須恵器 1 : 4

甕 61・62は大甕片。61は肩部から口縁部にかけての破片で、口縁端部は下方へつまみ出す。口縁部直下に1条の鈍い突帯をめぐらす。胴部外面は平行タタキ後カキ目調整、内面は屈曲部に一部当て具痕が残るが、大部分をナデ消す。復元口径22.4cm、残存高9.7cm。62は胴部下半から底部が欠損する。胴部が球形に大きく張り出す。口縁端部は上下につまみ出して肥厚させる。口縁部直下に突帯をめぐらす。胴部外面は平行タタキ調整の後に、カキ目調整、内面は当て具痕が明瞭に残る。また、口縁部内面には成形時の押圧痕がみられる。口径19.8cm、残存高20.7cm。

これら以外にも大形甕胴部片があり、なかには胴部内面ナデ消しやそれに近い調整を施した破片も散見する。甕胴部片は全体的に器壁が薄く、シャープなつくりのものが多く、古相の特徴をみせている。(松永)

4 SK641 出土土器

土師器は、高杯1点、壺4点、甕2点、甌1点、須恵器は甌1点が出土している(図70)。

(1) 土師器

高杯 63は無稜直口高杯。口縁部は直線的に開き、端部は内傾面をもつ。脚部接合部には棒状工具による刺突痕はみられない。脚柱部下半に円孔を1孔穿つ。杯部外面は横ナデで調整し、内面は板状工具によるナデを施し、一部にハケ目がみられる。杯部と脚部の接合部は、ユビオサエとナデで調整し、脚柱部外面は縦ナデ、内面はヘラケズリで、端部外面をナデで仕上げる。裾部内面はユビオサエとナデで調整する。口径16.8cm、器高12.2cm。TK73～TK208型式期併行か。

壺 64～67は直口壺。64は口縁部が直線的に開き、端部を丸く収める。口縁部外面は、ユビオサエとナデ、内面は横方向のハケ目で調整した後、ナデを施している。胴部外面は斜め方向のハケ目で調整する。内面調整はやや不明瞭だが、ユビオサエおよび板状工具によるナデ調整がみられる。胴部外面に黒斑がある。口径9.3cm、器高13.4cm。65は口縁部が直線的に開き、端部を丸く収める。口縁部外面の調整は不明瞭。内面は横ナデで調整する。頸部には口縁部の接合痕を明瞭に残す。胴部内面はユビオサエとナデで調整する。口径8.4cm。66の口縁部は直線的に開き、端部は肥厚する。口縁部内外面および胴部

外面には横方向のミガキを施す。胴部内面の調整は不明瞭。底部には木葉痕が残る。口径9.3cm、器高15.5cm。

67の口縁部は直線的に開き、端部を丸く収める。口縁部外面は横ナデで調整、胴部はユビオサエと板状工具によるナデが残る。胴部内面の調整は横方向のユビナデで、部分的にハケ目が残る。胴部下半から底部にかけてススが付着する。復元口径14cm、器高20cmと他に比して大きい。

甕 68・69は布留式甕の系譜をひく形態。68の口縁部は内彎し立ち上がり、端部に凹面をもつ。口縁部外面は横ナデで調整、内面はユビオサエののち、横ナデを施す。胴部は横・斜め方向のタタキ、胴部下半は左上がりタタキで調整する。胴部内面は、ユビオサエとナデで調整する。胴部の外面のほぼ全面をススが覆い、底部内面にもコゲが付着している。口径13.1cm、器高16.5cm。69の口縁部は直線的に開き、端部は内傾する面をもつ。口縁部内外面を横ナデで調整し、胴部外面を多方向のハケ目で調整する。胴部内面は、オサエと板状工具によるナデで調整する。口縁端部は丸く収め、やや狭い面をもつ。口径12.9cm、器高16.3cm。調整の特徴から、TK73～TK208型式期に併行すると思われる。

甌 70は甌。側面には一対の牛角状把手を付し、把手には線状の切り込みが貫通する。把手はソケット式とはならず胴部外面に貼り付け、把手位置にめぐる凹線はみられない。口縁部は直線的に立ち上がり、端部には内傾する面をもつ。底部は平底で、蒸気孔は中央に円孔を1つ、その周囲に楕円形孔を5つ穿つ。外面は格子目タタキ調整後、ユビナデあるいはハケ目を施し、胴部下位はヘラケズリおよびユビナデにより整える。底部外面はヘラケズリ調整する。内面はハケ目や板状工具によるナデを施す。外面には胴部中位から下位にかけて黒斑、中位にススが薄くみられる。また、内面の胴部下半から蒸気孔にかけてコゲが付着し、蒸気孔には炭化状の固着物が点的に認められる。いっぽう、胴部内外面には使用時の擦痕などはみられない。口径25.3cm、器高21cm。

SK641 出土土師器の特徴 SK641出土土師器は、無稜直口高杯(63)や甕(68・69)の内外面調整と甕の胴部形態の特徴から、SK641出土土器はTK73～TK208型式期に収まると捉えておきたい。(樋口)

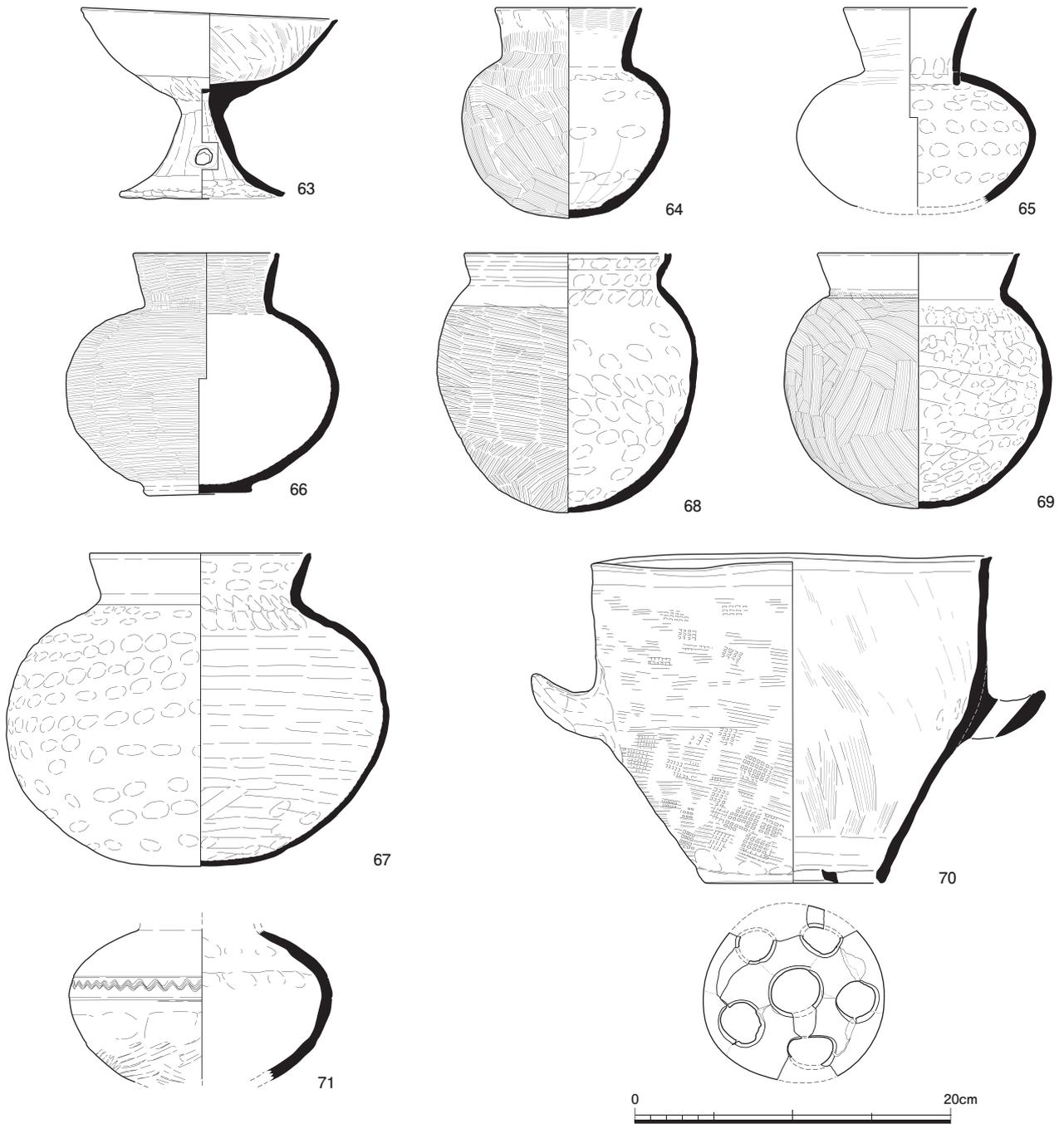


図70 SK641出土土器 1:4

(2) 須恵器

71は全体の1/3が遺存する胴部片。遺存する範囲に円孔はみられないが、形態や施文から甕胴部片とみられる。肩部は張り出し、胴部最大径が中位にある球形を呈する。胴部下位外面は底部成形に伴い、平行タタキ後回転ナデ調整し、一部タタキ板の押圧痕が残る。胴部中位は2条の稜で文様帯を区画し、5単位1条の櫛描波状文を施文する。胴部最大径16.7cm、残存高9.8cm。TK23型式の特徴をみせる。

(松永)

5 SD640・SK641 出土土器の様相

土師器 SD640 出土土師器には高杯・甕を多く含む点の特筆される。高杯は、無稜外反、椀形、無稜直口、大型高杯からなり、脚部接合技法からは、外反高杯(5・12)や椀形高杯(6・8・10・13)、無稜直口高杯(14)、大型高杯(15)にみられるように、接合時に脚部側から刺突を加えるものが主体的である。また甕には、小・中・大型があり、布留式甕系統の甕にくわえて、長胴形甕も複数みられる点の特筆される。当該期・当地における甕のヴァリエー

ションを考えるうえで注目される。

SK641 出土土師器のうち甕 (68・69) は、SD640 出土資料に比べ頸部や器高が小さい印象を受ける。こうしたSK641 出土土器は、SD640 出土土器よりもやや先行する特徴をみせ、これは両遺構の層位的にも矛盾しない。

また、前述したように両遺構において土師器化した長胴形甕 (34・39・40) や、甌 (70) の出土も特筆される。

飛鳥地域は、奈良盆地内でも陶質土器・軟質土器をはじめとする朝鮮半島系土器が集中する地域として指摘されており⁵⁾、本報告の川原寺下層以外にも、近隣では、山田道第2次調査の河川跡 SD2570⁶⁾ や高所寺池素掘井戸 SE9570、溝 SD9350 など⁷⁾、檜前遺跡群⁸⁾ からの出土が知られてきた。とくに山田道第2次調査 SD2570 や高所寺池からは外面格子目あるいは平行タタキ調整の平底鉢や長胴甕、外面格子目タタキで把手位置に凹線がめぐり、截頭形把手を付した甌など、土師器化前の韓式系軟質土器が出土する。こうした様相と比較すると、SD640・SK641 の甕・甌は韓式系軟質土器から土師器化が進んだ一群であり、飛鳥・藤原地域における古墳時代中期の外来系炊飯様式器種の受容と、定着の過渡期的な様相をみせている。

須恵器 須恵器については、一部 TK216 型式に遡及しうるような古相の杯蓋 (42) もみられるが、SD640・SK641 とともに、TK23・47 型式を主体とする。ただ、これより一段階古相の TK208 型式期の特徴を残すものが多い印象を受ける。器種構成は、杯類をはじめとして高杯、臚、把手付椀、高杯形器台、大甕からなり、飛鳥地域における当該期の様相を示す良好な資料群といえる。そしてその組成は、一般的な生活容器というよりは当該期の集落祭祀や古墳祭祀の組成と共通する。くわえて、SD640 出土杯身 (52) のように、初期段階に多くみられる、底部外面に手持ちヘラケズリ調整を施す資料や、把手付高杯 (55) のような特徴的な調整や器種の存在も特筆される。SK641 出土須恵器は TK23・47 型式期の特徴をもち、出土土師器の年代よりもやや降る傾向にあるが、単純な時期差とみるのか、新旧型式が混在する当該期における特質によるものなのか、本資料のみでの言及は難しい。

6 おわりに

本稿では、『報告』古墳時代の遺構の項で言及された、川原寺下層 SD640・SK641 出土土器を再整理し図示するとともに、形態的・製作技法的特徴について詳述した。そして、SD640 出土土器の土師器の多くが TK73~208 型式期の特徴を有することを指摘した。共伴する須恵器は、TK23・47 型式期を中心としながらも、古相の特徴をもつ資料の存在を示した。SD640 の底で検出した SK641 についても、5 世紀中頃まで遡り、SD640 よりも先行することを指摘した。

両遺構の調査はきわめて限定的であったため、今回の資料群が遺構の年代、さらには遺構の性格をどれほど反映したものであるのかは不明瞭であるが、SD640・SK641 出土土師器甕類の多くはススが附着することから近隣の集落遺跡の存在を、須恵器の器種組成からは祭祀遺構、あるいは古墳の存在を想起させる。そして土師器化が進んだ甌や長胴形甕は、あらたな炊飯様式を受容した集団の存在を示唆する。前述のように、飛鳥地域は韓式系軟質土器の出土が目立つ地域である。一定地域内における朝鮮半島系土器の集中は、渡来系集団が関与した土地開発や手工業生産と関連付けて考えられている。そのようななかで本資料群は、飛鳥地域における古墳時代中期の集落の展開を示す一群であり、当地における土師器と須恵器の良好な一括資料と評価できよう。(樋口・松永)

註

- 1) 奈文研『川原寺寺域北限の調査－飛鳥藤原第 119-5 次発掘調査報告－』2004。
- 2) 前掲註 1。
- 3) 杯部の形態や脚部接合方法にかんしては、辻美紀、中野咲の分類を参照した。
辻美紀「古墳時代中・後期の土師器に関する一考察」『国家形成期の考古学－大阪大学考古学研究室 10 周年記念論集』大阪大学考古学研究室、1999。
中野咲「古墳時代中・後期における奈良盆地の土師器編年とその特質」『考古学論攷』第 33 冊、奈良県立橿原考古学研究所、2010。
- 4) 前掲註 3 中野論文。
- 5) 近年では、中野咲による集積が詳しい。中野咲「古墳時代中期における大和の手工業生産拠点と外来系土器」『国家形成期の手工業生産と家畜利用』(科研費中間報告) 2024。
- 6) 「山田道第 2・3 次調査」『藤原概報 21』1991。
- 7) 奈文研『高所寺池発掘調査報告』2006。
- 8) 「檜前遺跡群の調査」『明日香村埋蔵文化財調査概報－平成 22 年度－』明日香村教育委員会、2012。

Ⅱ 平城京と寺院等の調査

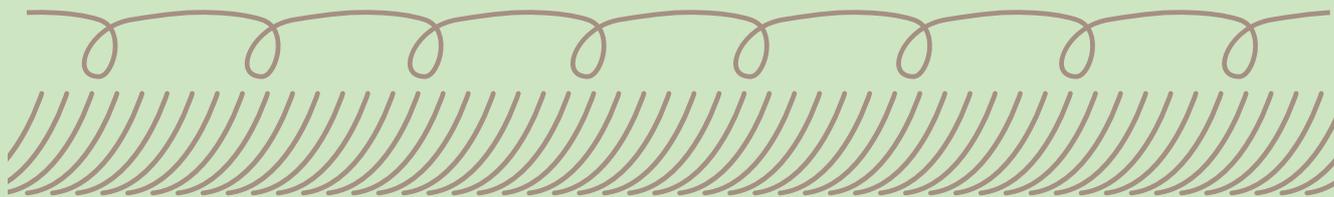


表 10 2022・2023 年度 都城発掘調査部（平城地区）発掘調査一覧

調査次数	調査地区	遺 跡	調査期間	調査面積	調査地	担当者	調査要因	掲載頁
(2022 年度)								
653 次	6BKA-D、6BFO-D	法華寺・海龍王寺旧境内	2022.11.2 ~ 12.16	262.6 m ²	奈良市法華寺町	川畑 純	宅地造成	89
(2023 年度)								
656 次	6BKA-C・D、6BFO-C・D	法華寺・海龍王寺旧境内	2023.8.21 ~ 10.20	600.7 m ²	奈良市法華寺町	高野 麗	宅地造成	89
658 次	6AFJ-O・P	左京三条一坊二坪	2023.10.3 ~ 2024.3.19	1125 m ²	奈良市二条大路南	田中龍一	歴史公園整備	※
659 次	6BFK-H	法華寺旧境内	2023.10.4 ~ 10.6	22.1 m ²	奈良市法華寺町	小田裕樹	店舗・住宅建設	117
660 次	6BSD-P・Q	西大寺旧境内	2024.3.14 ~ 2024.6.20	490 m ²	奈良市西大寺小坊町	浦 蓉子	駐車場建設	※

・このほか、平城地区では 27 件の工事立会に対応した。

※第 658・660 次調査については、以下の理由により、本書には収録していない。

第 658 次調査：第 650 次調査と合わせて別途正式報告書を刊行予定。

第 660 次調査：「発掘報告 2025」で報告予定。

表 11 2023 年度 都城発掘調査部（平城地区）現場班編成 ※総担当者

春	夏	秋	冬
和田一之輔（考古第一）			※浦 蓉子（考古第一）
	丹羽 崇史（考古第二）	小田 裕樹（考古第二）	
	川畑 純（考古第三）	※田中 龍一（考古第三）	
※垣中 健志（史料）	山本 祥隆（史料）	馬場 基（史料）	桑田 訓也（史料）
	※高野 麗（遺構）	山崎 有生（遺構）	西田 紀子（遺構）
総括：副部長 今井 晃樹	写真担当：企画調整部写真室		学報担当：神野 恵（考古第二） 日黒 新悟（遺構）

Ⅱ

平城京と寺院等の調査



图 71 平城京発掘調査位置图 1 : 40000

1 平城京の地理的環境

地 勢 平城京は奈良盆地の北部、奈良市・大和郡山市に所在する。北・東・西は山に囲まれ、南には平野部が広がる。京の北に広がる奈良山丘陵は標高100～140m、京域は北高南低の地勢である。京の北端に位置する平城宮内には奈良山丘陵から2つの支丘が南へ伸延し、それぞれに宮中枢建物と東院が造営される。支丘の間と宮西北部は谷地、宮西南部は秋篠川の旧流路にあたり、低湿地と微高地からなる。

標 高 平城宮は北高南低で標高は65～75m、京内南端の羅城門付近は京内でもっとも低く50m前後である。東の春日山からのびる支丘上に造営した興福寺は標高95mと京内ではもっとも高い。京の西縁は西ノ京丘陵の東麓にかかり75～90mである。

水 系 右京を流れる秋篠川は、平城宮の造営が一段落した後には宮外に流路を付け替え、運河として京の西市に通じていた。左京の佐保川や菰川の一部も運河として利用された可能性は高い。春日山・高円山から流れ出る小河川は佐保川に合流し羅城門の東側を南流していた。

2 平城京の歴史と構造

歴 史 平城京遷都の詔は和銅元年（708）2月に宣布され、同年3月には造宮卿が任命、造営工事はほどなく開始され、和銅3年（710）3月10日に遷都した。延暦3年（784）に長岡京に遷都するまで75年間、平城京は日本の都であった。

宮の構造 約1km四方の区画の東に、南北約755m、東西約265mの張り出し部が取り付く非対称形を呈し、その面積は約124haにおよぶ。宮の周囲は築地塀と宮城門によって囲まれていた。宮内には、第一次大極殿院・中央区朝堂院からなる中央区、内裏・第二次大極殿院・東区朝堂院・朝集院からなる東区、という2つの中枢部が存在する。張り出し部北半は造酒司ほかの官衙地区、同南半は東宮や苑池があった東院地区である。東区と東院の間および東区の南には宮内省、兵部省、式部省などの官衙があり、中央区の西側には西池と西池宮、西南池、馬寮などがある。天平17年（745）に平城京に遷都した後、第二次大極殿を新設し、その南の東区朝堂院、朝集院に儀礼や朝政機能を集中させるなど、平城宮の構造は平城



図 72 南西からみた特別史跡平城宮跡と法華寺周辺（2023年5月撮影）

遷都の前後で大きく変化した。

京の構造 平城京は、下ツ道を南北中軸線として造営され、朱雀大路は軸線上に敷設された。京域は、東西約4.3km、南北約4.8kmの方形区画の東に、東西約1.6km、南北約2.1kmの張り出し部（外京）をもつ。京の外周を囲む羅城は南面のみで北・東・西面は条坊道路が京域を限る境界であった。

京内には条坊道路が縦横に配され碁盤状を呈していた。朱雀大路は幅約74m、長さ約3.8km、二条大路は幅約37m、長さ約5.8kmあり、排水溝と街路樹をともなっていた。道路の両側は坊を囲む築地塀が延々と続くため、現代の繁華街とは全く異なる景観であった。条坊に囲まれた坊は計80あった。坊内には、離宮、宮外官衙、東西の市、貴族の邸宅や庶民の宅地などが確認されている。近年では諸国の出先機関である「調邸」の存在を示唆する成果も出ている。

寺院は京内の重要な構成要素である。大安寺、薬師寺、興福寺、元興寺、観世音寺は遷都前に、法華寺、西大寺、西隆寺、唐招提寺などが遷都後に建てられた。このほか貴族が建てた小規模な寺院や、7世紀から存在する寺院もあった。勅願寺と興福寺、元興寺は一坊前後の敷地を有し、京全体の景観にも大きな影響を与えた。

京の北方 奈良山丘陵には、宮や京内の寺院に瓦を供給した窯跡が複数存在する。同丘陵のなだらかな南斜面には、4世紀末から5世紀前半に営まれた佐紀盾列古墳群が存在し、奈良時代には天皇の苑林である松林苑が造営された。外京の北に位置する丘陵（佐保山・奈保山）には天皇の陵墓が営まれた。 （今井晃樹）

法華寺旧境内・海龍王寺旧境内の調査

—第 653・656 次

1 調査の経過

(1) 調査に至る経緯

本調査は奈良市法華寺町における道路敷設および宅地造成にともなう事前の発掘調査である。調査地は法華寺旧境内東北部または海龍王寺旧境内西北部にあたり(図73)、法華寺と海龍王寺の境界位置との説がある。2022年度に敷地の北部で第653次調査をおこない、2023年度に南部で第656次調査をおこなった。

奈良県文化財保存課(当時)および奈良市教育委員会との協議の上、事業者からの受託事業実施申し込みを受けて奈文研が受託事業として調査を実施した。なお、第653次、第656次調査ともに、受託事業による発掘調査成果を受け、事業者のご理解の下、奈文研の学術調査として調査区を拡張し、発掘調査をおこなった。

(2) 発掘作業・整理等作業の経過

第653次調査 発掘作業は2022年11月2日から12月16日にかけて実施した。11月2日に調査区の設定、レベル移動をおこない、重機掘削を開始した。11月4日から重機掘削と並行して人力による遺構検出をおこなった。11月17日に調査区全景写真を撮影し、遺構図作成、溝の掘削、遺構の断割調査に着手した。

これらの調査により大型の柱穴をもつ掘立柱建物が西方に展開することがあきらかとなったため、11月28日に奈良市教育委員会および事業者との現地協議を実施し、奈文研の学術調査として調査区を西方に拡張することとした(図74)。12月1日に重機により調査区の拡張に着手した。12月8日に拡張区の写真撮影をおこない、遺構図の作成に着手した。12月9日にはさらなる遺構の広がり確認のため重機により西方および南方に調査区を再拡張し12月12日から再拡張区の遺構図を作成した。12月13日より調査終了部分について遺構保護のための砂撒きと埋め戻しに着手し、並行して12月14日に再拡張区の写真撮影をおこなった。12月16日に埋め戻しと現場の撤収を完了し、発掘作業を終了した。

本調査では出土遺物が比較的少量であったため、発掘作業と並行して出土遺物の洗浄・整理作業をおこなった。

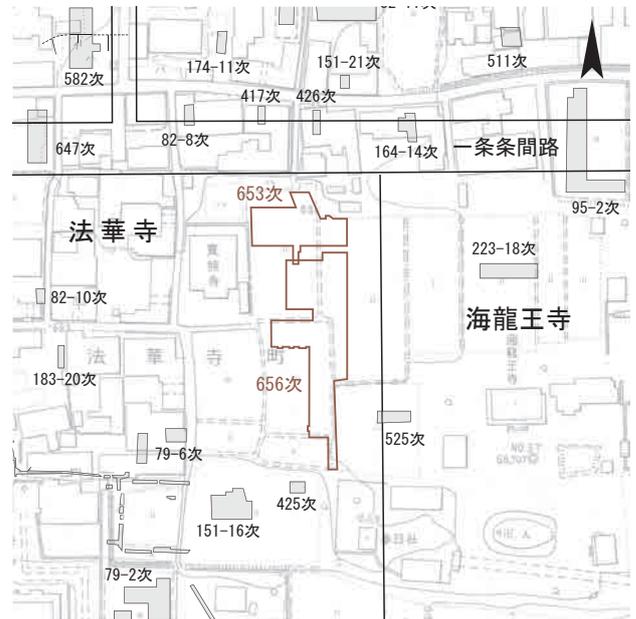


図73 第653・656次調査区位置図 1:2000

なお、調査区周辺の遺構の遺存状況および遺構面の標高確認を目的に、奈良市教育委員会および事業者との協議を踏まえて12月2日に調査区南方の4ヵ所で重機による遺構面の確認調査を実施した。これにより調査区より南についても遺構面が良好に遺存することを確認した。

第656次調査 発掘作業は2023年8月21日から10月20日にかけて実施した。調査前の8月18日に一部の調査区の設定、レベル移動をおこない、8月21日より調査区全体の設定と重機掘削を開始した。8月22日から重機掘削と並行して人力による遺構検出を開始した。9月20日には遺構検出状況の、10月5日には溝を完掘した状況の全景写真撮影をおこなった。

第653次調査の成果と、第656次の調査の進展を踏まえ大型の柱穴をもつ複数の掘立柱建物が西方に展開することがあきらかとなったため、奈文研の学術調査として調査区北半を西方に拡張することとした(図75)。10月10日に重機による拡張区の掘削を開始し、並行して当初調査区の遺構保護のための砂撒きと埋め戻しに着手した。10月12日に拡張区的全景写真を撮影し、遺構図の作成を開始した。遺構図作成の後、調査終了部分について遺構保護用の砂撒きと埋め戻しをおこなった。10月20日に埋め戻しと現場の撤収を完了し、発掘作業を終了した。なお、柱穴の有無の確認のため、追加調査区として4ヵ所で人力による調査区拡張と遺構検出をおこなった。

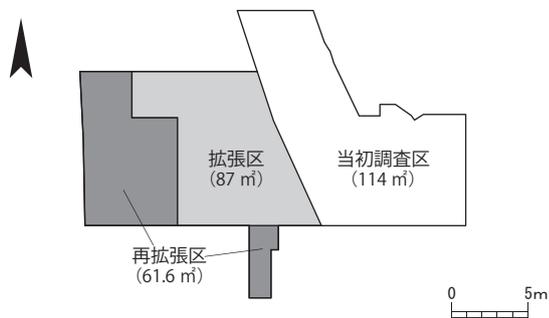


図 74 第 653 次調査の調査区拡張状況 1 : 500

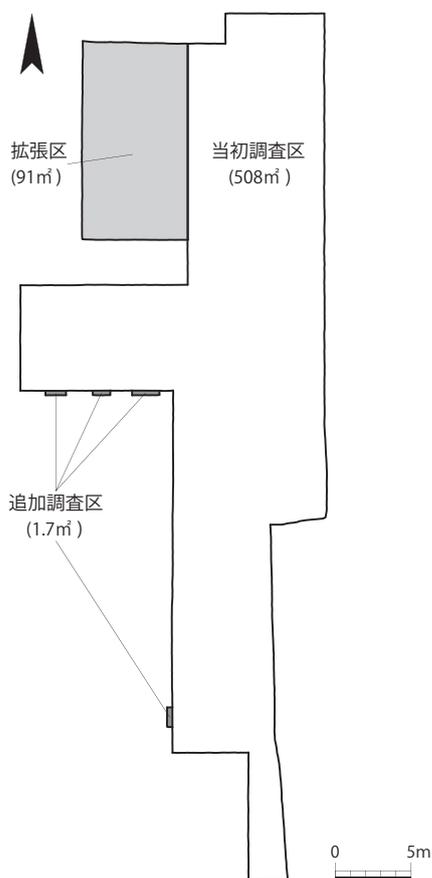


図 75 第 656 次調査の調査区拡張状況 1 : 500

本調査では、発掘作業と並行して出土遺物の洗浄・分類等の作業に着手し、調査終了後も継続して整理作業をおこなった。

2 遺跡の位置と環境

当調査区は、法華寺旧境内東北部または海龍王寺旧境内西北部にあたる。法華寺と海龍王寺の境界については未だ定見をみないが、太田博太郎は『大和古寺大観』の

中で法華寺と海龍王寺の境界を調査区やや東寄りの田境に想定している¹⁾。さらに、法華寺は光明皇后が父である藤原不比等から継承した邸宅を奈良時代中頃に尼寺に造り替えたものであり、奈良時代前半の当該地は邸宅内にあっていた可能性も想定される。

北方に広がる奈良山丘陵縁辺の比較的高燥な位置にあたり、現地形も南東に向かって緩やかに下っている。

調査地の周辺では、調査地の北約 30m の位置を東西に通る一条条間路の調査（第 82-8 次、第 164-14 次、第 417 次、第 426 次）等がおこなわれており、一条条間路の北側溝の位置等がはっきりしている。調査地の東にあたる海龍王寺旧境内の調査として第 223-18 次調査では食堂と推定される基壇建物を、第 525 次調査では海龍王寺西回廊を検出している。また調査地の南にあたる第 425 次調査では近世以降とみられる堀と溝を検出している。

3 調査の方法と成果

(1) 調査の方法

第 653 次調査 宅地造成にともなう道路敷設予定地を中心に、一部宅地部分を含む南北 14.2m、東西 15.0m の L 字形の 114m² を当初調査区として設定し、調査に着手した。重機掘削により耕作土・床土を除去した後、人力により地山上面である黄色砂および黄白色斑粘土まで掘削し、遺構検出をおこなった。遺構の掘削は、溝については埋土の掘削をおこない、柱穴および土坑については基本的には確認のための段下げまでとし、必要なものについては断割調査をおこなった。

拡張区の面積は約 87m² で重機掘削により耕作土・床土を除去した後、人力により遺構の検出をおこなった。ただし、調査期間との関係上、近代以降の攪乱については奈良時代の遺構の確認に必要と判断したもののみ掘り下げた。その他の遺構は確認のための段下げまでとし、必要なもののみ断割調査をおこなった。

再拡張区は面積は約 61.6m² で、最終的な調査面積は東西 25.2m、南北 18.0m の 262.6m² である。再拡張区においては人力による遺構の平面検出までとし、柱穴の断割調査を実施したものを除き、柱穴・土坑の段下げ等の遺構の掘り下げはおこなわなかった。

調査終了時には掘削停止面の明示と遺構保護を目的に、山砂を散布した上で埋め戻しをおこなった。

第 656 次調査 宅地造成にともなう道路および排水設備敷設予定地を中心に、一部宅地部分を含む南北 57.5m、東西最大幅 20m の逆 T 字形の 508㎡ の調査区を設定し、調査に着手した。重機掘削により耕作土・床土を除去した後、人力により地山上面である黄色砂および黄白色斑粘土まで掘削し、遺構検出をおこなった。遺構の掘削は、溝については埋土の掘削をおこない、柱穴および土坑については基本的には確認のための段下げまでとし、必要なものについては断割調査をおこない、半截・完掘した。

当初調査区西北部の南北 7m、東西 13m の範囲に拡張区を設定した。拡張区の面積は 91㎡で、重機掘削により耕作土・床土を除去した後、人力により遺構の検出をおこなった。調査は人力による遺構の平面検出と段下げまでとした。

また、後述の掘立柱建物 SB11925、東西掘立柱塀 SA11929 については調査区外に続くと考えられたことから、追加調査区として人力により調査区を拡張した。追加調査区は面積は 1.7㎡で、人力で耕作土・床土を除去し遺構の検出をおこなった。調査は遺構の平面検出と段下げまでとした。最終的な調査面積は 600.7㎡である。

調査終了時には掘削停止面の明示と遺構保護を目的に、山砂を散布した上で埋め戻しをおこなった。

第 653・656 次調査ともに GNSS 測量機を用いたネットワーク型 RTK 法で調査区内に基準線を設定し、縮尺 1/20 を基本に平面図を作成した。標高は、基準点平城 No.24 (X = -144,873.521、 Y = -18,128.584、 H = 71.826m) からオートレベルで直接水準測量をおこなった。写真撮影はデジタル撮影でおこなった。

また、調査に際して適時奈良県文化財保存課(当時)および奈良市教育委員会に内容を報告し、遺構と工事予定箇所が重なる場合などは調査方針について指導を受けた。

(2) 基本層序

第 653 次調査 地表から、①耕作土および床土(20~50cm)、②黄色砂(地山)、③黄白色斑粘土(地山)である。部分的に①と②または③の間に黄色砂礫土および黄褐色礫混土(近世の遺物包含層)、黄橙色粘土(古代の整地土か)がみられる。遺構はすべて②または③の上面で検出した。

なお、調査区の中央やや東よりには南北方向に田境が通っており、東側が一段低い。そのため調査区東部では③上面(遺構面)の標高は調査区西部よりも一段低い。

遺構検出面の標高は調査区西部で 69.0~69.1m、調査区東部で 68.8~68.9m である。なお、後述する 3 条の南北溝の位置はこの田境のすぐ東側に位置する。

第 656 次調査 地表から、①耕作土および床土(20~50cm)、②黄褐色土(遺物包含層、5~10cm、調査区南部のみに堆積)、③黄白色斑粘土(地山)である。③上面で遺構を検出した。調査区中央付近の X = -144,968、 Y = -17,865 を結ぶように逆「し」の字形の田境による段差があり、南西は一段下がる。同じく、調査区南の突出部でさらに一段下がる。このため、遺構検出面は田境ごとに南にいくにつれ低くなる。

遺構検出面の標高は、調査区北部では約 69.2m、南部では約 68.4m である。

(3) 検出遺構

南北溝 5 条、東西溝 1 条、掘立柱建物 8 棟、柱穴列 2 条、大土坑等を検出した。主な遺構を、中世以降の遺構、古代の遺構に大別して述べる。

中世以降の遺構

南北溝 SD11901 調査区北半で検出した現存幅 1.8~3.8m の素掘りの南北溝。南にいくにつれ幅が広がる。第 653 次で約 7.2m 分、第 656 次で約 16m 分を検出し、少なくとも 25m はあると考えられる。調査区北外に続き北端は確認できず、南端は調査区中央付近 (X = -144,968) の田境の段差によりとぎれ、これより南では検出できなかった。深さは 15~30cm と浅いが、東辺から 50cm ほどの範囲では一部が検出面からの深さで約 40cm と一段深くなっている。溝底の標高は北がやや高く南がやや低いが検出した北端と南端の高低差は約 10cm とほぼ同様である。土層の観察から一度は大きく浚渫がおこなわれたとみられ、西側の一段浅い部分は浚渫後の埋土のみが堆積する。浚渫前・後ともに溝底付近には溝が機能していた際の堆積土とみられる暗褐色粘土が堆積する。浚渫後の溝の上半の埋土はブロック状の暗褐色粘土および暗褐色砂であり、埋立土と考えられる。掘り直し前・後とも埋土に近代以降の遺物を含む。

南北溝 SD11902 調査区中央で検出した現存幅 0.8~2.2m の素掘りの南北溝。溝は南北で分かれ、北側は第 653 次で約 7.2m 分、第 656 次で約 16m 分を検出し、第 656 次調査区中央の段差により約 7.5m とぎれ、それより南でさらに約 25.5m 分を検出した。溝の北半は南北溝

SD11901の西に位置し、東辺はSD11901に壊され失われている。また、SD11901により壊されている部分以外は南北溝SD11903の上面で検出した。そのため南北溝SD11901より古くSD11903よりも新しい。検出面からの深さは、北側では40～60cm、南側では約25cm。溝底の標高は北が高く南が低い。遺構の遺存状態が良好な北側では、土層の観察から大きく3層に分かれ、浚渫がおこなわれたとみられる。上層の埋土は西端に堆積する幅約80cmの褐色砂、中層の埋土はブロック状の褐色砂からなり、どちらも異なる時期に浚渫した後の埋土とみられる。下層の埋土として溝底付近に暗褐色粘土が堆積しており、溝が機能していた時期の堆積土とみられる。南側では、上層と下層は削平されており、中層の埋土のみ遺存しているとみられる。いずれの埋土にも奈良時代から中近世の土師器・瓦質土器・陶磁器を含む。

南北溝 SD11905 調査区東端で検出した幅0.4～1.4mの素掘りの南北溝状遺構。東肩は調査区東外に位置するため全幅は不明である。第653次で約7.2m分、第656次で約27m分を検出し、溝の長さは少なくとも36mはある。深さは40～60cm。埋土は2層に分かれ、上層は黄褐色砂質土、下層は灰黄褐色砂質土からなり、人頭大の石を含む。後述する掘立柱建物SB11920の柱穴から出土した石と形状や大きさが似ており、もともとは周囲の柱穴で使用されていたもので、後世に柱穴を掘削した際に捨てこんだ可能性も考えられる。また、部分的に多量の瓦を含む土坑状のくぼみがあり、土坑状の遺構が連なり溝状になったものとみられる。埋土には飛鳥時代から江戸時代までの遺物を含む。

東西溝 SD11907 調査区南端の突出部で検出した、幅2.6～4.8mの素掘りの東西溝。ただし、南岸は近現代の土坑によって壊され、全幅は不明である。東西約2.4m分を検出した。深さは40cm以上。完掘していないため水の流れの方向は不明である。埋土は大きく2層に分かれ、上層は褐色砂質土、下層は灰黄褐色砂質土からなる。上層には近世以降の瓦を含むが、下層ではそれらを確認できなかったため中世頃のものともみられる。ただし、溝が深いことから完掘しておらず、下層は幅約40cmを検出したのみで、その全容は不明である。

土坑 SK11939 調査区東北隅で検出した大型の土坑。東西約1m分を検出したが東および北は調査区外に続く。

検出した範囲の深さは約50cmである。埋土からは近世の瓦が出土しており、近世以降の井戸の可能性もある。

土坑群 SK11941・11942 調査区北半で検出した大型の土坑2基。SK11941の掘方の平面は隅丸方形で、東西約1.7m、南北約1.9m、深さは約60cm。SK11942の掘方の平面は円形で、直径約3.1m、深さは50cm以上。どちらも南北溝SD11901の上面から掘り込まれており、埋土からは近世以降の瓦や染付が出土した。廃棄土坑とみられる。

土坑 SK11943 調査区中央で検出した大型の土坑。掘方の平面は円形で、南北約2.8m、東西約2.5m、深さは約35cm。近代以降の陶磁器片を含み、廃棄土坑とみられる。

古代の遺構

南北溝 SD11903 調査区北半で検出した現存幅30～60cmの素掘りの南北溝。第653次で約7.2m分、第656次で約11m分を検出し、少なくとも20mはある。東辺は南北溝SD11901に、西辺はSD11902に壊される。検出面からの深さはもっとも残りが良好な北辺付近で約30cm、溝の断面形はV字状をなすが、南にいくにつれ浅くなり、とぎれるため、南北溝SD11901・11902の掘削にともない削平された可能性がある。埋土はブロック状の褐色砂で埋立土とみられるが、溝底付近には暗褐色粘土が堆積しており、溝が機能していた時期の堆積土と考えられる。後述する掘立柱建物SB11918・11919に壊されるため、奈良時代あるいはそれ以前に機能した溝の可能性もある。

南北溝 SD11904 調査区北半の東部で検出した、現存幅20～50cmの素掘りの南北溝。調査区中央から田境のあるX＝-144,968まで約16m分を検出し、それより北には続かない。ただしX＝-144,952～-144,961の範囲では南北溝SD11904と東西の位置が揃うあたりに溝状の窪みがみられ、同一の溝の底部であった可能性も残る。調査区中央の逆「し」の字形の田境の際にあり、西辺は田境の落ち込みに、東辺は近代の溝によって壊され、溝の全幅は不明である。溝底の標高は北が高く南が低い。埋土は上層と下層に分かれ、上層にはおい黄橙色砂質土、下層は灰黄褐色砂質土からなる。下層からは奈良三彩・緑釉陶器が出土した。東西掘立柱塀SA11929と重複し、これに先行する。後述する掘立柱塀SA11930の約1m東に並行して位置することから、雨落溝の可能性や、敷地内の区画溝として並存していた可能性がある。ただし、SA11930よりも北に続くことなどから、溝が機能してい

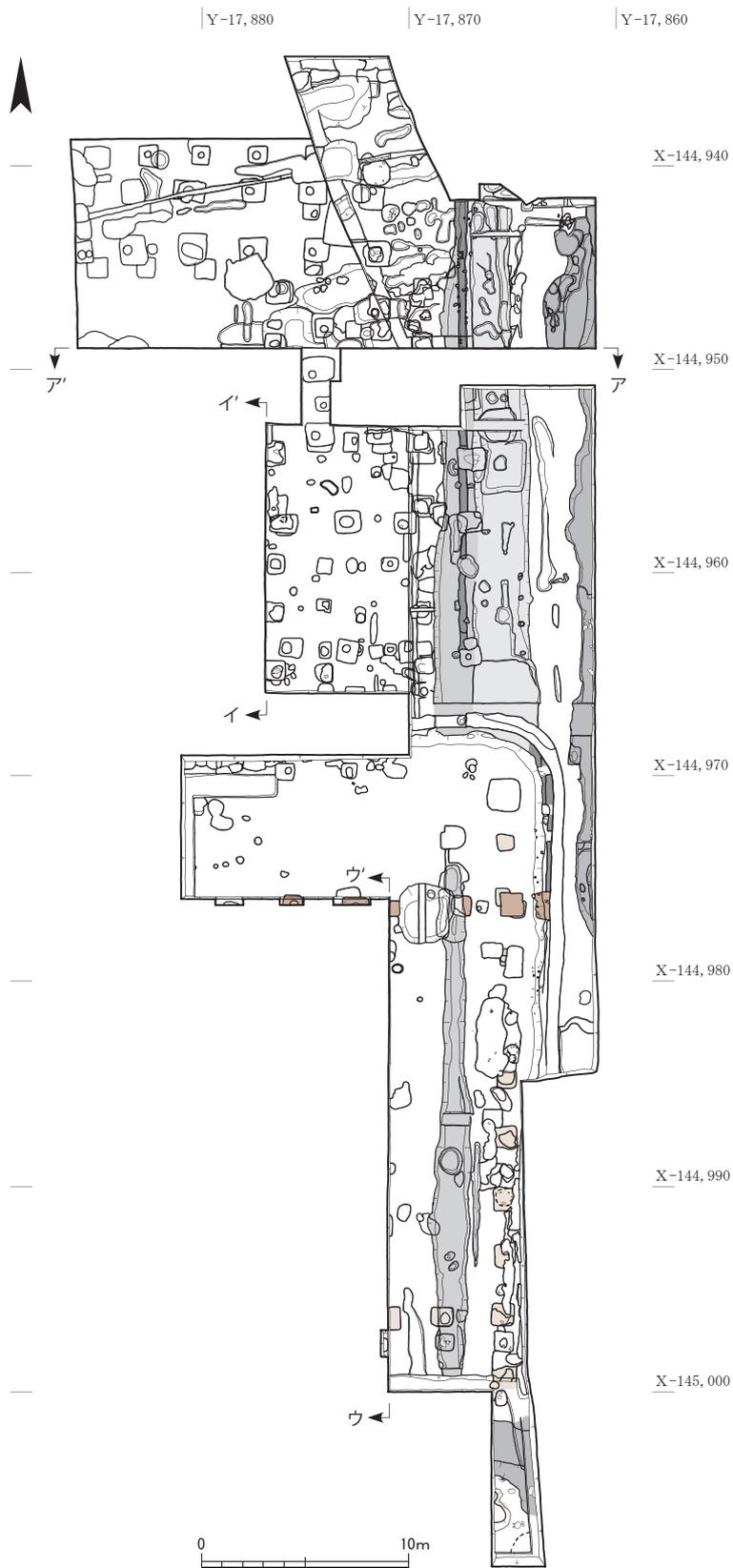


図 76 第 653・656 次調査区遺構図 1 : 350

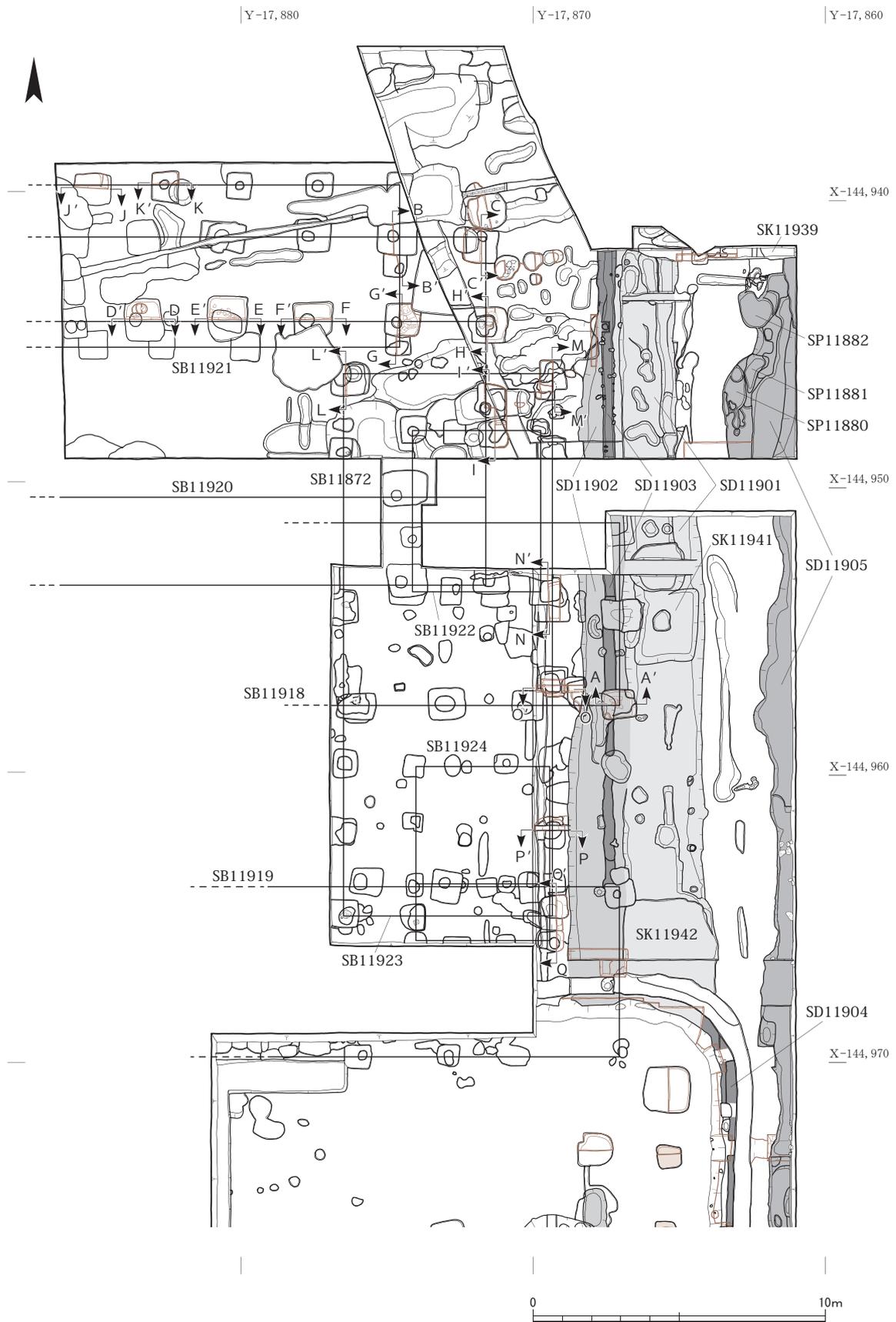


图 77 第 653・656 次調査区遺構図(北) 1 : 200

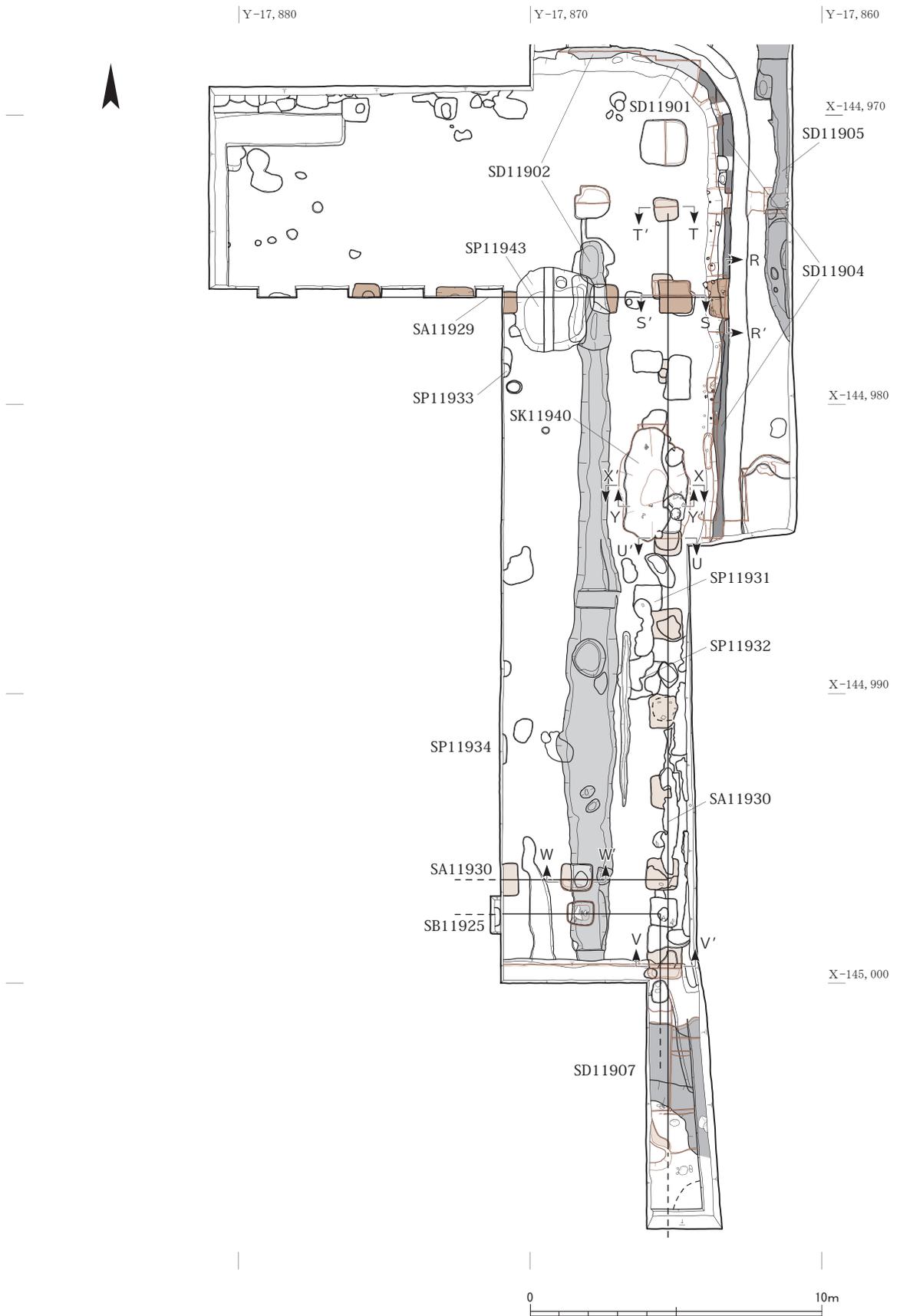


図 78 第 653・656 次調査区遺構図 (南) 1 : 200

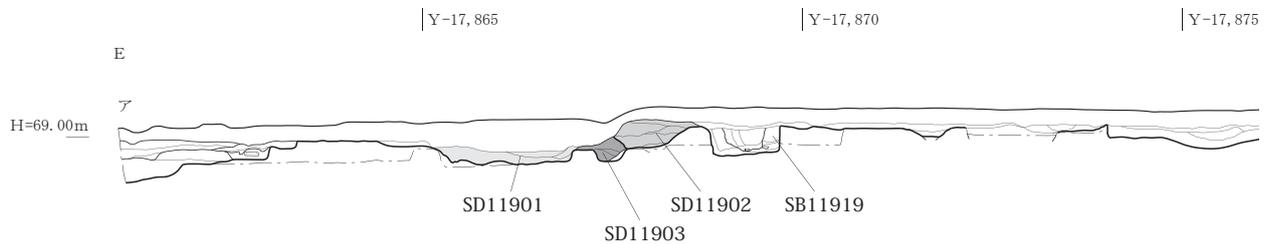


図 79 第 653 次調査区

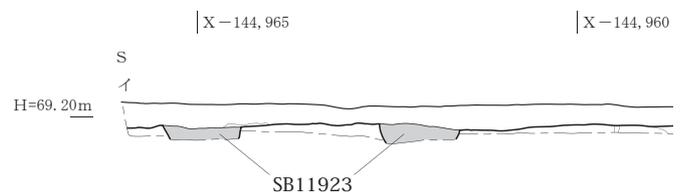


図 80 第 656 次調査区

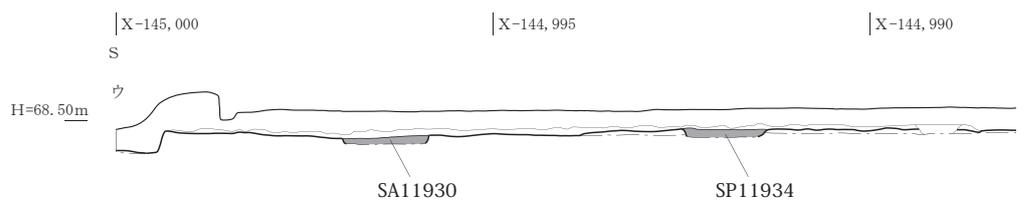


図 81 第 656 次調査区

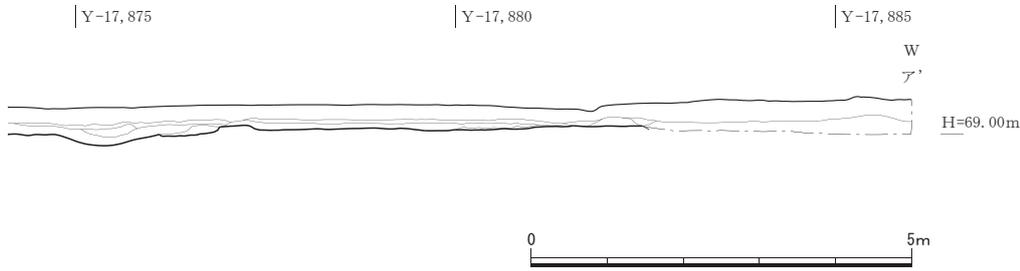
た際の用途は不明である。

掘立柱建物 SB11918 調査区西北部で検出した、東西棟の掘立柱建物。桁行3間以上、梁行2間。南辺の側柱4基と東北の隅柱1基、東妻中央柱1基を確認した。柱間寸法は桁行・梁行とも約3m(10尺)等間。柱掘方の平面は隅丸方形で、一辺1.0~1.3m、深さは約70cmである。西妻は検出しておらず、調査区の西外に続く。柱穴は掘立柱建物SB11923と重複し、これより新しい。

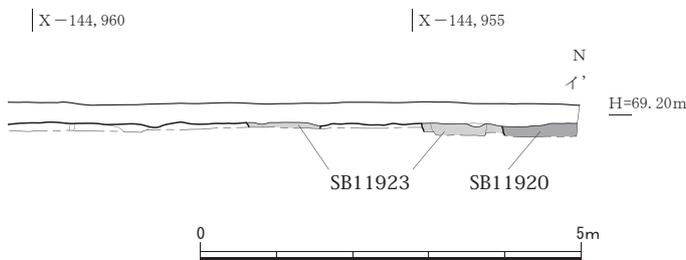
柱穴1基で断割調査をおこない(図82、A-A')、その後

完掘した(PL.37-1)。これにより掘方底面の中央には平瓦を敷き、その上で掘方底面全体に粒度の小さい砂質土を約15cm敷いていることを確認した。これら平瓦の位置は柱の想定位置にあたることから、柱の沈下対策として敷かれたものと考えられる。

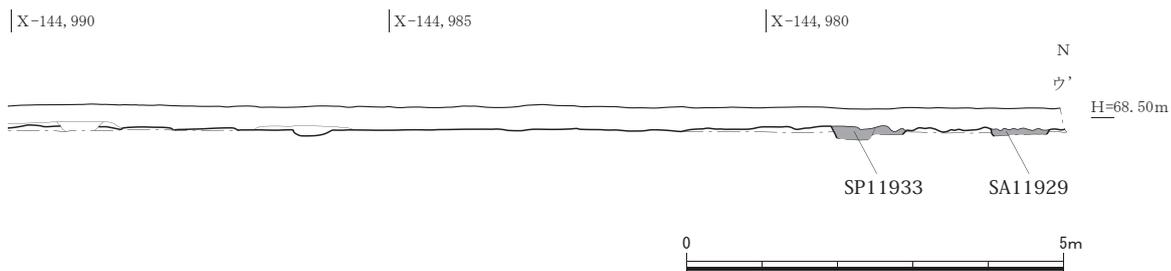
掘立柱建物 SB11919 調査区中央で検出した、東西棟の掘立柱建物。桁行4間以上、梁行2間。北・南の側柱7基、東妻中央柱1基を確認した。柱間寸法は、桁行方向は約3m(10尺)等間、梁行方向は約2.7m(9尺)等間。



南壁土層図 (ア-ア') 1:100



拡張区西壁土層図 (イ-イ') 1:100



南半西壁土層図 (ウ-ウ') 1:100

柱掘方の平面は隅丸方形で、一辺0.8~1.2m。南側柱の検出面は調査区中央の田境により一段下がっており、東南隅とその1つ西の柱穴は削平されているためか想定位置で検出できなかった。西妻柱の想定位置は調査区西外のため、桁行は不明である。柱穴は掘立柱建物 SB11923・11924 と重複し、これらより新しい。先述した掘立柱建物 SB11918 とは柱筋が対応しており、同時期の建物である可能性があるが、SB11918 より梁行の柱間がやや狭い。
掘立柱建物 SB11920 調査区西北部で検出した、東西

棟の掘立柱建物。桁行6間以上、梁行2間の身舎の南北両面に廂が付く構造で、西端および西南部は調査区西外に続く。柱穴は北側柱筋および北入側柱筋の各6基、東妻中央柱の1基、南入側柱の1基、南側柱の3基を確認した。柱間寸法はいずれも約3m(10尺)等間である。柱掘方の平面は一辺1.0~1.4mの方形で、深さは検出面から約80cmである。柱穴は掘立柱建物 SB11921・11922 と重複し、これより新しい。

8基の柱穴で断割調査をおこない、柱痕跡または抜取

穴を確認した。いずれも柱根は遺存していなかったが、うち5基では下部に腐植土（粘土）が遺存しており、柱根に由来するとみられる（図83のB-B'、D-D'、F-F'、G-G'、H-H'）。そのため、建物の解体にともなう柱の除去は、柱の周辺を一部掘削した上で柱を切り取る方法でおこなわれたとみられる。なお、柱痕跡から柱径は25~30cmと推定できる。

また、身舎柱については柱の据え付けに際して入念な造作がおこなわれていることを確認した。身舎の東北隅柱の柱穴では、長軸30cmほどのやや大振りの石を柱の下に礎板状に敷き込み、さらにその周辺を人頭大の石で囲み根固めとしている（図83のH-H'、PL.37-2）。北入側柱筋の東から2基目の柱穴では掘方底のほぼ全面に砂を薄く敷き、その上に平瓦を敷いている（図83のG-G'、PL.37-3）。東妻中央柱では柱の下に礫混じりの砂を薄く敷き、そ

の上に平瓦を敷いている（図83のI-I'、PL.37-4）。一方で、廂の柱穴についてはいずれもそうした造作は認められなかったため（図83のB-B'・C-C'、PL.37-5）、建物の構造上特に重量のかかる身舎や隅部分の柱についてのみ選択的に入念な柱の沈下対策をおこなったものと考えられる。

なお、柱掘方から緑釉水波文磚が出土した（図95-20、PL.44-20）。

掘立柱建物 SB11921 調査区西北部で検出した、東西棟の掘立柱建物。桁行5間以上、梁行2間で調査区西外に続く。柱穴は北側柱5基、南側柱4基、東妻中央柱1基を確認した。柱間寸法はいずれも約2.7m（9尺）等間。柱掘方の平面は一辺80cmほどの方形で、深さは検出面から約60cmである。柱穴は掘立柱建物SB11920と重複し、SB11920に先行する。

4基の柱穴で断割調査をおこなった。それにより、一部の掘方では粘土と砂を互層状に用いていることを確認した。立柱に際して入念な埋め戻しをおこなったものとみられる（図84のJ-J'）。また、柱痕跡または抜取穴を確認したが柱根は確認できなかった。この柱痕跡または抜取穴は形状からすると柱痕跡の可能性が高い。一方で図84のK-K'では埋土は粘土と砂が互層をなしており、埋め戻しがおこなわれた可能性も想定できる。その場合、建物の解体に際しては柱を抜き取って除去し、その上で入念な埋め戻しをおこなったことになる。先述した掘立柱建物SB11920の建築を前提とした造作の可能性も想定

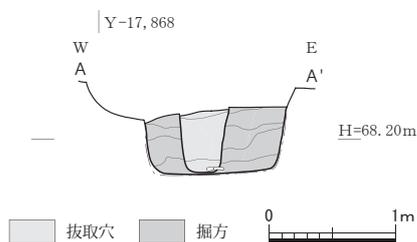


図82 掘立柱建物 SB11918 柱穴断面図 1:60

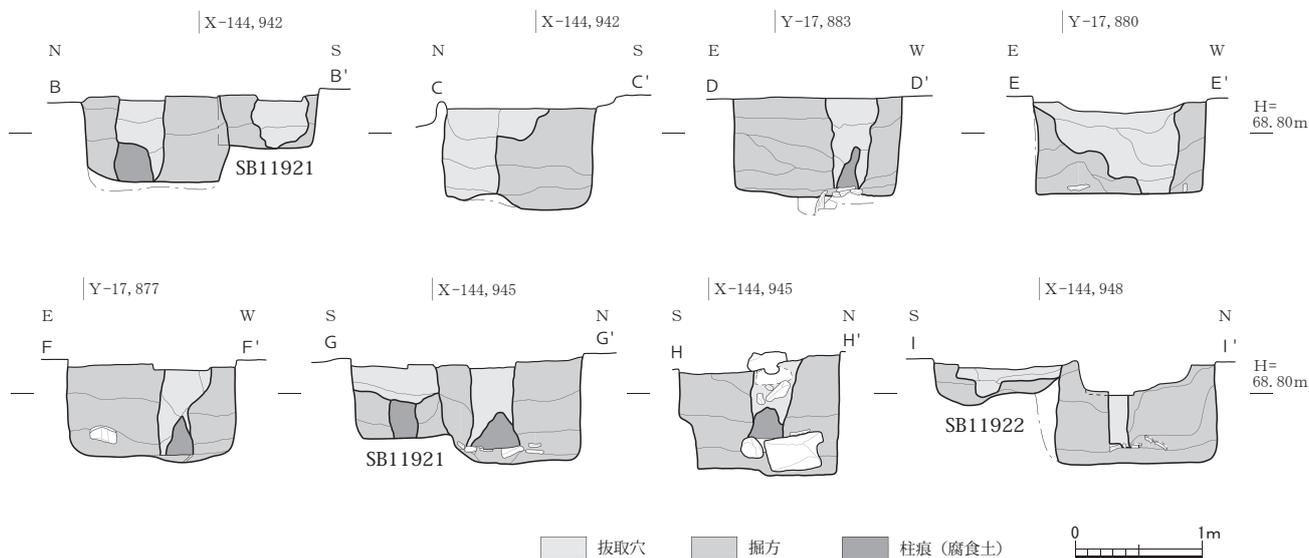


図83 掘立柱建物 SB11920 柱穴断面図 1:60

できるが、確定できない。

なお、いずれの柱痕跡または採取穴にも遺物が全く含まれない。このことも採取穴の埋め戻しが入念におこなわれた可能性を示唆する。

掘立柱建物 SB11922 調査区西北部で検出した掘立柱建物。東西3間、南北3間。柱穴は北・南側柱各4基とその間で西側柱1基を確認した。柱間寸法は南北方向が1.4~1.5m(約5尺)等間。東西方向は約1.8m(6尺)等間と考えられるが、西側柱は柱穴の想定位置に掘立柱建物SB11920の柱穴が重なり柱穴1基が検出できず、東側柱は調査区外に柱穴の想定位置があるため、2基とも検出できなかった。そのため正確な柱間寸法は不明である。柱掘方の平面は隅丸方形で、一辺0.7~1.2m、深さは検出面から約35cmである。柱穴は掘立柱建物SB11920・11923と重複し、SB11920に先行し、SB11923より新しい。また、柱穴としては浅く、当時の地表面はこれより高く、後世に削平されたものとみられる(図84のうちN-N')。

とくに桁行の柱間が狭く、建物の規模も小さいため、建物の用途としては倉庫などが考えられる。総柱建物の可能性もあるが、内部柱が調査区外に位置しているため確認できなかった。

掘立柱建物 SB11923 調査区西北部で検出した、南北棟の掘立柱建物。桁行7間、梁行3間と推定され、西側柱7基、東側柱6基と、南妻の柱1基を確認した。しかし、北妻の柱の想定位置には近世以降の溝があり、柱穴は既

に失われたとみられ、南妻の柱も1基しか確認できなかった。桁行方向の柱間寸法は約2.7m(9尺)等間、梁行方向は約2.4m(8尺)等間。柱掘方の平面は基本的には隅丸方形で、一辺0.9~1.2m、深さは検出面から35~55cmである。柱穴は掘立柱建物SB11918・11919・11922と重複し、これらに先行する。

6基の柱穴で断割調査をおこなった。うち5基で採取穴を確認したが(図84のL-L'、M-M'、O-O'、P-P'、Q-Q'、PL.38-1~4)、柱痕跡は確認できなかったため、建物の解体に際しては柱を抜き取って除去したものとみられる。採取穴の平面の大きさは、30~50cmのもの(図84のM-M'、O-O'、Q-Q'、PL.38-2・4)と、80cm以上のものがあり(図84のL-L'、P-P'、PL.38-3)、柱穴によって大きく異なる。また、平面規模に比して掘方は浅いため、当時の地表面はこれより高く、後世に削平されたと考えられる。

掘立柱建物 SB11924 調査区西北部で検出した掘立柱建物。東西3間、南北3間で、東側柱2基、西側柱4基と、その間に南側柱2基、北側柱1基を、さらに南側柱筋の1間北で東西2基の柱穴を検出した。北側柱筋の柱穴1基は想定位置で検出できず、東北隅とその1つ南の柱穴2基は、掘立柱建物SB11923の柱穴に壊されているとみられ、確認できなかった。柱間寸法は、東西は約1.5m(5尺)等間、南北は約2.1m(7尺)等間。柱掘方の平面は隅丸方形または楕円形で、一辺50~90cm、深さは約35cmである。平面規模に比して掘方が浅いため(図84のQ-Q')、

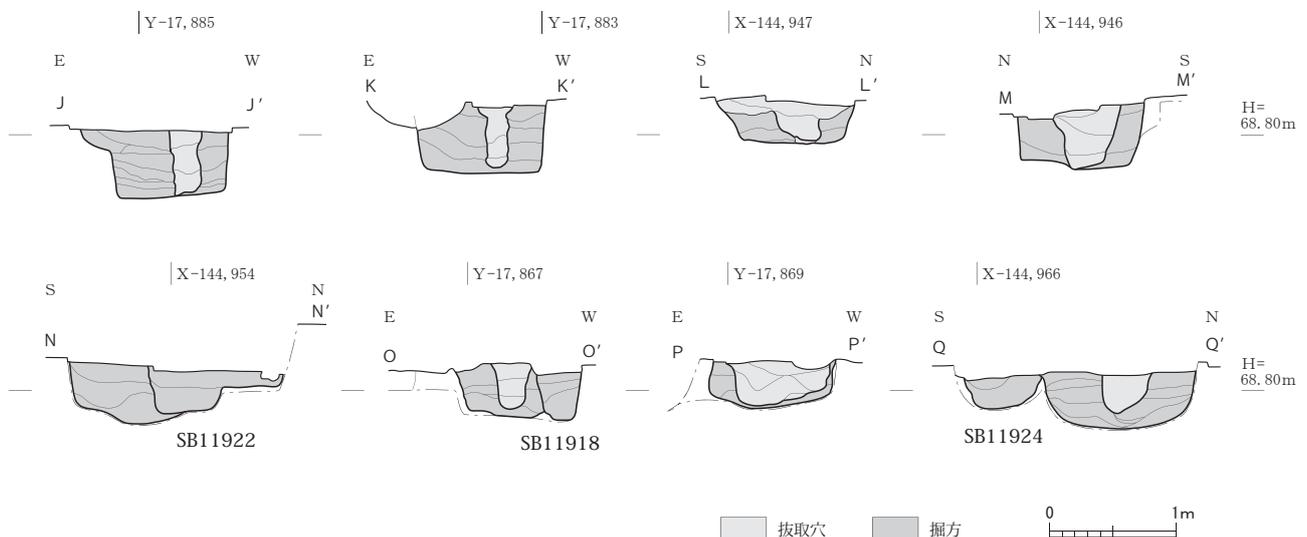


図84 掘立柱建物SB11921・SB11923柱穴断面図 1:60

当時の地表面はこれより高く、後世に削平されたものと考えられる。柱穴は掘立柱建物 SB11919・11923 と重複し、これに先行する。

掘立柱建物 SB11925 調査区南部で検出した掘立柱建物。東西2間以上、南北1間以上で、北辺と東辺の側柱4基を確認した。柱間寸法は、東西約3m(10尺)、南北約2.7m(9尺)。柱掘方の平面は隅丸方形から楕円形で、東西0.7~1.0m、南北0.8~1.0m、深さは約35cm。南に続く柱穴の想定位置は東西溝 SD11907 に破壊されており検出できなかった。ただし、SD11907 の南でも検出できなかったため、南北は最大2間と考えられる。調査区西外に続くと考えられる。

東北隅柱の1間西と1間南の抜取穴内で凝灰岩を検出した。そのうち、東北隅柱より1間西の柱穴を完掘した。出土した凝灰岩は一辺が40~50cmの三角形を呈しており、その上面は平坦で、厚さも20cm程度ある大形のものである。また、凝灰岩の下から瓦片も出土し、同時に捨てこまれたものと考えられる。遺構の検出状況からは、他の掘立柱建物群、掘立柱塀との先後関係は不明である。東北隅柱の1間南の柱穴では、直径約20cmの円形の凝灰岩と、一辺15~20cmの方形の凝灰岩を確認した。SB11925 あるいは周辺の建物で凝灰岩を用いていた可能性がある。

東西掘立柱塀 SA11929 調査区中央で検出した東西方向の掘立柱塀。5間分、約13mを確認した。東西ともさらに東・西へは続かないとみられる。柱掘方の平面は隅丸方形で、一辺1.0~1.2m、もっとも良好に遺存する東端の柱穴の深さは約85cm。柱間寸法は1.5~3.0m(5~10尺)と柱間によって大きく異なる。1番東の柱穴は逆「し」の字状の田境に位置するため、柱穴の西半が削平されている。

このうち、東から1・2基目の柱穴で断割調査をおこな

った。堀方の深さは、東端の柱穴は遺構検出面より約85cm(図85のR-R'、PL.38-5、堀方底面はH=68.0m)、2基目の柱穴は遺構検出面より約20cm(図85のS-S'、堀方底面はH=68.1m)である。堀方底面の標高がほぼ同じことから、東から2基目以西の柱穴についても旧地表面での堀方は遺構検出面での平面よりも大きく、深さも本来は80cm以上あったとみられる。東端の柱穴の大きさからみて比較的大型の南北を区画する塀であったと考えられる。

柱穴は南北溝 SD11904、掘立柱塀 SA11930 と重複し、これより新しい。

掘立柱塀 SA11930 調査区の南半で検出した南北・東西方向に並ぶ掘立柱塀。南北11間以上約33m、東西2間約6mを検出した。柱間寸法は南北・東西とも2.7~3.0m(9~10尺)。柱掘方の平面は隅丸方形で、一辺0.7~1.2m、深さは15~80cm。調査区中央でとぎれ北半では確認できず、北方では東西に接続する柱穴も確認できなかった。南北の柱穴列は少なくとも11間はあるとみられるが、北から4基目の柱穴は大土坑 SK11940 に、北から11基目の柱穴は東西溝 SD11907 などに壊され、遺存していない。南北方向の柱穴列のうち、北から9基目の柱穴で東西方向の柱穴列に接続し、西に2基の柱穴が続く。この柱穴列がさらに調査区の東・西外に続き、T字形ある

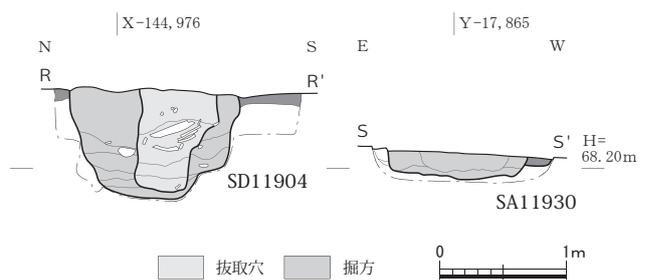


図85 東西掘立柱塀 SA11929 柱穴断面図 1:60

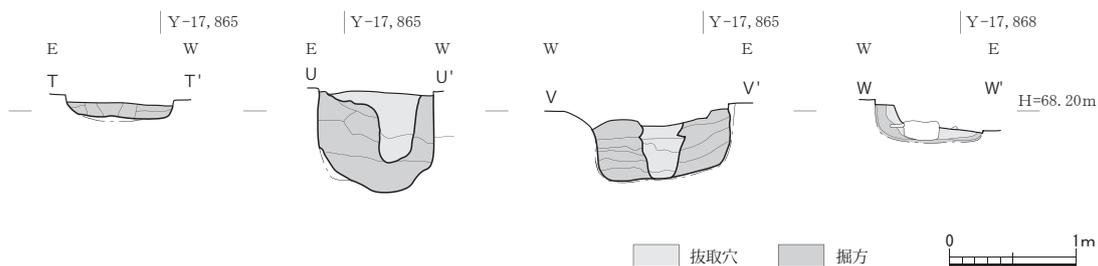


図86 掘立柱塀 SA11930 柱穴断面図 1:60

いは十字形に接続する可能性もある。さらに調査区の南外にも続く可能性がある。

南北方向の柱穴列のうち、北から1、2、5、10基目の柱穴と、東西方向の柱穴列のうち、西から2基目の柱穴で断割調査をおこなった。柱穴の深さは、北端の柱穴では、遺構検出面より約20cm(図86のT-T')、北から2基目の柱穴では約15cm(図85のS-S')、5基目の柱穴では約80cm(図86のU-U'、PL.38-6)、10基目の柱穴では約60cm(図86のV-V'、PL.39-1)。東西方向に並ぶ3基の柱穴のうち、中央の柱穴では約60cm(図86のW-W'、PL.39-2)。北の柱穴は浅く、南にいくにつれ深くなる。このうち、北から10基目の柱掘方では明褐色砂質土と灰黄褐色砂質土が3~10cmの厚さで互層に重なる。また、西に続く柱穴でも、柱掘方の上層と同様に黄褐色砂質土にぶい黄褐色砂質土が互層に重なり、柱の設置が丁寧におこなわれたことがわかる。

奈良時代前半に埋め立てられたとみられる大土坑SK11940と重複し、これに先行する。塀などの遮蔽施設であったと考えられる。

大土坑 SK11940 調査区中央で検出した東西約2.2m、南北約4.0m、深さ約1.0mの大形の土坑。埋土は①~⑩層の全10層に分かれ、上層・中層・下層の3層に大別できる(図87、PL.39-3)。上層は①~②層で瓦を多量に含む。中層は③~⑦層で、上層ほど遺物を含まないが炭が少量混じる。下層は⑧~⑩層で、木炭を多量に含む。上層、中層の埋土からは多量の瓦および竈や土師器の甕など調理に関する土器が出土した。そのため、埋土を取り上げ整理室で微細遺物の回収をおこなった。下層では木炭に混じり鍛造剥片など鍛冶関係の遺物が出土した。出土遺物は奈良時代前半が主体である。

中央に東西方向の畔を設定し、埋土を一層ずつ掘削し遺物の取り上げをおこなった。下層の⑧~⑩層は、木炭を多量に含むことから、少量の埋土を採取し篩にかけ分析したところ、鍛造剥片等の冶金関連の遺物を含むことが判明した。最終的には畔を含め完掘した。

掘立柱塀SA11930と重複し、これより新しい。

時期不明の遺構

柱穴 SP11931・SP11932 調査区中央南寄りで検出した2基の柱穴。柱掘方の平面は隅丸方形で、一辺0.8~1.1m。掘立柱塀SA11930より約60cm西に位置し、南北

に並ぶ。

柱穴 SP11933・11934 調査区西南部で検出した柱穴2基。調査区際に位置し、それぞれの柱穴の東半を検出した。柱掘方の平面形状ははっきりとはしないが、どちらも隅丸方形とみられ、一辺約1.0m。それぞれの柱穴の東側には対応する柱穴は確認しておらず、調査区の西外に展開すると考えられる。(川畑 純・高野 麗)

4 出土遺物

(1) 土器・陶磁器

第653次調査区からは整理用コンテナ6箱分、第656次調査区からは整理用コンテナ20箱分の土器・土製品が出土した。

奈良時代の土師器・須恵器のほかは南北溝SD11901・11902出土の中近世の土器・陶磁器類が中心で、古墳時代の埴輪などを少量含む。以下、各遺構・層位出土土器、および注目すべき遺物について記述する(図88~91)。

掘立柱建物 SB11920 出土土器 1は南側柱穴出土の須恵器杯B蓋。口縁部が屈曲しない笠形の形態で、外面全体に降灰を確認できる。2は身舎東北隅柱掘方出土の須恵器高杯の杯部。杯底部から緩やかに口縁部が立ち上がり、端部をわずかに折り曲げる。復元口径は28.0cm。軟質の焼成である。杯B蓋の可能性もあるが、口縁部の屈曲と端部の痕跡的な折り曲げの特徴から高杯の杯部とみた。3は北入側柱掘方出土の須恵器皿B。体部と口縁部の境に稜を有し、外面にヘラミガキを施す。4も北入側柱掘方出土の須恵器甕A。先行する掘立柱建物SB11921の東南隅柱掘方出土の破片と接合した。口頸部が大きく外反し、端部を内に折り返す。体部外面に平行タタキを施し、内面は無文当て具でおさえる。粘土紐の痕跡が明瞭に観察できる。色調は赤褐色を呈する。

掘立柱建物 SB11921 出土土器 5は北側柱穴出土の須恵器皿C。口縁端部をわずかに折り曲げる。口縁端部に平坦面をもつ。

掘立柱建物 SB11922 出土土器 6は北側柱抜取穴出土の須恵器高杯。杯底部から緩やかに口縁部が立ち上がる。口縁端部にわずかに沈線状の段を有する。復元口径は21.0cm。軟質の焼成である。7は北側柱抜取穴出土の須恵器甕の頸部。頸部径と器壁の厚さからみて大口径の甕Aと思われる。

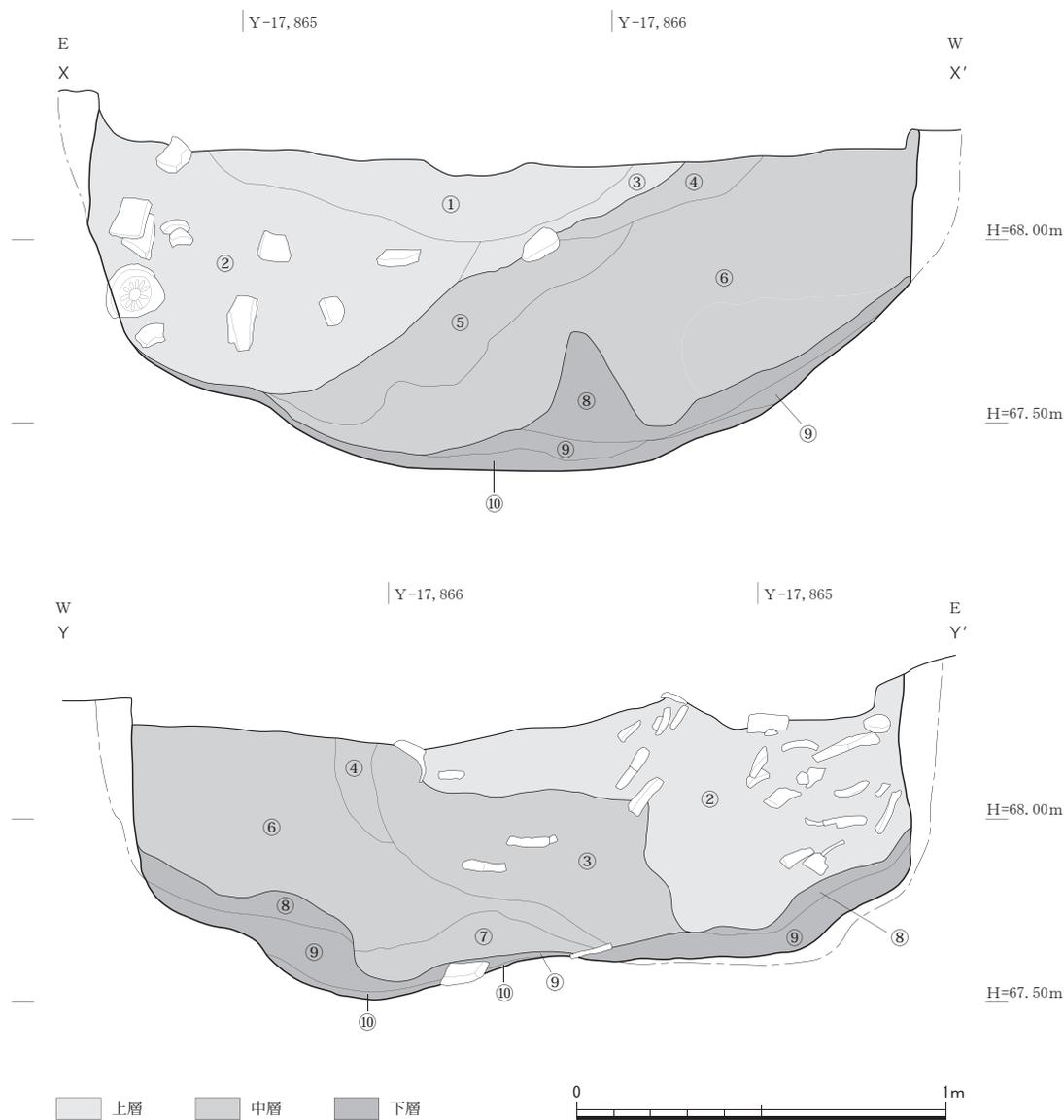


図 87 大土坑 SK11940 断面図 1 : 20

掘立柱建物 SB11923 出土土器 8は須恵器甕Aの頸部片。掘立柱建物SB11922出土の7と同一個体とみられる。東側柱穴出土。10は東側柱穴出土の須恵器杯Bの底部。高台が底部の屈曲部分につく。

掘立柱建物 SB11919 出土土器 11は北側柱穴出土の須恵器杯Bの底部。高台がやや内側につき、軟質の焼成である。

東西掘立柱塀 SA11929 出土土器 12は東から3基目の柱穴出土の須恵器杯Bの底部。高台が底部の屈曲部分につき、外面全体に降灰を確認できる。

掘立柱塀 SA11930 出土土器 9は北から7基目の柱穴出土の須恵器杯B蓋の口縁部。口縁部が屈曲する。

以上の1~12の土器はいずれも奈良時代の特徴を示す。
南北溝 SD11901 出土土器 浚渫前後のいずれの層からも近世の土師器・瓦質すり鉢・陶磁器が多量に出土している。

南北溝 SD11902 出土土器 上層・中層・下層から、奈良時代の土師器・須恵器とともに中近世の土師器・瓦質土器・陶磁器が出土した。13は下層出土須恵器杯B蓋。14は下層出土須恵器皿B。底部中心が下降し、高台部よ

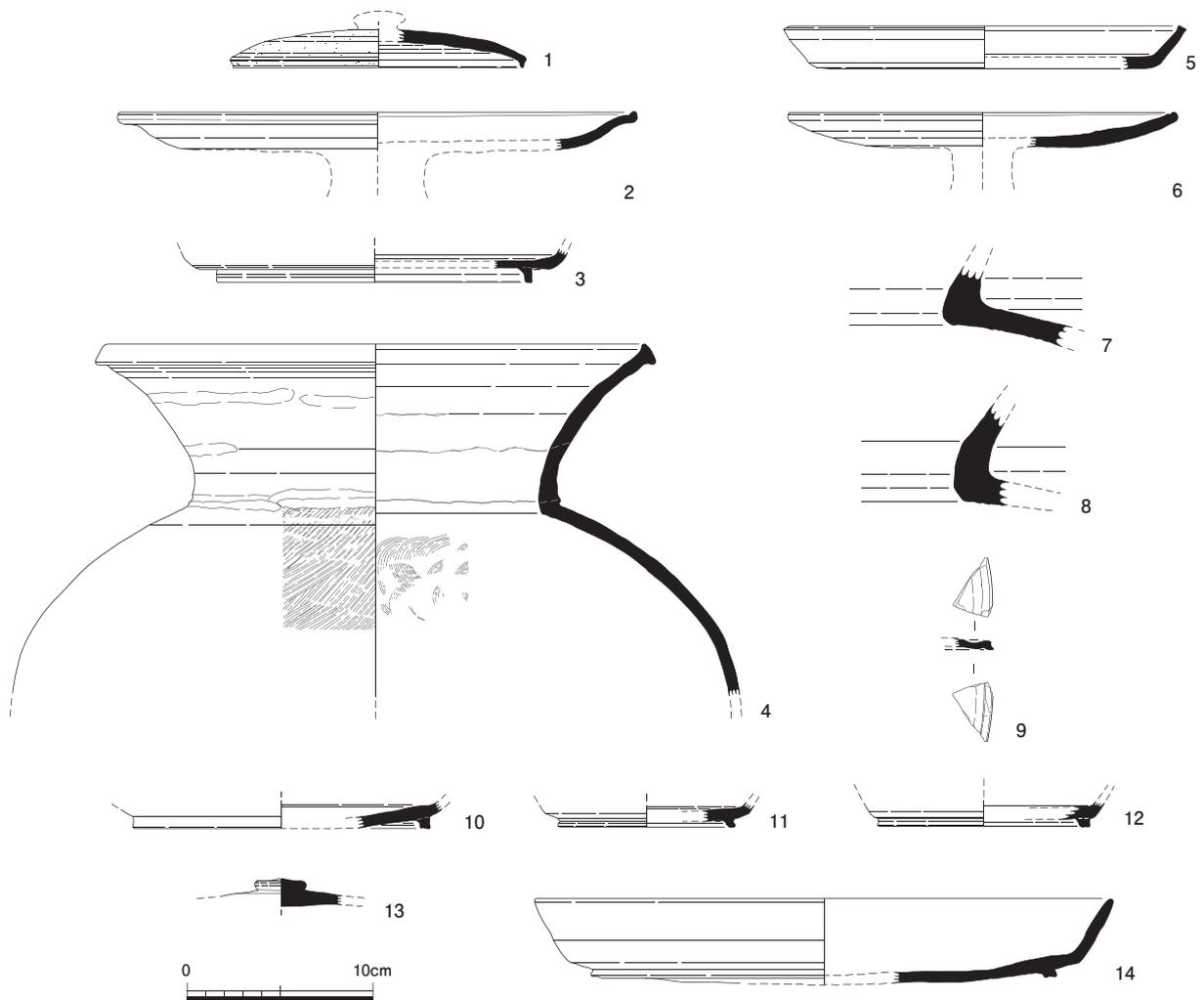


図88 掘立柱建物 SB11919・11920・11921・11922・11923、東西掘立柱塼 SA11929、掘立柱塼 11930、南北溝 SD11902 出土土器 1:4

りも低い。軟質の焼成である。

大土坑 SK11940 出土土器 整理用コンテナ5箱分の土器・土製品が出土した(図89・90)。15~23は土師器、24~42は須恵器。

15・16は杯C。15は摩滅により調整不明だが、16は外面体部下半にヘラミガキを施す。17は杯A。口縁部内面に連弧暗文と一段放射暗文を施す。外面はa0手法。18・19は皿A。いずれも内面に暗文を施す。20は甕A。外面に縦方向のハケメ調整、内面に横方向のハケメ調整を施す。外面にススが付着し、使用された痕跡を示す。21~23は竈。21は体部。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリのちナデ調整。22は廂部の破片。内外面ともナデ調整。23は底部から廂部の破片。外面はハケメ調整、内面はヘラケズリ調整。

24~26は杯B蓋。24は平坦な頂部から口縁部が屈曲し、端部を下方に折り曲げる。降灰および重ね焼き痕跡が確認できる。25は、扁平な形態で頂部外面はロクロケズリ。口縁部に降灰および重ね焼き痕跡が確認できる。26は頂部外面にヘラケズリを施す。宝珠つまみを貼り付ける。27は杯の口縁部から体部。28は皿C。底部外面にヘラ書きが確認できる。29は壺または瓶類の口縁部。30は鉢A。外面の口縁部から体部にヘラミガキを施す。31は鉢Fの底部。32~35は壺の底部。いずれも脚部をもつ。35は内面に同心円状の当て具痕跡が確認できる。36・37は平底の壺の底部。内面に降灰やススの痕跡が確認できる。いずれも内面に赤色物が付着し、銅などの金属を溶解した痕跡の可能性はある。38は甕Aの口縁部。39は甕Cの口縁部。肩部外面に平行タタキが確認できる。40は甕Aの

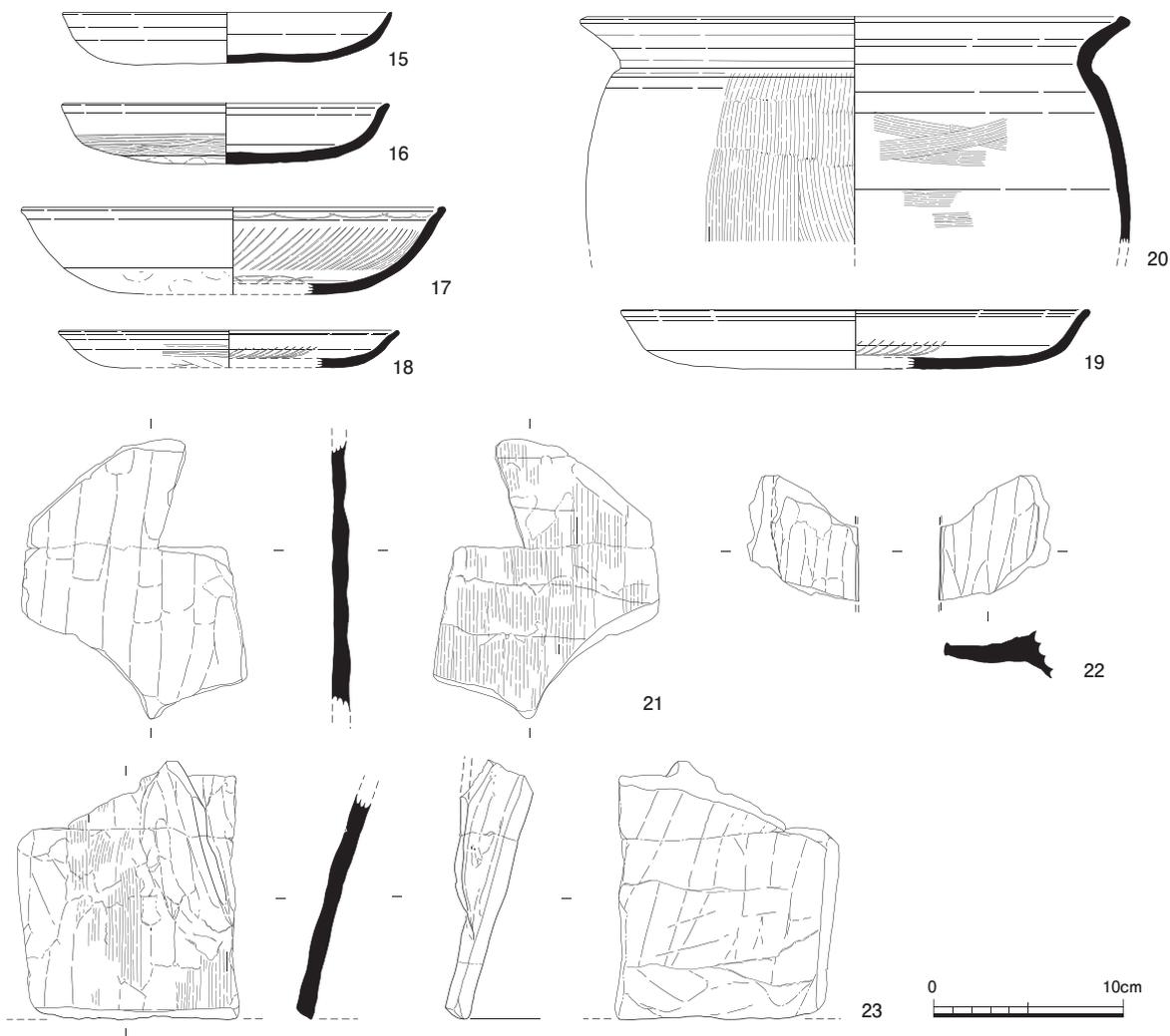


図 89 大土坑 SK11940 出土土師器 1 : 4

頸部。外面は格子目状タタキ、内面は当て具痕跡のナデ消しが確認できる。41・42は須恵器盤Aの底部。41は外面ヘラケズリののち、ナデ調整を施す。内面はヘラケズリ調整。42は内外面ともロクロナデ調整。

以上のように、大土坑 SK11940 からは食器類のほか、土師器の竈・甕や須恵器の鉢Fなど調理に関する土器、冶金関連に使用された可能性がある須恵器など、特徴的な土器類が出土した。年代は奈良時代前半が主体で、後半以降のものを含まない。

南北溝 SD11905 出土土師器・陶器 近世の土師器・染付、古代の須恵器・土師器・灰釉陶器が出土しているほか、飛鳥時代に属する須恵器横瓶・杯H・かえりのある杯B蓋片などが出土している。杯Hやかえりのある杯B蓋の

出土から、調査区周辺で隅寺（海龍王寺）に関連する時期の遺構・遺物の存在をうかがわせる。

南北溝 SD11904 出土奈良三彩・緑釉陶器 このほか注目すべき遺物として、南北溝 SD11904 から奈良三彩・緑釉陶器が出土した（図91）。43～45は瓶・壺・鉢など容器の体部の破片。43は外面に褐釉・緑釉を施し、内面はナデ調整で、釉は確認できない。44・45は外面に淡緑色の白釉と緑釉を施し、内面ナデ調整で、釉は確認できない。

46～48はいずれも淡緑色の釉を施す緑釉陶器。いずれも外面に沈線を施し、内面に釉は確認できない。47は透かし状の窓部分で側面にも釉が確認できる。長岡京期以降に出現する緑釉単彩陶器の火舎（風炉）の可能性はある²⁾。46は沈線の箇所が屈曲し他と異なるが、47・48は

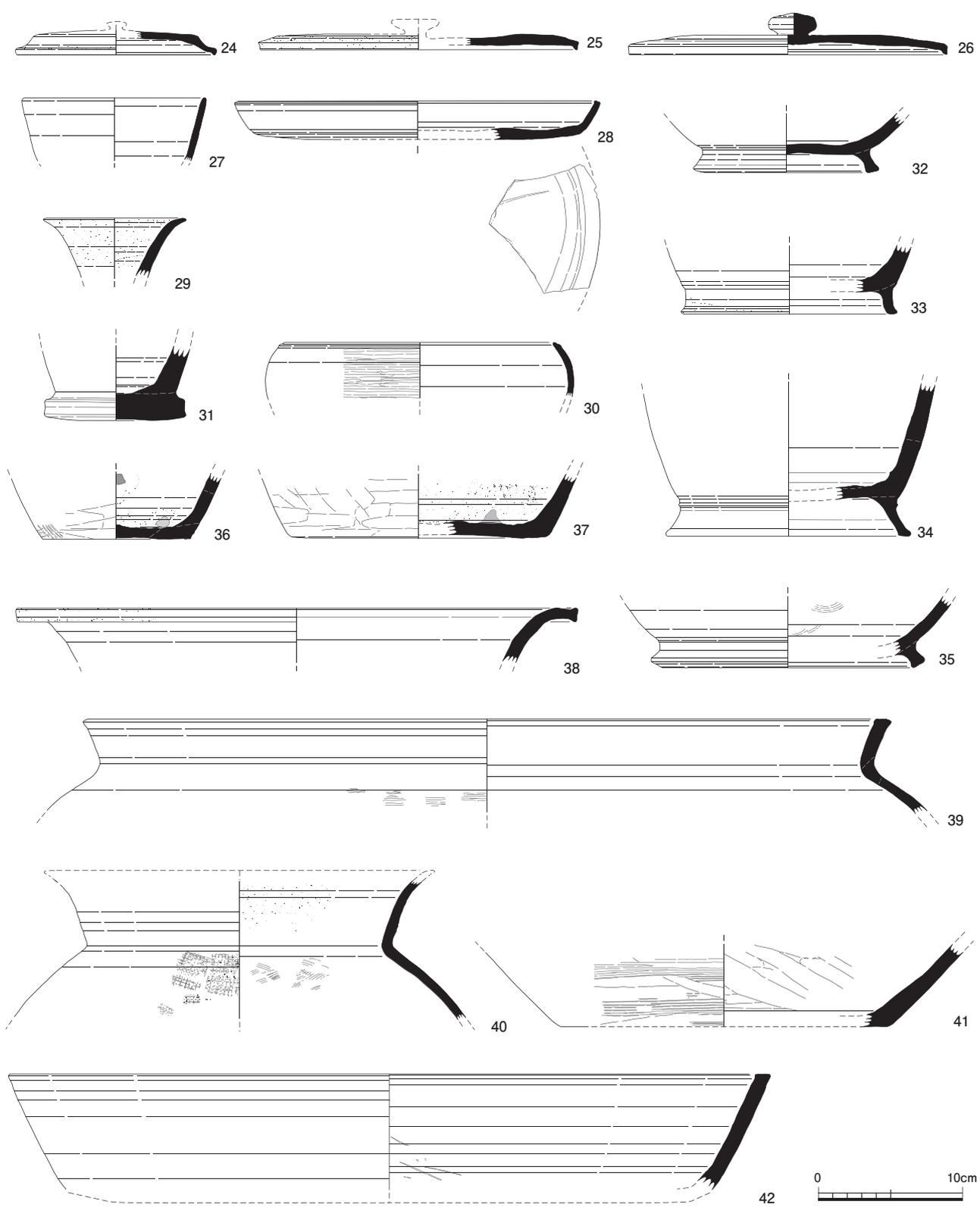


図90 大土坑 SK11940 出土須恵器 1:4

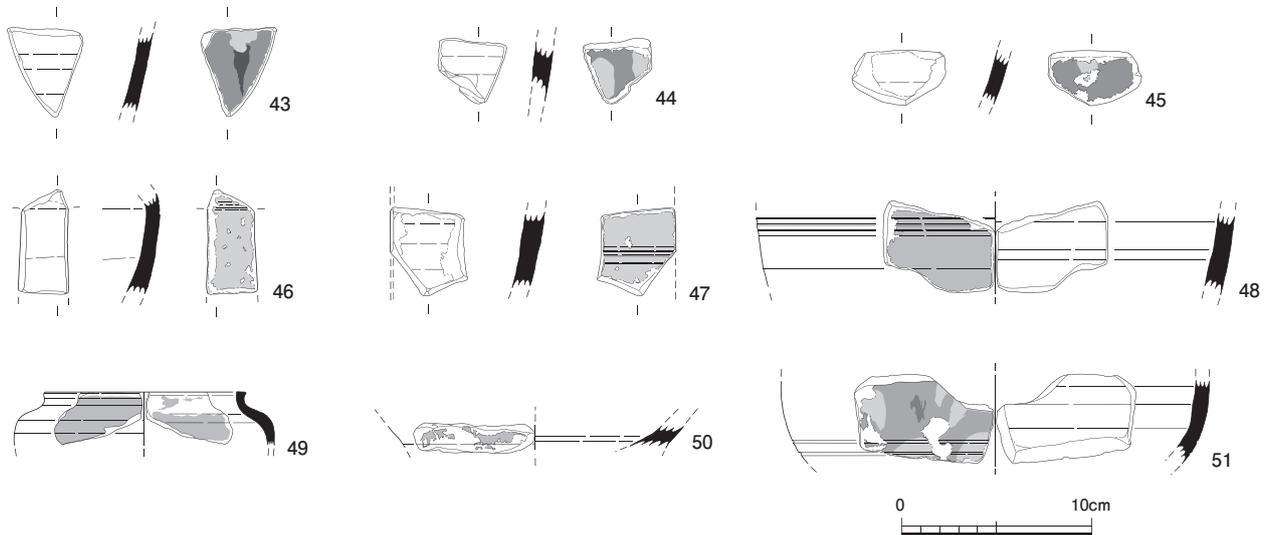


図91 南北溝 SD11904 出土奈良三彩・緑釉陶器 1:4

同一個体の可能性がある。

49は小壺の口縁部か。内外面ともナデ調整ののち釉を施す。また、内外面とも胎土の表面には薄い褐色の物質が確認でき、その上に淡黄色釉を施す。50は火舎（風炉）、もしくは瓶の底部から脚部。外面は緑釉を施し、内面はロクロナデ調整で、釉は確認できない。51は瓶の体部。外面に淡緑色の白釉および緑釉・褐釉を施す。また2本の沈線が確認できる。内面はロクロナデ調整である。

南北溝 SD11904 からはこのほかに、奈良時代から平安時代前期にかけての土師器・須恵器・黒色土器A類等が出土した。

これ以外の注目すべき遺物として、漆附着土器20点、円面硯1点、転用硯1点、灰釉陶器3点、灯明器18点が出土した。

(丹羽崇史・小田裕樹)

(2) 瓦磚類

調査区全体から出土した瓦磚類の概要は表12のとおりである（大土坑 SK11940 出土分を含む）。丸瓦 3,697点、約 457.6kg、平瓦 11,642点、約 1,191.9kg、磚 15点、約 10.2kgが出土した。その分布は図92のとおりである。丸瓦・平瓦ともに調査区東半からの出土が多いが、その多くが南北溝 SD11901 と南北溝 SD11905 からの出土である。また調査区南端の東西溝 SD11907 および近現代の遺物包含層からも多くの瓦が出土した。これらはいずれも近世以降の遺構ならびに包含層である。古代の遺構に関わる

ものでは大土坑 SK11940 から多くの瓦が出土した。

軒丸瓦は飛鳥時代のもの1点、奈良時代のもの39点、平安時代のもの4点、鎌倉から室町時代のもの5点、江戸時代のもの20点、時代不明のもの10点の計79点が出土した。軒平瓦は飛鳥から奈良時代のもの26点、平安時代のもの1点、鎌倉時代のもの4点、室町時代のもの4点、江戸時代のもの10点が出土した。そのほか軒平瓦に古代とみられるもの2点、中世とみられるもの6点、時代不明のもの11点があり、軒平瓦の合計は64点である。また軒棧瓦が3点出土した。

以下、主要な遺構ごとに出土した瓦を報告し、包含層や攪乱出土のものを最後にまとめて報告する。

大土坑 SK11940 出土瓦 軒瓦の型式・種・点数および丸瓦・平瓦の点数・重量を表13に、実測図を図93・94に示した。出土した丸瓦は645点、約86.0kg、平瓦は1,367点、約190.2kgで、軒丸瓦は12点、軒平瓦は17点である。大土坑 SK11940 は大きく3層に分かれるが、とくに上層から多くの瓦が出土した。

軒丸瓦は6271Cが1点、6276Gが2点、6285Aが7点、6301Aが1点、6301Dが1点出土した。1は6271C。藤原宮式で久米瓦窯産である。全体がやや摩滅しており調整などの詳細は不明。胎土に砂粒を多量に含む。2は6276G。藤原宮式で高台・峰寺瓦窯産である。瓦当裏面は部分的にケズリで仕上げる。外周部分には範の当たりの痕跡がみられる。2点出土しており、どちらも瓦当

表 12 第 653・656 次調査出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
時代・型式	種 点数	時代・型式	種 点数	種類	点数
飛鳥	1	重弧文	16	刻印 (丸瓦)	2
6138	A 2	6667	A 3	(平瓦)	3
	A? 1	6671	A 4	へら書 (丸瓦)	2
6271	C 1	6679	A 1	(平瓦)	3
6282	Ba 2	6721	C 1	三彩瓦 (平瓦)	1
	G 1	奈良	1	鬼瓦 (中世)	3
	H 1	平安	1	(近世)	2
	不明 4	古代	2	隅切平瓦	1
6285	A 8	鎌倉	4	鬘斗瓦	5
	A? 1	室町	4	箱鬘斗瓦	1
	不明 2	中世	6	面戸瓦	7
6301	A 2	江戸	10	雁振瓦	4
	D 2	時代不明	11	伏間瓦	2
奈良	12			目板瓦	3
平安	4	軒平瓦計	64	水返付瓦	1
中世	1			用途不明道具瓦	15
巴 (中世)	4			瓦製円盤	1
(江戸)	17	軒棧瓦		緑釉水波文磚	1
(時代不明)	1	時代・型式	点数	緑釉刻線文磚	1
江戸	3	江戸	2		
時代不明	9	時代不明	1		
軒丸瓦計	79	軒棧瓦計	3		
	丸瓦	平瓦	磚	凝灰岩	
重量	457.583kg	1191.947kg	10.235kg	4.374kg	
点数	3,697	11,642	15	8	

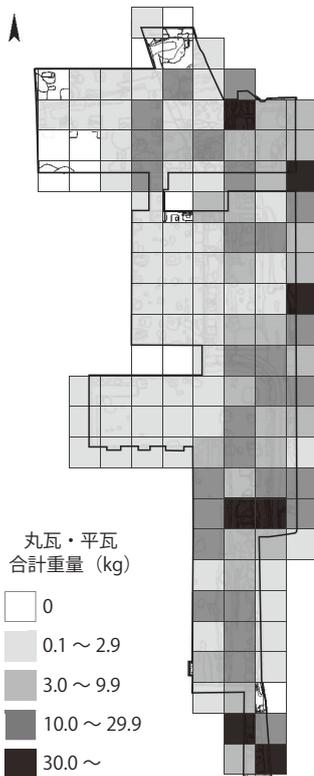


図 92 瓦の出土重量分布

には複数の範傷がみられる。

3~5 は 6285A。歌姫西瓦窯産で 6667A と組み合わせる。3 は瓦当面が 4.5cmほどと厚い。瓦当裏面をナデで仕上げわずかに窪ませる。丸瓦の先端上部は丸みを帯び、外面に接合用の刻みを入れる。4 は瓦当面 2.0cmほどと薄い。瓦当裏面が窪むほど強くナデつけ、さらに周縁にわずかにケズリを施す。丸瓦との接合部分は接合粘土が少なくほぼ直角をなす。外周部分には範の当たりの痕跡がみられる。5 は瓦当面の厚さ 3.0cmほど。丸瓦の先端はほぼ直角で外面にわずかに刻みを入れる部分がある。不明瞭であるが 3 → 4 → 5 の順で範傷が進行するとみられる。

6 は 6301A。興福寺の創建瓦で 6671A と組み合わせる。瓦当裏面はユビオサエで仕上げるが布目痕はみられない。外周部分には範の当たりが確認できる。やや判然としないが顕著な範傷は確認できない。7 は 6301D で興福寺式軒丸瓦である。興福寺創建時にやや遅れて補足用として使用されたものとされる。全体的に摩耗しており調整などの詳細は不明。

軒平瓦は重弧文軒平瓦が 14 点、6667A が 1 点、6671A が 2 点出土した。8・9 は四重弧文軒平瓦である。瓦当面全体が残っておらず弧線幅による復元ではあるが、8 と同様の弧線幅のものが 4 点、9 と同様の弧線幅のものが 7 点ある。そのほか四重弧文ではあるが摩滅により弧線幅が不明なものが 1 点ある。8 と同様の弧線幅のものは 7.5~9.5cm の粘土板を貼り付けて段顎を成形する。9 と同様の弧線幅のものは顎部が完存するものがなく顎部幅は不明である。いずれも顎部が剥離しているものが多く、平瓦部の凸面側となる内面には縦縄タタキ、斜格子タタキ、格子状刻み目を入れるものがあり顎部の接合を強めるための工夫とみられる。顎部成形のため貼り付けた粘土板の凹面側となる内面には糸切痕が明瞭にみられるものが

表 13 大土坑 SK11940 出土瓦磚類集計表

軒丸瓦		軒平瓦		その他	
時代・型式	種 点数	時代・型式	種 点数	種類	点数
6271	C 1	五重弧文	2	刻印 (丸瓦)	1
6276	G 2	四重弧文	12	へら書 (丸瓦)	1
6285	A 7	6667	A 1	(平瓦)	4
6301	A 1	6671	A 2	鬘斗瓦	1
	D 1			面戸瓦	5
				磚	1
軒丸瓦計	12	軒平瓦計	17		
	丸瓦	平瓦			
重量	86.035kg	190.246kg			
点数	645	1367			

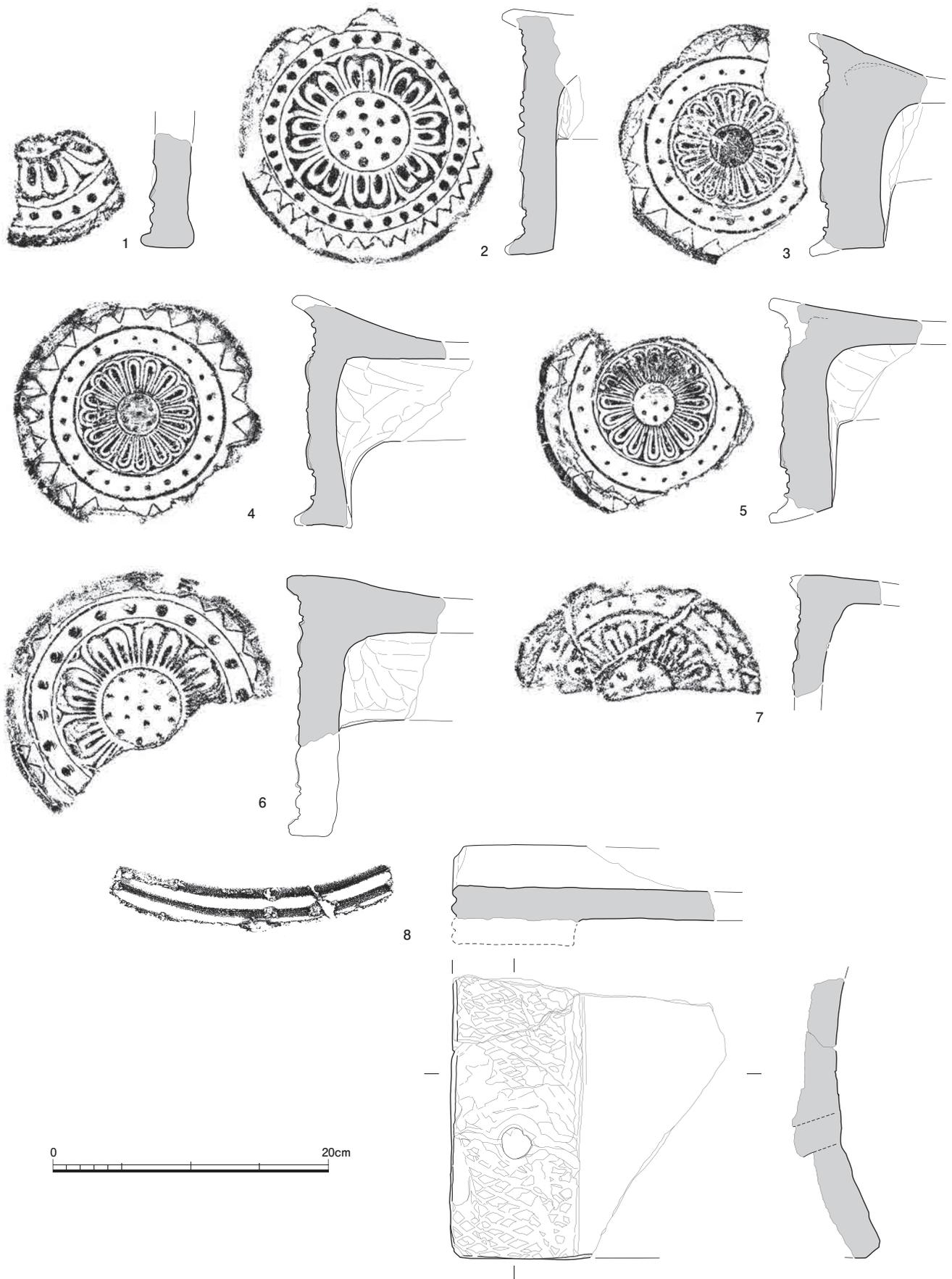


图 93 大土坑 SK11940 出土瓦 (1) 1 : 4

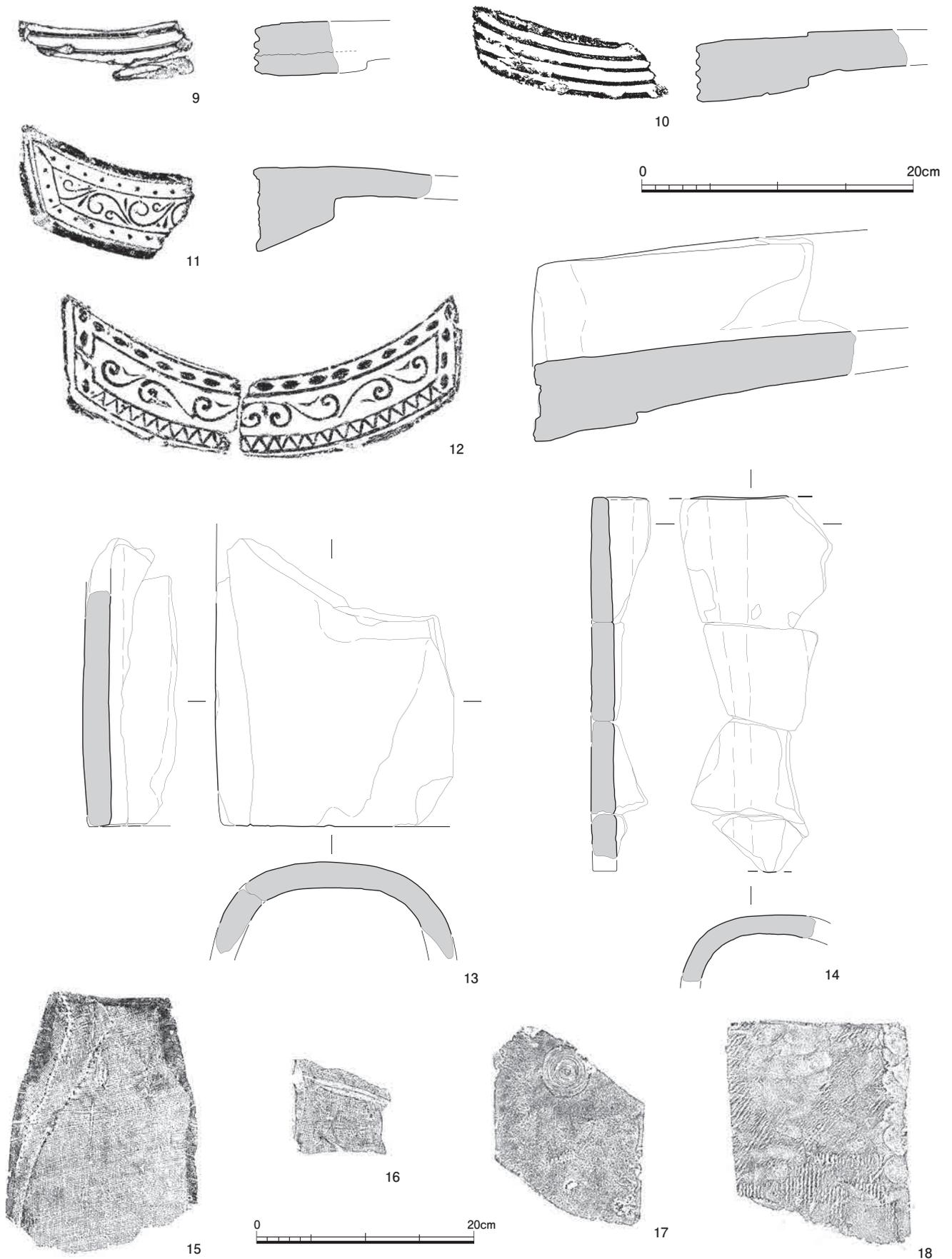


図94 大土坑SK11940出土瓦(2) 1:4(9~12) 1:5(13~18)

あり、顎部の粘土板は粘土塊から糸切により切り出したことがわかる。また8では平瓦部と顎部に一連で2.1~2.5cmの孔をあけその中に円柱状の粘土塊を差し込んでいる。平瓦部と顎部の接合を強化するための工夫であろう。10は五重弧文軒平瓦である。模骨痕と粘土板の合わせ目がみられ、粘土板桶巻造りでの成形による。顎部は長さ8.5~10.0cmの粘土板を貼り付けて段顎を成形する。顎部にも胴部と一連の縦縄タタキ痕が残る部分があり、桶からの分割の前に顎部を接合したことがわかる。凹面の瓦当付近のみ強くヨコケズリをおこなう。

11は6667A。先述の通り歌姫西瓦窯産で6285Aと組み合わせる。表面は摩滅しており調整などの詳細は不明。12は6671A。先述の通り興福寺の創建瓦で6301Aと組み合わせる。顎部は段顎で長さは約8.0cm。顎面から平瓦部凸面にかけてヨコナデするが、一部で縄タタキの痕跡が残る。凹面には布目が残る瓦当付近の3.0~4.0cmをヨコケズリする。模骨痕は判然としない。瓦当側面から平瓦側面にかけてタテケズリする。

これらの軒瓦のうち6276Gの1点、6301Aの1点、重弧文軒平瓦の1点が中層からの出土で、そのほかはいずれも上層からの出土である。

6285A-6667Aの組み合わせは平城瓦編年のⅡ-1期に、それ以外はいずれも藤原宮式またはⅠ期に位置づけられる。中層に含まれる軒瓦が相対的に少ないので確定は難しいが、他の瓦よりも相対的に新しい6285A-6667Aの出土が上層に限られることは、上層と中層が埋められた年代に開きがあった可能性を示唆する。ただし発掘調査時の所見として上層は掘り直しによるものではなく中層から一連で埋められたものとみられることから、瓦の年代差を遺構の年代差と結びつけるのも難しい。あるいは出土層位と瓦の年代差の関係を有意とみなすのであれば、使用されていた建物の違いが廃棄時のまとまりの違いとして現れた可能性も想定できる。

道具瓦として用途不明の袖瓦状のものがある。通常の平瓦に類似するが全体として一定の曲率で緩やかな弧状をなすのではなく、側端部付近でのみやや強く屈曲し、その他の部分はほぼ平坦となる。15点あり、縦横ともに完存するものはないが、幅は完存する13で27.4cm、長さは接合関係がやや判然としないが14で約40.4cmである。いずれも焼成が甘く表面の摩滅が著しいが凹面は布目痕

を残し、凸面には縦縄タタキ痕が残る。粘土板の接合痕とみられる部分を残すものがあり、だとすれば通常の平瓦と同様の手法で成形した後に、一部を平坦にして整形したものと想定できる。用途は確定できないが形態から大棟の最上段に載せる伏間瓦状の使用法が想定できる。

ヘラ書き瓦として、15は丸瓦凹面に「十」字を記す。16は平瓦凹面に「夫」に一を加えた字を記す。「秦」字から「禾」を省略したものとされる³⁾。その他の文字は判読できない。

17は丸瓦凸面の側縁部付近に径3.6cmの円形の刻印をもつ。円形の刻印としたが窪み部分に円弧状をなすケズリ痕がみられることから、何らかの工具を当てて回転を加え削り取ったものとみられる。18は平瓦凸面の側端に円形の工具の打ち込み痕が並んでみられる。円形の打ち込み痕は径2.5cmほどで重なりつつ7個並んでいる。打ち込み痕の端は平瓦側縁のケズリによって切られる。一部では内面に木目痕がみられることから木製の工具を打ち付けたものであることがわかる。平瓦凹面には模骨痕があり平瓦の成形は粘土板桶巻造りによるものだが、この円形の打ち込みは平瓦凸面のタタキの後におこなわれその後平瓦分割にともない切られている。こうした造作の目的は不明である。

東西掘立柱塚 SA11929 出土瓦 図95の19は東端の柱抜取穴から出土した6285Aである。全体的に摩滅しており調整等は不明である。

南北溝 SD11904 出土瓦 6667Aが1点出土した。

掘立柱建物 SB11920 出土瓦磚 20は北入側柱の東から3基目の掘方から出土した緑釉水波文磚である。四辺すべてが失われているため正位置は不明であるが現存長22.4cm、現存幅12.6cm、厚さ5.0cmである。表面には部分的に緑釉が残る。緑釉の遺存状態が不良なため詳細は判然としないが、緑色の発色が濃い部分とやや薄い部分があり、濃淡の違う2種の緑釉が用いられた可能性もある。胎土は精良で釉薬がみられない地の部分は深い明黄褐色である。裏面には布目痕が残る。

表面には水波文が線刻され、中央よりやや寄った一部が山状に高く盛り上がる。盛り上がりの範囲は縦7cm、横5cmほどで、高さは現状でもっとも高い部分で0.7cmほどであるが、頂部を欠失しており本来はもっと高く盛り上がるものとみられる。尾根と谷状の表現が認められ、

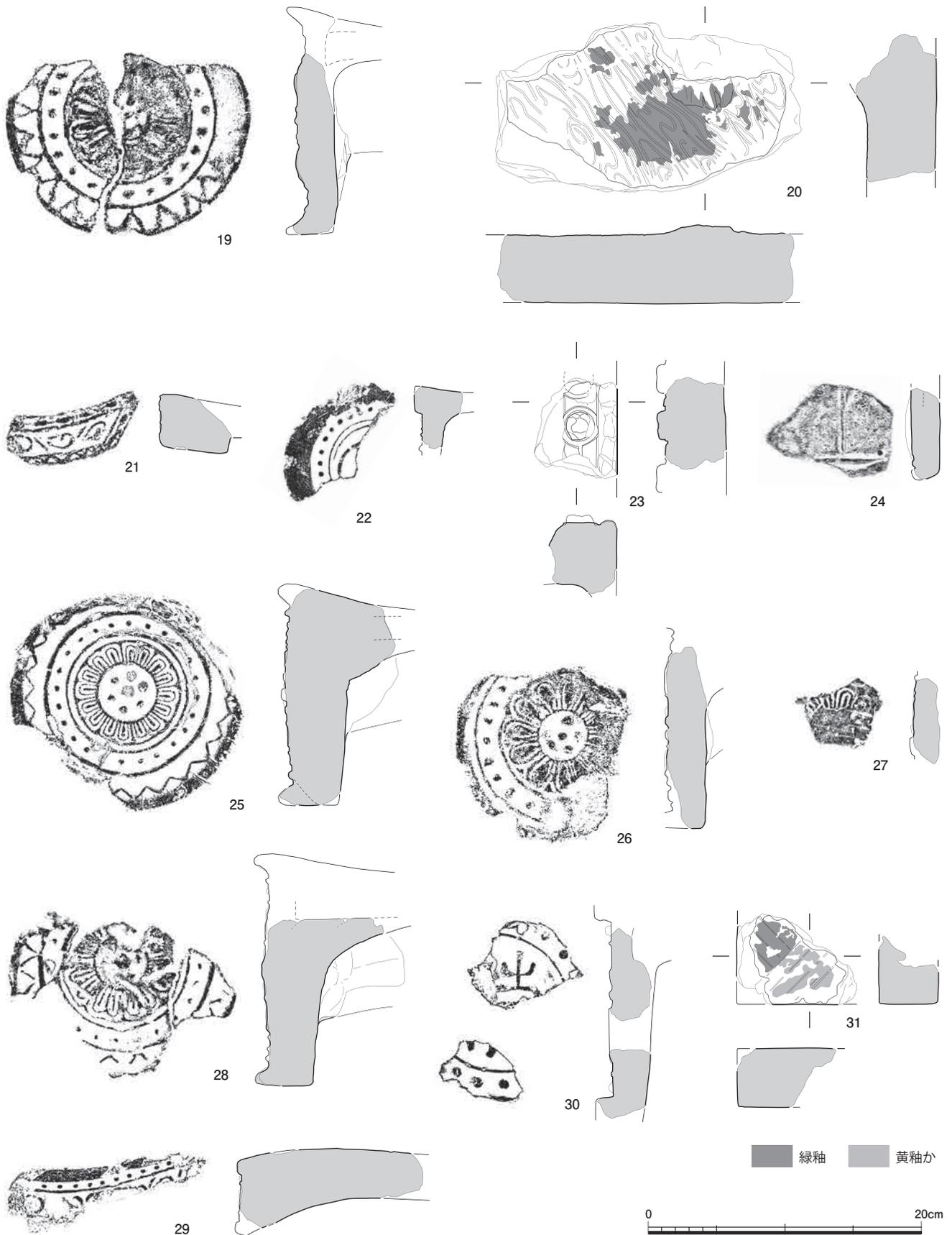


図 95 その他の遺構・包含層出土瓦磚類 1:4

山を表したものと考えられる。山とそれを取り巻く水波文の表現から、須弥山を中心に山と海が幾重にも取り囲む九山八海を表現したものと考えられる。

近世以降の遺構出土瓦磚 南北溝 SD11901 からは奈良時代から江戸時代までの瓦が出土した。軒瓦では奈良時代のものは 21 の 6679A が 1 点出土した。顎部の形態は段顎で、平城瓦編年Ⅱ-2 期に位置づけられる。平安時代のものは軒丸瓦が 1 点出土したが、細片のため詳細は不明である。鎌倉時代から室町時代のものは 22 の巴文軒丸瓦が 1 点出土した。江戸時代のものは軒丸瓦 8 点（うち 6 点が巴文軒丸瓦、2 点は文様不明）、軒平瓦 4 点、軒棧瓦 2 点が出土した。他にも中世の鬼瓦が出土した。23 は鬼瓦の外縁の珠文部分で、他にも同様のものが 1 点ある。

南北溝 SD11902 からは 6285 型式（種不明）が 1 点、6667A が 1 点、細片であるが平安時代とみられる軒丸瓦が 1 点出土した。

南北溝 SD11905 からは飛鳥時代から江戸時代までの瓦が出土した。24 は角端点珠型式の素弁 8 弁蓮華文軒丸瓦である。奥山廃寺Ⅱ B 式と同範⁴⁾だが細片のため詳細は不明である。25 は 6282Ba である。瓦当裏面の丸瓦接合部は接合粘土が多く厚手で瓦当裏面から直角に立ち上がり、接合部の平面形は台形状をなす。遺存状態が良好なものではいずれも範傷は認められない。平城瓦編年Ⅱ-2 期の生産で皇后宮または「宮寺」時に使用されたものとみられる。軒平瓦は 6671A が 1 点出土した。そのほか鎌倉から室町時代の巴文軒丸瓦が 2 点、江戸時代の巴文軒丸瓦が 1 点、時期不明の巴文軒丸瓦が 1 点、中世の鬼瓦が 1 点出土した。

包含層および攪乱出土瓦磚 26 は 6138A。単弁蓮華文軒丸瓦で間弁は短く三角形を呈し、弁区全体が高く盛り上がる。3 点が出土したがいずれも細片化または摩滅のため製作技法や調整の詳細は不明。3 点とも包含層および床土からの出土。平城瓦編年Ⅳ-1 期に位置づけられる。27 は 6282G で 28 は 6282H。どちらも包含層出土で平城瓦編年のⅡ-2 期に位置づけられる。29 は 6721C。瓦当面の大半が失われている。顎部は曲線顎である。6282B と組み合い平城瓦編年のⅡ-2 期に位置づけられる。30 は珠文縁文字文軒丸瓦で瓦当に「法」の古体字を飾る。丸瓦接合式であることを確認できるが、その他の製作技法などは不明。薬師寺に同范例がある（『薬師寺発掘調査報告』

の 96)。平安時代後半。そのほか軒瓦では 6282Ba が 1 点、鎌倉から江戸時代の軒丸瓦・軒平瓦が出土した。江戸時代の軒瓦はとくに調査区南端付近からの出土が多く、鬼瓦 2 点も含まれる。

31 は刻線文磚で調査区北部の攪乱坑内から出土した。現存長 6.5cm、現存幅 8.7cm、厚さ 4.4cm。角は失われているが二辺が遺存する。胎土は精良で釉薬がみられない地の部分は灰白色である。表面には 4 条の並行する刻線文とそれに直交する 3 条の刻線文が区画を分けて配される。刻線の間隔は約 1.0cm である。表面全体が施釉されていたとみられるが、現状では図左上の区画のみ黄色から緑色を呈しており、右下の区画では判然としない。本来は並行する刻線文が施される区画ごとに緑釉と黄釉で塗り分けられていたとみられる⁵⁾。

他にも攪乱坑内より三彩瓦が 1 点出土した。（川畑）

(3) 木製品・金属製品・石製品ほか

鉄角釘、木片、鞆羽口、提碁等が少量出土しており、いずれも細片で図化できるものはない。このほか、掘立柱建物 SB11918 の柱穴から水晶の細片、掘立柱建物 SB11925 の柱穴から礎板と思われる石材も出土している。

注目されるのは、大土坑 SK11940 から出土した冶金関連遺物である。埋土を持ち帰って 0.5mm メッシュの篩にかけたところ（表 14）、鞆羽口片、鉄滓や銅滓、鍛造剥片、木炭等を確認できた（PL45）。鞆羽口はごく微細な小片 9 点のみで、全容は不明。鉄滓は合計重量 366.1g で、もつとも残りの良い椀形鉄滓は長径 10.7cm、厚さ 3.9cm、重さ 245g。銅滓は微量で赤褐色を呈する。銅滓が付着した須

表 14 大土坑 SK11940 出土冶金関連遺物一覧

層位名	鍛造剥片	鉄滓	木炭	その他
上 ②層	—	—	0.41g	
層 ③層	—	—	0.60g	
中 ④層	0.11g	—	1.78g	
層 ⑤層	0.09g	—	3.57g	
層 ⑥層	—	—	0.01g	
層 ⑦層	—	—	0.88g	
下 ⑧層	15.93g	355.00g	255.84g	鞆羽口片、銅滓
層 ⑨層	2.03g	7.10g	—	安山岩片
層 ⑩層	3.12g	4.00g	62.00g	鞆羽口片、取瓶、銅滓
合計	21.28g	366.10g	325.09g	

恵器甕の体部片が1点あり、取瓶に転用したものでろう。鉄鍛冶を示す鍛造剥片は1mm前後の小片だが、木炭とともに各層から出土した。なお、②層および⑨層からは安山岩片が出土しており、被熱痕や敲打痕は認められないが、金床石の破片の可能性もあろうか。(和田一之輔)

5 遺構変遷・考察

(1) 遺構変遷

古代の遺構 調査区中央にある田境の北と南では古代以前の遺構が重複していないため、調査区の北半と南半でそれぞれの遺構変遷を検討する。

北半では、南北溝 SD11903、掘立柱建物 SB11918～11924 を検出した。これらは互いに重複しており、先後関係は SB11924 → SB11923 → SB11922 → SB11921 → SB11920 → SB11919 または SB11918 と想定でき、SD11903 は SB11918・11919 より前に開削・埋立てされている。

柱穴の規模については、初期に建設された掘立柱建物 SB11922～11924 の掘方の深さは検出面から 35～60cm で、後続する掘立柱建物 SB11918～11920 の掘方の深さが検出面から 60～80cm であるのと比べて浅い。また、掘方の平面規模は、SB11918～11920 は長辺が 1.0～1.2m であるが、SB11922・11924 は一辺 80cm ほど、SB11923 は小さい柱穴では一辺 70cm ほどで、SB11918～11920 と比べて小さい。さらに、SB11918・11920 の一部の柱穴では、柱の下に平瓦を敷く点が共通する。

こうした柱掘方の平面規模や柱据え付け方法の違いから、初期に建設した建物は、柱径が小さいために柱掘方の平面規模も小さく、深度も浅かったが、後の建物は柱径が大きくなったために、柱掘方の平面規模も大きく、深度も深くなり、さらに沈下対策として石材や瓦を使用した可能性が考えられる。こうした建物規模の変化は掘立柱建物の建設の順序とも整合する。

これらの掘立柱建物の柱穴から出土した土器はすべて奈良時代に属する。またいずれも正方位で建設されている。そのためこれらの掘立柱建物はいずれも奈良時代のもと考えられる。ただし、重複する建物の数が多いことから、奈良時代のみではなく、一部は平安時代に及ぶ可能性も否定できない。

南半では、南北溝 SD11904、掘立柱建物 SB11925、東西掘立柱塀 SA11929、掘立柱塀 SA11930 および大土坑

SK11940 を検出した。これらは重複関係と出土遺物の年代から、SA11930 → SK11940 → SD11904 → SA11929 と変遷する。SB11925 の時期ははっきりしないが、出土遺物の年代から SA11930 よりも新しいとみられる。

中世以降の遺構 中世頃の遺構は、南北溝 SD11902・11905 である。これらは重複しておらず、先後関係がはっきりとしない。

近世以降の遺構は、南北溝 SD11901、土坑 SK11941・11942 である。南北溝 SD11901 が埋め立てられた後に、SK11941・11942 が掘りこまれ、周辺の瓦や土器などを捨てこんだとみられる。

(2) 南北溝 SD11901～11903 の検討

南北溝 SD11901～11903 はほぼ同位置に掘られた南北溝で、調査区北半では3条の溝が重なる。もっとも新しい SD11901 は、SD11902 を埋め立て、近い時期に掘り直したものと考えられる。SD11901 が SD11902 を踏襲したものとすれば、現状調査区の中央付近でとぎれる SD11901 は当初さらに南側に続いていたが、後世の削平により失われたことになる。

一方、南北溝 SD11901・11902 と南北溝 SD11903 の関係は、① SD11901・11902 が SD11903 の流路を踏襲した、② SD11903 が一度廃絶し、後世に SD11901・11902 を開削した、の2つの可能性がある。

①の南北溝 SD11903 の流路を踏襲していた場合、SD11903 を埋めた後に掘立柱建物 SB11918・11919 が建てられているため、SB11918 あるいは SB11919 の東に位置を変えて SD11903 に代わる南北溝が掘られたと考えられる。現状 SD11903 の南端は調査区中央付近でとぎれるが、SD11901・11902 と同様に調査区の南までほぼ直線に伸びていた可能性がある。その場合、調査区を東西に横断する掘立柱建物 SB11925 や東西掘立柱塀 SA11929、掘立柱塀 SA11930 と重なるため、調査区全体の遺構の造営と廃棄の順序を推定することができる。

南北溝 SD11903 からは年代が確定できる遺物が出土していないため、時期の確定が困難である。一方、掘立柱建物 SB11925、東西掘立柱塀 SA11929、掘立柱塀 SA11930 からは奈良時代の土器が出土している。また、これらの後に掘削される大土坑 SK11940 から奈良時代前半を主体とする遺物が出土しているため、SA11929・11930 も奈良時代前半とみられる。遺構の重複関係から

SD11903がそれら以前に造営され、そのまま流路が近世頃まで踏襲されたとは考えにくく、SA11929あるいはSB11925の廃絶後にSD11903が開削されたと考えられる。その場合、北側にある掘立柱建物群のうち、確実にSD11903より新しいSB11918・11919は、南側の掘立柱建物、掘立柱塀群が廃絶した後の造営となる。SB11920～11924については厳密には先後関係を確定できないが北側の掘立柱建物群は比較的近い時期に建て替えられたと考えられるので、大きな時期差はないものとみられる。そうすると、奈良時代前半頃にまず調査区の南半で土地利用が始まり、これらの廃絶後に、SD11903の開削と、調査区西北部の掘立柱建物群の造営がおこなわれたと推定できる。

以上から、東西掘立柱塀SA11929あるいは掘立柱建物SB11925の廃絶後に南北溝SD11903が開削されたと考えた場合、検出した遺構は大きく3段階の変遷として理解することが可能となる(図96)。すなわちⅠ期：調査区南半の遺構群の段階(掘立柱塀SA11930・大土坑SK11940・南北溝SD11904・東西掘立柱塀SA11929・掘立柱建物SB11925)、Ⅱ期：調査区北半の遺構群の段階(掘立柱建物SB11920～11924・南北溝SD11903)、Ⅲ期：調査区北半の2棟の東西棟掘立柱建物の段階(掘立柱建物SB11918・11919)である。この場合、Ⅰ期は奈良時代前半を中心とする時期、Ⅱ・Ⅲ期はその後の奈良時代中頃以降で、特にⅢ期は奈良時代後半から平安時代にかかる可能性も想定できる。

なお、②とした南北溝SD11903が一度廃絶した場合には、SD11903の南の流路はSD11901・11902と全く別であった可能性が想定される。この場合、調査区北半と南半の遺構が重複しないため、先後関係の推定ができないことになり、調査区北半と南半の建物群・掘立柱塀が並存していた可能性もありうる。その場合、Ⅰ期とした南半の遺構群とⅡ期とした遺構群のうち早い段階のものは奈良時代前半に併存していたことになり、Ⅰ期とⅡ期は明確な時期差としては区分できないことになる。

(3) 遺構変遷に関わる考察

Ⅱ期でも早い段階に建設された掘立柱建物SB11922とSB11924は、柱穴の位置、柱間寸法が同じで、南北軸もほぼ揃えるが、柱穴の重複関係より別時期の建物である。建物の用途としては、建物の規模や柱間寸法が小さいこ

とから、住空間としてではなく、倉庫類などの可能性がある。特にSB11924は南側柱の1間北に間柱があると考ええると、南側の空間がさらに狭くなる。敷地内におけるバックヤード的な空間として使用されていたことを示すものであろう。

続く掘立柱建物SB11921は解体後の抜取穴の埋め戻しを非常に丁寧におこなっており、Ⅱ期のうちでもっとも新しい掘立柱建物SB11920の建設に先立つ造作と考えることができる。掘立柱建物SB11920は、南北両面廂をもつ東西6間以上、柱間寸法約3m(10尺)等間の大型建物である。柱掘方から緑釉水波文磚が出土したことから奈良時代後半の可能性が考えられる。建物規模や位置から法華寺の東北部域または海龍王寺の西北部域における主要な建物とみられる。当該時期にはバックヤード的な空間から中枢施設を伴う空間へと、土地の利用形態が大きく変わったことがわかる。

Ⅲ期の掘立柱建物SB11918・11919については、重複していないため先後関係ははっきりとしない。ただし、柱穴の位置や、柱穴の平面規模・柱間がほぼ同じで、南北軸を揃えること、SB11918の南側柱とSB11919の北側柱の間隔が20尺であることから計画的な配置がうかがえる。同時期に建設され、並存していたとみられる。

大土坑SK11940は、周辺の不要品を捨てこんだ廃棄土坑とみられ、奈良時代前半における当調査区の土地の利用方法を検討できる貴重な遺構である。上層・中層は炊事関連の土器や多量の瓦、下層は鍛造剥片や木炭を多量に含む。大土坑SK11940の周囲では炊事施設や冶金生産施設が存在したと考えられる。掘立柱建物SB11922・11924とともに当該地のバックヤード的な性格を示すのであろう。

調査地周辺の状況はまだ不明な点が多いが、海龍王寺については『続日本紀』や正倉院文書などに「隅院」や「隅寺」の名で現れる。その寺域の東限は東二坊大路だが、これは平城京の条坊からずれることから先行する条里に基づき寺域が定められたとされる。ただし、法華寺と海龍王寺、あるいは光明皇后宮と「隅院」「隅寺」の敷地の境界については定かではない。南北溝SD11903・11904、掘立柱塀SA11930は敷地の境界として機能していた可能性がある。今後はこれらの条里あるいは条坊の理解にもとづくさらなる検討を要する。(高野)

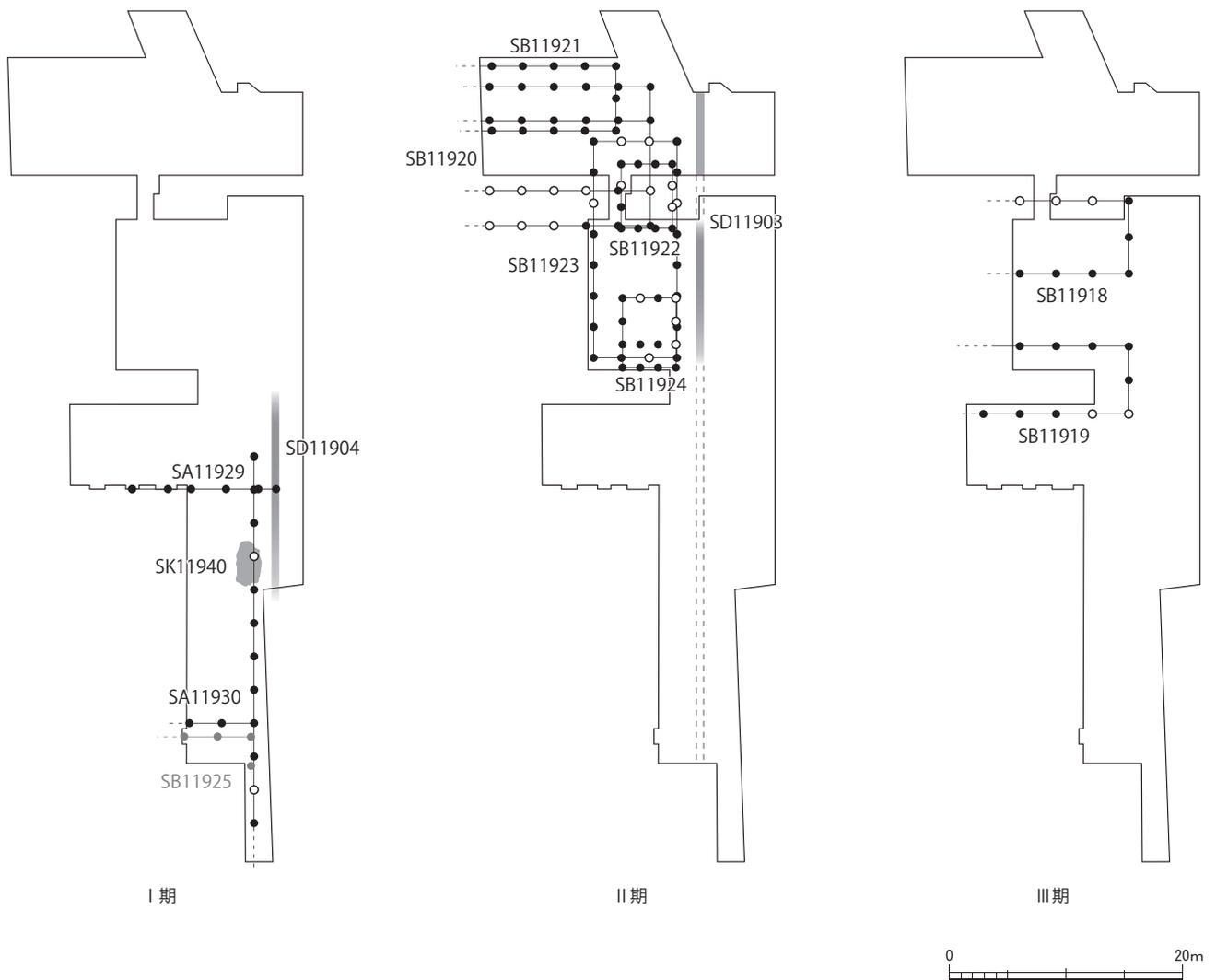


図96 第653・656次調査 遺構変遷図(古代) 1:600

(4) 大土坑 SK11940 出土瓦の性格

大土坑 SK11940 からは軒丸瓦 12 点、軒平瓦 17 点、計 276kg におよぶ丸瓦・平瓦が出土した。これらの軒瓦は先述の通り藤原宮式軒瓦と平城瓦編年の第Ⅱ-1 期までのもので占められる。Ⅱ-1 期は養老 5 年 (721) 頃から天平初頭頃までの年代が与えられている。すなわち大土坑 SK11940 出土軒瓦は 730 年代前半頃までに製作されたもののみで占められることになる。瓦は通常使用期間が一定期間に及ぶのでこの年代がただちに大土坑 SK11940 の掘削と土器・瓦の廃棄年代を示すものではないが、少なくとも当地において天平初頭頃までに造営された建物に使用された瓦の実態を示す良好な資料群と理解できる。

出土した軒瓦のうち、6271C・6276G は藤原宮式で、五

重弧文・四重弧文軒平瓦も藤原宮・京や飛鳥地域で出土する。これらは平城京への遷都にともない当地が藤原不比等邸として使用されるにあたり搬入されたものと理解できる。興福寺所用瓦である 6301A-6671A と 6301D も同様に不比等邸の段階で製作され使用されたものであろう。一方の 6285A-6667A はⅡ-1 期の生産であり、藤原不比等死去後にその邸宅を光明子邸として改築した際に用いられたとされている⁶⁾。

当地における奈良時代前半の大規模な造営事業が想定されるものとして不比等邸造営・光明子邸への改築とともに、天平元年 (729) の光明子立后とその後の皇后宮の造営がある。軒瓦の年代観からは 6285A-6667A の組み合わせを皇后宮の造営にともなうものと解する余地はある。

他方、法華寺旧境内から多数出土する 6282Ba-6721C をⅡ-2期の生産として法華寺造営以前の皇后宮にともなうものとする理解⁷⁾に則るのであれば、その前段階にあたる 6285A-6667A はやはり光明子邸にともなうものとなる。すなわち 6285A-6667A についてはⅡ-1期のうちでも不比等死後、皇后宮造営までに製作されたものとして 720~729年の製作とするより限定した年代を想定できることになる。

以上と考えれば大土坑 SK11940 出土瓦は当地が藤原不比等邸・光明子邸であった段階に使用されたものが廃棄されたものとして理解できる。同じく出土した食器類・調理に関する土器、冶金関連に使用された可能性がある須恵器なども不比等邸・光明子邸で使用されたものと理解することができよう。

大型の廃棄土坑が設けられそこに多数の土器・瓦が捨てこまれた理由として、当地の皇后宮への改変にともなう不要品の廃棄を想定できる。大土坑 SK11940 の掘削をこのように理解するならば、それに壊される掘立柱塀 SA11930 を中心とする調査区南部の遮蔽施設群は不比等邸または光明子邸の段階の区画施設として理解できる。それらの遮蔽施設が SK11940 の掘削後認められなくなることは、皇后宮の造営にあたり当地の土地区画のあり方が大きく変えられたこと、そして調査区西北部で皇后宮やその後の宮寺・法華寺に関わり活発な土地利用がなされた可能性を示唆する。ただし、先述の通り調査区北半の掘立柱建物群と南半の遮蔽施設については一部が併存する可能性もあるため、確定できない部分も多い。こうした大きな土地利用形態の変遷についてはより広範囲の調査成果を参照する必要がある。(川畑)

6 まとめ

本調査は法華寺と海龍王寺の旧境界と想定される位置での初めての調査となった。調査では、南北溝 5 条、東西溝 1 条、掘立柱建物 8 棟、柱穴列 2 条、大土坑等を検出した。これらのうち、調査区中央で確認した南北溝 SD11903・SD11904、掘立柱塀 SA11930 は、調査区周辺の敷地の境界線として機能していた可能性があり、奈良時代前半の藤原不比等・光明子の邸宅時代の敷地の利用方法や、その後の法華寺と海龍王寺の旧境内の寺域に関する重要な情報を得ることができた。調査区西北部で検

出した掘立柱建物群においては、詳細な時期を確定できないものもあるが、奈良時代における活発な土地利用の状況を示す。その中でも南北両面廂が付く大型の掘立柱建物である SB11920 は重要な建物であり注目される。また、大土坑 SK11940 は不比等・光明子邸から皇后宮へと当地が移り変わっていく際の廃棄土坑である可能性が高く、当地の土地利用形態の大きな変化を示す重要な遺構である。

一方、調査区の北半と南半における遺構変遷の過程や、南北溝 SD11901~11903、南北溝 SD11904、掘立柱塀 SA11930 の役割については、引き続き検討を要する。今後の調査成果に期待したい。(川畑・高野)

註

- 1) 太田博太郎「法華寺」『大和古寺大観』第 5 巻 秋篠寺・法華寺・海龍王寺・不退寺、岩波書店、1977。
- 2) 類例として大山崎遺跡・興福寺一乗院出土例がある。愛知県陶磁資料館・五島美術館『日本の緑釉と三彩 天平に咲いた華』愛知県陶磁資料館、1998。巽淳一郎「古代前期の土器」『古代の官街遺跡Ⅱ 遺物・遺跡編』、2004。
- 3) 山崎信二「平城宮・京の文字瓦からみた瓦生産」『文化財論叢Ⅲ』学報第 65 冊、2002。
- 4) 佐川正敏・西川雄大「奥山廃寺の創建瓦」『古代瓦研究Ⅰ - 飛鳥寺の創建から百済大寺の成立まで -』奈文研、2000。
- 5) 中川二美「法華寺旧境内出土刻線文二彩磚について」『紀要 2015』。
- 6) 林正憲「瓦磚」『図説平城京事典』、柗風舎、2010。
- 7) 川畑純「法華寺旧境内、左京二条二坊・三条二坊出土の 6282-6721 型式軒瓦」『古代瓦研究Ⅶ - 平城宮式軒瓦の展開 1 6225-6663 系 - 平城宮式軒瓦の展開 2 - 6282-6721 系 -』、奈文研、2017。

法華寺旧境内の調査

— 第 659 次 —

1 調査の経過

調査に至る経緯 本調査は法華寺町における事務所兼住宅併用店舗の建設にともなう事前調査として実施した。奈良県文化財保存課（当時）および奈良市教育委員会との協議の上、事業者からの受託事業実施申し込みを受けて奈文研が受託事業として調査を実施した。

作業の経過 調査期間は2023年10月4日から10月6日までである。9月28日に現地協議およびレベル移動をおこなった。10月3日に調査区を設定し、10月4日には重機掘削ののち遺構検出を開始した。10月5日に調査区全景および遺構検出状況の写真撮影をおこなった後、遺構図・土層図を作成した。同日、遺構保護のための砂撒き後、埋め戻しをおこない、10月6日に撤収作業を完了した。

当調査では出土遺物が少量であったことから、調査と並行して洗浄・分類・註記等の整理作業を実施した。

2 遺跡の位置と環境

調査地は奈良山丘陵から延びる北から南に緩やかに下る尾根の南端部付近にあたる。法華寺の中心伽藍である金堂・中門・東塔・西塔があった場所は、江戸時代中期～後期には「金堂之芝」と称されていた（『紀要2019』）。また、中門の南には宝永4年（1707）に地震で倒壊するまでは塔1基が存在しており、『大和名所図会』などにもその礎石が描かれている¹⁾。

調査地は南面回廊および西塔推定地の中間に位置し、周辺では複数回にわたり小規模な調査がおこなわれている（図97）。第98-7次調査では顕著な遺構は確認できなかったが、第95-4次調査では建物と東西石組溝（『平城概報1975』）、第419次調査ではクランク状を呈する溝SD9150・9151および東西石組溝SD9153を検出しており、東西両塔推定地の中央に溝で区画された「凸」形の高まりがあったことが指摘されている（『紀要2008』）。

本調査では、遺構の遺存状況を確認するとともに、西塔に関わる遺構の検出が予想された。

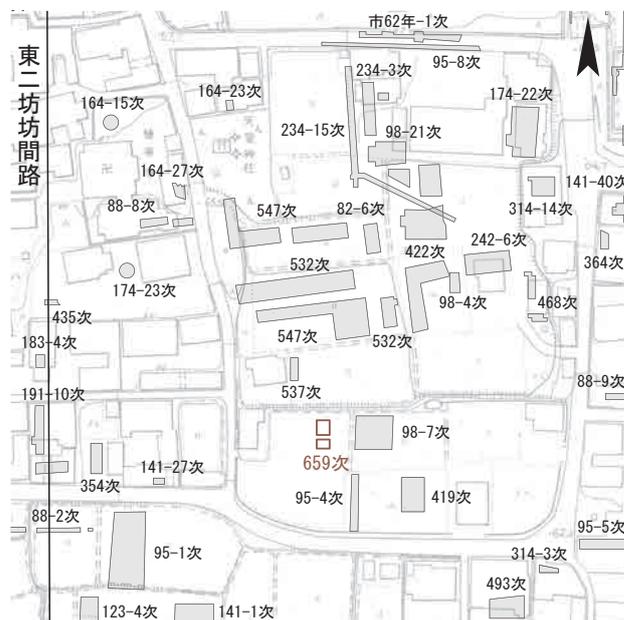


図97 第659次調査区位置図 1:2000

3 調査の方法と成果

(1) 調査の方法

南北2カ所の調査区を設定した。北区は東西3.4m×南北3.9m、南区は東西3.4m×南北2.6mの範囲とし、調査面積は約22.1㎡である。

調査では、GNSS測量機を用いたネットワーク型RTK法で調査区内に基準線を設定し、縮尺1/20を基本に平面図を作成した。標高は基準点平城No.54（X=-145,389.024、Y=-18,064.600、H=61.364m）を基準として第435次調査（2008年度）で設置した基準点からオートレベルで直接水準測量をおこなった。発掘作業は重機により既存建物の造成にともなう整地土、旧表土・耕作土を掘り下げた後、人力で遺物包含層の掘削と遺構検出をおこなった。写真記録はデジタル撮影でおこなった。

(2) 基本層序

現地表面から順に、既存建物の造成にともなう整地土（厚さ40~50cm）、旧表土・耕作土（黒色土、10~15cm）が堆積し、北区では黄灰色砂礫層（地山）に達する。南区では、調査区北部は北区と同様の層序で、中央以南は既存建物にともなう整地土、旧表土・耕作土の下に、遺物包含層（暗灰色土、10~20cm）、落ち込みSX11886埋土（褐灰色土、15~25cm）が堆積し、黄灰色砂礫層（地山）に達する。

遺構検出は、北区では黄灰色砂礫層上面（標高約62.7m）、南区では暗灰色土上面・褐灰色土上面（標高62.6~62.7m）でおこなった。

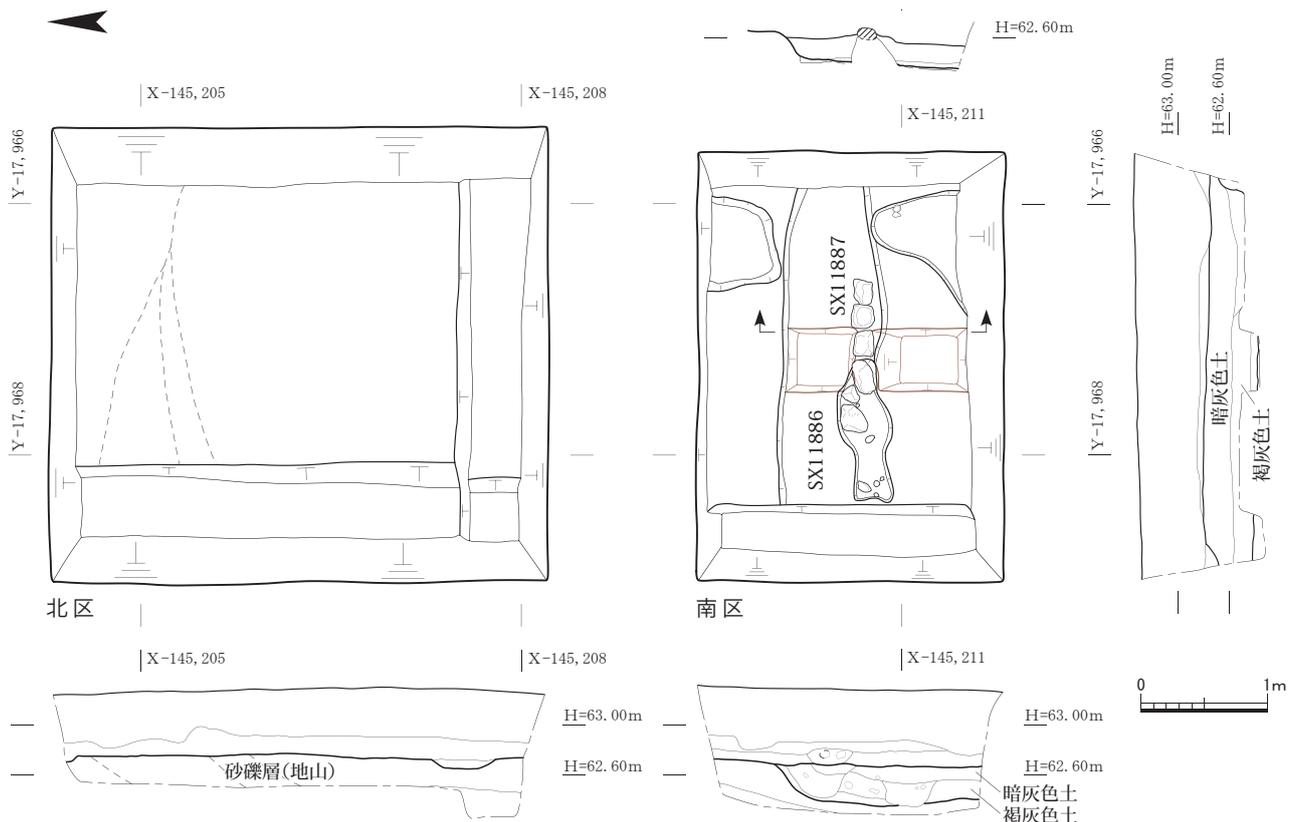


図 98 第 659 次調査遺構図・土層図・断面図 1 : 60 (西壁土蔵図は南北反転、南壁土層図は東西反転)

(3) 検出遺構 (図 98)

北 区 調査区全面で黄灰色砂礫層(地山)を確認した。当該地の造成時に大きく削平された可能性がある。遺構は確認されず、出土遺物もない。

南 区 調査区北部では北区と同様に黄灰色砂礫層を検出した。中央部以南で以下に述べる落ち込み SX11886 および石列 SX11887 を確認した。

落ち込み SX11886 北肩は東西方向に直線的に延び、南に向かって緩やかに下る。深さ 20~30cm。褐灰色土を埋土とする。調査区西壁では埋土上面からの掘り込みを 2 ヶ所で確認したが、平面では確認できなかった。古代以降の土師器小片が出土した。

石列 SX11887 落ち込み埋土上面で検出した東西方向の石列。20~30cmの石を 6 個並べており、東西約 1.2m 分を検出した。いずれも据付痕跡は確認できない。西方に抜取溝の可能性がある溝状のくぼみがあるが、調査区西壁までは続かない。暗灰色土に覆われている。性格は不明である。(小田裕樹)

4 出土遺物

土器・陶磁器類は整理用コンテナ 1 箱分が出土した。古代から近世までの土師器や古墳時代から古代の須恵器を含むが、いずれも小片である。

瓦類は整理用コンテナ 1 箱分の丸瓦・平瓦が出土した。暗灰色土から古代から中世までの丸瓦・平瓦が出土し、褐灰色土から瓦は出土していない。木製品・石製品・金属製品は出土していない。(田中龍一・小田)

5 まとめ

今回の調査では古代の遺構は確認されなかった。周辺地形の観察もふまえると、法華寺中心伽藍が展開する丘陵尾根の南端部にあたり、緩斜面となっていた当該地では、段状に田畑を造成したことにより遺構が削平された可能性が高い。

いっぽう、調査区東南方で実施した第 95-4 次調査では石組溝を、第 419 次調査ではクランク状を呈する溝を検出しており、これらは室町時代後期以前の遺構と考えられている(『紀要 2008』)。尾根裾部にあたる調査区の南方では古代の遺構が残存する可能性も考えられる。今後の調査課題である。(小田)

註

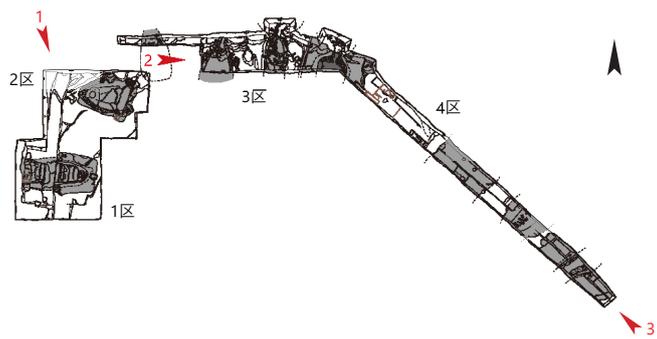
- 1) 太田博太郎「法華寺の歴史」『大和古寺大観』第 5 巻、岩波書店、1978。池田源太「法華寺の沿革」『新修国分寺の研究』第 1 巻、吉川弘文館、1986。

III 圖 版

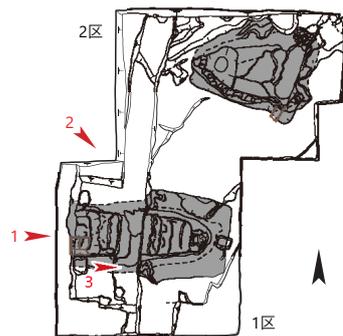




1 : 調査前 北西から 2 : 1・2区 西から



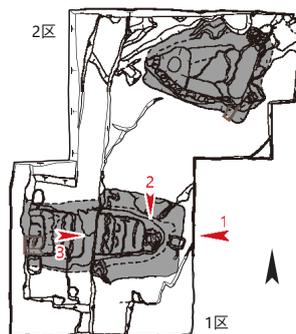
- 1 : 1・2区 北西から
- 2 : 3区 西から
- 3 : 4区 南東から



1 : 瓦窯 SY11681 西から 2 : 瓦窯 SY11681 版築土 北西から
3 : 瓦窯 SY11681 の被熱痕跡 第 1 次被熱が掘り込みに先行する 西から

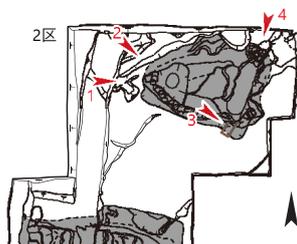


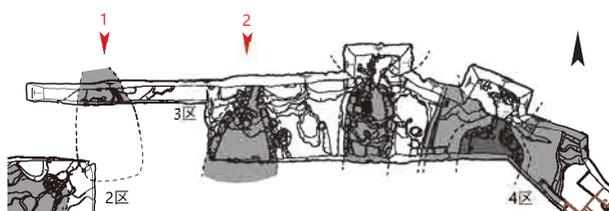
- 1 : 瓦窯 SY11681 東から
- 2 : 瓦窯 SY11681 煙道の日乾レンガ 北から
- 3 : 瓦窯 SY11681 焼成部 東から



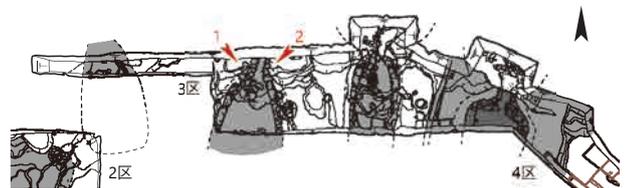


- 1 : 瓦窯 SY11682 西から
- 2 : 瓦窯 SY11682 南壁 北西から
- 3 : 瓦窯 SY11682 裏込土 北西から
- 4 : 瓦窯 SY11683 煙道 北東から

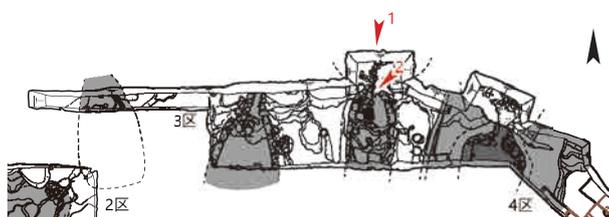




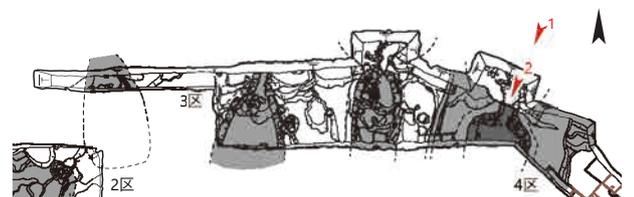
1 : 瓦窯 SY11683 北から
2 : 瓦窯 SY11684 北から



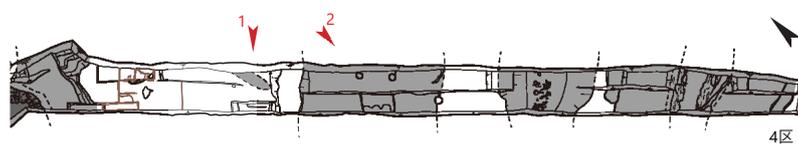
1 : 瓦窯 SY11684 焼成部東壁 北西から
2 : 瓦窯 SY11684 焼成部西壁 北東から



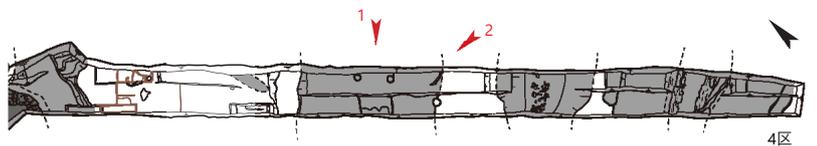
1 : 瓦窯 SY11685 北から
2 : 瓦窯 SY11685 燃烧部西壁 北東から



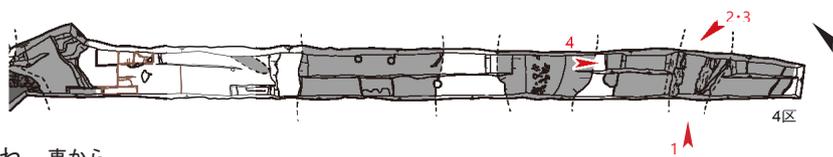
1 : 瓦窯 SY11686 北東から
2 : 瓦窯 SY11686 焚口断面 北東から



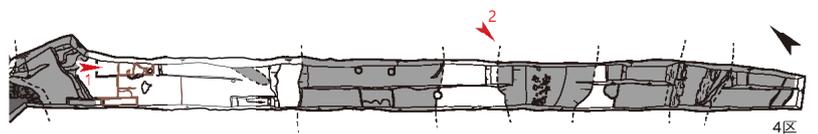
1 : 瓦窯 SY11687 灰原 北東から
2 : 瓦窯 SY11688 北から



1 : 瓦窯 SY11688 中央部 北東から
2 : 瓦窯 SY11688 版築土 東から



- 1 : 瓦窯 SY11689 南西から
- 2 : 瓦窯 SY11689 窯壁 東から
- 3 : 瓦窯 SY11689 窯壁の粘土の積み重ね 東から
- 4 : 瓦窯 SY11689 版築土 北西から



1 : 土坑 SK11690 北西から
2 : 斜行溝 SD11680 北から





1



2

1 : 熨斗瓦 2 : 日乾レンガ



1 : 6233Ab 2 : 6233Ac 3 : 6233Ac 4 : 6274Ab



1 : 6275E 2 : 6643Aa 3 : 6233Ab 丸瓦接合の様子 4 : 6274Ab 接合部と裏面調整
5 : 6643Aa 粘土紐の重ね巻きと剥離状況





1 : 1号窯出土瓦 2 : 2号窯出土瓦



1 : 6233Aa 2 : 6233Ab 3 : 6233Ac 4 : 6274Ab



1



2



3

1 : 6274Ab 2 : 6275I 3 : 6279Aa



1



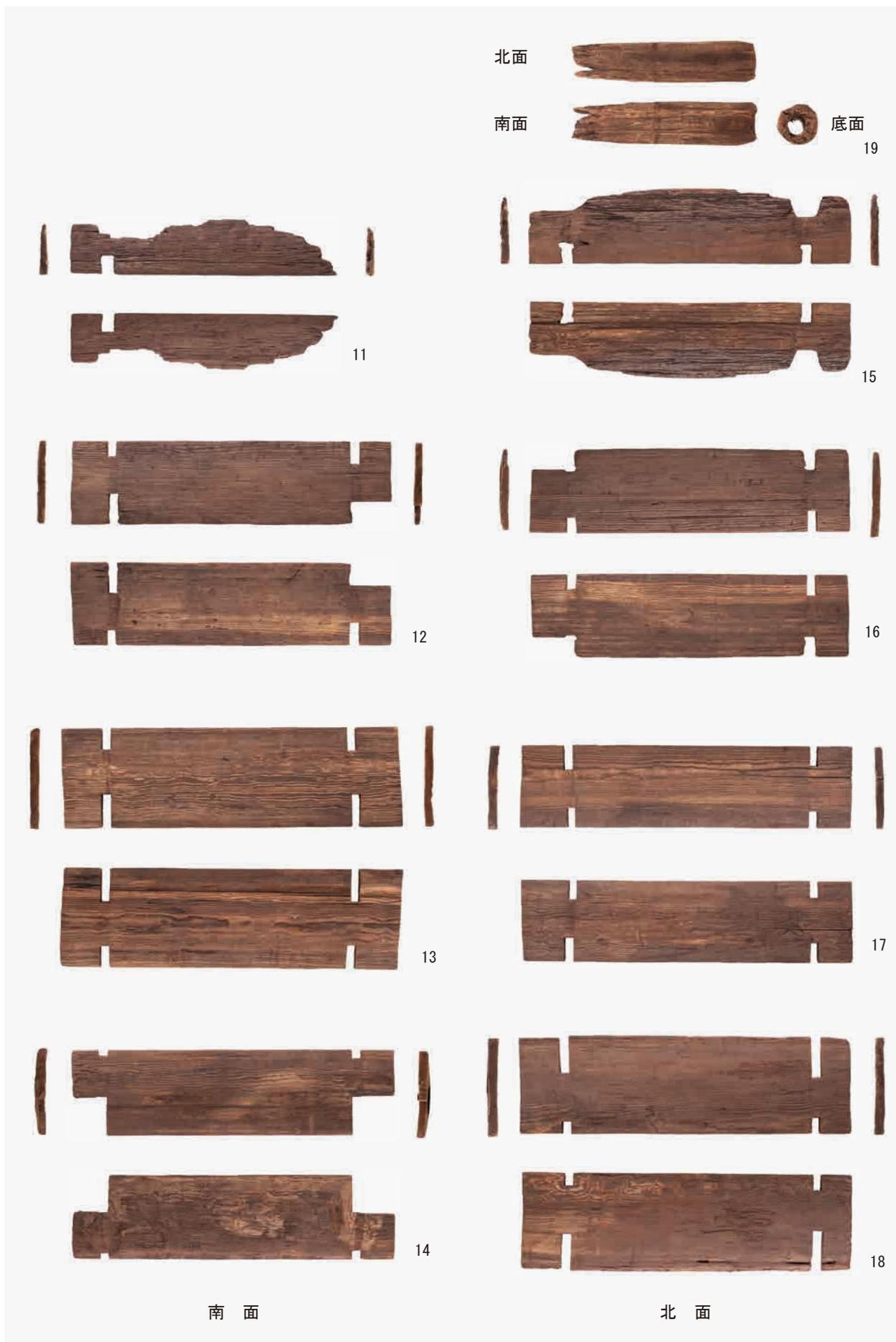
2



3

1 : 6643Aa 東西溝 SD1845 出土 2 : 6274Aa 井戸 SE1850 出土 3 : 6274Ab 井戸 SE1850 出土



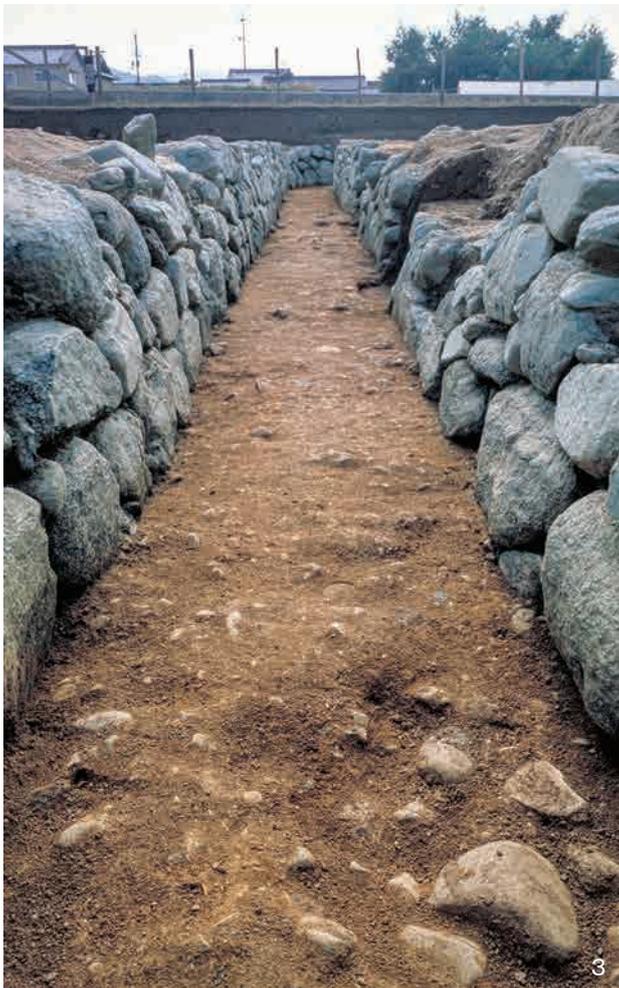
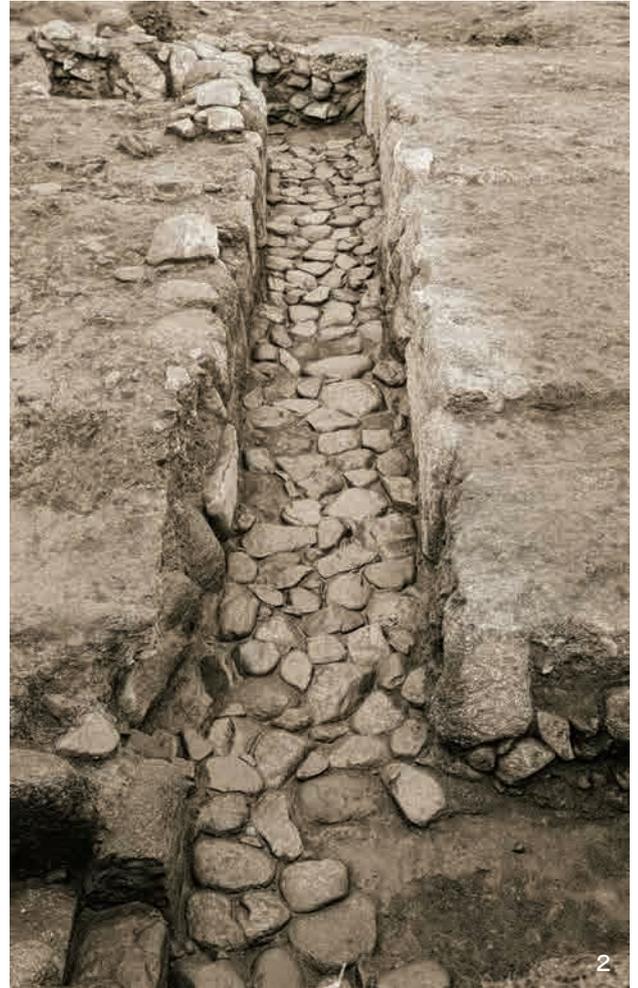




遺構検出状況 石神遺跡東方をのぞむ 南西から



1 : 航空写真 (2023 年撮影) 石神遺跡周辺 北方をのぞむ 南から 2 : 第1次調査区全景 (1981 年撮影) 南西から

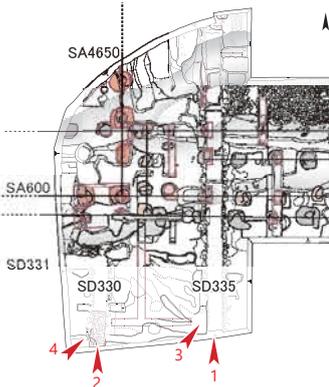


1 : 石組溝 SD335 南から 2 : 石組溝 SD330 南から 3 : 石組溝 SD335 北から 4 : 石敷 SX327 東から

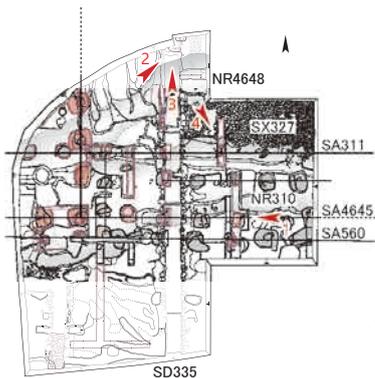


- 1 : 南北塀 SA4650 南から
- 2 : 東西塀 SA600・4645
および SA560 西から
- 3 : 南北塀 SA4650 の
柱採取穴
第 1 次調査にて完掘 西から





- 1 : 石組溝 SD335 底石はない 南から
- 2 : 石組溝 SD330 底石を敷く 南から
- 3 : 石組溝 SD335 側石には自然石を3～4段積み上げる 南西から
- 4 : 石組溝 SD330 SD335 に比べて大きな自然石を側石に用いる 南西から



- 1 : 流路 NR310 と SA560・4645・4646 との重複関係 東から
- 2 : 石組溝 SD335 と整地土および石敷 SX327 との関係 南西から
- 3 : 石組溝 SD335 の溝埋土 上2層は埋立土、それより下は細砂の流水堆積 南から
- 4 : 東西塀 SA311 柱穴断面 直上を流路 NR310 や平安時代の遺物包含層が覆う 北西から



1



2

1 : SD640 出土土師器 2 : SD640 出土須恵器



1



2



5



3



6

7



4

- 1 : SK641 出土土器
- 2・3 : SK641 出土土師器甑
- 4 : SD640 出土土師器高杯脚部内面
- 5 : SD640 出土須惠器杯身
- 6 : SD640 出土須惠器把手付椀 火襷
- 7 : SD640 出土須惠器器台 波状文



1 : 平城第 653 次調査区全景 (拡張後、再拡張前) 西から
2 : 平城第 653 次調査再拡張区遺構検出状況 北から



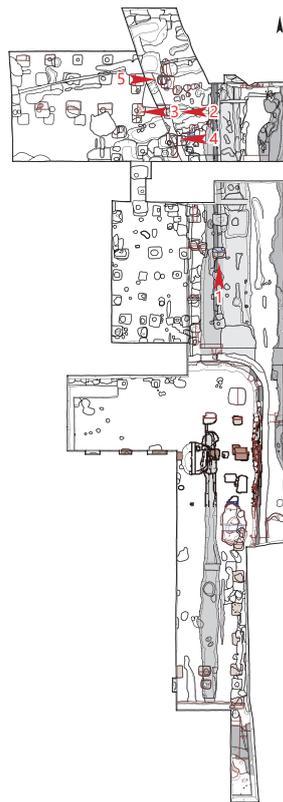
平城第 656 次調査区全景（拡張前）北から



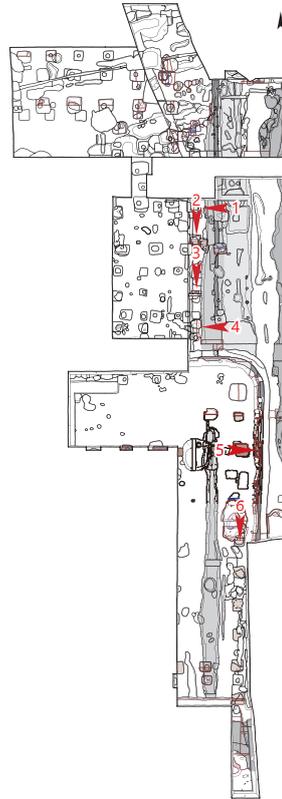
平城第 656 次調査区全景（拡張前）南から



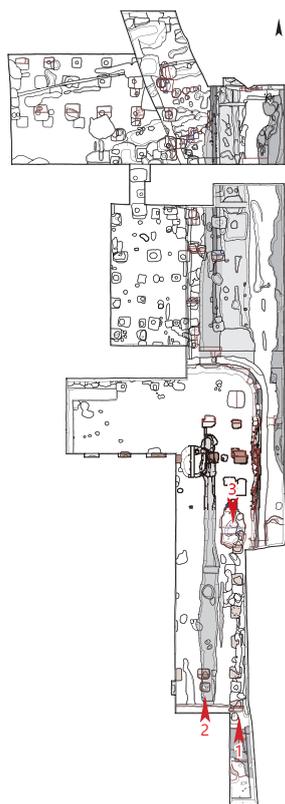
1 : 平城第 656 次調査拵区遺構検出状況 北から 2 : 南北溝 S D 11901・11902・11903 北から



- 1 : 掘立柱建物 S B 11918 柱穴完掘状況 南から
- 2 : 掘立柱建物 S B 11920 柱穴断面 東から
- 3 : 掘立柱建物 S B 11920 柱穴断面 東から
- 4 : 掘立柱建物 S B 11920 柱穴断面 東から
- 5 : 掘立柱建物 S B 11920 柱穴断面 西から



- 1 : 掘立柱建物 SB11922・SB11923 柱穴断面 東から
- 2 : 掘立柱建物 SB11918・SB11923 柱穴断面 北から
- 3 : 掘立柱建物 SB11923 柱穴断面 北から
- 4 : 掘立柱建物 SB11923 柱穴断面 東から
- 5 : 東西掘立柱塀 SA11929 柱穴断面 西から
- 6 : 掘立柱塀 SA11930 柱穴断面 北から



1 : 掘立柱塀 SA11930 柱穴断面 南から
3 : 大土坑 SK11940 断面 北から

2 : 掘立柱塀 SA11930 柱穴断面 南から



1



2

1 : 大土坑 SK11940 出土土師器・須恵器
2 : 奈良三彩・緑釉陶器





8



9



10



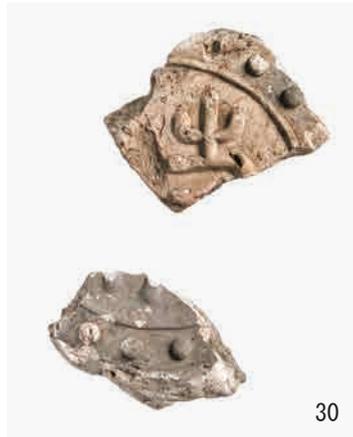
11



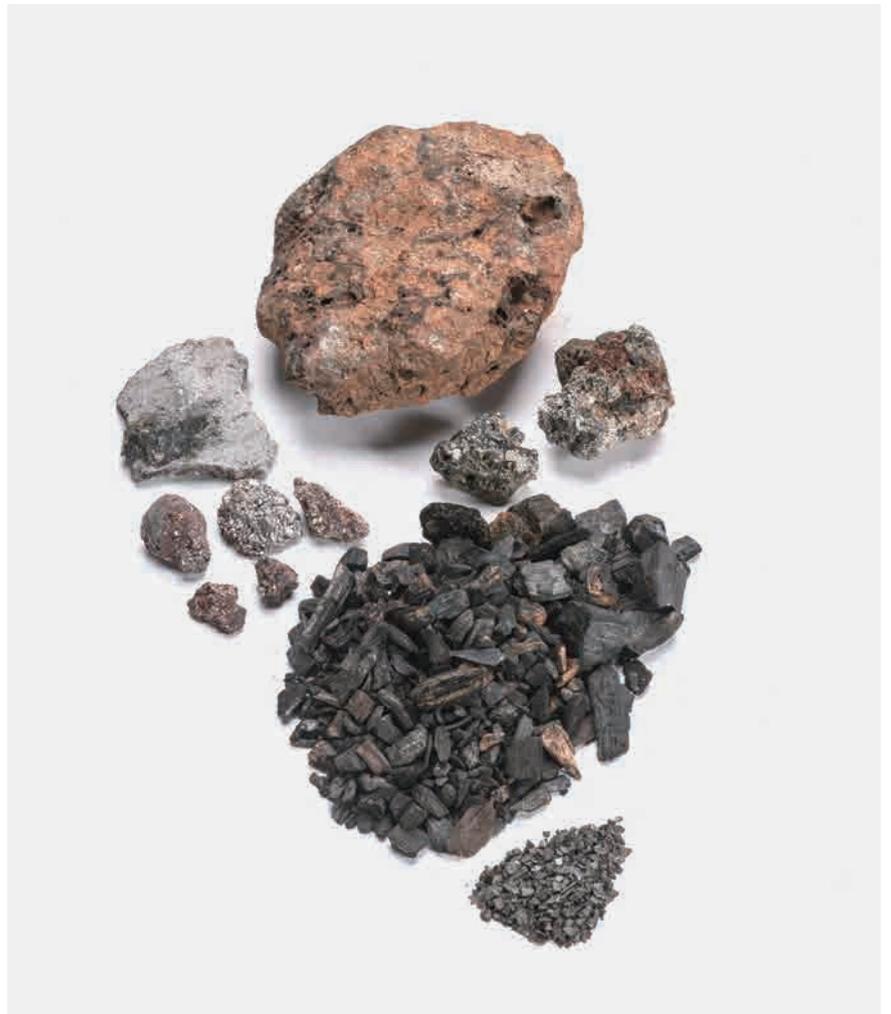
12

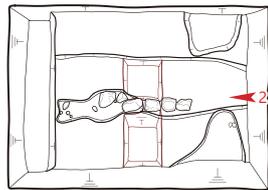
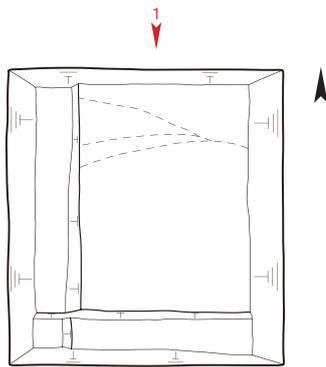






瓦磚類





1 : 調査区全景 北から 2 : 石列 SX11887 東から

**Excavation Survey Report of
Nara National Research Institute
for Cultural Properties
2024**

C O N T E N T S

I	Excavations in and around the Asuka and Fujiwara Palace Site	1
1	Excavations at the Fujiwara Palace Site	3
	Excavated Artifacts from the Outer Moat of the West Side of the Fujiwara Palace (Fujiwara Palace Site Excavation No.23-5)	5
2	Excavations at the Fujiwara Capital Site	9
	Excavation at the Hidakayama Tile Kiln (Excavation No.213)	11
	Rooftiles Excavated from the Hidakayama Tile Kiln (Excavation in 1978 and Fujiwara Palace Site Excavation No.17)	47
	Wooden Materials of a Well Frame Excavated from Well SE1850 at the First Ward of the Seventh Row Avenue Inside the Right Capital of the Fujiwara Capital (Fujiwara Palace Site Excavation No.17)	55
3	Excavations in and around the Asuka Area	59
	Excavation at the Ishigami Site (Excavation No.214)	61
	Pottery Assemblage Excavated from Lower Strata Ditch SD640 and Pit SK641 at Kawaradera Temple (Excavation No.119-5)	73
II	Excavations at the Nara Capital Site and Neighboring Temple	85
	Excavation Inside the Former Precincts of Hokkeji Temple and Kairyūōji Temple (Excavation Nos.653 and 656)	89
	Excavation Inside the Former Precincts of Hokkeji Temple (Excavation No.659)	117
III	Plates	1~46

報告書抄録

ふりがな	ならぶんかざいけんきゅうじょはくつちょうさほうこく							
書名	奈良文化財研究所発掘調査報告							
副書名								
巻次	2024							
シリーズ名	奈良文化財研究所発掘調査報告							
シリーズ番号	2024							
編著者名	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所 都城発掘調査部							
編集機関	独立行政法人国立文化財機構 奈良文化財研究所							
所在地	〒630-8577 奈良県奈良市二条町2-9-1 TEL: 0742-30-6733 (研究支援推進部総務課)							
発行年月日	2024年12月27日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
ひだかやまかまあと 日高山窯跡	奈良県 かほらし 橿原市 かみひだちょう 上飛驒町	292052	14C-0530	34° 29' 43"	135° 48' 22"	20230510 } 20230801	254.4	学術調査 (飛鳥藤原 第213次)
いしがみいせき 石神遺跡	奈良県 たかいちぐん 高市郡 あすかむら 明日香村 あすか 飛鳥	294021	14D-0028	34° 28' 50"	135° 49' 08"	20231204 } 20230315	335	学術調査 (飛鳥藤原 第214次)
ほっけじあと 法華寺跡・ かいりゅうおうじ 海龍王寺	奈良県 ならし 奈良市 ほっけじちやう 法華寺町	292010	05A-0112 05A-0113	34° 41' 47"	135° 48' 07"	20221102 } 20221216	262.6	宅地造成 (平城第653次)
ほっけじあと 法華寺跡	奈良県 ならし 奈良市 ほっけじちやう 法華寺町	292010	05A-0112	34° 41' 45"	135° 48' 07"	20230821 } 20231020	600	宅地造成 (平城第656次)
				34° 41' 38"	135° 48' 03"	20231004 } 20231006	22.1	店舗・住宅建設 (平城第659次)
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
ひだかやまかまあと 日高山窯跡	生産遺跡 (窯)	白鳳時代 (七世紀末)	瓦窯、土坑、古 墳周濠	軒瓦、丸・平瓦、日 乾レンガ、土師器・ 須恵器(古墳時代～ 古代)、埴輪		藤原宮の瓦を焼成した日高山瓦窯 で、9基の瓦窯の存在をあきらか にした。瓦窯に関わるとみられる 小型の焼成土坑を検出した。古墳 の周濠の一部とみられる斜行溝を 検出した。(第213次)		
いしがみいせき 石神遺跡	官衙遺跡	飛鳥時代 (七世紀後半)	掘立柱塼、掘立 柱列、石組溝、 石敷、流路	軒瓦、丸・平瓦、土 師器・須恵器(古代)、 黒色土器(平安時代)		7世紀前半の区画施設SA600・ SA4650を確認し、遺跡東南隅を あきらかにした。また、東西塼 SA4645やSA560、SA311を確認し、 遺跡の拡張過程や南限区画施設の 変遷過程、東方への遺跡の広がり をあきらかにした。(第214次)		

ほっけじあと 法華寺跡・ かいりゅうおうじ 海龍王寺	寺院跡	奈良～近世	掘立柱建物、南北溝	軒瓦、丸・平瓦、縁 釉水波文磚、土師器・ 須恵器(古代)、土器・ 陶磁器(近世～近現 代)	法華寺と海龍王寺の境界付近の様相をあきらかにした。大型の掘立柱建物 SB11920 を中心とするいくつかの掘立柱建物と古代～近世の南北溝 3 条を確認した。(第 653 次)
		奈良～近世	掘立柱建物、掘 立柱塀、南北溝、 大土坑	軒瓦、丸・平瓦、土 師器・須恵器(古代)、 土器・陶磁器(近世 ～近現代)、鉄滓、 鍛造剥片	法華寺と海龍王寺の境界付近の様相をあきらかにした。平城第 653 次から続く掘立柱建物群と溝の様相をあきらかにし、掘立柱塀 SA11930 や奈良時代前半の大土坑 SK11940 を確認した。(第 656 次)
ほっけじあと 法華寺跡	寺院跡	奈良時代	落ち込み、石列	丸・平瓦、土師器(古 代～近世)・須恵器 (古墳時代～古代)	古代以降の落ち込みとその埋土上面で性格不明の石列を確認した。(659 次)

2024年12月27日 発行

奈良文化財研究所発掘調査報告
2024

著作権所有者 独立行政法人国立文化財機構
発行者 奈良文化財研究所
奈良市二条町2丁目9番1号

印刷者 株式会社 明新社
奈良市南京終町3丁目464

ISSN 2759-0704

Excavation survey report of Nara National Research Institute for Cultural Properties

2024

Independent Administrative Institution
National Institutes for Cultural Heritage
Nara National Research Institute for Cultural Properties
2-9-1, Nijo-cho, Nara-shi, 630-8577, JAPAN

<https://www.nabunken.go.jp/>

